五月一日發行

女學世界

第十一巻

第七號



博文館

明治三十三年二月廿五日（第三種郵便物認可）
明治四十四年四月二十三日印刷納本（毎月一回二十三日印刷納本）

女子技藝叢書

女子技藝研究會長梶山彬先生著

非常なる評判

女子技藝研究會長梶山彬先生が苦心に苦心を重ねられ編述せられたる女子技藝叢書は發表せらるゝとゝもに全國の高等女學校の技藝科の唯一の參考品として持囃され

近來に至りては針・鋏み・鏝などを用ふる婦人の傍に本書あるに至れり

是れみな内容の實際に適し他の參考書などゝ類を異にするが故なりされば新たに高等女學校・實科女學校・技藝學校・其他の女學校に入學せる生徒・女學校を卒業せる諸姉の座右に備ふべきは此の女子技藝叢書のみなり。

驚くべき賣行

書名	版	
裁縫新書	五版	大和綴美本 菊判全一冊 正價五十錢 送料金八錢
刺繡術新書	五版	大和綴美本 菊判全一冊 正價五十錢 送料金八錢
編物新書	十五版	大和綴美本 菊判全一冊 正價五十錢 送料金八錢
摘み製作新書	七版	大和綴美本 菊判全一冊 正價五十錢 送料金八錢
袋物製作新書	十版	大和綴美本 菊判全一冊 正價五十錢 送料金八錢
しみぬき染色洗濯法新書	三版	大和綴美本 菊判全一冊 正價五十錢 送料金八錢
造花術新書	十五版	大和綴美本 菊判全一冊 正價五十錢 送料金八錢

發兌 東京市京橋南槇町十八 廣文堂 (電話京橋二四六三 振替東京四六八四)



御手紙にて三越へ御注文

目下流行せる子ルとセル

は申すに及ばず季節〳〵の流行品と必要品とは御手紙にて御注文下さりますれば、早速小包郵便にて御届け申上ぐべく、御便利は此上もございません。

三越呉服店は呉服太物を始め、洋服、時計、指輪、小間物、化粧品、玩具、靴、鞄、文房具、美術品など、何呉となく取揃へ品質の極良いものを極て安い直段で差上申ます程に明日とはいはず今直に、御注文下さる樣ひとへに御願ひ申上ます。

寫眞版入「地方御注文案内書」は御申込次第進呈致します。

東京駿河町

三越呉服店

女學世界 第拾壹卷 第七號 五月號目次


牛乳で洗ふと
美しくなるといふのは
昔の事！
御料洗粉
初夏の新緑に映えて
美しい素顔を
いとゞ美しくなすのは、
牛乳浴にも増した
この御料洗粉ばかりです。

造花原料

東京九段坂

吉住商店

營業目録御入用の方は郵券貳錢封入東京九段坂吉住商店宛御申込みの事

新刊

實用造花圖譜

本圖は著者が十數年間苦心を重ね夫々實物を解剖し寫生したるものに多年の實驗と考案とを加味し日々實地に應用しつゝある處の瓣、葉、蕚等の切型に一々鮮麗なる着色を施し傍らに其組立てたるものを圖示して一目瞭然たらしむ故に只僅に其心得を有するのみにして本圖を繙けば直に理想的の造花を作成するを得べし若し又些の心得なき者なる時は左記造花自在を併せて繙讀せば師に就き學ぶと毫も異なる所なし

吉住春子著

定價金壹圓　郵税金六錢

最新刊

實用造花自在

（一名…造花術秘密の鍵）

本書は造花技術の基礎に重きを措き筆述せるものにして多年の實驗と考案とを網羅し百數十個の解説圖を挿入し染色法より鏝當法組立法等に至るまで種々の秘法便法を剰す所なく親切丁寧に且最も平易に説明したるものにして眞に造花秘術の鍵を讀者に提供するものなり故に初學者と雖も本書を繙かば優美艶麗佳香を放つを疑ふ底の造花は立所に床上机邊を飾り不斷の春色を一室に集め得べし

跡見玉枝女史書○吉住春子著

定價壹圓廿錢　郵税八錢

◎右二書の内容見本御入用の方は實費として郵券五錢添付東京九段坂吉住商店宛申込まるべし直らに進呈可仕候

發兌兼發賣元

東京九段坂（九段郵便局私書函十番）

造花原料商　吉住商店

特長電話番町二〇五六番

振替東京六六七九番

◎賣捌所……◎東京神田表神保町　東京堂……◎東京日本橋區本石町三丁目　至誠堂



女(いの二)

與謝野晶子著　藤島武二畫

一隅より

定價金壹圓貳十錢　小包料金拾貳錢

與謝野夫人が折に觸れたる感想文、漫筆、詩篇等併せて五百頁に餘れり。「思索の人として」の夫人「實行の人として」の夫人「家庭の人として」の夫人は、本書を繙いて初めて窺ふを得べく、夫人の歌集を讀むに比して又別樣の興趣あり。中に女子の獨立自尊を說き、男女の對等を聲明し、時代の保守消極主義に反對して女子の爲めに積極的新思想を鼓吹し、新婦人の先驅を以て任せらるゝ所、特に一般女子、父兄、敎育者の必讀を望む。

文學博士上田敏序　與謝野晶子著

歌集

春泥集

定價金壹圓
郵稅金八錢

女子が獨自の天地に遊びて彈く所の廿五絃は黃金の絃なり。銀の絃なり、其音は細けれども純にして高し。人皆平俗なる生活と低調なる述作とに倦める時、紫堂は女史が新聲六百餘章を得て此一卷となし、以て世に薦む。

書名	著者	版	定價	送料
日本倫理彙編	井上哲次郎 蟹江義丸	十冊 新刊	金拾五圓	小包七十二錢
一日三千里（一信）	河東碧梧桐	新刊	貳圓五拾錢	小包拾貳錢
寂しき人々	ハウプトマン 森鷗外譯	新刊	金壹圓	小包八錢
子規短册集	正岡子規	新刊	金壹圓	小包八錢
畿内見物（京都の卷・大和の卷）	有明、泣菫、晶子 月郊 淺井忠、中澤弘光 共著	再版	各壹圓五十錢	各小包十二錢
東京印象記	兒玉花外 中澤弘光	新刊	金七拾五錢	郵稅六錢
柳公權金剛經	澂厚 發堀	新刊	金五圓	小包拾貳錢
天覽台覽 愚禿親鸞	須藤光暉	七版	壹圓五拾錢	小包拾貳錢
天覽台覽 空海	須藤光暉	再版	金貳圓	小包拾貳錢
天覽台覽 法然上人	須藤光暉	三版	金貳圓	小包拾貳錢
天覽台覽 孔子之聖訓	二條基弘 東久世通禧	四版	金八拾錢	郵稅六錢
基督教聖典	赤司繁太郎	新刊	金壹圓	小包八錢
イエスキリスト	佐野天聲	新刊	壹圓五拾錢	小包八錢
簡易聖書	トルストイ	再版	金六拾五錢	郵稅六錢
法然と親鸞	木下尙江	三版	金五拾錢	郵稅六錢
親鸞聖蹟	安藤鐵腸	新刊	金壹圓五十錢	小包拾貳錢

發兌元　麴町區平河町五丁目五（振替東京三八一七番）　金尾文淵堂　藏版書目往復端書申込進呈

女(い〇三)


美髪となるには煉香油
中第一位と稱せらるゝ
パールをお使ひなさい!!
煉香油パール
スミレ香水
馥郁たる芳香はよく旬
日を保ちハンカチーフ用
として實に天下一品也
菊の露白粉
東京日本橋區横山町
平尾銑也商店

女(い)の四

茵の草



田中製版所三色版

◉婦人の幸福は如斯して得らるべし

結婚前に至つて健康なりし婦人の一旦他に嫁し未だ幾もなくて血の道癥に苦しむ者の非常に多きは事實婦人の生殖器が天然的受身に構造せられ即ち人類の田畑なれば病菌の繁殖するは當然にして結婚の機會に病毒侵入し其田畑を荒す故實際惡き土地の田畑に滿足な農産なき道理にて政治實業上外交繁き人の夫人及日常多くの客に接する婦人等は殊更其生殖器を害する機會多きを以て子宮血の道に苦しむ事の夥しきは此理由なれば一生の損害とならぬやう可要球を用ゆべし、方今婦人科學の泰斗として臨床上實地の錬達一世を壓する獨逸伯林のフロインド博士の研究と其實驗に成る處方に依る藥液をして直接に婦人の局處に作用せしむべく可要球(座藥にして内用藥にあらず)を調劑し幾多婦人科醫の實驗に供したる處殊に子宮内膜炎、下白帶下赤帶下下腹筋張胸先差込子宮糜爛子宮出血及惡臭搔痒月經時疼痛痲毒性子宮病等の諸症に外用すれば驚くべく效力神速顯著なりとの稱賛を受けたり故に速に可要球を外用して病毒を根治せらるべし

可要球定價　三球入廿錢八球入五拾錢拾八球入壹圓
四拾球入貳圓　特製百拾個入五圓

發行所　東京本郷湯島天神前(振替東京千五百番)
藥劑師　中西莊吉

眞に美容を希ひ美髪を望む者は……先づ……

衛生化粧 **最新美髪法** を讀め

本書の内容は

◎しらが、赤毛染の話◎毛のなき所に毛の生える話
◎ちゞれ毛くせ直しの話◎毛髪の洗ひやうの話
◎拔毛どめふけとりの話　其他毛髪化粧に關する秘法

にて郵券貳錢封入御申込なれば直ちに無代贈呈

次ぎに……

理想的 ちゞれ毛くせ直し ベント を用ひよ

最新製劑

本劑は一度之れを使用すれば如何なるちゞれ毛くせ毛も立處に直伸し永く使用すれば殆んど根本的に全治す

定價十二個入九十錢六個入四十七錢　送料東京市内四錢　地方八錢

また……

内務省免許 牛毛強壯 ヱフ、トニック

十日分金壹圓　小包料金八錢
卅日分金貳圓五拾錢　小包料金拾六錢

本劑は最も進歩したる毛髪劑にして根本的に毛髪を美化するにあり、されば本劑を服用せば、身體を強健にし、血行を良行ならしむ、皮脂線の分泌を盛んにし、毛根の營養を能くし、毛髪の發育を[illegible]くるを以て、薄毛、細毛、赤毛、白髪等に連用せば奇効あり。

發賣元　東京本所區外手町八七　**深澤國華堂**　(振替東京二〇八二五)

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒りん病 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人病 わきが ぢ

東京淺草瓦町
廿八淺草橋通
瓦町停留場横

中央醫院

りん病・梅毒・婦人病

子宮病 血の道 月やく(まとまらぬたる病) 子なき婦人

腦病 生殖器病 神經衰弱

記憶力減衰 思考力症等 生殖器病萎縮 遺精 早漏 夢精 發育不充分症等

わきが・ぢ疾・皮膚病

ただれ ちあきれ ちなきれ ぢれでき 等 ぢにきび たむし等

▲病狀記し郵券六錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特效新藥說明書を送る

東京市淺草區
瓦町廿八番地
淺草橋通瓦町
電車停留場橫

中央藥院

見よ●月經なき女子●病める婦人

▲勿驚……藥力最精實…効能確保…有効無害…

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物



博士賞賛良藥

改良 女月丸

其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り月經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又每月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

◉肥滿病新藥 (米國新輸入)

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてより肉太りたる爲め上圖の如くぶと〳〵ふとり醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ベンツォルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ぶと〳〵ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顏赤●にきび●ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は艶白となり齊て美顏窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音

美人となる



やせる藥

藥價	一劑一圓五十錢	三劑四圓卅錢	送料
	二劑二圓九十錢	四劑五圓半	十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番

小宮愛生堂

女(ろの二)

婦人画報

五月一日發行　五月の卷　一冊廿五錢　郵稅二錢　六冊稅共壹圓五拾錢　二冊稅共貳圓八拾八錢

讀物

誤れる結婚……文學博士 三宅雄次郎
結婚と實際問題……東北大學總長 澤柳政太郎
婦人と劇……文學博士 坪内雄藏
健全な婦人運動……法學博士 小河滋次郎

▼その日〳〵……三宅花圃
▼嫉妬の談……文學士 源 眞英
▼晩春の思出……時雨　▲姑より見た嫁
▼病院日記……晶子　▲花嫁の日記……
▼住宅と庭園……工學士 古宇田 實
▼家具の手入……宮川すみ子
▼卒業證書を手にして……葵 子

畫報

馬こやし……中澤弘光筆三色版二頁大美人畫
梨本宮方子女王殿下御昇校……
八殿下の御汐干狩……
東伏見宮兩殿下御出發
北白川宮武子女王殿下御降嫁
村雲尼公御散歩◎◎德川侯爵の婚儀……
新婚披露會における島津公爵と新夫人……

◎飛行機に乘りし婦人◎此頃の花
◎女子美術女子商業生徒の活人畫
◎女子高等師範卒業式と謝恩會……
◎東京と京都◎貴婦人癈兵院慰問
◎布哇女學校◎竹柏會大會雜況……
郊外散歩の一日
◎諸名家の令孃◎女の手いろ〳〵
◎長井博士の金婚式と夫人令息令孃
各女學校の優等卒業生
◎職業學校記念會◎宇治の茶摘み
◎各女學校の卒業式光景……

讀物

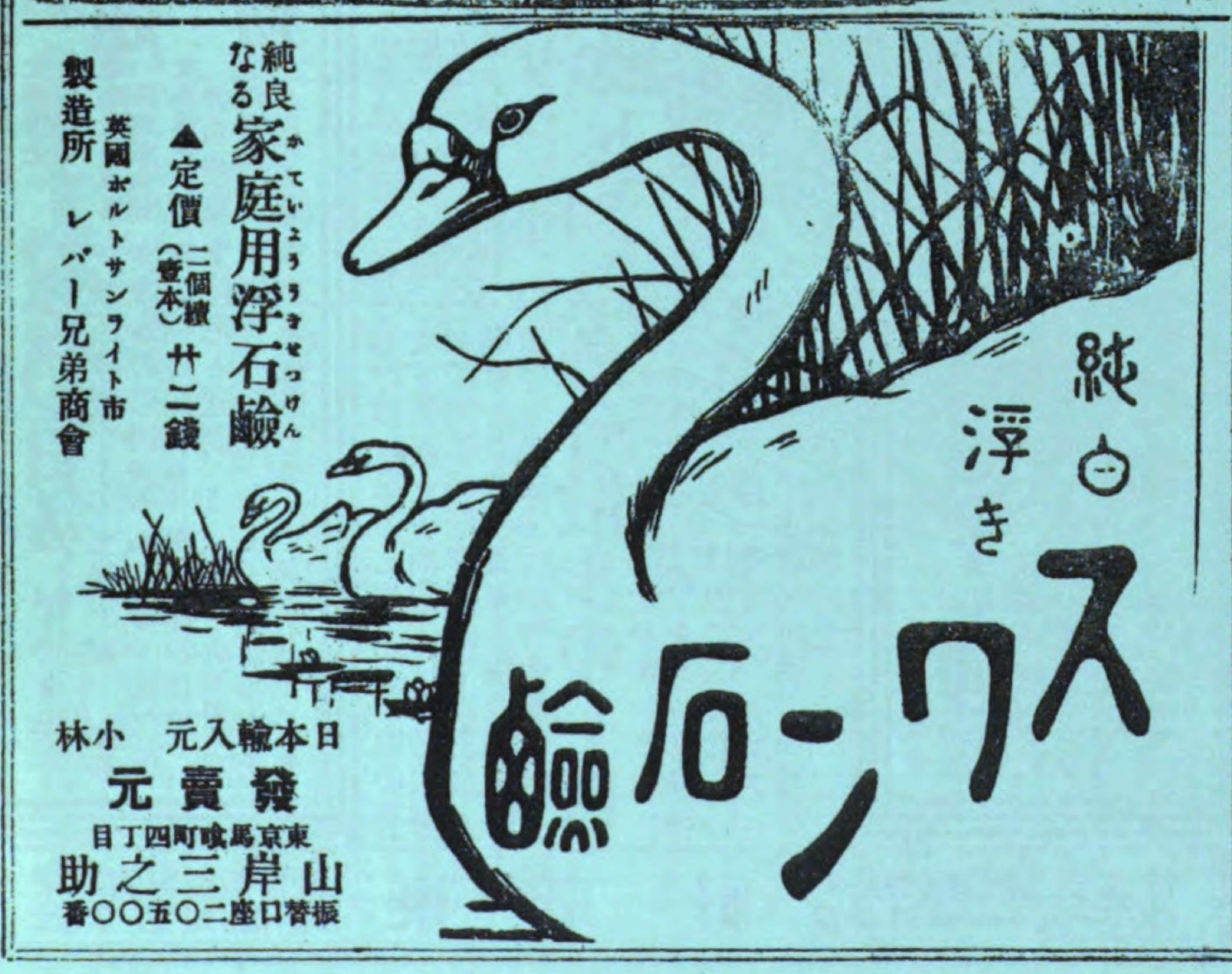
鎌倉記 二代の時姫……文學博士 建部遯吾
快樂と生活 嚴肅生活……文學士 下田次郎
婦人の自覺……文學士 吉田熊次
自勞自活の婦人……農學士 志賀重昂

▼名婦鑑伊賀局……いね子
▼皇后陛下の御歌
▼端午について……文學士 瀨川克三
▼五月の表情と自然の面影……しづか
▼連綿體假名の書方……岡山高陸
▼家庭論……文學士 今井政吉

東京麴町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九番　振替口座一一八一八番

女（ろの三）


千代田
香油
千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
特製 金七十錢
大瓶 金三十五錢
中瓶 金二十五錢
小瓶 金十七錢
発賣元
東京市馬喰町
山岸三之助


純良なる家庭用浮石鹼
▲定價 二個續(壹本) 廿二錢
英國ポルトサンライト市 レバー兄弟商會 製造所
純白
浮き
スワン石鹼
日本輸入元 小林
發賣元
東京馬喰町四丁目
山岸三之助
振替口座二〇五〇〇番

女(ろの四)

虹



渡邊與平筆


最上醤油
元祖
開業貳百六拾七年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子一二一番　振替口座五〇二一番
(はの一)

女(はの二)

女(はの三)


世界に於ける專賣の衛生好飲料
シナルコ
歐米各國に於て一ヶ年一億貳千萬本の需要ある專賣飲料にして原料は獨逸國ビルツ博士の發明せる二十有餘種の新鮮なる果實汁に三ツ矢特有の平野水と天然炭酸瓦斯とを以て壜詰し毫も「アルコール」を含まざれば何人にも適し殊に御婦人令孃には必用缺くべからざる最上等の衛生的好飲料なり
シナルコの準備なき御家庭は殆ど主婦なき御家庭と同じ憾みあり
三ツ矢サイダー製造元
宮内省御用達
帝國鑛泉株式會社東京支店
Sinalco
FreeAl

女(はの四)

晴間の庭



水野秀方筆

入會の最好機

女子手藝講義録

普通科

■壹ヶ年修了■

本會の講義錄は婦女子に必須の手藝を最も叮嚀親切に修得教授す

講義課目
△裁縫科 △造花科 △割烹科 △袋物科 △圖書科
△編物科 △刺繡科 △細工物科 △組糸科 △手藝教授法

共立女子職業學校 校友會内 手藝普及會編

本會の講師は老練なる講師と新進優秀なる教師の最新智識に依り講述す

會費 普通科 一ヶ月 金三十錢 半ヶ年金壹圓七十錢 壹ヶ年金參圓廿四錢

高等科

■壹ヶ年修了■

講義課目
△裁縫科 △造花科 △割烹科 △袋物科 △圖書科
△編物科 △刺繡科 △細工物科 △組糸科 △手藝教授法

會費 高等科 一ヶ月 金卅五錢 半ヶ年金壹圓九十九錢 壹ヶ年金參圓七十六錢

本會の教授法は通信教授界のレコードを破り未だ何人も企てざりし破天荒の編輯法にして斬新奇抜なると優美高尚なる各種手藝の技術を最も簡易に修め得るは本會の有する特色也

本會の講義錄に依り研究し終りたる時の**智識**は恐らく會費全部を支拂たる金額の其**幾千部**以上の價値あり

入會申込所
東京日本橋通一
大倉書店
振替貯金東京二三八番

毎月一回發行

入會規定 内容見本進呈

女(にの一)

根治確證

わきが

新治療藥 ラピヨン

忽ち臭氣を全滅せしめ速に用ゐて苦惱を脫せよ

丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれは主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔淸驅逐し惡臭を止むる作用を有する最近發見の有力劑にして如何程劇烈の難症も甲價特別製を用ひよ 送料拾五錢

毛髮生長液 原名ベグネス

毛のはへる

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最も賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●わけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●其他の所に毛なき人用ひよ毛髮增生す◎頭などにはげのあるのは見苦しき者也

化學製品

色の白くなる

ハンドコロン溶液

價A印壹圓B印特別製壹圓五拾錢送料十五錢本劑は貴紳淑女粹士間に高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をなし益に皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

月やくをとろし

メソルビン此藥は子宮を痛ず長き月經とまりも下る二三月位のは一劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のと はり又は血塊に速に流經す月經不順より起る子宮病血の道を治し古 ま特製を用ひよ血を一掃す

價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓參拾錢參圓五拾錢小包料拾貳錢（凡テ郵券代用一割增し）

專賣 東京神田小川町東明館前 オリエンタル藥舘

全治確證

無痛（全治する挿入藥）

ぢを治す

Haemorrhoidal KUgel

本邦人に最も多き痔疾に對して從來迂遠なる內服藥にのみ治療を委ね適切なる治方を講ずる者少し 本館發賣の治痔藥は近世醫學界の貴重なる新發見藥を以て座藥に調製したるものにしてこれを肛門內に挿入するも少しも疼痛を覺へず體溫の爲め徐々適切に溶解して直接に患部に作用し 穴痔 蓮痔 いぼ痔 裂痔 脫肛 又痔瘻の初期等痔病一切に神効を奏して遺憾なし 半劑八拾錢壹劑壹圓五拾錢特別製貳圓八拾錢送料拾貳錢

最近の大發見

肺病血清藥

從來の療法として醫學界に用ゐ來れる唯一の「ケレヲソード」の如きは殺菌の力はあるも其力たゞ藉りて肺病を治する事は事實上不可能の事柄なり弊館發賣の肺病血清藥は根本的に病因を全治せしむる適中新劑なり末期の患者即ち既に肺臟の缺損せる者に向ては病勢の進行を止め患部を固癒せしめ初期の人は七八日目より効顯れ一ヶ月以上二ヶ月にて全く快癒せしむ 半劑壹圓五拾錢壹劑貳圓八拾錢貳劑五圓特別製七圓送料拾貳錢

專賣 東京神田區小川町東明館前 オリエンタル藥舘

やせる藥

多血症●脂肪過多●中氣●便秘●酒ぶとり●凡てふとりすぎて御困りの方に害なく●やせて●中肉美容となる新藥なり試みたき人は郵券二錢送れ詳細報知す

東京市小石川區第六天町一七 池田製藥所

女（にの二）

女（にの三）

漁村



木蓮




花菖蒲――燕子花
燕子花と花菖蒲とは、何方が姉でせうか？妹でせうか？
その鑑別を附けるのは今！今が最も好い時季です！
而して一輪の花、一莖の葉を標本として之れを造花とするのも、面白いではありませんか
金三拾六錢御送りあり造花案内を送付す、
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
造花材料商 合資會社 天野卯兵衛商店
電話浪花（一六四三番）
電信略號（アマウ）
振替口座（東京）（四九七）

リウマチス全治

秘訣

妾儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悦に勝へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵券二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ

東京府下大森停車場東大畑

河奈とめ女

●小兒五かん驚風 ●蟲おさへ

登録商標 (八)

本方 小兒五かん一切の妙藥 奇應丸

定價 金三十錢 金拾錢 金廿錢 (送料金…錢)

東京市京橋區銀座三丁目

發賣本舗 (八) 松澤商店

賣捌は全國各々藥店賣藥店に特約あり (電話京三…)

隆鼻術(はなたかくするほう)

東京市九段下 神田今川小路二丁目十一番地

午後夜間

和田耳鼻咽喉醫院

[illegible]毛

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる祕密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老錬なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を發明し禿毛に關する世界無比の學理的發毛藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き賣藥山師的に無責任の廣告を爲して販賣する賣藥品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する売腎丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病ヤケド、デキモノ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●●●●●取次所ハ前月ノ廣告ニアリ●●●●

らい病

此らい病藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分析し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ヶ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生癩病を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする賣藥主義の賣藥に非ず

●●●●●醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ザノサール 一ヶ月分 貳圓

强力ザノサール 一ヶ月分 參圓

三河國碧海郡刈谷町

本舗 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

振替口座東京貳參壹壹 電話刈谷參拾貳番



コツホ博士撰定

ロード葡萄酒

（赤色ロ 金壹圓 金色ロ 金壹圓五十錢）

健康と成功と長壽を望む人は佛國製のロードを飲み給へ精分を増し肉を肥し腦神經を健全に肺及胃腸を强壯となし陰萎老衰、貧血、虚弱、冷え症、病後、産後其他凡ての衰弱に可驚特効あるが故に病者は勿論健康者の滋養飲料に適する他に類なき最上葡萄酒なり

直輸入 東京日本橋てりふり町 太陽堂洋酒部

大好評

機械不要 軽便 早取寫眞インキ

今回賣弘めの爲め特別御直段送料共金拾七錢（説明書付）で弘く發賣す速かに注文せよ但し切手代用十九錢振替は十八錢

今や日進月歩の世界にして文明利器の發明せらるゝ枚擧に遑あらず而して本法はシヤノタイプと稱し實に寫眞界大發明にして其方法頗る簡易なれば何人と雖も熟練を要せず此インキを塗りて作りたる原紙と一枚の普通硝子とを以て他に少しの機械藥品を要せず人物風景意の如く凡て其通り美麗鮮明に速寫するを以て愉快限りなし萬一寫らさる時は返金す安心注文せよ◎本品を用ひて自分の肖像入繪はがき肖像入名刺を製せば一層樂しみ多く友人も羨むならん、又如何なる文字にても一枚原稿を書けば其通り何千枚にても寫し得る故名刺葉書其他萬般の印刷代用として其便又彼の複寫インキ等に優る◎説明書は丁寧明細なれば誰にもよくわかる

●日本全國同業者へ卸元 發明 岐阜縣高須町七二五 發賣 振替東京七七八七番 皓文堂

Ⓗ Ⓗ Ⓗ

弊館發行の雜誌幷に圖書の御注文は必ず當係へ御申越下され度候編輯局若くは他の係へ宛て御申越相成候ては當方にて甚しく手數にも有之候間堅く御斷申上候

東京本町 博文館小賣係

Ⓗ Ⓗ Ⓗ

毛ぬき 新劑

●原名ヘールピン 壹圓、特製參圓、内地送費十五錢

本劑は極有効なる成分を集めて成せる脱毛劑にして主成分の化學的作用により皮膚に害なく根本より脱毛す男女毛多き人毛深き人は速に本劑を試みられよ

東京牛込區北山伏町壹 百合園製藥所

わきが

患者にて醫療賣藥有らゆる手を盡しても全治せざるの士女は獨逸醫學界の泰斗たるノート博士の最近發見のわきが根治劑「ブレート」を用ゐて速に其苦痛を脱せられよ○藥價は輕症用八十錢重症用壹圓五十錢蔓性頑固用特製三圓送費十錢郵券代用必ず二割増代金引換小包は一切謝斷：

◉發賣元 電話下谷二五六九番 振替口座東京二〇七四三番 東京市本郷區東片町十五番地 市原製劑部

女(ほの三)



（ほの四）

夫人と令嬢

右圖、子爵松平賴和氏夫人保子德川茂承侯令嬢）
左圖、子爵毛利元敏氏令嬢新歡子





令嬢かゝみ







右、實業家豐川良平氏令嬢靜惠子
中、實業家利光鶴松氏令嬢きぬ子
左、紳商大倉保五郎氏令嬢みれ子

懸賞文

俳優の化粧と素人の化粧に就て

第壹等當選者　東京　宇知多生

化粧法が根本から異ふ

△太陽の光の下で俳優の化粧顔を見て御覧
△艶氣のない、粗雑なものでお化の様だ
△素人は舞臺に出のでないと云ふ觀念が必要である
△俳優が常用すると云ふので誤まられてはならん

俳優の化粧法を抽象的の言葉で一口にいへば舞臺的であるといふ事に歸着する。舞臺的の語は、第一に遠見えを主とすること、第二に光線作用の援助を借りること、第三に濃厚主義なること、第四に非自然的なること等を含んで居る。

俳優の化粧は相對して演技するお互同士と見てくれをするのではない、目的格は觀客である。觀客は舞臺と離れて遠から俳優を望むのだから、背景や扮裝が土間の一や二の近くからは不自然なアラが見えても、離れて見れば其間に渾然たる調和が出來てるのと同じく、遠見で綺麗に見られれば、それで俳優の化粧の當面の目的は達せられる。九代目團洲の逸話に出幕となつて中腰になりながら、指先で眉毛を描いて走ることもあつたといはれたが、此名優の顔もそんな時は隨分ぞんざいなものであつたに違ない。遠見的だからごまかしがきく、ノリが惡くてもムラが出來ても、其アラが目立たずにすむ香氣なんぞもどうでもいゝ、いくら鼻のきく觀客でも、舞臺の上までは迚も嗅覺が屆かないから。

素人は之に反して、多くの場合、化粧の目的は常に對人的である。膝と膝とを突き合せ、目の前に顔をつきつけて語る何人でも化粧の善惡巧拙はすぐ見わける。俳優の化粧に必要がないと云はれて居る香氣の如きも、交際場裡に立つ素人同士に在ては、香料に依て對手に快感を與ふるのと不快の感を與ふるのとの差がある。故に素人間に於ては香料も注意すべき必要條件の一つである。

俳優の化粧は舞臺的である、即ち夜目遠目式である。隨て特種の光線の援助が必要である、夜間はもとより晝間でも舞臺の上は常に太陽以外の光線を借らればならぬ。電燈とか瓦斯とかの光を借らればならぬ。太陽の光線は兎角つや氣がないが、電燈等の光には特殊のうるほいを含んでる、前者はアラを暴露するが、後者はプラスアルハを美化して實價以上に割増をつけて見せる、恰も月夜には醜婦も美人に見えると同一である。試に晝間樂屋に行つて、太陽の光の下で俳優諸君の部屋に於ける化粧顔を見て御覧なさい、恐らく三年の戀もさめ果てゝしまふ程殺風景きはまるが、而もこれが一度舞臺の上に出ると、其のさめた戀も忽ちに息を吹返す程に美しく見えるこれが部屋の光と舞臺の光との差違、云ひかへれば太陽の光と瓦斯電燈の光との差違である。俳優は常に此舞臺上の光の伴ふアルハを勘定に入れて、其化粧を割引することが出來る。遠見的たるが故にノリやノビの惡い位のことはわけもなくごまかしがきく（前段團洲の逸話參照）、素人は電燈等の下に立つ如く、太陽の下にも立たなければならぬ。素人の化粧は月夜にも美人であり又晝間にも美人であるのでなければならぬ。少しでも割引したりごまかしたりすれば、其のアラは直に發見されて非常に目立ち却て醜き化粧顔となる恐れが

（一）

ある。素人の化粧は實に對人的であるから十全な用意を要する所以である、故に近く見ても高尚優美でなければならぬ。

遠見的光線的なことは、次いで濃厚的なことを喚起す。淡と濃とは程度の差であるけれど、一般に俳優は常に厚化粧を主とする。遠見えを閑かせて舞臺の光線に調和させる爲めには、どうしても厚化粧でなくては引立たない。うつりをよくする爲只ゴテ〳〵と塗る、塗られるだけ塗る、顔面筋の運動が不自由な程塗り立てる、俳優の鉛毒にかゝる者が多いのは、此厚化粧の必要に驅られて、只一時的にゴテ塗に適すればいゝといふ目前の便利から兎角有鉛の白粉を使用したがるからである。表面上は兎も角も實際は純粋の無鉛白粉で扮装する俳優は甚稀れである（是れは樂屋の事に精通せる某新聞記者の實話である）。

素人に於てはむしろ薄化粧の方が其化粧法の眼目である。高尚で床しくてどう見ても品位を落さないのは薄化粧である。必要に應じて厚化粧にするにしても、俳優の如くやたらに濃く厚くさへぬつておけばいゝといふ譯には行かない、素人の化粧には舞臺的でないやうにと云ふ觀念が必要である。常に對人關係たる根柢はどこ迄もつきまとつてるから、其の品質の選擇も決して俳優の常用すると云ふやうな事の爲めに誤られてはならない。殊にかの俳優の日々用ゆる猫腦脂の如きは非常に顔の生地を悪しくするものである。

最後に俳優の化粧は、非自然又は反自然を根柢としてあることを素人は忘れてはならぬ。俳優は各〻其扮する役々に應じ、いろんな技巧を加へて自己本來の自然を沒却せんとを勤める。自然を隱し自然を僞り、乃至は自然を害せん爲めに化粧をする場合が多い。素人の化粧は特に技巧を加へるにしても高尚にして其程度は只自然美を發揮する爲、乃至は天眞美を助長する爲めの目的であらればならぬ。

（三）

自然美の語は、人格美と肉體美との兩面を含む。人格美の陶冶や其の修養は美人論の根本哲學であるが茲には特に肉體美の方面に就てのみ論ずる必要がある。肉體美は先天的後天的の二つから成立つて先天的とは持つて生れた顔容美即ち自然其儘の形狀美である、其向上的變更は全體に於て人の力以外にある。併し人力の及ぶ限りに於ても、其の形狀美を補充し又幾分か助長することも出來る。其の補助の方法手段が化粧法である。

後天的とは皮膚美、即ち白いこと艶々しいこと、うるほいのあること等である。此方は人の力に由て發揮することが出來る。人力の支配の下に之を白からしめ艶々しからしめ、うるほひあらしめる爲、こゝに石鹼にも優る洗粉が出來、又無害有効なる無鉛の白粉が出來た。化粧品の凡ては畢竟この皮膚美の補助品である、助長手段である、一時の便宜や俳優の化粧談に迷うて不純な白粉を用ふるが爲に、鉛毒で身體をこはしたり、目前の巧言に釣られて不良な石鹼を使つて却て皮膚の艶氣を失ひ、うるほひを抜く等のことがあるならば、これ化粧をするために却て根本の目的たる自然美を損ずるもので、首と尾と、主と客とを顚倒したものといはれねばならぬ。

俳優と素人とは其化粧法に於ても目的に於ても、少く共如此差違を認めればならぬ 從つて俳優の使用する化粧品が必ずしも直ちに素人にも適應するとは言はれない。

但しこれは抽象論である、實際に於て果して如何なる化粧品が素人に適するかは茲に殊更解説する限でない。要は其根本の目的を誤らない[illegible]内に於て石鹼でも洗粉でも白粉でも其選擇が必要である。

心ある母の書翰

貴婦人間の問題となれる
俳優の化粧と素人の化粧に就て

吾が愛娘よ、俳優の舞臺化粧は一種の變相術なり、或は老人となり、或は若衆となり、或は姫樣となり或は小娘となる。是れ白粉其他の化粧料にて巧に其形を變へて見するなり、素人が此化粧法に倣つて厚く白粉を塗る時はそれこそお化になつて了ふべし。

自然の美を失はずして天眞の美を發揮するが素人の化粧の目的なり美顏法の秘訣は厚く塗といふよりも寧ろ厚く塗らずに皮膚の美を美しく見せるにあり此の秘訣を能く心得たる人は日常クラブ洗粉を用ゐて高尚にして床しきクラブ白粉の薄化粧を施すが第一なり、彼の俳優の舞臺顏の如き左官式の化粧法は素人の化粧としては最早今日の時代に伴はざるなり。

御身良く淑女の品位を保つ化粧法を心して見られよ智識ある上流婦人は總てクラブ白粉の高尚なる化粧法を採れる事を御身呉れ〴〵も高尚は婦人の最も尙ぶべき容儀の條件なることを忘れ玉ふな。

（三）



クラブ歯磨　　クラブ白粉　　クラブ洗粉

夫人と令孃



上圖　紳商菊池長四郎氏孫孃絹子

下圖　神戸紳商小寺謙吉氏夫人

斯華會春季大會





上野常磐華壇にて

判明な發音で其上に丈夫な

舶來ライロホーン

兩面盤音譜多數到着仕候

（定價金壹圓五拾錢）

王冠印クラウン音譜四月吹込新製

アイヌ江差追分、一ノ谷、ペリカー（アイヌ土人、ペルリ）

新曲尺八（野崎村、寺子屋　遊吹、詩人米山　一睡軒花堂）

流行唄、亥の年、新作狂詩米山

○樂隊、謠曲、新内、浪速節其他百數十種

◎尚引續新吹込の新音譜多數發賣仕候

專賣特許 連働蓄音器　新案特許 重函蓄音器各種

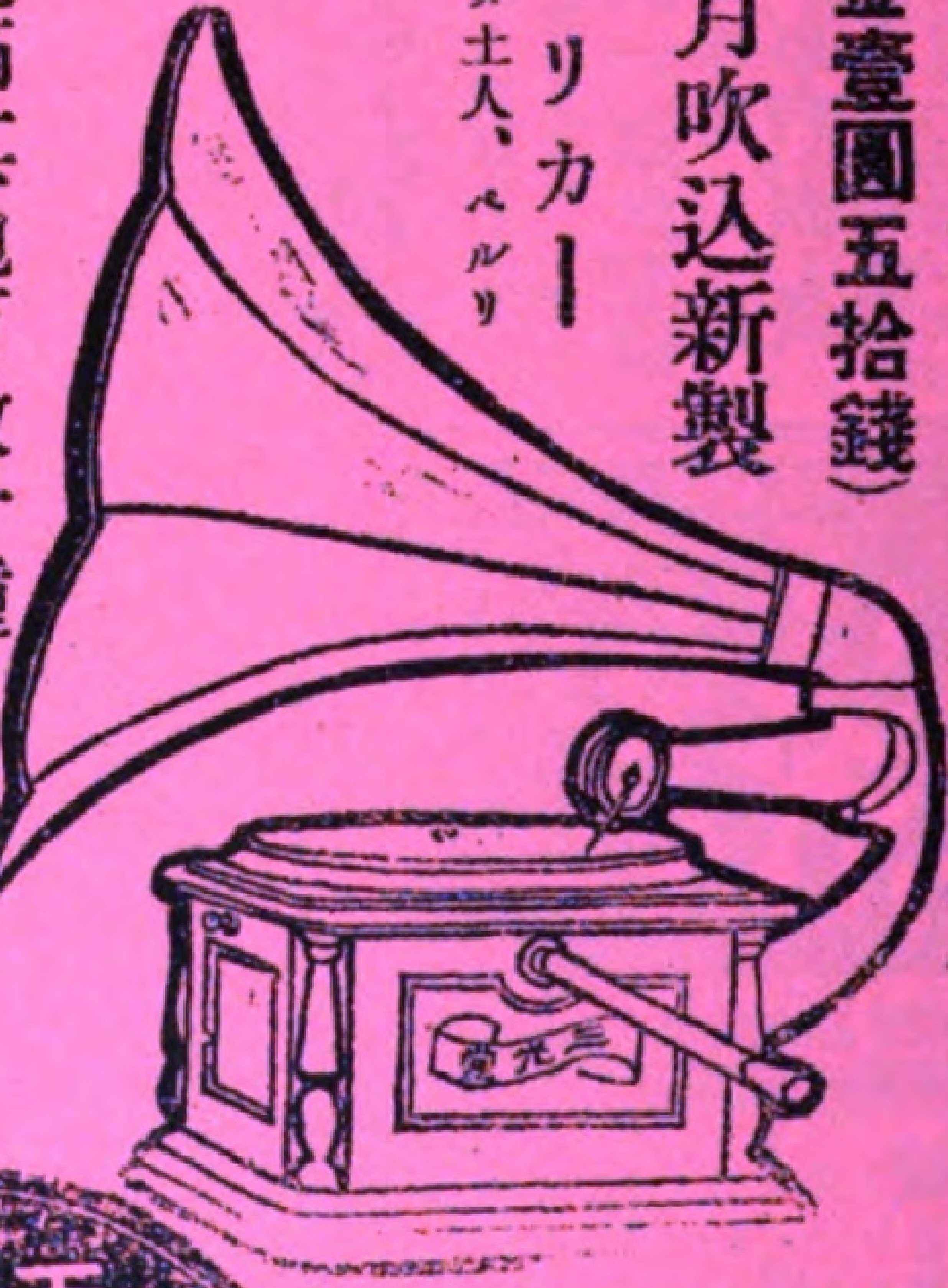
◎實用新案理想的 安全音譜入 新製發賣仕候

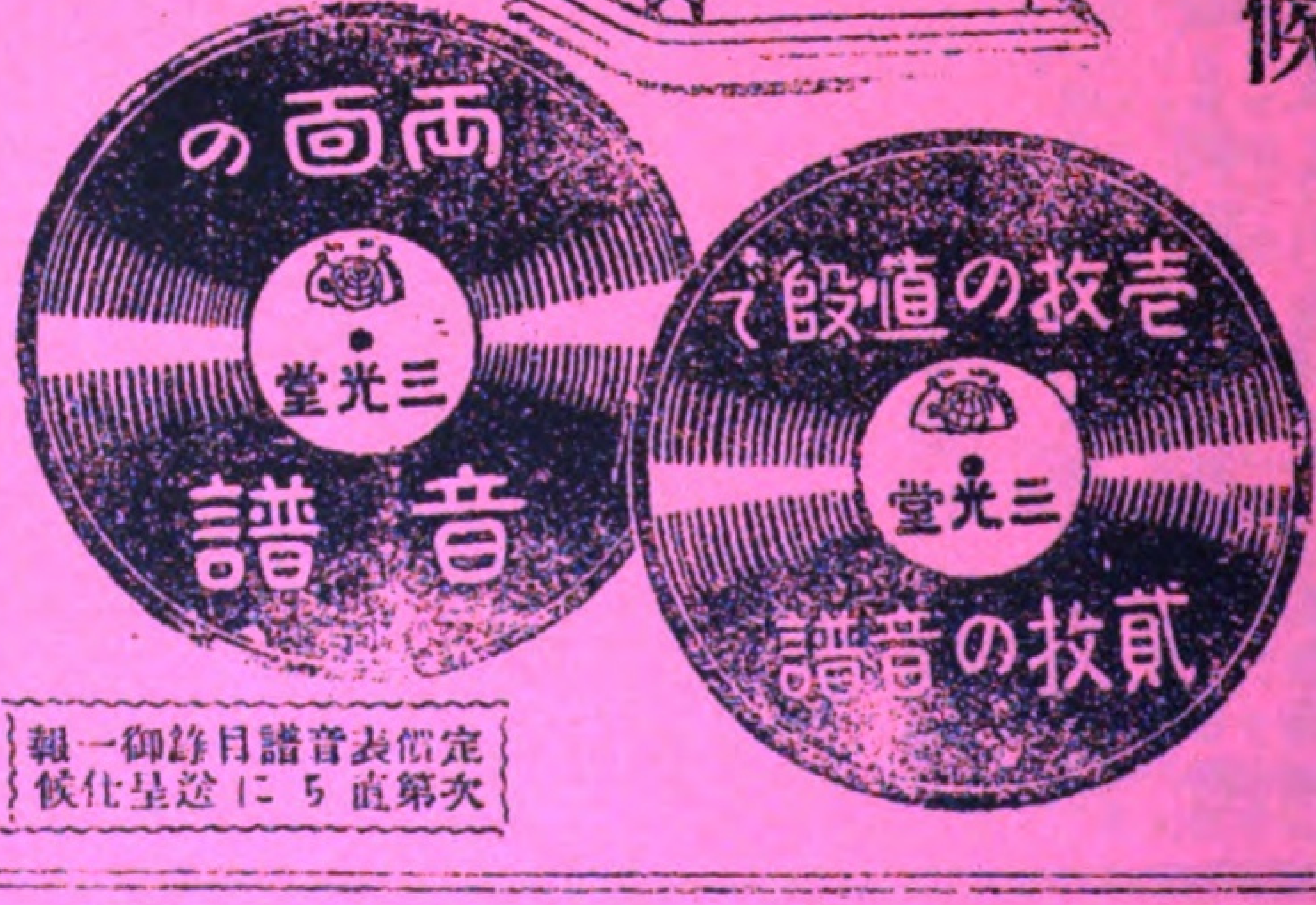
東京市銀座一丁目三番地（長電話京橋九七八 振替口座東京六四二五九九）

東京市淺草並木町廿五番地（長電話下谷九八八 振替口座東京一九八八四）

支店……（大阪）……（九州福岡）……（北海道小樽）

三光堂





定價表音譜目錄御一報
次第直ちに差上仕候

（その一）

婦人へ相談

月やく滯又は不順

等を人知れず秘密に治療せんとするのが女の性癖である、夫故往々有觸れた無効の藥などに迷ふて後日の大病を引起す人が多い、此等の婦女に斯道大醫の方劑を仰ぐと同樣最も安心に快通流下する靈藥をお知らせするから、郵劵三錢を添へて申込みあれ密封にて詳報す

東京市京橋區金六町三番地

笹山むめの

●裁縫に必要品

特賣 發賣一週年の祝として此廣告封入御注文に限り一個卅錢**特賣●**

新案 都針箱

△箱入美製竪七寸
△横三寸深サ一寸

價 一個卅五錢
郵稅 八錢
市內 四錢

切手代用一割增

此都針箱はコンパス入形にて內部の構造頗る面白く裁縫道具一切入れる事容易なり發賣以來各女學校用として好評を博せり尙ほ今回は弊店新案裁縫用手帳並に蠟を呈す

發賣元 東京日本橋住吉町廿二 長島商店

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液

禿、脫毛、薄毛、生際惡き人試みよ……



本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髮の毛はへぎは眉毛髮等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべきき所に毛なききに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舖 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂



日本輸入品に限り包裝紙に斜に「**アイボリー石鹼**」と記入し一見模造惡質石鹼と判別に容易ならしむ御購求の節「**アイボリー石鹼**」に御注意を乞ふ

◉見よ!!! 若き男女の秘書出でたり!!!

第三版

最新美人法

第一 白色法 色白くなるつけ薬飲み薬等實驗有効の方法十餘種を分りやすく詳説す外に薬品等を用ゐぬ簡單の眞法數種あり

第二 美髪法 髪の毛を美しく柔かにツヤをよく長くする十餘種の方法と縮れ毛癖毛薄毛赤毛白毛等を治す眞法其他種々詳述す

第三 美顔法 顔を洗ふ最良の方法眼口唇等の注意油顔赤顔青顔等を治する方法シワのよらぬ法歯を白くする方法を詳記せり

第四 治療法 やせる法こえる法鼻高くする法聲をよくする法イボあざワキガひぜん田蟲ナマヅ其他秘密病の必治法を記述せり

第五 養生法 根本的美人となる平生の養生法食物と美人との關係婦人病と顔色との關係其他睡眠運動の注意等を面白く記せり

第六 化粧法 化粧品の撰び方最新の化粧法鼻高く見せる法目を大きく又は小さく見せる法唇を薄く又は厚く見せる法其他色々

第七 服裝法 衣服の色合や縞柄の見分け法衣服裁縫の注意より着物の着方帶のしめ方に至るまで皆一冊中に分りよく記述す

●學理實驗上必ず有効なるを證す●大割引送料共金廿五錢振替廿六錢切手廿八錢

通俗衛生

女の心得

女子性來の心弱き是非必要なる事にても少しく秘密なる事を尋ぬる事を得ず遂に甚だしき不衛生の事をなし爲めに我身を害し子孫をも損ふに至る著者之を遺憾とし其秘密の問に答ふべく本書を編む。

●本書内容大略▲婦人の秘密にするいろ〳〵の病氣の話及其秘密療法▲月經の模樣と種々の注意▲婦人科醫と秘密▲子の有無の話▲婦人の秘密の心得種々▲姙娠中の心得と食事の禁物▲出産前必ず用意すべき品々▲産後の心得▲小兒の蟲及がん▲子を持つ月▲出産の日を前知する法▲懷姙せしか否かを知る法▲夫の放蕩を止めさす法▲酒きらゐにする法▲夫婦將來の和不和を前知する法▲胎内の子の男女を知る法▲飯の片煮又はこげ臭きをなをす法▲髪を新らしくする法▲秘密日記手紙等の書き方▲洗濯屋の大秘密洗濯藥の調合法▲或娘のザンゲ話等實に面白く若き男女の參考として必ず一讀あらん事をすゝむ

本書には右の外に種々の記事あれど只廣告の目次だけにては見つまらぬ卑猥の書と誤解せらるゝ恐れあれば略す、尚本書は甚だ嚴重に密封して本送す故に兩親兄弟朋友等に決して知れる心配なし安心して御注文あれ。

●秘密の問に對する秘密の答全一冊

●特別割引送料共金拾八錢切手送金廿一錢振替十九錢

發行專賣所 東京神田錦町三の二 振替東京一六一八番 學友社（本社着金即刻送本）

ちゞれ 婦人の新福音

（くせ毛並に赤毛を黒くし白毛を防ぎフケを去る奇劑）



昔はちゞれ毛くせ毛は迚も治らぬものと嘆いて居りましたが、今は良藥に依りて生來の難毛も必ず美化できる樣になりました。本劑「美髪液」は藥學專門大家が永年研究の結果發見された、ちゞれ毛くせ毛を直し赤毛を黒くし白毛を防ぎふけを去る新藥にて、世に弘めてから五年になりましたが此間に多くの全治者を出し、澤山の禮狀を戴いて居ります、此の際特に「美髪液」の効能を多くの方に知らせたいのです、誠に頭髪は婦人の生命でありますから、不幸にしてちゞれ毛くせ毛の方は速に本劑を御使用の上、是非美髪になって戴きたいので御座います

（詳細の説明書御入用の方は郵券二錢送付あれ進呈す）

●東京市神田區仲猿樂町十番地 北澤定子

◎**美髪の眞法**を最もたやすく自修的に實行するには如何すべきか

◎**拔け毛禿げ**を最も確實に防止し濃髪を再生せしむる確法如何

◎**薄毛赤毛**は如何せば最も有効に之を濃化黒化せしめ得べきか

◎**縮れ毛癖毛**は如何せば最も安全に矯正し得て再發の憂無きを得るか

前記の諸問題を毛髪生理學の上より**根本的**に解決し一度**治癒**せば**永久**其の患に罹る事なき最も容易に安全に確實なる自修的療法を明快に講述せるものは

専門大家口述の無價珍寶・・・・・・・毛髪衛生説明書是なり

（一千部を限り）郵券貳錢送附次第先着順にて贈呈す

名古屋市中區中ノ町三丁目 **鬼頭杏西堂**

女（との四）

蒙古圖爾巴特王と妃



令嬢かゞみ



青山花子（西大久保）

中、齋藤銀子（日本橋）

山口ため子（赤坂）

加賀美紀子（赤坂）

藤村俊子（赤坂）

女子文壇 紀念第百號

☛五月一日定期發行

◉紙數三百餘頁 木版、寫眞版挿畫澤山
◉本號限特價三十錢 送料壹錢五厘

▲現代婦人百人一首（肖像及筆蹟入）
上は各宮殿下より現代各方面の名流婦人一百人の自作の和歌を請ひて掲ぐ、好個の讀物なり

▲脚本『祇王』山崎紫紅作
帝國劇場の初舞臺『源賴朝』を書きおろしたる有名の脚本作家が特に本誌の爲に起稿の最近作脚本一幕物なれども約四十頁に亙る長編なり

▲與謝野晶子論
○婦人の作物に現れたる色彩（和田英作）○短歌の爲に生れた人（森田草平）○熱烈に吾が生を愛す（窪田空穗）○尋常一般の女流作家にあらず（藤島武二）○心持は貴族的實際は謙愼な夫人の生活（馬場孤蝶）○和歌の創作三千餘首（河井醉茗）

▲わが好む演劇と音樂（四十八名士）
文士あり、畫家あり、學者あり、實業家あり、婦人あり、皆各自の好む演劇と音樂に就て其題目を擧ぐ、歡樂の興味油然として起る

▲家庭の仕事が減じて來た……大塚文學博士
▲將來の男女の關係……上杉法學博士
▲好んで藝術家たるに及ばず……井上文學博士
▲西洋の若き男女の交際……藤島武二
▲女庭訓……中村文學士
▲近頃の婦人問題……鳩山春子
▲母としての自覺……日向欣子
▲正直に言ふ男子の見立……ほとゝぎす
▲日本及世界文豪……
▲有のまゝに現はしたる若き女の身の上……十篇

◉滿願の日 竹久夢二筆
本誌が企てたる新しき試みにして、明治の新錦繪とも稱するもの、本誌二倍大、奉書摺木版極彩色十六度刷を添ゆ

東京京橋區大鋸町 女子文壇社出版 賣捌全國書店

女（ちの二）



○子宮病自宅療法と姙娠法

子宮病の一般の容態は、手足が冷え悪寒がする、逆上や頭痛がする、肩凝り眩暈もする、そして内股や腰の邊りに索張る様な疼痛を覺え、勿論子宮も多少の痛を感じ、下腹が重苦しく條張り、小便に度々行き、或は便通が惡くなり、局部の周圍が痛痒く不潔で惡臭がある、斯くて間もなく（或は初めより俄に）稀薄な水様の物、又は濃い粘りある膿の様な下物（白帯下）がする、斯うなると月經は多量になつて、經行前には疼痛を覺え、且月經時で無い時も出血し、白帯下は續いて有つたり無かつたり、而して腰部が何時も痛い、これが永く續くと一生涯不姙となり、辛い淋しい月日を送るばかりか、段々身體が衰弱して、取返へしの附かぬ重症を惹起し、遂には命迄失ふ様になるのです。

▲子寶を得る最も良法　斯様に子宮病は恐るべき疾病ですから、一旦本病に罹ると、どんなに輕症のものでも、全く根治しない間は何うしても、子供が出來ません、世間には子寶がないと、自分等夫婦には子が無いのだと、斷念めて居る方も尠くない様ですが、決してそんな道理はない、中には其罪が良人にある事も御座いますが、十中の九迄は婦人の方が、本病に犯されて居るのが多いのです、又子宮病の治療は多く手術をいたしますが、手術をすると治りが早い代りに再發し易く、殊に全快した後でも姙娠する事が極て稀で御座います、それに手術を受くるには、身體の餘程強壯な方でないと到底堪へられません、然らば

▲何うするのが一番よろしいかと云に、それは婦人科専門の大家醫學士北畠孝夫先生の御書になりました『婦人病者心得』を讀んで其通りに養生なさるのが、最も安全で最も確實な療法で御座います、此方法によると大概の子宮病血の道は、自宅で容易に根治せられ、御希望通り姙娠が出來ます、皆様、理窟では病氣は治りません、物は試しと云へば、現に身體に異狀ある方は勿論、何んともなくて、是迄一度も姙娠した事のない方、又は流産難産の癖ある方は、兎も角婦人病者心得を御覽になつて、成程と得心が出來たら、速かに本療法を試みなさい、後悔は先に立たずです。

記者曰く婦人病者心得はハガキにて東京京橋新榮町笹岡省三氏宛申込めば無代送附せらる

新婚の人



法學士大竹勇氏新夫人あき子（東京女學館卒業）



西田亮氏（樺太實業家）新夫人てい子（郡司成忠氏令孃）

福州三山婦人會



清國福州日本領事館庭内ニテ

化粧香水 フラチナ



八方美人の香水

世に香水の數は山々あれど悉く一品一効で人の鼻な衝くだけの効能さい持つて居ないが此のプラチナ香水は

●ハンカチーフに一二滴たらして持てば終日香氣を保ち

●微溫湯に滴らせば乳白の化粧水と變じ

●顏を洗へばニキビ、ソバカス、吹出物を全治し

●頭髮に塗抹すれば毛髮を養ひ香氣馥郁香油の代用をするのみならず髮のくせを直し赤毛白髮を防ぎます

故に人は本品を「八方美人香水」と云ふは尤なる次第である

定價壹瓶三十錢▼郵券代用一割增遞送無料

東京日本橋横山町一丁目

發賣元 近江屋 天野源七

浪花八六三番 振替口座五九三三番

宮內省御用達

ヒゲタ醬油

千葉縣銚子港

田中玄蕃釀造

伊國皇室御用

(りの一)

女(りの三)





女學世界

第拾壹巻

第七號

五月號

女學校の先生へ

眞劍な忠告

諦三世

全國數萬の女學生の渇望を、一身に脊負ひ花咲く四月を欣々として、御上京遊ばしたのは昨日の樣で御座いますのに、もう御卒業さうして御奉職地も極りましたとやら、立派な敎諭樣としての御歸省を私はまあどうして御迎へしませうか、村の名譽として、よるとさはると貴女のおうはさ、御母樣の御顏の晴れやかさは御皺ものび〳〵したやうで御座いますわ。私なんぞはもう糠味噌臭くなりまして、お話しがてんと合はないかも知れませぬ、それはもう十分の御覺悟の上、十分な御學問の御あんなさる貴女で御座いますもの、槍が降らうが彈丸が飛ばうが、びくとも遊ばさないのは、承知致して居ります、然しね、貴女、お怒り遊ばすな竹馬の友の私には、矢張りなつかしいお多代さまで御座いますの、女學校の先生樣であらうが、敎諭樣であらうが、やつぱり、桃割れにおそろいの丈長喜こんだ頃のたよさん、私には一寸も一寸もかはりませんわそのたよさまに私が、心持だけ、お明し申す分ならさし支へませんわね、後は水へなり海へなり、灰へなり遊ばして、──當て碎けろと申しますね、複雜な樣で單純で、單純なやうで複雜な、それは面白いのは世の中で御座います、科學や哲學のみにお耳なれた、貴女には平凡な無趣味なと思召すことに、案外、警句があつたり、カントだとかデカルトとか變んな名前の人の言草の外、太郎兵衞さんも一大眞理の說明をすることがあります。底の下に底、蓋の上に蓋、オヤ〳〵と吃驚遊ばすことが、一度やそつとではなからうかと私は思はれて仕方がありませぬ、殊に失禮ながら、貴女なぞは順境許り歩いてお出でになります、小學校も優等、女學校も優等、御兩親のお秘藏子、學校の自慢生徒、すく〳〵と手放しで御身大きく御なりなす

つた方です、さうして女學校を御卒業遊ばすや否や、直ぐに女子高等師範學校の寄宿舍生活、よしんばお友達の間に、多少の紛糾はありましても、お試驗で御骨が折れてもそれは世の中に出でゝ、せちがらい世渡りする身からはほんに〳〵極樂淨土とも申しませうかお樂で御座います、それですから、貴女は、世の中の表面の一本すぢの大道しか御存じ御座いません、路次から裏町へぬけて細道を通つてなんぞいふ呼吸はとても御わかり遊ばしますまい、お羨しい事、私も貴女の樣に實はなりたい、貴女も泰風習々とふく國に、いつまでも、かうしてお出での事を私ば衷心から願ひます、然し〳〵、夜半の嵐は得て吹き安いもの、比較的、清淨な教育社界でも、一人前の立派な先生としてお立ちになるからは、お辛い節は今から御覺悟遊ばせよ四年の螢雪の功をかさね、學窓で練りに練つた理想を實施遊ばさうとする段になりますと、あちらからもこちらからも故障が起ります、夏目樣の「坊ちやん」あれは中學校のことで御座いますが、女だけあれ、以上の角突き合ひが教員室の中には絶えず繰り返へされて居る者と思召せ、そこに御位置の高い御經驗の淺いお孃ちやんの貴女がお出でになつたんだから、はら〳〵思はずには居られませぬ、口で云ふ事と行ふ事、思ふ事、三つの事が工合よくしつくり合ふのは、まあ母樣とさしむかひの御家庭位で御座いますわ、矛盾の多い社會と思召して、何事も大目に御覽すぐし遊ばせよ、殊に四十過ぎるまでもミスで紫の袴を引きずつてお出でになる先生方の中には隨分ヒステリックな偏した方があります、人を教育するより御自分から出なほして欲しいやうな人物もありませう、そんな中に御這入りになり、あれも氣にくわぬ、これも癪のたねで、御煩へ遊ばしては嫌で御座いますよ、嫌どころか人間の子がたまつたもんぢやありませんからね。それから生徒に對してゞ御座いますね、それは教授法だ教育學だとちやんと御習ひ遊ばしたのですから、世話はありますまいが、生徒だとて人間で御座いますから、直覺的に先生の御値うちはちやんと見て取る者で御座います。それ

ですから始めが大切で御座います、出來るだけ、莊重に、出來るだけ柔和に、出來るだけ公平に遊ばすがよろしう御座います、ことに生徒に對して必要なのは同情で御座います、あふるゝ樣な同情を以て遊ばせば、根が無邪氣な花のやうな少女だけ、貴女でなくつては夜も晝もないやうになりませう同じ生徒と申しましても家庭の狀態は千差萬別十人十色で御座います學校からお歸りになれば家庭教師がお待ちうけして居りまして御復習申上ぐるといふ富豪の娘もあれば、七人の兄弟の姉娘で子守りや家事の手傳ひ旁、學校に通ふものもありませう、そんなのに、同じ課題の同じ量の宿題を御課しになつたり、又克明に甲だの乙だのと評點遊ばすのはすこし可哀想と思ひます、其れも學習院だの女學館だのと相場の極つた學校なら知らない事、通常な女學校では中流の家庭を標準にするので御座いますから家庭の手傳ひして學校に通ふのが過だとは申されますまい、母親の心になれば、少しでもいゝ所の娘樣の多い學校でゆかしい氣品のある娘にしたいといふのは山々で御座います、やれ作文を書いて來ないの圖書の出し方が惡いのとがみ〳〵被仰るのは本人の娘のみならず家庭の母の身となつてどんなにどんなに辛いでせう、その癖、學校では良妻の、賢母のと被仰る樣ですが、概して女學校の優等生は良妻とも賢母ともなるのが少い樣で御座います、成績が中通りで氣立のいゝ娘が思ひの外の良結果を修める例が、往々あります、下手なの



香川伯爵令嬢志保子（皇后宮御用掛・書道の名手）

は上下に、偏して居るのは正しく遊ばすのはこの上もない結構な事で御座いますが、そこはよくその子の家庭や境遇をおきはめの上、その子の天性やら傾向やらをよく御斟酌遊ばしてお小言を被仰つて下さいますやうに、徹底しない同情ほど苦しいことはありませぬ、うけます當人の迷惑、おかけになつた方の御不滿、ほんとにつまりませぬ、出來ないからかあい想、性質がひねくれて居るから氣の毒と思召していろ／＼おさとし遊ばしても、その依りて來る處が、判然して居ないではその要領を得てきつぱり圖星をおさしになることは出來ませぬ、徒勞に歸しませう、然し世間の通常の家庭では、さう／＼うちあけて他人に家庭のありさまが明白に云へないのが多ふ御座りますし、年頃の娘に疵をつけて、やれ我儘の、氣隨のと打あける母親も少う御座います、そこは貴女の御人格一つ、あの先生ならと云はれになる樣におなりになりませ、奢侈の何のとやれ着物は木綿にしろ、リボンは何時限り等と御被仰るよりもやさしい心さへ生徒が持つて居ますなら、こんなにしては兩親が困るあゝしたならお友達がいやに思ふ等いふ氣が出ましてさうさう突飛な風にもなりますまい、ことに女學校時代は、身心ともに一大變化の機で御座います、動きやすい單純な清淨な心はこの時機にかちをとる人の心で暗くもなり、ひねくれもし、又その儘うつくしくものびます、學問や技藝なら補ひはいつでもつきますが一旦うけた胸の創痍は容易になほりませぬ



新夫人の洋裝

他家の大切な孃さんをお預かり遊ばす貴女、何卒すらすらしたひねくれないやさしい女性を御養成遊ばして下さいまし、以上つまらないこと長々のべました、前にも申上げた通り私の心持だけで御座いますから、宜しく御みのがしを願ひます、無學な私が立派な貴女に御説教、これも世の中の矛盾の一つだと御笑ひ遊ばして下さいまし。

結婚の資を作る婦人

神戸から三晝夜の航海波濤遥かに沖縄縣那覇の港に上陸すると、先づ第一に眼につくのは男女共に下駄も穿かず草履も履ます、高等女學校の生徒までも裸足で通學して居ることであります。又埠頭から沖縄縣廳所在地の方に向つて五六町程進むと、其所には魚市場があつて、手の甲に入れ墨をして破れた琉球風俗の衣服を着た賤しさうな女共が、魚を手々に攫んで我々にはサッパリ不明の沖縄語で「買つて呉れ」と勸めて居ります。私は始めて之等の婦人を見て如何にも憫然の情に堪へなかつた。そこで種々と沖縄の風俗を研究して見ると、之等の婦人に就て實に感心な話があります。

前述の魚市場に居た婦人は、多く那覇から南三里許り經たつた字糸満といふ村から來て居るのですが、この村では漁業より外に生業はないので、男子は南洋邊の飾り、北九州の近くにまで船を進めて、漁魚に從事し、又其妻や、妹等は、皆此船の歸るを待つて、其得物を、前述の魚市場に持ち出して、之を賣る、而して其利益の一部を、各自に分配して、その金を宜く貯蓄するさうで、いざ婦人が結婚をすると云ふ場合には、其貯金で萬端の仕度をして、決して親や兄弟等の世話にならず、内地の婦人のやうに、親兄弟の世話になる事は、寧ろ大變な恥辱と思つて居ると云ふことであります。私は此話を聞いた後で試みに糸満婦人の貯金高に就て調査して見ましたが、婦人一人に就き、最小額が四百圓、多額のは約二千圓の貯金を有する婦人もありました。

（東貫重昴氏）

常識の養成

井深花子

米國で私の居つた學校は極く愛校心の強い生徒ばかりで、卒業後幾星霜を經た婦人でも、母校を慕ふこと我家の如く、母校の事と申せば力の限り働らきます。學校が古いだけに各地方の支部會員が却々の多數で、これが尤も有力なのでございますが、學校に因緣なき資産家婦人も、學校のためには多額の寄附金をいたします。その寄附金のいたし方が一寸變つて居りまして、假令ば貴女方の同窓會に貴女方が一萬圓を支出するならば、私は三萬圓を寄附する、若し貴女方の手で一萬圓だけ出來なければ、私は他の學校に寄附する、と云ふ奬勵的の條件付で申込むのですから、會員達は猶更一生懸命になつて金を集め厚意を受やうと働らきます。斯樣活動は金力ある彼國婦人の仕事で、素より例には引れませんけれども、母校を愛する精神だけは我國の婦人にも移し植ゑたいものと存じます。卒業の別れに袖を絞りながら、何時とはなしに師の恩も友のことも忘れ果て、身の飾りに頭腦は使つても、母校のために働かうと云ふ考は全く消滅して了ふやうでは、とても高尙な品性を保つことは出來ません。足一度學校の門を出れば責任を双肩に擔ひ、自分は學校の代表者であるから、自分の行に依つて學校の名を汚してはならぬことを夢寐の間も忘れぬ心掛は、是非ありたいものと存じます。

△母校の演壇に立つ神々しき姿

私の居りました學校では、毎年卒業式の期に、卒業後五年目、十年目、十五年目、廿五年目、五十年目に當る婦人へ特別の招待狀を發しますので、老若多數の卒業生が打揃つて學校へ集會いたしますが、在學生は面識もない古い卒業生を時代後れとして疎外する風は微塵もないのみならず、老卒業生ほど學校に因緣の深い婦人として優待いたし經驗談を聽くことを何より

の怡びといたします。老婦人も又娘や妹に遇ふ如く少しでも有益な談話を耳に入れやうとする、その靄然とした和氣は誠に床しいものでございます。卒業生はこの特別集會の他に、折があれば一個人で母校を訪問することがございますが、これを歸ると申して丁度古郷の實家へ歸る考へで居ります。而して校長や教師が變らうが古馴染が無からうがそんなことに一向頓着はありません。五十年前の卒業生が白髪に白い頭巾を被り、杖に縋つて母校を訪れ、演壇に立つて經驗を物語る樣子は、實に神

新婚の春



高木隆吉氏（三井物産社員）と新夫人登代子（實業家福島宜三氏令嬢）

神しい感を與へます。母校と後進を愛する熱情より迸り出る老婦人の談話は、句々赤誠が籠つて居りますから、後進者は慈母の教を聴く思ひで歡迎いたし、演壇に上らぬ内から急霰の如く拍手が起るのでございます。彼有名なアンクル、トマスキャビン（奴隷虐待を小説的に書いた物で、南北戰爭の動機となつた位の有名な書）の著者ストー夫人が七十幾歳の老體を提げて訪問れさた際なぞは、全校湧くやうな歡迎でありました。

△他を幼稚視する慢心

我國では昔から長幼の序が正しい美風がございましたが、教育の進歩した今日は却つてこの美風が廢れ、若い者は新智識を恃んで時代後れとか、老朽談するに足らずとか申して、兎角老者を侮り、家庭に於ては氣儘の嫁が現はれ、社會には暴慢無禮の學生を見るやうになりました。尤もよく考へて見ますと、老者の方にも侮られる原因はありませう。我國の人は男女共早く心が老いて

巴里新流行の婦人服



裾が細く小股でなければ歩かれぬ樣な形で大抵繻子地で作つてあります

勉強心が早く衰へます。現に私なぞも近來人の書いた論説なぞを一生懸命に讀む氣が減りましたので、これは確に勉強心が衰へて他を幼稚視する慢心が生じたのであらうと友達と話したのでございますが、畢竟慢心が怠惰を生み、怠惰は早老を促して若い者に馬鹿にされる。假令馬鹿にされぬまでも自分の老込から僻みが起るので、益々威を落して了ふ氣味がありませう。智識の幼稚であつた時代は長幼の序が都合よく立つて居たのでせうが、今日は却々これが困難になりました。併し乍らよ

し智識は古くとも、多年の經驗を味ふた貴い老者を侮り、長幼の序を亂すと申すことは、文明國を以て任ずる青年男女の大不德義ではございませんか。米國當りの青年男女は大學生になつても少年時代から敎を受けた日曜學校の老女敎師を敬慕し、日曜には子供に歸つて敎師の許へ談話を聽きに參ります。敎育の程度から申したら自分と比べ物にはならぬ老婦人を師遇する美風は羨しいことゝ感じました。老婦人の方も度量がひろく、若い學生に向つて私は學問は古いが經驗と云ふ寶を澤山持つて居ますと揚言して愛情のこもつた訓話なぞいたして居ります。老若の間柄はこんな風になりたいではございませんか。



新婚の春

△婦人會の餘興

婦人の會合に藝人を招いて餘興を催ほすことが主要の條件となつて居ります内は、未だ意義ある會合も興の和樂も得られないかと思ひます。藝人を招かずとも、會員達が音樂を奏するとか、自作の詩文を朗讀するとか、經驗を語るとか、各自御得意のことを十分に發揮した方がよいと思ひます。併し未だ我國婦人會合の席で少しでも變つたことをいたす者はおはねとかお天狗とか貶され易いので、折角學識のある者も氣兼して差扣へると云ふ風がございます。爰はもつと會員各自が度量を廣くして俊秀の會員あることを我會の名譽とし、己れに勝つた會員に依て

己の發達を益することを怡ぶやうになりたいものです。この精神なき婦人の會合は徒らに時間と金を費して不愉快を買ふのみでございませう。

△談話材料の蘊蓄

會合の席で優遇されたいのは當然のことですが、特に婦人は期待心が強いので、これが不愉快を買ふ一原因でございませう。會に出て愉快を得やうとするには人の優遇を望むより人を優待しやうと云ふ覺悟が必要でございます。集會の席で、知己も話し相手もなく、木から落ちた猿で、氣の毒な人を見付けましたら、何か談話の緒を引出し、他の會員に接近させるとか、何や彼や人に勸める間に自分も自から愉快になつて參るものです。これについては平生多方面の談話材料を蘊蓄することが必要で、『今日は良いお天氣でございますネ』と此方から口を切つても、『左樣でございますネ』と答へるだけで口をつぐみ、取付く島のない相手に對しては、何か刪妙な話柄を向て彼を怡ばせることが必要でせう。併し時としては人につとめる者まで惡評を受けることもありませうが、自信ある婦人はつまらぬ批評に氣兼するに及びません。懇意な婦人同志が此所彼處に一塊を作つて密談低語することは甚だ面白くないことでございます。

新婚の春



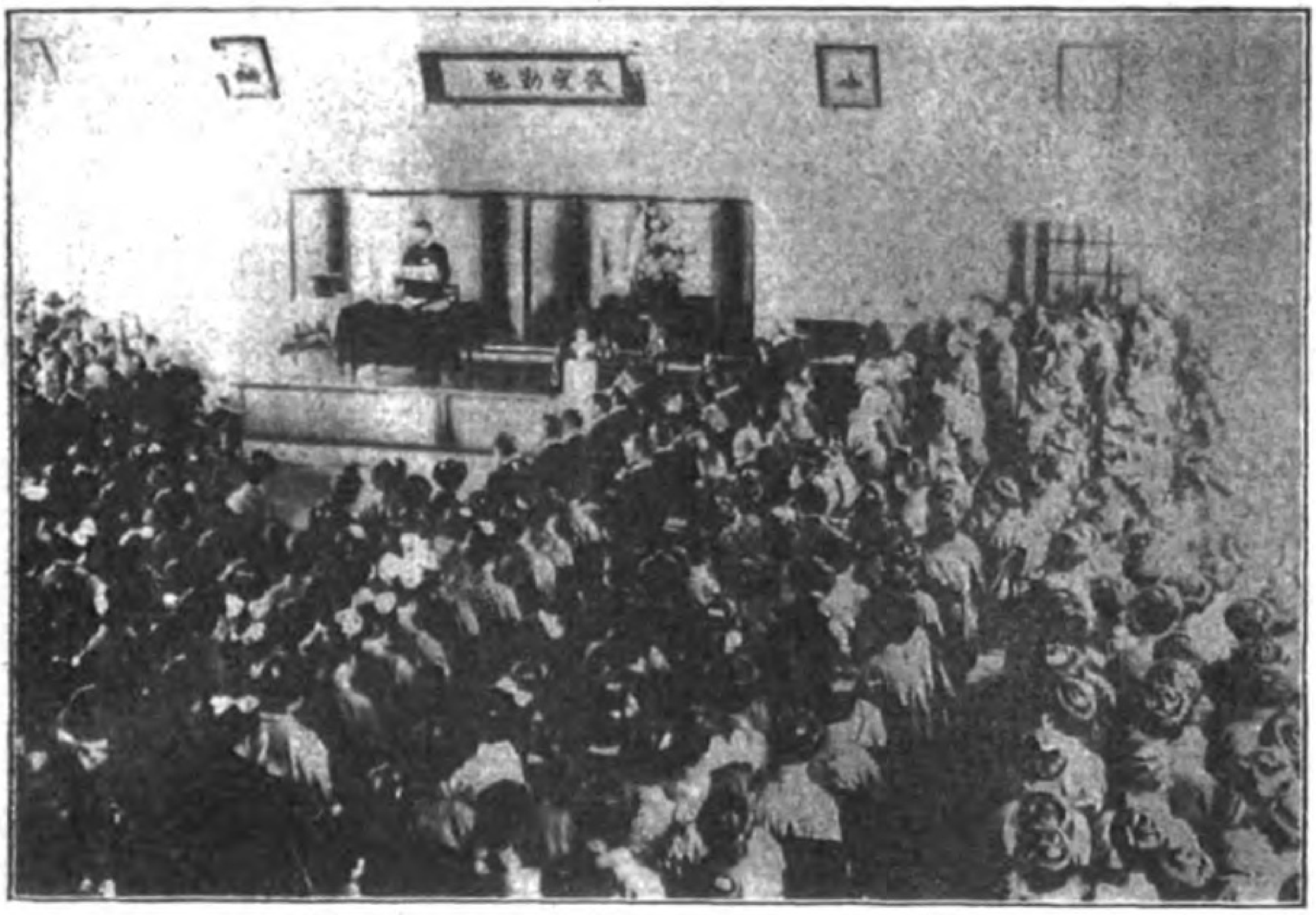
△感心した夫人

序に慈善會に關した話も少し申上やうと存じます。又米國のことを例に引ますと、唯彼に心醉して居るや

うな誤解を招きますが、米國婦人の中にも虚榮一方で同情心の微塵もない婦人が勿論澤山ございます。たゞ私は模範的の人とのみ交際しましたので、御參考にならうかと存じて例に擧げる次第でございます。

私の知己であつた紐育のフヒートモールと申す實業家の夫人は、九人の子持の上に、交際その他の用事も良人の職業柄却々多忙でありながら、孤兒院や貧民學校を設立して一生懸命に働らき、その上にこれらの事業に關する小冊子を澤山著はして居りました。私はこの夫人を訪ふ度に如何してかやうに澤山な働らきが出來るのであらうと不思議に感じました。良人も又特志な人で日曜には貧者のために夫人の事業を助けて居りました。彼地の實業家にはこんな人が澤山ありますので、費府で有名な豪商ワナメカー氏なぞは、大きな店を持つて忙はしい身でありながら日曜學校を設けて自ら牧師の役を勤めて居りました。

女子職業學校創立二十五年記念會



△貧民窟に理想の一家族

女子大學卒業生の中に貧民感化事業を企てるものがございまして、是をユニバーセテーセトルメント、或はカレジセトルメントと稱へ、一群の家族を組んで貧民窟の中へ一戸を持ち、救恤ばかり待つて居る惰民に、裁縫を手まめにして襤褸を下げぬことや、安價の原料で旨い食物を拵へる方法なぞを敎

へ且つ實行し、兼て音樂その他高尚な娛樂を獎勵して賭博に耽るを防ぐのでございます。この團體の維持費は在學生や有志婦人の手から支出します。こんな事業は婦人を尊敬する土地ですから出來る事で日本の若い女子が貧民窟へ雜居するなぞは危險千萬でございませうが、一身一家の事以外にこんな働をするのでございます。

△盡す道は幾らもあり

一身一家のために正しい働らきをしますのは、立派な婦人でございますが、こ



若草や捨たろ世とも思はれず　（香吹）

の立派な婦人も、一度良人の地位が高まり、生活に餘裕ある境遇になりますと、活動を休止するのが多いやうでございます。一身一家のために働らく必要はなくても、社會同胞のために盡力する道はいくらも在りさうに思はれますが、婦人の働らきは兎角誤解されるところから、折角志ある婦人も種々な障害の爲に活動を止められるかも知れません。或る女敎師は良人が追々地位を得たので良人が『お前もモウ敎師を廢めてくれ、友達に

君は未だ妻君を働かせるのか、そんなに慾張なくても宜からうと云はれるから」と云はれたさうでございます。未だ一般にこんな考があるのかも知れません。併し志さへあれば際立つたことをせずとも手藝や養鶏の收入を積んで孤兒院或は有益な會に寄附するとか何とか方法を工夫して幾分でも同情的の仕事を執りたいものです。家庭の内に幾分でも同情的の仕事を設けて家兒に手傳はせることなぞは何の位良い感化を子供に及ぼすか知れません。

△眞の樂みを解する人

花笑ひ鳥歌ふ春の日を、長閑けく暮すにつけても、飢に泣く同胞あることを忘れぬ婦人は、眞の樂しみを解する人でございませう。櫻狩の翌日はつゝれを板に張つて貧兒の袖無でも拵へる心掛もありたいものでございます。この心掛なき者が、虚榮的な大袈裟の慈善事業を企てましても、その手段は往々弊害が伴ひ實効は却つて少いやうでございます。左程喇叭を吹かずとも、先づ身邊に觸れるものに、身分相應な慈善が出來やうと思ひます。不幸な下婢を教育したり、近隣の孤兒を世話することなぞも、赤心一つで、立派な成績が擧りませう。婦人の會合も會員各自の赤心を待つて始めて眞價あるものが成立つことゝ存じます。



○何事を忍ぶの岡の岩つゝじいはて思ひの色にいつらん　顧園

○みせはやなのとけき春の日本にうつりて後の色深み草　景樹

○引入るゝ田川の水を爭はぬ隔てに咲けるかきつはたかな　千濱

家庭の教へ

天下一品の姑

神品小枝子

一、親切主義

私が此家に嫁りまして一番に感じましたのは、お母さんの親切です。私の心配する所をお母さんの方が先きに心配してくださつて、ちやんと私の心配を解いてくださるのですよ。私が何か過を仕出かして、當惑して居ますと

「不精者に過なし、爲損ふ程働くのは結構々々」と仰つてお小言はみぢんも仰やらない。其度に私は嬉しくて濟ないといふ氣が一層強くなります、斯樣な時には私の心はお母さんの心の中に溶け込んでしまいます。

是は何もお母さんが私を手中の者にしやうなどいふ御心からではなく、御自身のお嫁時代に顧みて私に同情してくださるのです。

近所の穢い子供なんかよくお湯に連れて行かれますがまだ自身の體を流さない中に、子供の足の爪先から手の先まで糠袋で洗つてやりまして、後に其使ひ晒しの糠袋で自身がお流しなさる、私は見て居て涙が溢れました。

嗚呼恐れ多い譬へだけれどむかし光明皇后が、罪障消滅の本願を起念し玉ひて汚くるしき癩病を淸き御手にお洗ひ遊ばした御心にも似通ひて居ると、勿體なくおもました。

御交際なんかでも全くの親切主義です。私が嫁りますと直に一冊の厚い帳簿を御渡しくださいました、それには御親類の方は無論一度でも御交際した方のお名前がちやんと記してあつて、それに又其名前の方々の總ての御嗜好が書き添へてあります。例へば

Ａ氏について

食物はお汁粉とお鮨もじ

飲料は葡萄酒　其他甘口は大抵いける

趣味は音樂、繪畫、詩歌
其他衣服は派出好
果實は大抵お好き
お話は歴史物がお好
性質は快活の方
お嫌なものは生のお魚とコンニヤクそれに猫

まづこの様に書き記してありますから、誰某をお招きしやうといふ時には、其帳簿を見てお料理しますれば、お出でくださつた方のお心にちやんとはまつてゐますし、室の裝飾、話題なんかもお客樣のお氣に召すやうに出來ます理です、又進物などする時でも、先樣の御氣に入るやうな御進物が出來ますし、嫌なものも記してありますから滅多に感情を損はせるといふ事も御座いません私の方にお出でくださつた方がみんな此家は心地が良いとおつしやるのはつまりお母さんの此心得帳が原なので、此心得帳は人を喜ばせたいといふお母さんの親切心が基なのです、ですから私の家は揃つて皆が親切主義です。



ふ し ぎ

私が嫁りたてなんか、鉛筆一本削るにつきましても少し粗雜な削り方をしますと主人は

「ひどい事をする、そんな慘酷な事をして、可哀相に、お前が長生したいと思ふ通りに其鉛筆も長生したいに極つて居る、それをそんな粗雜な削り方をしたら、鉛筆は泣きますよ、生命の浪費だ、可哀相にもそつと親切にしてでおやりなさい、といふやうな御教訓です。

一寸縁側など拭ひましても、隅の方なんか拭ひの屆かぬ所がありますと。

『可哀相に、此隅を御覧、ほこりが涙をためて泣てるよ、よく拭つてお上げなさい』といふ御言葉、まあ一寸した事にもかういふ工合です、主人は能く物に氣のつく性質で始めは、男子としては餘り氣がつき過ぎる、も少し悠揚して居てくだされねば勤まらぬと思ふ事さへ御座いましたが。近頃は何も仰つしやいません。まるで無頓着の樣にして居らつしやいます、それについて思ひますに、前に氣のつき過ぎる程色々と仰つしやつたのは、私を思つてくださる御親切からで、早く私を此家風の型に入れやうとしてくださつたのだらうと眞から感謝して居ます。



四ツ目の名花

二、主人は精神家

から述べますと私共の生活は一から十まで軟いやうに見えますが、主人は一面、大の硬骨漢で、曾つて學校で生徒を訓誡しました時分に、其中の生徒に卑怯な方がありました、すると主人は大喝して小刀で自身の腕を切つて、此血を啜れとつきつけなすつたさうです。お母さんはそれをお聞きになつて、そんな亂暴な敎育をするものでないとお言ひなさつたもの丶心の中でば、武士の魂が未だ失せぬと密にお喜になつたさうです。

主人の室の床の上には何も飾りはなくて、書物がズ

ツシリ並べてありまして、眞中に短刀が置いてあり、鷹の軸と、萬年靑の一鉢がお父さんのお形見として、お床の飾になつて居ます。

主人の道樂は讀書で自分には敵といふ者は一人もないが、讀書を妨ぐる者は、其妨ぐる間敵であると言つて居ます。

こんな風にお母さんの親切主義が家庭の空氣に愛の和ぎを湛へさせ、主人の氣魄が其和ぎに締りをつけて、岩井の時代家風が出來て居ます。其中に私が生活して居ます。

私？未知數ですよ、お母さんの愛、主人の氣の感化によつて早く此家風に適合するやうにとばかり心掛けて居ますの。



樂しきまどゐ

三、經濟は負債で苦しいのですよ、お父さんが或る事業に失敗なさつて澤山の負債を殘しておなくなりになつたものですから、主人は其負債の償却に苦心して居ますの、けれど經濟の苦を一言いつた事は御座いません。或る時お友達にお話して居るのを聞きますと。

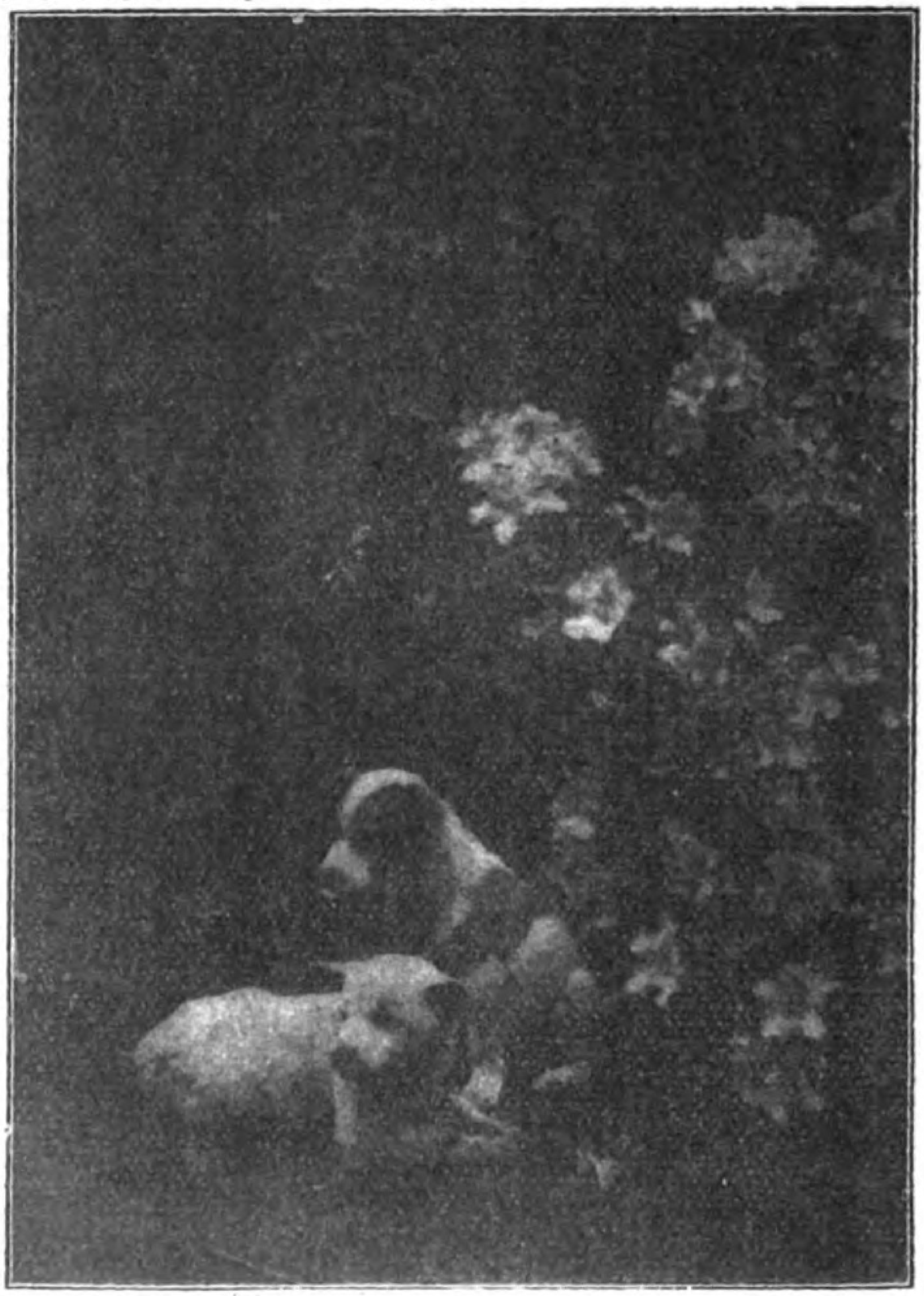
「親父は物質に於ては何も殘してくれなかつたが、精神的には多大の形見を殘してくれてゐる、負債の如きは僕の處世的精神鍛錬の必須材料だ、世人は負債によつて信用を落すが、僕は負債によつて信用を作るつもりだ」と申さ

れた。苦しい經濟でも、主人が此精神ですから私共迄苦しくないので御座います

お母さんは御自身の良人の失敗で、其子に經濟の苦を見せるのは可哀相だといふので大層御心配なさつて、時々、〇〇は可哀相だ可哀相だと申します、主人は又お母さんの其御心配を察して居ます家庭の平和を破り、家風を亂すのは經濟上だと申しますけれど、私共ではまう、家風が經濟を支配して居ます。

誰でも何か言ひ出しますと皆それに從ひます。私の言ひ出しました事にさへ、お母さんも主人も喜んで賛成してくださつて其通りに實行されます。是もつまりは親切主義の結果でせう。

岩つゝじ手折りし花の跡見れば果遠からぬ山路也けり　（治堅）



伯林の女學生

伯林大學に於ける女學生の數は近時著しく増加し、去る明治四十二年冬期に六百三十二人、翌四十三年夏期に六百二十六人なりしものが、今年の學期には頓に八百六人に激増し、其内外國よりの留學生は露國の七十四人亞米利加の六十五人を最とし、外に單に大學總長より該大學の聽講許可を與へられたるもの二百五十六人あり、尙シャルロッテンブルグに於ける高等工業學校の女學生七人、及び美術學校に學べる百二十八人の聽講生を加ふるときは、現今伯林に於て高等專門的教育を受けつゝある女子の總數は千百九十七人の多數なりと。

人の榮華を羨まぬ心の餘裕

伊澤千代子

△動かねば氣が濟まぬ

私は動き廻らねば氣の濟まない苦勞性で、勝手元の澤庵の世話から、洗濯まで自分で手を降さねば我慢出來ないものですから、手足は女中以上に荒れて居ますけれども此の樣にして家事の世話をするといふ事は非常に樂みでございます。又性來文筆に執着する方で、半解の智識で、人樣には御覽に入れられないやうな惡詩をちよい〳〵閑々にやつて見ます。

時々禪學や陽明學の講義を聽きに參りますが、又時には耶蘇教の說教を聽きに行く事もあります。近頃ではまた易を習ふのを樂みにして、隙を見ては高島先生の許に押掛けて居ます。

△平民的で家政本位主義

それで娘に易や宗教を吹込むかと言ふに、其は決して致しません。元來人には其々の宗教觀念があるもので、決して他から強ひて迫り教へられるものではなく特て、まだ年若い頭の固らぬ中にそんなものを注ぎ込むと、妙に若やぎのない枯淡なカラ〳〵した心になるか、でなければ愚にもつかぬ悲觀者流になつて、臺所向でなく、家事向でない非世間的に流れ、私の日頃からの抱懷である平民主義、家政本位主義の女を作り惡いかと思ひます。

元來私は日頃から、造物主にして女子と男子を平等に社會的に働かしめようとする意があつたら、子供なども兩方が姙む可きで、それが然うでなく、女だけが子供を產ませられるのは、要するに家内を捌くのを専門にさせるための重鎭であると言ふ、信念を抱いて居ます。所で娘などは校友の交際位ゐは自分から勸めてもさせてゐるが、其他の交際社會へは餘り連れ出

さぬ樣に心掛けてゐます、それでも結婚後は夫の職業周圍によつて如何樣にでも變化し得ると思ひます。要するに如何なる職業の夫にも適應し得る普遍性の修養に止めて置く方が却て好いと思ひます。

△他人を羨まぬ心の餘裕

けれども私が外で聞いて來た禪其他の話をよく致しますので、強ひぬながらも極當り障りのない程度で、娘等の頭に「積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり」と言ふやうな、宗敎臭くない宗敎觀念が自然と沁み込んで、無暗に他の光榮を羨望せぬ心の餘裕が自然と出來て居ります。

又澤山置きます女中の内には、隨分譃吐、物盜みなどの性癖を持つた者も參りますが、時々私が外から聽いて來た面白いと思ふ宗敎上の逸話等を主人や娘に話すのを、軒雨拍子にいつとなく聽き覺えて一種の道心を作るのか、宅にゐる内に次第に匡正されて行くのがあります。

或時も伊勢の女で一人女中がゐまして、宅へ參つてからも始終國の兩親を呪咀してゐましたが、色々話して聞かせて、汝は一體に腹立ツぽいのだからと說いてゐる中に、其女の兩親から手紙が宅へ參りました。手紙の意は三年音信不通の娘が本心に歸つて、今度懺悔と共に居所を報じて來たのは、皆な御主人の難有いお蔭でと言ふ感謝狀でございました。探つて見ると、東京を流れてゐるうち色々誘惑に逢ひ、百姓の娘といふことがつく〴〵嫌になり、自分の境遇を包むために故鄕と音信不通にしてゐたらしいのです。今では滿な人格になつて呉れて、然るべき處に身を固めて居ます。

△神經質に良い救濟法

私は性來強い神經質で、若い時の傾向が其儘で進んだら、今頃は發狂してゐたかとも思はれます。其れを匡正して呉れたのも依然禪學です。今の女學生の方など一體に神經質でゐられる樣に思ひますが、禪學なども其匡正の一方法かと存じます。即ち空中に畫を描く

やうな妄想を一切拂拭して、虚心平氣になり、其底に唯今よく言はれる全自我の客觀と言ふ眼が開ける修養が出來まして、下らぬ事を氣にせずともすむ樣な覺悟が自然と出來て來ます。禪の方に「身は之れ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時々努めて拂拭せよ」、「菩提もと樹に非ず、明鏡も亦た臺に非ず、本來無一物、何れの處にか塵埃を止めん」といふ語がありますが、二つ對照して妄想排除の恰好な格言かと存じます。

△料理會で精神修養



針しごと

今一つ私の修養になると思ふのは毎月三週間毎に一度、醫科大學の清水彦五郎樣のお宅で開かれる西洋料理の會に出席する事で、其の待遠さと言つたらございません。

然る歴とした方が教師の役で、方々の奥樣孃樣方が集まられ、自ら手を降してやつて見る方もあれば、唯見習ふ方もあり、私のやうに頂いてばかりゐる者もあります。一體臺所の好きな性で、料理も面白いのは勿論ですが、若い婦人方と一緒に落合つて、料理を頂きながら、樣々な興味あるお話を聞くのは誠に樂みでございます。其の爲に何れ丈け心の糧を得るか知れません。



思ひ出の記

玉露

五月晴、雨さへそぼふる今日此頃、ほとゝぎすは血に啼いて、人の腸を斷つとやら、嗚呼私の此胸も、此頃になると血に泣く思ひが致します。思ひ出づれば早や三年、一昨々年の今頃でした、私は露さん、美枝さん、姉妹に、藤尾さんを加へて四人で、葉山の奥の一色に遊んで居りましたの、家は露さん達の別莊。即ち水野男爵家ので、花と云ふ女中の外は、別莊番の爺ばかり。東京に居れば姫樣添きですまして居られる花やを對手に皆しての自炊でせう。其大さわぎ、其滑稽。

お味噌すりかけて居る露樣美枝さんが居ないと思つてお炭つぎかけて私がさがしに行けば、丁度雨上りの水溜りに、前の池の小魚がはね出したのを入れるのだつて、露さんの袖の、地に引いて、セルの單衣に泥の裾模樣、美枝さんが氣が付いて

『あらお姉樣お召……。』と云ひかけてつるりすべつてこれはまたお對のお召に腰模樣、泥はおしりにべつとり、と。

「お洗濯が多くて氣の毒だから御飯は私達が炊てよ。」と花に二人の脱いだ單衣渡して四人してかまどにかゝる。燃え付く迄は一生懸命、無言でしたから其反動に燃え始めると皆の口はよく動きます。

『一寸蝶さん此火の工合が美しいのねイルミネーションのやうね』と藤尾さんが感心するから

『さうね。かま炭に一つ〳〵付いたり燃えたりほんとにカステイラにイルミネーション付けたやうね』と私が評する。

「だけど此赤煉瓦の燒けた工合は、私ローマの滅亡が

忍ばれるわ、尊き君の御住家も、むたら兵火に燒かれんとして……とでも云ひさうでお城の樣な氣がしてよ此おへつついは……と謹しみ深い露さんが靜かに云ひ出す。

『すると姉樣はひどく詩的ネエ、私はお喰氣の方で矢張りカステイラ組よ、カステイラつてば昨日上つたお山ね、あの禿げて赤土の出た處が少し割れて居たでせう。其處へ太陽がうすく映して……あの時は私つくづくカステイラのやうだと思つてよ』

『喰べたかつたでせう』と私がませると



霞立春の日の岡邊ゆきて岩田の小野にけふも遊ばん（景樹）

『エヽ』と大眞目面餘計な事は一言も云ない藤尾さんまで勿體らしく話出すのを何だと思つて聞くと

『私も昨日偶然妙な處にカステイラを發見したの美枝樣に同じカステイラだから不思議ねエ、エ何處につて？實はね矢張り其夕方なのよお緣に出て爺やがお庭掃くのを見て居たのよすると其衿から喉咽へかけて横に西日が映して、日に燒けて太い皺のあるくびの樣子が例のカステイラ……。』

『まあ!!!』一度に皆笑つてどうして今日はこんなに

カステラ揃ひなんでせう。』

處へお洗濯して上つて來た花やに、

『序にカステイラの理由因緣を話してスポンジケイク論終結にしませう、ネエ花!!! 昔西洋人はね日本へ來始めた時分に、多く長崎へ來たのよ、さうしてね、來る時日本にまだ出來なかつたカステイラをね、西洋ではスポンヂケイクつて云ふのを持つて來て、長崎の人達に食べさせたの　すると皆喜んで食べるうちに、西洋人は其カステイラの箱の蓋をしてしまつたのよ、すると日本人はそれがあんまり甘味しかつたから、此お菓子は何んと云ふお菓子ですつて、言葉は通じないから、手眞似で箱を指して聞いたのをそれで其西洋人は Castle....



と答へたの丁度其箱の蓋に赤煉瓦のお城の繪が畫いてあつてそれを聞かれたと思つたから Castle つてお城と云ふ事なのよ、それから日本人は其お菓子が Castle と思ひ違へて、カステラ〱と云ひならして其後日本で出來るやうになつて、加壽天以羅…と美枝さんの話すのを

『ヘエ…左樣で…ヘエ…』頻りに感心して聞いて居た花が急に驚いて

『アラ御飯が大變臭います!!! まあこげました!!!』

萬事こんな風で朝から晩まで笑ひつゞけて暮しました。

丁度一週間目の月曜の朝突然三人連れのお客樣

『まあ山川のお從兄樣』と皆大喜び

其義杖はどう遊ばしたの、と聞いたが始り昨日早稲田とベースの仕合でね僕、後しろの寄宿舍の屋根へ上つて見て居たが、吉村の奴素適な球を出しやがつたから思はずイョーと賞めると同時に落下ちたんだんと。』

『馬鹿ねエ!!!』

『何失敬だ自分だつて此間池の横で臀餅を付いたぢやないか』

『あらだれがそんな事知らしたの蝶樣でせう。』

『イヽヤ雨の便りでね、五月雨の軒の玉水音たえず、絶えせず送る筆まめの文、と云ふ名歌はありやしないけれどもね。』

『何云つていらつしやるの、ホヽヽ』

御足は痛んでも元氣は相變らずの、それからそれと賑はしく御連れの方は一人は同じ大學の文科の君一人は學習院の大學部とか御紹介願つた、一二時間にお互に左樣然らばときめ込んで居りましたがだん〳〵に御心やすくお茶の水スタイルはお腹を出すの、脊中が長いのと惡口も仰有るから「文科の方はレートの常得意でお出遊ばすのですつてね」と申上たりして其夜は知らず識らず十一時迄お話してしまひました。

『學習院だのにどうして御知り



新婚の春

合ないのと従兄様に伺ひましたら分致場で逢ふから』仰有る。

『それぢや音樂が？』と伺つたら

『お好き處か何でも知らない事なし出來ない物なしの大通さ』と仰有る。

成程何の小路何麿様と申すお大名の若様とはどうしても信ぜられぬ趣味のお廣いこと、二日目の夕方美枝様と露様が十二段をお彈べになつた時口笛を御合せになつたのと始めとして五日許り御滯在の間には色々のものを伺ひました御風呂上りの浴衣だけで、

『今頃は半七さん……何處にどうして御座るやら……』なんて仰有つて御出遊ばすのを見ると何ぼ何でもとは小言申度なりますけれど端然と御坐り遊ばして音聲玲瓏



岡部子爵家の三令孃

『三つの車に法の道火宅の内をや出ぬらむ。夕顏の宿の破れ車やる方なきこそ悲しけれ、浮世はめぐる小車の、めぐるや報いならむ。』

など〻御うたひ遊ばすと御眉のあたり自づから尊く何やら自然に頭が下るやうでしたの、そして折々藤尾様の事を

『貴女は紫の女ではないですな三四郎の美禰子の方ですな』と意味ありげに仰有る。』

すると藤尾様はいつも靜かに微笑んで、

『クレオパトラとは違ひますの？』

など〻云ひなさるのでした

『エ、我は我とがを知る罪は常に我前にありの方です

……』とこれは從兄樣!!!　その時の從兄樣の頰は心持ち紅うなりましたの。

五日たつと御連れの御二方は學校の御都合で御歸京遊ばしましたが從兄樣は御足が治るまでと云ふ筈で十日許り殘る事になりました悲劇はそれからで御座いますの

何ぞ秘しませう山川の從兄樣とは文學博士山川義秀氏の御令息で、此夏大學を卒業の上は、やがて我露樣の脊の君と御なりになる方なんですの、エ、、水野男爵の御養子に……其御約束は從兄樣が大學に御入いりになる前からで、數年の長の月日人も許し御互も其つもりで御出でしたの、何の波瀾もなしに……



それがあと二三ヶ月と云ふ此頃になつて、まあどうしてあんな事になりましたか、何時とはなしに從兄樣は藤尾樣を御したひになつて入らつしやるのよ……實は私氣が付いたのは私ぎりだと思つてましたの、忘れもしません或る晩でした、入梅中に似氣なく空が晴れて月の光が木木の靑葉を美しく映らした時でした藤尾樣はお手紙書きかけてるからと仰有るので、露樣美枝樣と私と三人

花やを連れて森戸まで青物だの果物だの色々欲しいもの丶買ひ集めに出かけましたが、私三四町行つて丁度一色の町をたづねてあの岩角をまがつた處で、下駄の鼻緒を切らしましたの、所か途中で間に合せてと思ひましたが、私の氣質例の慾にいや氣がさして引返しましたの、そして邸の裏から片足引すり〳〵入いつて御緣へ上らふとして：：其時!!! あゝ其時：私はお庭の木のかげに立すくんでしまひましたわ、快活な面白い事ばかり仰有つていつでも『アハヽヽ』と男らしい御聲で御笑になる從兄樣がその時の御顔の色さへ月に青くふるへる御聲で、何か云つて御出になるのが私には聞こえなくてもよく分りました、凝然と地を見つめたまゝうつむいた藤尾樣の御顔の眞白なのもよく見えました。



山櫻青葉か中にむすぶ實のこほろゝ夏と成にけるかな　（永好）

＊　＊　＊

『もう明朝は從兄樣返るのね』と露樣の御言に

『お淋しくなります』と笑つた私のお腹の中は今迄通り平らではありませんでしたが、

『蝶樣それはあんまりな私は何もかも分つてますわ』

と云はれた時の胸のさわぎ、呆れてたゞ露樣を見ました、すると

「蝶々人間は何時どんな運命になるか分らないものねエ、私は自分ながら恐ろしい覺悟をしたのよ、それはたとへ天地にたつた一人の御友達……眞のお友達のあなたにも云ひませんの、けれどたゞ御願するのは美枝樣にねお父樣やお母樣に私の分までよく〳〵孝行してくれるやうにあとでよく頼んで頂戴ね。」

さてはと私はもう夢中で

「露樣そりや一體何仰有るの意氣地のないことを……」

と云はふとすると淋しく笑つた露樣は

「いやな……現代の女性……自殺したり尼になつたりは出來かねるのですつて……第一親が許しませんわ。まあ何でもいゝから私の身のなり行きを見て居て頂戴」

＊　＊　＊　＊

御話が長くなりますから結末だけを申しませう、最少し聞いて下さいませ。

何處を何樣したか其れはまあ色々の噂が御座いますが、表面は何小路伯爵夫人としての露樣は華やかなもので御座いますよ、そりや前申た通り　殿樣も通人とやらで御出遊ばすから衿元白い根下り髪の御馴染も一人や二人では御座いますまいが、それはたゞ趣味生活に過ぎないの奥方は奥方として大切に遊ばすだらうと考へます、何しろ私は此三年間露樣に親しく御目にかかりませんから……エ、紅葉館の御結婚披露會の後はさつぱり!!……たゞあの時一寸のすきを見て「蝶々樣時時は思ひ出して泣いて頂戴!!!」と私の手をしつかり御握りになつた時の御瞳の露は未だにまざ〳〵と其神々しい御洋裝と共に目に殘つて居りますけれど……:

エ？従兄樣ですか従兄樣はね今は水野秀勝と云ふ文學士、まだ獨身ですけれど行く〳〵は私どうしても美枝樣を奥樣にしやうと思つて色々に考へて居りますのけれど従兄樣の御手箱の中にあるあの藤尾樣からのお手紙!!!　あれを燒いてしまわないうちはまあ駄目で御座いますネエ、手紙の文は私よく覺えて居りますから云ふのです。

「……敎會を出でし美彌子は……罪は常に我前にありとかすかに云ひてホと太息せしとか、されど妾はそれ

よりも更に／＼罪深う候學生とやら學士とやら何の意味も聞えすまして男爵とやら博士令息とやらは寧ろ煩らはしう存じ候。愛するならば妻子ある君、暮すならば趣味生活。とかねて思ひし心も○麿樣を見參らせて流石に亂れ申候然それとてもたゞお友達と願ふのみ一生妻となりて其君一人に此體を捧ぐる事は殘念に候、ましてあなた樣はたゞ弟の如く可愛ゆしと申すより外の事は何も思ひもより不申候……

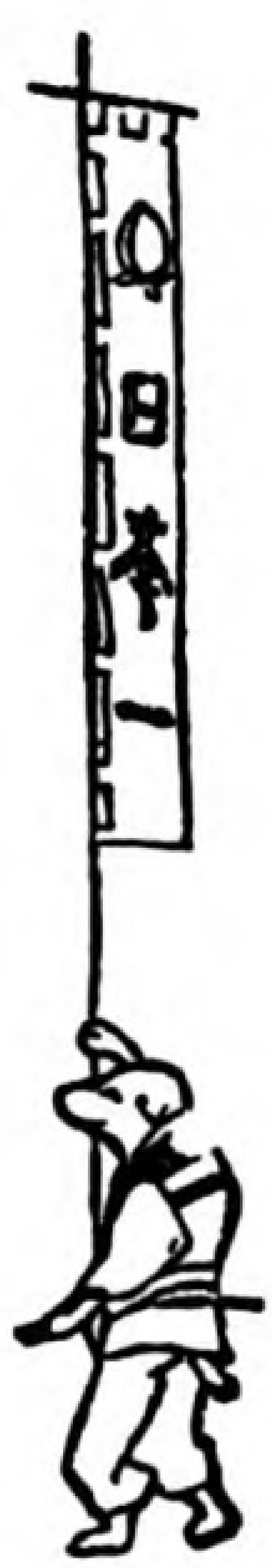
定めて如何ばかり御呆れ被遊候はむ露樣はじめ三人の友の君も大かた美しき御眉ひそめて世知らぬ脣に絶交!!! と叫び給ふなるべし、理窟から申せばあなた樣の御さげすみも、女の友達に捨てられても、更に／＼さしかまひなき如くに候へども何とやらむそれ思へば悲しいやうに思はるゝも私も遂に／＼女にて候はむか…………。

とこんなのです勿論私も藤尾樣とは絶交も致しませんが自然にうとくなつてしまひました。

うとくなりました其人人の消息をいつも今頃になると悲しくて……私の身のまはりゝ冷い雨におそはれて暗いじめ／＼した地の中に落ちて行く樣な氣が致しますのあゝ世の中は。(終)

新婚の春





桐の意匠


五七桐
桐菱
かげきり
みだれきり
三ツ割桐
三ツ桐丸
花桐車
桐くずし
桐くるま
さぎきり
利久桐
入ちがい桐
桐車
桐枝丸
うつみ桐
たいこう桐
光りん六ツ桐
下りきり

村井弦齋著

◎家庭改良の最良指針!!!

増補註釈 食道樂

春夏秋冬　合本　定價貳圓　郵稅十八錢

◎本書には米料理百種、パン料理五十種、病人料理百五十種、日用食品分析表　食器食品價格表、料理心得の歌百種等の附錄あり。

増補註釈 食道樂 續篇

春夏秋冬分本價各一冊八十錢　郵稅各冊十二錢

◎春の卷には野菜料理百種、夏の卷には果物料理百種、秋の卷には魚料理百種、冬の卷には肉料理百種の附錄あり。

増補訂正 台所重宝記

全一冊　和裝　定價金壹圓　郵稅十二錢

著者の自序に曰く此書の記事は盡く我家庭の實驗する所にして余は飽く迄も世人に親切ならん事を期すと

▲發行所　東京市麹町區有樂町（振替東京七三八番）　報知社出版部

▲發賣所　東京銀座大通新橋際（振替東京二〇〇番）　新橋堂書店

▲松林伯知一世一代の講演

徳川榮華物語

全十冊　各冊定價五十錢　郵稅六錢

◎六ケ年間報知新聞連載……好評嘖々

各卷重なる讀物

松の卷には　大久保彦左衛門、春日局
竹の卷には　天草…、由比正雪
梅の卷には　元祿時代…、水戸黄門
櫻の卷には　赤穗義士、大岡越前
藤の卷には　白河樂翁、高山彦九郎
菊の卷には　中山公東下り、林子平
椿の卷には　河内山宗俊、鼠小僧
萩の卷には　大鹽平八郎、高野長英
楓の卷には　八代目團十郎、お富與三郎
桐の卷には　水戸家騒動、錢屋五兵衛

▲東京小兒科院長　醫學博士　瀨川昌耆先生著

▲やまと新聞記者　天野誠齋先生著

（五版）

増補訂正 實驗上の育兒

上卷定價六十錢郵稅八錢　下卷定價七十五錢郵稅八錢

七人の愛兒を自身御夫婦にて恙なく育て上げられた育兒實驗家の瀨川醫學博士が丁寧親切に説明せられました育兒談は即ち此本です、吾兒の健全なる發育を望まるゝ父なり母なる人に是非御一讀あらん事をお勸め申します。

發行所　東京市銀座大通新橋際　振替貯金東京二〇〇番　新橋堂書店

女(ぬの二)

女（ぬの三）

新學期開講

◎會員募集◎

此際至急入會すれば入會金全免の特典あり修學に最も好都合なり

本講義は婦女子の處世に欠くべからざる學藝を多年女子敎育に經驗ある講師が何人にも了解出來日常生活に應用さるゝ樣特に平易を旨とし講述せるものなれば家庭及び學窓の參考として最も適當なるは勿論初學者も難解の憂なく自宅にありて秩序的に獨習し得らるべし

女子大學 家政講義

主要科目

△修養談	△法制大意	△作法	△家庭園藝
△修身講話	△經濟大意	△日本料理	△自然研究
△敎育學	△社會衛生	△西洋料理	△文藝
△實驗心理學	△家庭理科	△裁縫、手藝	△文學評釋
△兒童研究	△家事	△生花	其他科外として數科あり

毎月二回發行 會費月五十錢

巻頭には毎號諸名士各女學校長が特に本會の爲め講演されたる有益なる**修養談**あり

◎附錄**家庭**には淸新にして趣味豐富なる時事談訪問記事掲載す

東京小石川目白臺 日本女子大學校通信敎育會

◎見本附き **會則**申込次第**進呈**

發行所 東京市小石川區久堅町一〇八 **精美堂** 電話番町九三二 振替東京二八三八

新法令

附・・・第廿七回帝國議會史

帝國議會は、二十七回の齢を重ねて、豫期の如く無事閉會を告ぐるに至れり。法を立つるの多き、從來其比を見ざる所、他方面は暫く措き、立法の一面のみよりするときは、今期議會は、其成績第一等に在るものと謂ふを得べし。本館は、例により、此等諸法律と共に、昨夏『新法令』發刊後、既往一年間に發布せられたる重要諸法規を編纂し、茲に又、新に『新法令』を發行す。

五月十日發行

洋裝四六判紙數二百六十頁
定價三十錢 郵税三錢

東京本町 博文館

勅令に省令に訓令告示の小なるものに至るまで、其重要なるものは皆捃摭採錄を怠らざる所なり、殊に皇室令として公布せられたる皇族身分令、皇室親族令の如きは、帝國々民の必ず精讀すべきもの、皆收めて此中に在り、加ふるに『第二十七回帝國議會史』は、例によりて快筆妙文、縱に横に、帝國議會の行動を評して擒縱自在、讀去り讀來りて、興味津々、政治財政に注意し、法の庇護に賴らんとするものは、座右一本を缺くべからざるなり

實業少年臨時増刊

店員出世鏡

五月十五日發行

東京本町 博文館發行

四六判二倍大判上等紙七十二頁
印刷美麗毎號寫眞版數十面入
正價金拾錢 郵税一錢



◎五月十五日臨時増刊 店員出世鏡の内容如何

◎禍ちをよく改めて重役にほめられた小僧さんの實例……

◎どんな店員が出世するや大商店主の意見

◎五十萬圓を銀行から持つて來る間の私の大責任と苦心……

◎大商店會社の店員採用法内規種々

◎小僧さんの失敗を招ぐ源因は多くこゝに在り、また救治し難し……

◎店員から養子になつた大實業家の調査……

◎私が始めて東京に出て來て入店するまでの詐らざる告白記……

◎私が今日尚就職し得ざるは奉公中にかゝる交際法を取りたれば也……

◎出世した店員の實例、好模範……

◎各種小僧さんの述懐は、奇々怪々を極む、小説よりも面白し……

◎昔の小僧さんの眼から見た今日の小僧さん、實事と思へぬ實事也

◎歐米の店員の執務ぶりは如何、取りてわが短を補ふべし……

◎從業者座右の銘は一語千金……⊙大實家の小僧時代の實談……

◎本誌のさしゑは口繪中繪とも天下一品、純然たる畫報的なり……

◎獨學實驗法 ◎實業大講談

◎賣切となりても再版せざれば急に前約せらるゝを可とす

評論

婦人問題は無益な空論

法學博士　岡村司

△二種の結婚

婦人に關する問題で先づ我々の眼に付くものは婚姻の問題である、日本の現在の狀態では婚姻は男子は自由意志を以てするけれども、女子は自由意志を以てするやうなことは殆ど無いと云つても好い。民法に依ると婚姻は一人の男と一人の女との意思の一致即ち契約に依て成立つもので、若し一方に婚姻の意思がないと無効であると規定せられてあるが、然し此れは法律上のことで、實際は自由意思を以て婚姻する場合は殆ど皆無と云つても好い位で、大多數は皆な親兄弟の意思に從つて、世話さるゝまゝに嫁つて行くのである。ところが歐洲の婚姻は日本とは丸きり違つて居る、歐洲では男子と女子が互に友達となつて久しい間交際し、好く氣心を知り合うた末、貴方と私と結婚しやうぢやないかと相談した上で、其の男女が兩親へ「誰某と結婚し度いから」と同意を求めることになつて居る。つまり自分が主になつて居るのである。夫と引變へ日本では自ら進んで同意を求めるといふやうなことはなく皆親の命令次第で「お前は那の人と婚姻せ」と命ぜられて、温和しく婚姻するのである。中には反抗する者がないでもないが、夫は學問を生嚙りの仕方のないお轉婆娘位のもので、極めて少數である。又たとへ反對の考があつても、愈々の場合となると言ひ出す勇氣がないのが普通である。

△急拵へは危し

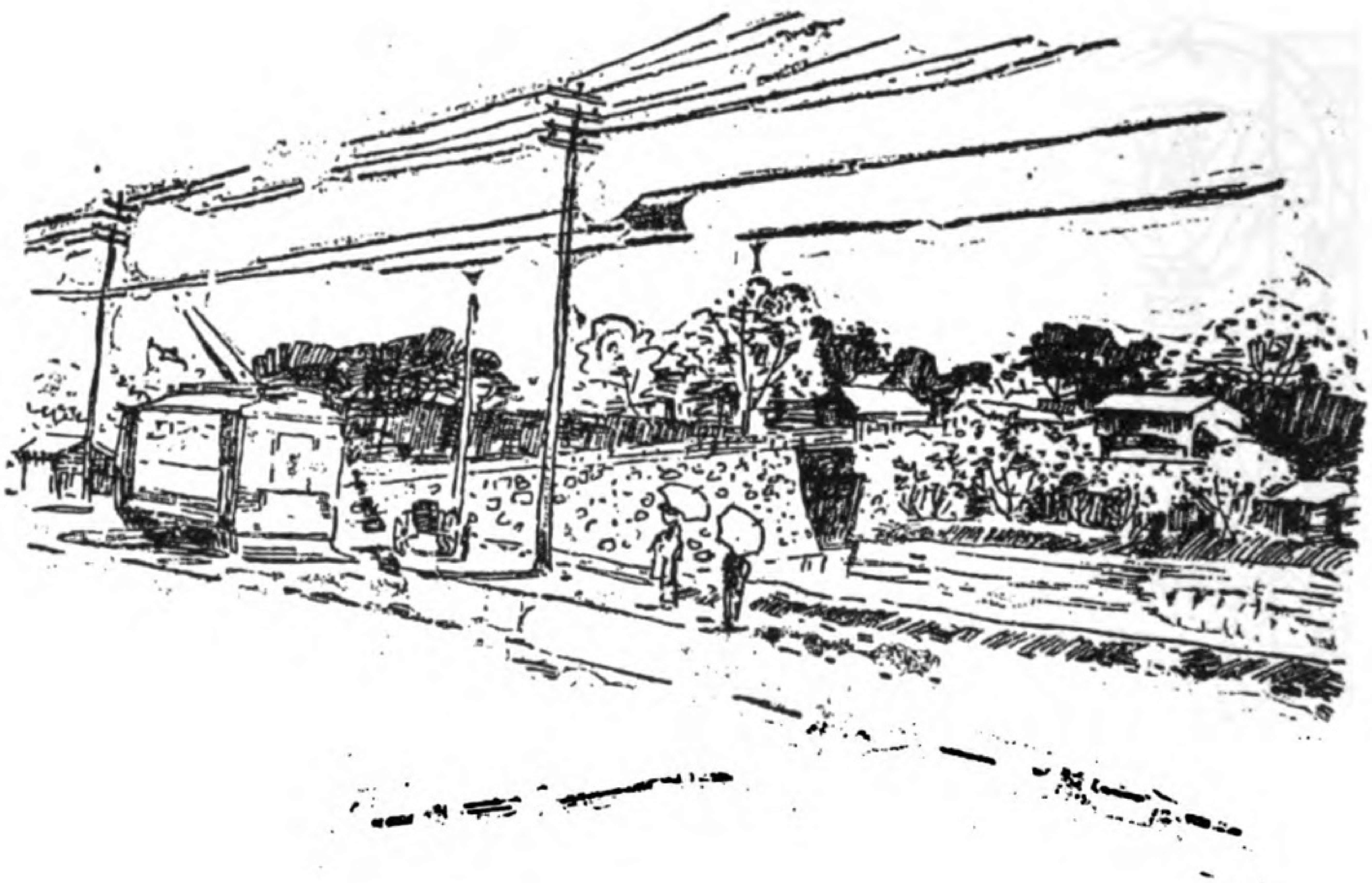
斯の如く歐洲の婦人には獨立の意思があるが、日本の婦人には未だ其れがない、ないと云つたからとて直様獨立の意思を起せよと言ふのではない、又然う手輕

に獨立が出來るものでもない、歐洲の婦人には夫れ相應に獨立の意思を有すべき基礎があり、資格が附いて居るので、急拵へに拵へ上げたものではない第一に敎育が普及して居るから智識が高く、一身の事は自分一人で判斷する程の能力を持て居る。中には却て男子を凌ぐ程の學問智識を有して居るものもある、懸る智識能力を有してこそ始めて獨立の意志も持たるゝ譯である、次には財產を持て居る。下流社會は別として、中流以上になると、財產の無い婦人は婚姻が出來ないことゝなつて居る。婚姻とは男女の生活の組合を作るやうなもので愛情などは二番目三番目で、皆な財產が目的になつて居る。財產がないと何んな美人でも嫁に貰手がないやうな有樣である、理窟から云ふと或は歐洲の方が正しいかも知れぬ、生活費は双方が資力に應じて分擔するのが正當のやうに思はれる。が、日本では未だ其處迄は行つて居らぬ。金持の娘で簞笥が幾棹長持が幾棹と衣類道具を持て行くものはあつても、婚姻後の生活費を分擔するといふ女は絕無である、斯の如く西洋の婦人は智識があり財產があるから、獨立の意志も有し得るわけで、從つて家庭に於ける地位も高く男子と平等の權利も持ち得るのである、日本の婦人が然ういふ風になるのはまだ前途遼遠であるが、然し何時かは到着しやうと思ふ。

△婚姻の新傾向

然るに此頃歐洲では更に新しい新傾向が見えて來てゐる、といふのは從來の婚姻は法律の上で餘りに六かしい條件を定めて居る、餘りに些細な點まで國家が干涉して居る。夫婦間の關係とか子供の敎育とか、離婚とかに就て餘りに嚴格に餘りに煩はしく、干涉して居る、夫程までに世話を燒いて貰はぬでも最早や自分で利害を判斷する程の能力は出來て來たから、法律上の條件を緩めて貰つて、男女の自由な契約に依て婚姻さして貰ひ度いといふのである利害を十分判斷し得る能力を持つた男女が餘りに嚴格な法律進步した人民には不適當な法律に干涉して貰はないで、自己の能力に信

新綠の東京（四谷見附）



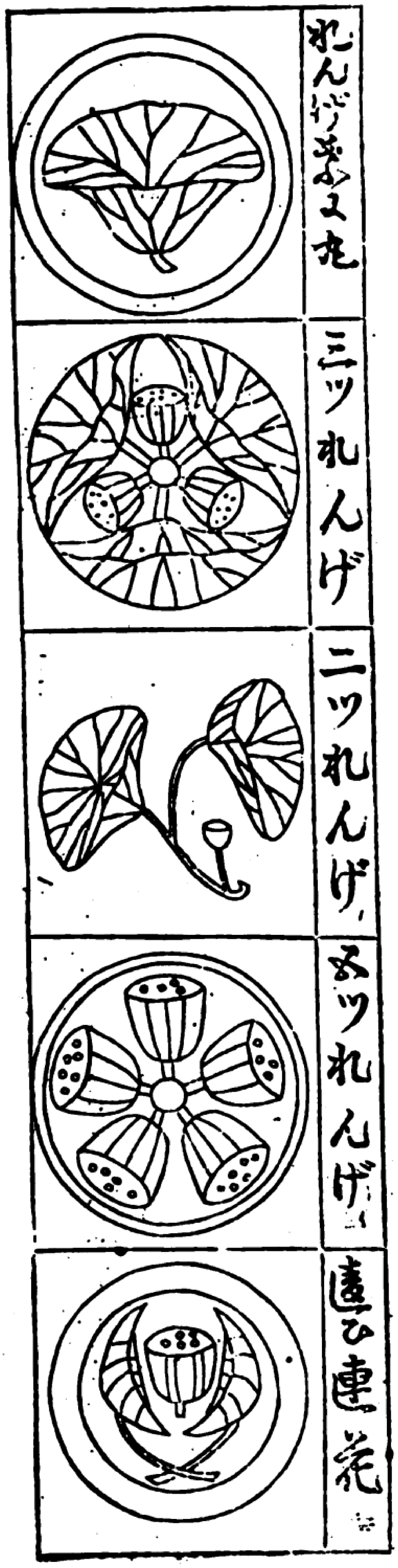
類して自由な契約を取結び度い、自由な契約に依て婚姻する方が好い、といふ傾向が生じて來たのである。

△時勢の變化

從來法律が難しく干渉したのは、つまり妻子の當然の保護者たるべき夫若くは父を確定して、か弱い妻子を保護させやうといふ主意で、人類が社會的に生存し人種の繁殖を圖る上には避くべからざる方法であつたのであるが、現今では國家の制度が完全になつて、子供の敎育の出來ない貧窮者の爲めには姙産婦救護所だの、養育院だの、設備が整つて、父や夫が保護するより國家が保護する方が却て安全になつて來たと共に、結婚其のものに就ても人々が自分の頭腦で十分利害を判斷し得るやうになつたから、進歩した現代人には煩はしい干渉は不必要で煩はしい法律を緩めて自由な契約に依て婚姻するやうにし度いといふのである。

△云ふて益なき事

以上のことを約めて云ふと、婚姻には三つの種類がある。第一が命令的婚姻、即ち日本の婦人のやうに親が命令して婚姻するもの、第二が承諾的婚姻即ち現在の西洋婦人の如く男女相互の承諾に依て成立つもの、第三が目下歐洲で起りつゝある自由的婚姻である。ところで日本の此頃の有樣を見ると、漸々第一の命令的婚姻から第二の承諾的婚姻に進まんとするやうな堺にある。然るに西洋では承諾的婚姻から更に自由的婚姻に進まんとしつゝある。して見ると詰り日本は一時代遲れて居る譯である、今日のやうに交通が容易で、泰西文物の輸入が頻繁で、進歩が頗る迅速な時代でも、今日の歐洲婦人のやうな地位換言すれば承諾婚姻の時期に達するには、五十年か百年は要するであらう。夫から又更に一時代を經なければ自由的婚姻には到着しないので、未だ〳〵前途遼遠な話しである、夫にも拘らず今日歐洲で唱へて居るやうな婦人問題を現在の日本に唱へやうといふのは、一種の夢物語とも評すべきものではあるまいか。男子と女子との懸隔が非常に遠ふ今の日本に、其んな實際に適せぬ空論を唱道したとて何の効もない話である、此頃ちよい〳〵聞く女權問題などは、恐らく千年も後のことであらうと思ふ。（談話）



現代婦人評論 其四

女流音樂者

鐵拳禪

一

幸田延子——湯原元一——柴田環子——北村初子——神戸絢子——天野愛子——賴母木駒子——橘糸重子——四竈訥子——山室千代子——北原末子——安藤幸子

◎新緑の上野山は、一個幽邃の詩境也。色彩の世界にして、音樂の天地也。銀色の光の雨の降り濺ぐ夜半、若葉の匂ひの漲り渡る朝、樂耳に囀ぎ、藝術に逍遙する青春の士女を醉はしめずんば非ず。

◎斯の一新詩境に、美術學校は色彩の世界を占め、音樂學校は樂音の天地を領して、兩々相對立す。而して、此の二校は、明治の樂潮と藝術とに寄與する所尠からざる也。

◎上野は東都に於ける不斷の樂堂也。ニコライの鐘鳴らざるも、日比谷の綠園に樂の波を打たざるも、市中の樂會の扉の一つだに開かれざるも、新しき樂の音は木立の奥に反響す。

◎宮廷の雅樂は暫く言はず、又狹斜の地の三味線、寄席の琵琶、尺八、胡弓等の音曲を論外として、現下の音樂界に名あるものは、多く上野の樂堂裡より生れたる也。蓋し、東京音樂學校は新興の音樂の搖籃也。明治樂潮の源流也。

◎然れども、官臭を帶びたる今日の音樂學校は、其の增築の不調和なる建物のニス臭きが如く、一種厭ふべきもの無きに非ず。餘りに杓子定規に過ぎて、音樂家の養成に努力を拂はず、唱歌教師の製造に急なるが如き觀あるは、即ち是れ。

◎近時、同校の出身にして、女流音樂家として著聞するもの、曉天の星の夫れよりも寥々たり。安東恒子は有望の目ありしも、人に嫁ぎて音樂界を去り、殘る所

のものは唯芳しからざる時のみ。本年卒業の岡見メリーモリスの獨唱、松島彝子のピアノ。共に異材の稱あるも、未だ以て後生恐るべしとは爲さず。

二

◎新進振はず、中堅も亦音樂界の中心たるの力量に乏しとせば、其の覇權は依然として齋進の老孃幸田延子たる也。

◎老孃延子は、一個天才の自覺を有する婦人也。樂界の曙に目覺めて、考へつゝあるの人也。其考へたる所のものを以て、更に新なる研究に入らんと努力しつゝあり。吾人は、此の新しき努力を以て「よく樂界の明星たる。彼女の技倆を賞せざるを得ず。

◎彼女が人生の春は、既に過去の一夢に屬せり。熱き溜息の絃の上にたばしり、美しき胸の鏗鏘の如く轟き、紅の唇の顫へたるは若き日の詩境也。年歯漸く傾ける彼女は、老孃の孤棲を守りて、樂器を戀の如く抱き、興來の彈奏に其の心神を捧げぬ、即ち、音樂は彼女が終生の良人たる也。

◎安藤幸子は英文科出身の文學士安藤勝一郎の妻也、姉と共に音樂界の二雄才と稱せらる。勝一郎は銀時計の駿足、風丰瀟洒たり。幸子は水平線上の美人には非らざるも、纖指觸るゝ所皆樂音をなすの魔力あり。家庭得意の人たるに於て、女流樂音家中の隨一なるべし。

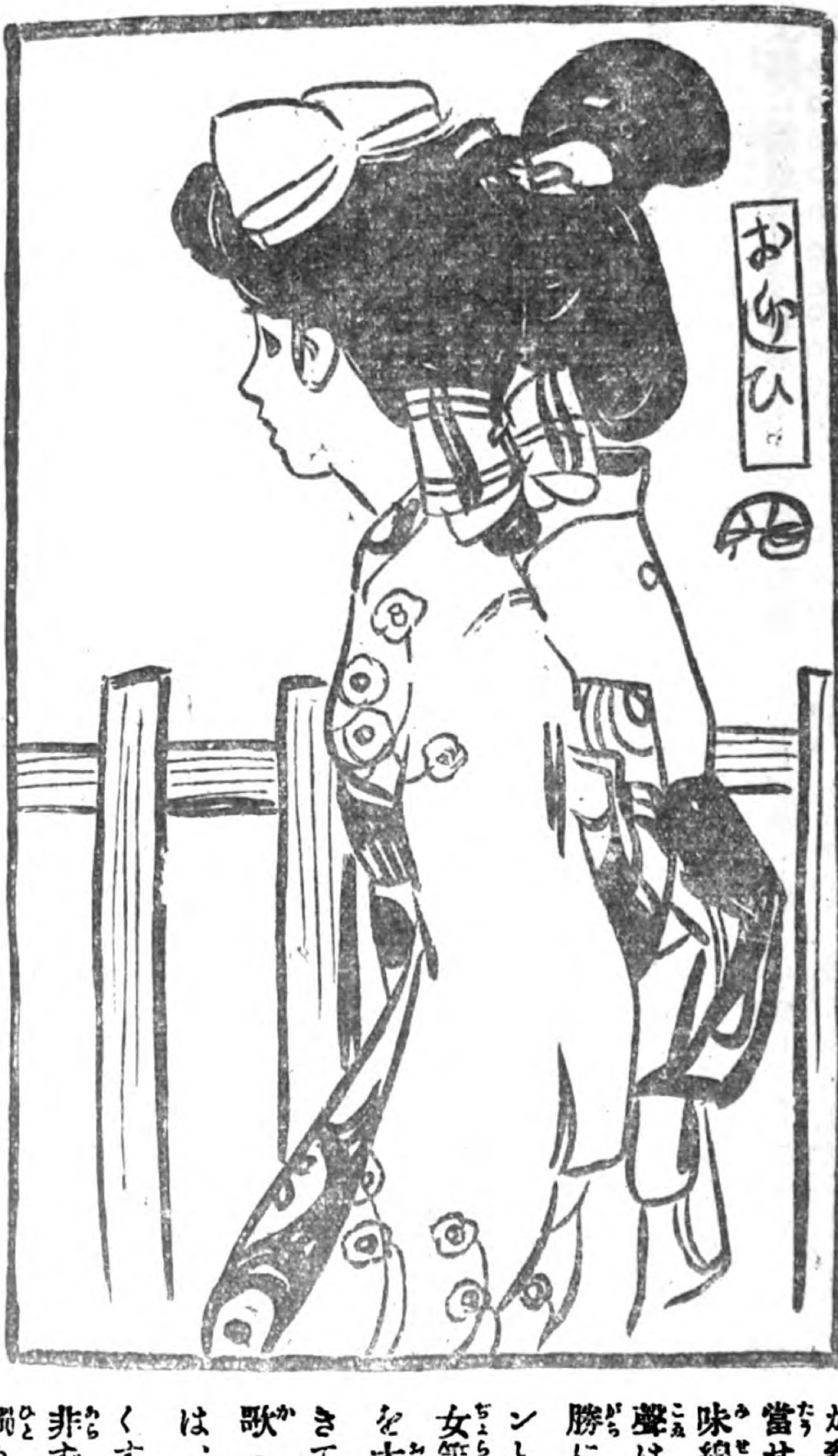
◎幸子は東京音樂學校の出身也。老孃延子の同校教授たるの故を以て、幸子の天才は夙に先輩に認められ、未だ業を卒へざるに、其の名既に樂界に嘖々たりき。幸子は斯かる祝福の前に、希望の船を乘り出せる也。

◎延子は明治三年、神田山本町に生れ、文雄露伴とは三歳差ひの妹也。幸子の順潮に帆を揚げたるとは異り、延子は變轉極りなき時勢の中に少女と爲り、家計不如意の間に成長して、人知れず苦勞を嘗めぬ。

◎明治十年——此の年は正に西南戰爭の爲めに社會の動亂せる時代也。維新の元勳大西郷が妖星の如く西の空に消え失せたるの年也。——天下の人心恟々たるの春、彼女は八歳にして高等師範附屬小學校に入りぬ。斯くて彼女は此處に學ぶこと八年。

◎音曲は江戸時代の趣味也。江戸の東京となりて未だ幾許ならず、江戸時代の面影と匂ひとの殘れる當時に在りては、斯趣味の修養を以て、女子に缺くべからざるものとせり。されば、血腥き風の吹き荒ぶ物騷なる世の中にても、なほ三味線の音は絶えざりき。

⦿延子は、由來音曲を聴くの耳あり。母の仕事をしつつ歌ふ唄を聴き覺えて諳誦し、其の節廻しの巧妙なる、五六歳の幼童と思はれざるの天才を有せり。母深く其の才を愛して、三味線を下谷の杵屋某に(七歳)、琴を知人某に學ばしめ(十一歳)後山勢の門に入らしむ(十三歳)。斯の如く、彼女の幼年時代は、殆んど江戸趣味の裡に生長せる也。



⦿然れども、彼女の感興を催せるは、江戸趣味に非ずして、泰西の樂潮なりき。彼女が十歳の頃、學校に於て唱歌なる課目は加へられ、米國人メーソン來りて之が教授を擔當せり。三味線すらも聲は口籠り勝にペンペンと彈く少女等の、口を大きく開きて唄ふ唱歌の如きは、到底能くする所に非ず。延子獨り之を能くして、教師に賞讃せられ、教師と親しみを生じ、遂に教師の邸に到りて、ヴァイオリン及びピアノを手に

觸れ、玆に始めて洋樂の感情に打たれたる也。

◉性來幽鬱なりし彼女は三味線を彈きながらもメソ〳〵と泣きたりしも、ピアノの彈奏には心の勇躍を覺えぬ。九歳の折の大病にその性格を一變して快活となれる彼女は、十幾歳にして音樂取調掛の下に通學するの身となりぬ。同所は數年の後音樂取調所となり、東京音樂學校となりて、本鄕の高臺より上野山に移されぬ。此の三段の變化中に孵化し、成育せる雛鳳は、實に今日の老孃幸田延子たる也。

◉延子の半生は、活ける明治音樂の發達史也。ピアノ及びヴァイオリンを研究せる彼女は、明治二十年優等の成績を以て卒業せり。而して、直ちに母校の敎授に擧げられ、二十二年海外に留學して、米國のニューイングランド音樂院及び墺國の維也納音樂院に研磨の功を積み、二十八年の夏歸朝せり、時に年正に二十六歳。

◉戰勝の日本の文藝は鬱然として勃興し、淸新の詩歌漸く勢を得て、音樂界も亦新樂に耳を傾けぬ。斯の多望なる藝苑の曙に、淸く高き響を奮せるは延子也。無味枯淡なる唱歌にのみ馴れたる、我が邦の樂壇は驚嘆と讃美との兩樣の眼を以て彼女を迎へぬ。此の時、彼女の得意や想ふべき也。

◉延子は春園の永日に、燦爛の尾を擴げたる孔雀也。其の得意時代は容易に去らざるのみか、次で其の黃金時代は來れり。遂に彼女は上野の西太后と謳はれ、高等官四等の校長湯原元一の前に、高等官三等の敎授として控へ、隱然音樂學校の實權を掌握せり。

◉湯原は宮崎の人、大學豫備門の出身也。山口高等學校講師、新潟中學校長、新潟縣及び北海道廳の事務官等を經て今の地位に進み、學殖富贍、敎育界稀れに見るの才物には相違なきも、惜いかな音樂に對しては素人たるを免れず。延子はくろうとにして敎授たる事二十有餘年、能く校の內外の事情に通じ、其の勢力牢として拔く可からざるものありき。

◉當時學習院女學部に下田歌子あり、音樂學校に幸田延子あり。世人稱して、官立學校に於ける女天下の雙絕となす。然るに、將軍乃木の入りて大廓淸を行ひ、易水湯原の猛進して弊風矯正の大旆を飜すに及びて、

彼等は二つながらその多年の勢方地盤を抛ち去るの止むなきに至れり。

⊙敗軍の將は兵を說かず、延子は倉皇として海外に赴けり。是れ一昨年の事にして、恰も自然主義の思潮横溢せるの秋也。斯くて伯林に滯留すること滿一年、昨夏歸朝せしも、時勢は旣に二三變せり亦往年の寵兒に非ず。

⊙彼女は元より歌子ほどの大なる人物にあらず、又歌子の如く圓轉滑脫の才情なしといへども、胸裡なほ滿々たる霸氣を藏す。其の肥え太りたる體格、濃き藤紫の五ツ紋の羽織を著せる泰然たる態度は、年波の寄り來れる顏と相俟ちて重々しく、其の獨逸語交りの饒舌も左程キザには聞えず。こゝらが年の功と云ふもの也。



三、

⊙人の噂を七十五日として、樂壇に復活せるは獨唱美人柴田環也。四十二年の春や、藤井善一と離緣するや、都下の新紙は活字を大にして之を吹聰し、評論し、さては其の陰事をすら發きて、冷罵を

加へぬ。之が爲めに音樂學校助敎授を辭するに至りしも、昨年の秋フイルハルモニー會第三回演奏會に於て、端なくも彼女は復活せり。而して彼女を葬り去れる新紙は、更に活字を新にして其の「復活」し「蘇生」せるをむしろ善意に報道せり。

◎フイルハルモニー會は、彼女一人の舞臺に非ず。音樂界の明星綺羅の如く輝き、雲を呼び、華を降らすの妙音を發しぬ。然るに、樂堂（有樂座）の人氣は、一に柴田環の獨唱に集まれり。死灰再び燃ゆるの時。緋牡丹の如き光焰は正に中天を燒かんとす。見よ、熱烈なる彼女の聲は、唇は――其の唇を洩るゝの婉音は、滿堂の人を醉はしめぬ。斯くて、離縁の痛恨に死せる彼女は、急霰の如き拍手の前に復活せり。

◎彼女は公証人柴田孟甫の長女、年少早く藤井に嫁せり。藤井は陸軍々醫學校出身の軍醫にして、彼に長ずる事二十餘歳也。夫は武骨の軍人にして、妻は叡明多趣味の才女也。青春に横溢する血潮を以て、理智の胸に注がんとす。茲に兩者の暗闘は起らざるを得ず。

◎獨唱の名手として樂壇に立たんか、家庭の主婦として庖厨を守らんかは、少くとも環一身の大問題也。彼女は人知れず泣きぬ。暗夜に悶えぬ。遂に恩愛ある藤井と手を分ちてその天職に活きんと決心せり。戀に破れし哀れなるサッポーは海に投じて死せしも、破鏡の悲しみを嘗めし環は墓の中に目覺めぬ。正に一篇の悲曲也。

◎藤井環彼女の名は、未だ音樂界の人たらざるに、早く靑年士女の間に謳はれ、虎門のハイカラとして、自轉車式部として、盛名を擅にせり。丈なす綠の髮を風に吹かせ、長袖を飄して自轉車を驅るの時、行路の視線は期せずして彼女の後姿にありき。

◎彼女が東京音樂學校を卒業せし時、女義界に竹本京子ありて、艶名を江湖に馳す、然るに何等の奇縁かありけん、彼女の面輪は何となく此の京子に似通ひ、奏壇上の風姿人を魅するもの有りければ、忽ち實力以上の名聲を博するに至りぬ。

◎彼女に少しく頭を傾げるの癖あり。雨に惱める海棠の風情、愛憐の眼を動かす談話と共に、多少の吸引力を

有す。延子は生徒に畏敬せられ、寧は即ち親愛せらる。

音樂學校を退きし時、生徒の失望はむしろ大なりし、今日なほ生徒間に信用あるは之が爲め也。

◎本年劈頭に於ける好音樂は、ペッオールド夫婦罹災義捐の音樂會也。フイオ夫人のピアノあり、ペイン夫人の高音獨唱あり。ペッオールド夫人のピアノ獨奏あり。各々得意の演奏に、其の妙技を發揮す。



◎ユンケルのピアノ、幸田延子のヴイオラ、安藤幸子のピアノ、ウェルッマイステルのセロ四部合奏は當日第一の聽き物なりし、久方振にて現はれたる延子の、好漢ユンケルと顔を合はせたるは、蓋し彼等が得意の壇場ならずんば非ず。

◎ペッオールド夫人は音樂學校の教師、就任の日尚淺きも樂壇の新潮に寄與する所尠からず。彼女はリストの高弟にして、ピアニスト及び獨

唱家たるに於て、當世第一流の目あり。曾てコーペンハーゲン國立歌劇場のシンガーとなり、盛名彼地に嘖々たりし也。

⊙環素よりベッオールド夫人の敵には非ざるも、本邦唯一の獨唱家也。當日の高音獨唱は其の技巧に於て多大の進歩を認むるも、其の情熱の冷めたる、表情の乏しき聲調をのみ弄せるは遺憾也。吾人は寧ろ彼女によりて空しき技巧の聲を聞かんよりは、充實せる眞の感情を聽かんと欲するもの也。

四

⊙音樂家に敎育家肌なるあり。藝術家肌なるあり。前者は俸給に衣食し、生徒の前に威儀を作るの習性となりて、排他の風なきに非ず。後者は屢々公會の奏壇に立つを以て愛想よく、人と交るに城府を設けず。惡るく言へばすれッからしなるは數の免れざる所也。

⊙ピアノの神戸絢子は前者に屬し、ヴァイオリンの北村初子は後者の好模型也。初子、舊姓は天野、音樂家北村季晴の妻也。年若くして別離の哀愁に泣ける彼女は、熱烈なる新詩を賦して詩人と交友し、『讀賣』紙上の其の作を公にし、以て自ら慰むる所ありしが、奇縁を季晴と訂するに至りて、全く演奏場裡の人となれり。

◎季晴は新曲『離れ小島』『露營の夢』等の作者、和洋兩樂の調和を圖り、樂壇に一新機軸を出さんと努力する人也。妻と共に樂器を携へて地方に演奏し、或は三越呉服店の樓上に現はれ、或は子弟を敎へて懇切を盡す。所謂夫婦共稼ぎの音樂家也。

⊙絢子は東京音樂學校の敎授、佛蘭西より歸朝するや、流行の寵兒となりぬ。到る所の音樂會は、彼女の新聲を聽かん事を欲するも、本職及び內職に多忙にして、容易に上野及び駿河臺を出でず。駿河臺は即ち自邸にして、朝夕ピアノの音を絕たず。

⊙彼女もと良人あり。一兒あり。今之と別居す。新綠を洩るゝ月淸き夜、手馴のピアノを假りて滿腔の情緒を彈じ去り彈じ來れば、悲調慘として四隣を泣かしむるものあり。

◉天野愛子は、初子の妹也。姉と共に皐月會を起し、姉はヴァイオリン、妹はピアノを教授す。姉は豐頰にして風姿艶妖、妹は鼻いかつく巨眼近眼鏡の底に光る。一は藝人を以て任じ、一は人格の上に立せんとせり。

◉愛子は姉と同じく東京音樂學校の出身なるも、外國語に通せず。然れども、其の技能に至りては、侮り難きものあり。常に獨身生活を標榜して、音樂界に雄飛せん事を期したるに、卒然として醫學博士樫田龜一郎の後妻となりぬ。



居眠もうまし柳も見に出たし　其角

◉博士樫田は下宿屋の子也。又立志篇中の一人物也。愛子も亦素人下宿の娘也。世間並の薄志弱行のお孃さんにあらず父母の身分に於て大した懸隔は非ざるも、一は二十臺の花嫁にして一は四十臺の再婚也。而も愛子は音樂を絶つの條件を以て、博士に嫁げりと聞く。最早音樂家としての、彼女の生命は滅びたる也。而かも彼女は人格に活く。

◉一家の主婦として、良妻として音樂家として敢て差閊なく社會に立つは賴母木駒子也。駒子はヴァイオリンの名手、新聞用達合資會社の賴母木桂吉の愛妻也。

◉駒子と同じく、東京音樂學校に教授たもの、橘糸重

●予あり。彼女は多情多恨の音楽家にして、本邦稀れに見る鬱憂の歌人也。ピアノは其の特技にして、三十一文字は其の餘技也。而も彼女は其の餘技によりて、『心の花』紙上を光彩す。

⊙彼女の歌は字々涙痕あり、句々悲調を帯ぶ。試みに、其の詠歎首を擧ぐれば、

傷りの人の涙を拭はんと傾けはてし我がまことかな

いひ知らず美しかりき然はあれど短く消えし夢をしぞ思ふ

わがうれひしばし忘れて人の上に涙を注ぐ夕まぐれかな

さりげなくさらばとのみに別れ行く人の情を悲しとぞ思ふ

又一日苦しき命加ふべく明けゆく姿のうらめしきかな

涙なく悔なき一日もしあらば其の夕暮に死なんとぞ思ふ

⊙是れ、大膽なる自己告白也。自己告白によりてあきらめを得る、悲しき慰藉也。所謂お孃さんのでも歌にあらず。頁を塞がんが爲めに捻出するの歌に非ずして、實情の詩也。吾人は此の詩によりて、戀ひては失ひ、失ひては戀する、か弱く、清き女性の半面を窺ふが如き心地す。

⊙由來女史は内氣の人也。沈默寡言の女也、胸中何等の思を藏するにか、毎年元旦には必ず遺言書を書き換へ、之を確と手函に收めて密封すと聞く、友人某氏に寄する英文中に、羅馬字にて『私の苦しき胸を察して下さい』と書く程の思慮深き人なれば、秘函中の一書は、夫れ或は一葉の日記の如きもの乎。

五

⊙羽翼漸く成らんとして倒けるも、消き日の前に復活せるは四溜姉妹也。多くの女流音樂家の學閥を負うて立つに反し、彼女は誇るべき學歴を有せず、獨學自習以て今日を致せる也。

⊙父訥堂は音樂界の先進、明治二十七年に廢刊せる『音

樂雜誌」の經營者たり。彼れ始めてヴァイオリンの分解研究を試み、次で古今東西の樂器を蒐集して之が研究を爲し、又仙華琴を發明して、當時盛名ありき。

⊙納堂は藝術家肌の男にて、家事を顧みず、一管の笛を携へて諸國に放浪し、家を出でて數年なるも歸り來らず。母小辰は感情の强き女性にして、能く音曲を解す。先年共益社より出版せる『俗曲集』は、即ち其の著也。

⊙藝術を父とし、感情を母として、生ひ立ちたるは四竈姉妹也。二十五歳の蘭子、二十二歳の鶴子はヴァイオリンに妙を得、十歳の濟子は琴を能くす。

⊙姉妹の設立せる富士音樂會は、長姉富士子の紀念也。富士子は八九歳の時旣に洋樂に秀で、獨逸出身の雇敎師ヂットリッヒの如きは、大に稱揚して安藤幸子以上の望を囑せり。好事魔多く、天才富士子は明治三十四年、十八歳を以て夭折しぬ。

⊙箏曲に名あるもの、山田流に柳田ひろ子あり。山室千代子あり。生田流に町川杉勢あり。ひろ子は其の家元榮清の跡を繼げるもの、居を神田淡路町に構へて箏曲を敎授す。

⊙北原末子は一種の變物也。三十四年女子職業學校を卒業し、一時岐阜縣高等女學校に敎鞭を執りしが、文學及び音樂を熱愛するの情止み難く、ゆく〳〵は小說家たらんの希望を以て、再び東京に舞ひ戻れり。

⊙箏曲のお師匠樣となりては十五人の弟子を得、短詩を詠じては雜誌『火の柱』を飾り、所謂文壇の澁谷派に推重せられしも、該誌廢刊後は杳として聞えず。

⊙職業としての箏曲家はお師匠樣也。其の收入の如きも、月謝は一圓乃至五圓に過ぎず。而して公開の樂堂に出づるの機少し、是に反して、洋樂家は常に演奏壇上の花形となる。其の一夜の演奏料の如きも、幸田姉妹及び絢子は五十圓、絢子、永既子、環は三十圓、初子は二十圓、愛子は十圓位なりと聞く。以て社會の洋樂を待つの厚きを知るべき也。

⊙報酬は或意味に於ける、無言の證明也。一夜の演奏料より見ても、音樂界に於ける彼等の地位は分る也。吾人は此の稿を結ぶに、其の技能の如何を問はずして、唯札束によりて觀察し、花の如き女流音樂家の誇を傷けたるを謝す。

ヂフテリヤの看護法

ヂフテリヤは急性な猛烈な傳染病で、最も多く子供の咽喉部を冒す所のもので、實に恐るべく、注意を怠つたならば大切な子供の生命を奪はるゝ事は申すまでもない。この病症は初め身體が倦怠く、惡寒がして熱が出で、下顎の淋巴腺が腫れ、咽喉部が赤くなり、扁桃腺もふくれ出し、其上灰色の膜が出來て食物を嚥み下す時に劇しい痛みを覺える。輕症なのは吸入及び塗布藥等で次第に輕くなり、一週間位で全治する事もあるが、重症で且つ治療が手後れになると、忽ち上下の兩頸に擴がり、熱もいよ〳〵高く、頸の腺が腫れあがり、口内から臭氣のある液を出し、後に鼻の孔の中にまでも及ぼして、聲が嗄れ、呼吸が苦しく、咳嗽が出て、顔色も蒼ざめて、だん〳〵と危篤の狀態に陷り、脈搏が不整になつて遂に痙攣を起し死亡する。併し今日では血精注射藥があるから、早く氣づいて注射をすれば大概全治するものである。

若し子供が原因の分らぬ熱出た時には、まづ口を開かせて咽頭部を見てやつて、萬一前條の如き樣子が見えたならば、早速醫師の診察を乞ひ、都合によつては入院出た方がよい。さてその看護法は臥かすには低い枕を用ゐて、胸の開く樣に床につけ、頸の廻りに氷嚢をあて、或は罨法を施し、又は醫師の命ずる藥液で吸入することが大切である。吸入をかける時には、患者の頭部を少し傾け、胸のあたりに油紙又は護謨布を敷き、その上にヘチルをあて、薄いハンケチを二ツ折にして眼を覆ひ、吸入器を五六寸位離してかける。吸入器のかけ方を知らぬ人は、醫師に聞いてするがよい、吸入が濟んだらば温湯で絞つた手拭でよく顔を拭き含嗽をさせるがよい。

食物は牛乳、スープ、オモ湯、鷄卵等咽喉を刺戟しないものを與へる、それからこの患者を出した時の注意は嚴重に健康の人を隔離して患者の身についたものは勿論、室内等も十分に消毒する樣にしなければならぬ。ヂフテリヤの黴菌は至つて抵抗力の強いもので容易に死ないもの故、消毒を嚴重にし、且つ十歳以下の他の健康な幼兒には醫師のすゝめを待たず、此方より進んで豫防の爲の血精注射を施して貰ふがよい。

さて患者の全快した時は、頭髮を洗ひ、温湯に入れ、着物を着替へて他の部屋に移し病室に用ゐた器具は悉く、消毒舍にやるか、又は十分に瓦斯消毒をせねばならぬ、且つ看病人も同樣に髮を洗ひ消毒し衣服を着替へてから外出する樣にせねばならぬ。

處世哲學

素人嚇かしの時代は既に過ぎたり

信用ある女生徒――卒業生の肩書――外交官は一年にタッタ三人――理想の結婚を夢見る大馬鹿――自己に與ふる暗示――五百圓の端タ金――骨と富――手紙政略――百の鞭より一滴の涙――樂天の要訣

河岡潮風

▲よき癖か、わるき癖か。自ら知らず。たゞ月に四五日を旅にすごさゞれば、生きたる心地せぬ樣になりたり。休日ごとに用をこしらへて飛び出す。湘南の海邊さては豆州の温泉場。到る處わが家あり。こたびは酒匂の松濤園に法科の友のA君の病を養へるを訪ふ。四月一日の夜也。病人の病氣見舞こそ尊く珍らしきものなれ。

▲A君と曉四時まで語りて二日は晏く起きつ。美しき朝、美しき海、美しき光。宿の中庭の松原のベンチに出でゝ豆相の山々ながめつゝ、筆とる。ぶらんこに少女少年の笑聲あり。三々五々別れたる藁屋づくりの家の緣に、安樂椅子を出して書を繙く紳士あり。淑女あり。僕が萬年筆は麗日和風の間にありて、頻りに惡文を陳ず。

* * * *

▲居は氣を移し、習ひは性となる。誰もみな學校はよき學校に入り、住むにはよき處に住みたきものなり。僕が見聞に於ては、信用あり、名聲ある女學校の生徒ほど、よく自ら重んじ自ら慎むるを知る事殆んど十中の十に居る也。また住所の位置もその人格の一部を造る。而してその久しきや、其事眞の性となる。時、新學期に際し、身、山光水色の間に轉じ、此感特に新らたなり。

▲素人おどかしの學校卒業生の肩書を振りまはすべき時代はすでに過ぎたり。食はせものはつひに食はせもの也。鍍金の箔はやがて木地を出だす也。一時視聽を聳かさしめし、某校の如き、昨今頓に聲價をおとし、東京にては到底捌けず、地方の小學校へ赴くか、乃至はお情的に母校に使つてもらふ位のものにて、母校の職員となれば、單に名ばかりにて生活費は相變らず、父兄より仰がざるべからずといふ。ことに文學を修むる科の如き、今年卒業生二十何名中滿足に職を得しもの五指を屈する迄に至らず、何雜誌記者など云ひ作ら毎月二圓の原稿料を頂戴せりとかや。呪はれたるかの學校よ。僕は同情にたへず。

▲何にせよ明治は四十四年にして、世は二十世紀の叫びけたゝましき今日此頃也。なほあるべからざる事を望める事の何ぞ多き。女學校出でゝ妾が嫁がんもの外交官をのぞいて他になしと思ひ込み居るもの、一校にして數十人の多きを算する由。されど行くものは多くして選ばるゝものは少なし。否な、殆んど莫し。近き例を引けば去年外交官試驗に及第せるもの十八、その内任官せるもの六人。しかも二人は齡あまりに過ぎ、二人は妻帶者たり。今年はこの試驗ありやなしやと疑はれつゝありと云ふ、かくの如く一年に出づる數、一人乃至三人のみ。都下無數の女學生の希望決して實現され得べきものにあらざるは自明の理にしてあだかも官私大學生が内閣總理大臣を夢みつゝあると一對にて、白晝に夢を見るの徒と申すべし。尤も、之を能はずと知るもなほ捨つるを得ずと云ふならば、粕谷村のトルストイ德富蘆花氏の平和說についての言は彼らが借用すべき名言なるをおぼゆ。「人は世界平和を痴人の夢と云ふ。夢か。夢か。夢でもよいぢやないか。このせちがらい世の中に夢でも見んでは生きて居られるか」知らず外交官夫人希望する人よ。卿らは夢と知らずして夢みるものなりや。夢と知りつゝ醒めざらん事を希ふものなりや。

* * * *

▲一日の計は晨にあり。一年の計は元旦にありと云ふ

諺それも十九世紀の遺物の一とならんとするぞ是非もなき。生存競争はげしく、せちがらき昨今なれば、一歩十歩先んぜざれば勝利者となりがたし。寧ろ一日の計は前日の夜にあり。一年の計は前年の大晦日にありと訂正すべきをおぼゆ。僕はいかに忙しくとも、就寝前、其日の日記をつけ、行動のあとについて自省し、全身全力をつくしたるを思ふときは、衷心より、天に之を謝し、かつ翌日の事をも考ふる也。而して其翌朝には、それを心中にくりかへして汝は今日これだけの事を爲さゞる可らずと自ら命令する也。換言すれば自己に暗示を與ふる也。



＊　＊　＊

▲理想を過去におく人あり。將來におく人あり。前者は下り坂の身分にして後者は兎も角も向上發展す。婦人の多くは回顧追憶の人にして『あの時分この様になればよきに』とおもひ男子の多くは『今にかくの如くすべし』と力む。僕は後者を賛すれども、何にせよ理想のある人まだよし。無理想を

叫ぶ人もあしからず。たゞ不知理想にて、空く寂々の日を送る勿れ。

▲けふは神武天皇祭。しかも朝よりの春の雨。海も空も一つ色にうち煙りて、藁屋の軒におとづるゝ雨しめやかに、松原の祇羅徒らに閑也。都にては日本橋開橋式の當日とて、非常の賑ひを豫期しゐたりしなるが、あはれやそれも流れたるべし。

障子あけ放けしてものかけば、鶯嬌喉を弄して、ややさむき風、ほのかに座をめぐる。何の寺の鐘か鳴り響きければ、

春雨や松にわけ入る鐘の音

見まねの一句ノートのはしにかきてまた雨をきく。

▲大法螺流行の世。一トロに、何、五百圓や千圓の端タ金など、大きな事を云へど大抵の家庭にはこの所謂端タ金すらなきが多き也。端タ金すらなき癖に威張るはこれ空威張。識者組せざる也。知らずや。空飛ぶ大鳥も來りて憩ふ參天の老木も、遠き昔に溯れば二葉の時代あり。一粒の種子たりし時代もあり。進歩には飛躍を許さず。百萬圓の身代は五百圓は愚か、一圓、五十錢より始まりしものなるぞや。端タ金なる五百圓が、往々にして一生涯の榮辱存亡の問題となる事出來ず、ない時には逆さに振つても血も出でず。この苦境に陷つて驚くともすでに遲し。多言を要せず。貯金の美談の一例を山内一豐の妻に於て見る。

五百金は勿論、一紙半錢も惜むべし。主婦の責務ここにあり。

▲戀と富とは竟ひに人生の二大槓桿也。少年少女はお伽噺よりしてすでに、目出度し／＼の大團圓には、男は美女を娶り、山なす財寶を得、女は勇士にあふと說く場合多からずや。戀と富とをこはいものゝ樣にして敎育するものゝつねに失敗するは此の故也。

▲雷すら高き樹を選んで落ちんとす。女が賢こく富みたる夫に嫁がんとする寧ろ當然なりと云ふべし。理は

正しくとも冷か也。貧にして才なき男の許に內助の勳功を建てんとするものゝエラキを知り乍ら、之に赴かんとするものなき亦當然也。

▲かつて某女學校長、僕を捉へて嘆じて曰ふ。妻帶して十年、なほ女性の特色を知るを得ざりし吾、一度び女學校長となつて悉くその長短を了しえたり。吾にありては天下の三難物は隅田川の流れと、骨子の目と、女教師也。一寸用を命ずるにも心せざれば、風說忽ち翼を生じて飛ぶ。



その割あてに氣をくばり、その用語に心を使ふ。二人以上の女性を同時に扱けば、特色即座にあらはるゝ也。賃金をためすに試金石あり。女性をためすには女性あるのみ。と、長大息之を久しうす。

＊　＊　＊

▲ものはすべて思ひ立つた時になすべきなり。カーネギーの格言に「Do it now」（それを今すぐ爲せ）と。昔の坊樣は、明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものかはと、人の眉毛に唾をつける樣な歌を

よみたり、生命に刻々燃えつゝあり。其の生命は、長さあると同時に幅なくんばあらず。寸陰惜しむべきはさる事ながら、尺陰ことに惜しむべし。

▲グラッドストンは手紙政略の効用を知つて實行したる人也。一片の書信はよく交際上の圓滑を助くる油として、先輩朋友の感情を良好ならしむるもの。かの田中正造翁すら、この主義者にして、旅行每に、八方は愚か十六方にハガキを飛ばすとかや。手紙政略は誰にも必要の政略なり一錢五厘居士の力輕んずべきにあらず。僕は旅行ごとに數十枚のエハガキを認めて出だす習慣はおそろしきものにて、今やこれを爲さゝれば物たらぬ樣おぼふるに至れり。

＊　＊　＊　＊

▲夜な〳〵トランプを弄ぶ家庭ありけり。主人は友に促されて外出せんとす。玄關にて、「あれを忘れた持つて來て與れんか」と妻に云ひつ。蓋し財布の事たりし也。傍にて之を小耳にはさみし子は、いち早くかけ入りて「とうさんこれかへ」と差し出したるはトランプの一と組！

客は顏をそむけ、主人と主婦は啞然として物云はず飛むだ茶談なりしと、こゝの噂の語りき。光景目に見る心地す。

＊　＊　＊　＊

▲男が羽織袴に靴はきたるは何となく田舍くさし。女の袴と靴とはハイカラめきて見ゆ。これ神女と云へば日本的にして、女神と云へば西洋臭きと同じく、在來の習慣より來る心理作用なる如し。松原を靴はきの女の子ゆくを見てこの感を深くす。

＊　＊　＊　＊

▲思想を司配するものは思想。肉は靈を左右し得じ。一寸の蟲にも五分の魂。子供には子供相當乍ら正義の觀念あり。親より不條理の叱責をうけて服するものにあらず。百の鞭より一滴の涙の有効なる事多きは、嗚呼、壓政が、如何に權威なきものたるかを知るに足らむ。僕はつねに信ず。家庭に於ける小兒は「導くものにして、矯むべきものにあらず」と。

▲人の本性は善なりと云へど、其半面には惡ち潜める

如し。人生は悉く矛盾也。矛盾なるが故に、進歩あり。變化あり。發展あり

* * *

▲僕が病勢はげしく身動きもならざりし頃、平生は一顧にすら假せざりし、小繪端小冊子、乃至は紙片の一句が、非常に氣を新にしたる記憶なほ新たなり。昨夜話をきけばA君も幼な兒の昔にかへりて小さき手遊び、名畫の油繪などもらひて非常に精神を爽かにしたり。就中當今流行の西洋福の神ビリケンを枕頭におかれし時は、失笑禁ずる能はざりしと。僕は爾今病氣見舞に大いにビリケンを使つてやる考へ也。



▲病氣のとき病勢以外におそるべく注意すべきことは根性のひがむ事。

▲一生懸命——所謂ベストをつくして得たるものは、天下一のものと心得よ。結果としては十二分に滿足すべきものなり。

▲同情をあつむるは偉大なる勢なり。而かも座して得べからず。

▲樂天の要訣はすべてのものを趣味眼を以て觀るにあり。天下詩趣なきもの

はあらむも趣味なきものはあらじ。

▲人は己れを樂しますべきものに苦められつゝあり。これ執着、愛慾の爲めなり。之を去つて淡々たらば、眞に天空快濶。

▲富めるものは高慢に、才あるものは至誠に乏し。

風流な花屋商賣

風流な花屋の生活はどんなものか調べて見ると、先づ剪花屋は、市内で相當に店を持つてゐるのが一區平均十六七軒、市内全部で凡そ二百五六十軒はある、それに大きな店では十五六人の賣子を置くし、其他もぐりと稱して朝に仕入れ夕に賣つて歸る者を合せたら六七百人はある、而して宮内省初め各國大公使館出入の花屋は、大概月五六千圓位の收入はある、時に依つて一萬圓位の賣上がある、純益四割と見ても、平均月二千圓、三千圓の多額に上る。

併し普通の花屋では、平均一ヶ月の賣上が五六十圓より出ることは少なく、純益は三四十圓位である最も月に依つて多少異動はあるが、概して店は冬場が景氣よく、賣子は夏が書入れ時である、これには種々な原因もあるが、冬の花物は多く溫室物の自然小さな商人には賣難くなるに反して、夏場は花も澤山あるし、從つて値段も安いから思ひ切つて安く賣れる、そこで店持の花屋は夏場を多く大道の賣子に侵略せられて、霜枯時が却つてよいといふ。

店で割のよい商ひは誰も知る葬式用の樒花盛花で、樒花の値段が並で對の三圓位、中が五圓の上が十圓といふ順序、これに人夫付となると一人四十錢宛、これも花屋で周旋する、盛花は花が上等だけに其の割合に安くはない、純益も略ぼ前の通りの割合で、花屋の主人は『心細いものでせう』と折々嘆聲を發する、又賣子の收入はと云ふと、一日鋏の音をさせながら市中を歩いて賣上けが平均月三十圓位。

次が緣日の花屋で、市内各所の緣日に出る植木屋が總體三十六組合あつて、其人員が六百餘人、其の半數が花物專賣の商人と見ても、一寸三百餘人ある、其の一人の收入がどの位あるかといふと、一ヶ年三四百圓から千圓まで、書入れ時といふのは四月から八九月頃までゝ、花物は大抵盂蘭盆まではよく賣れる、一夜に十圓位取ることは決して珍らしくないが、盆過はまるで駄目だといふ。

人間の躾け方の參考として
猫の躾け方を說く

成女學校敎務主任　村上武三郎

△幼い時の躾け

人間でも幼い時はさうですが、猫などは尙更習慣に依つて動くものですから、生れてからの躾け次第で、如何やうにもなるものです。先づ幼年期少年期ともいふべき、生後二三ヶ月迄の間に、食物の喰べ方、糞尿の遣り方、其の他の事を嚴重にして置くことが肝腎であります、幼少の時代に、好い習慣が就いて居れば、成長の後、全く扱ひ易いのであります、私は國元では始終飼つて居りましたけれども、東京では只今の家に越した時、前の人が殘して置いたのを飼つたのが初めてゝ、今年八九歲ですが、最初の躾けの惡るかつたせいか、何事にもだらしなく、食事にまれ、糞尿にまれ失敗を時々いたし、而も殆ど矯正の仕方がないのに、困つて居ります。

△食物の與へ方

食物は凡そ時を定めて、人間の食事の濟んだ後か、或は前に遣るのが宜しいやうです。人が食事をする時膳の端や皿の中で喰べさせますと、つひ其れが習慣となり食事や來客の折、人の食膳に近寄つたり、五月蠅く泣いたりするのみならず知らぬ間に膳の物を捕る味を覺え、尋で戶棚の物、其處等の物を盜み喰ひすることゝなりますから、食事の折など傍らに寄せないやうにし、惡い事をした場合には、嚴重に折檻をしなければなりません。又食物の種類は、大抵御承知でせうが猫は犬と違つて、腐敗しかけたものでも、何でも構はず喰ふやうなことはなく、美食を好み、又は美食に流れ易いものですから、食物に惡習をつけないやうに氣を附けねば、なりません、餘り可愛がり過ぎて、美食をさせますと、必ず之れに慣れて、其れでなければならぬやうになります。例へば鰹節を掛けて遣るとして

も、何時でも撒けると云ふことをせず、時々食物を變換して、肴の骨があれば遣る、なければ遣らず、其れで飯を喰ふ習慣にするのが第一です。今私の家に居る猫は、前の人が鰹節でのみ食事をさせて居たので、鰹節を撒けなければ、三日でも四日でも食事をしません。食事をしないで居るのは構はぬが、家に食物がないと、近隣の臺所を荒して來るので、猫のお蔭で、大事な頭を下げてお詫をしなければならぬやうな事があります。

△糞尿の遣らせ方

糞尿の遣り方も、生れて暫しの間は、親猫が綺麗に甜めて取りますから、別に世話は燒けませんが、乳以外のものを食ふやうになりますと、親猫は構はなくなりますから、此の際、糞尿を催さんとする樣子を見たならば、一定の糞尿所に伴れ行きて、させるやうにせねばなりません。初め糞尿を催す時には、必ず彼方の隅に往き、此方の隅に行きなどし、臀部を高く上げて蹲きながら、聊か悶ふる氣色が見えますから、此の際注意して之を糞尿所に導くのです。糞尿所は、椽から下して、庭の隅の邊にさせるやうにすれば宜しいのです晩は內庭とか、廊下の隅とかに古い金盥などを置いて三四回も其處にさせるやうにすれば、習慣がついて、必ず其處にするやうになります、其の習慣をつけてないと、寢所の中にでも、衣服の上にでも、又は大切な器具の上にでも、床の隅にでも、構はず致します。それのみならず、下より上に尿を走らせて、掛けてある衣類道具などを汚すことがあります、糞尿器には、砂を入れて置いて取り換へるのです。

△子供の襁褓と猫の糞尿

其れから糞尿で注意すべき事は、嬰兒が居る家では襁褓の始末をよくして置かないと、猫は其處等に襁褓の汚れたのがあると、其の臭を嗅いで、直き其の上にします、又子供の寢床が、小便臭かつたりなどすると其處にもしますから、注意して其んな處をうろ〳〵嗅

いだりなんかする場合には、嚴重に制裁を加へて置かねばなりません。

△罪惡の叱り方

猫を叱る前に、惡い事をしないやうに此方で十分注意しなければなりません、猫が肴を捕るやうな處に置きながら、棒片などで打擲するのは、亂暴無慈悲な遣り方です。猫が肴を喰べて逃げ出さんとする時に大聲叱咤すると、聲に驚いて銜へながら逃げ出します。此の習慣がつくと、聲を掛けないでも、銜へたら一生懸命逃ぐるやうになります。ですから最も上策としては將に喰べやうとする風が見えたら聲を出して嚇すか、夫れでも聞かなければ取らうとする物の傍に、自由に押しつけて直に打つかするのですが銜ほ



良い方法は耳を指端で、きつく撚るのであります。物の近くに鼻を遣るのは、畢り此ういふ悪事をすれば、此ういふ罰を受けると敎ふるのです、唯叱り放しではいけません。

△病氣の手當

猫の病氣も色々あるやうですが、多く罹り易いのは皮膚病のやうです、是れは不潔から起きるのですから軟痂など出來た場合には、石鹸で患部を洗つて、亞鉛華澱粉を撒布すればなほります、其れから蚤がたかつて困ることがありますが、其れは除蟲菊の粉を振り撒け、梳櫛で透いて遣れば、能く取れます、又猫に木天蓼は非常に良いといひますが、兎も角、健康を助けるやうです。

△男猫と女猫

其れから東京などでは、女猫を嫌つて男猫を好み私の國(九州)などでは男猫を嫌つて女猫を好みますが是れは一得一失がありませうが、猫を飼ふといふ目的には、女猫の方が能く適ひます。男猫は女猫に比して總て横着で其の上に始終家に居ないで外にのみ出て居て鼠を捕りません、所が、女猫は靜で落着いて、割合に悪いこともせず、鼠を能く捕ります、唯女猫の世話の焼けるのは、子を妊む時の五月蠅いのと、子を生んでから其の處置に困る事ですが、能く注意して見て居りますと、分娩の前には、母猫の擧動で分りますから其の時は、一定の所に入れて生せるのです、其れを構ひませんと、往々にして寢所なり、物の隅なりに生みつけます、又子猫の捌け場處は、鼠退治の必要なる今日ですから、都會などには、貰ひ手は幾等もありませう。

△鼠の捕らせ方

鼠を捕る捕らぬは、幾等か其の猫の性質にも依りますが、餘り好い食物を遣りますと、鼠を捕へる必要がないから、餘り捕らなくなります、又親猫が同居す

る時は、鼠の捕れた都度、一應玩具にさせて喰べさせますから、幼い時より鼠の味を覺え、早く捕ふるやうになるやうです、猫を飼ふ第一の目的は、鼠を捕さす る爲ですから、特に之が躾け方としては、人が鼠を捕つた場合に之を與へて、味を覺えさせる事も大切であります。

△猫と子供

子供の居る家、殊に牛乳を飲ませてゐる家では、特に注意して、猫に牛乳の味を知らせないやうにすることが肝腎です、能く新聞に、牛乳の味を知つた猫が、乳兒の脣を噛んだといふこともありますし、終に生命をも奪つたといふ話もありますから、乳兒に對して猫は非常に危險であります。故に乳兒のある家では猫を養はない方が安全ですが、飼ふ時は猫に牛乳を與ふるは勿論、夢にも片乳の味を知らしてはなりません。又牛乳でなくとも、小猫はぢやれつきますから、乳兒が手を動し、足をぶら／＼させると飛びついて傷けることがあります。私の子供が、先程障子の破れた手を入れて居りましたら、内の方に居つた猫が、つと動き出した指の尖にぢやられて怪我をさしたことがありました、注意せねばなりません

△猫の藝當

是れは、主要なる問題でありませんが、猫に藝當を仕込みますと一家の團欒をも助けますし、子供の玩具にもなりますし、又賓客を接待する餘興ともなります猫に藝當の仕込み方は、左程面倒ではありません、何か食物を前に置いて、首の所を持つて、後に引繰返して、食を與へると云ふ風にすれば、此方の命の儘に、敎つた藝當を行ふやうになります。





雲雀笛

田鶴子

「姉様、お花が咲いてよ」、と植込の方で、あわただしい、俊子の聲に私は新春衣にと新調して戴いた、無地お召の、縫ひさしの袷を投げすてゝ飛んで出た。

昨日まではあんなに堅かつた、彼岸櫻の蕾が赤く大きう膨らんでチラリ、ホラリと彼方の枝にもこちらの枝にも、三つ、四つ、二つ。

それもその筈、お彼岸から、もう一週間も經つたのですもの、此の間の兄様からのお手紙には、「目下東京の一重櫻は滿開」とあつたが、當地じや、一重も八重も鹽釜も花のみられるのは未だ〳〵十日も後の事でせう。何と云つても中國山脈の麓、雪も霰も深い片山里の事で御座いますもの、ねえ。かうして内にばかり引つ込んでゐると、却つてそれが習ひ性となつて別に何とも思はないけども、たまさか斯うして新鮮な外の空氣に觸れてみると、又何とも云へない、いゝ氣もちだこと。

さながらの、ビールのやうな緣一ぱいの春の日の長閑さ、青空高く舞ひ上つてはよく囀る雲雀は、又たハイカラな小娘のやうにも可愛らしい。

とこ一度の此の春！一たび逝きては又返らない、可惜九十の春光を、むざ〳〵と過すも餘りに勿體ないと、われから理窟をつけて、「明日は幸ひお節句、俊さんお花見しようではないか、新宅のお君ちやん、それから二郎さんも、明日來て頂戴つて、云つてお出。序にお隣の八重さんにも、ね、間違つちやいけませんよ、明日お花見するんですから皆さん來て頂だいてさう云ふんですよ」、莞爾うなづいて俊子は跳て門外へ消えてしまつた。

△

さあ、是からが私の役、それは斯々ですからつて云へば譯はないけども、それぢや興がない何うぞなら母様の方から云つて戴きたい。

「お母様明日は桃のお節句で御座いますねえ」

昨年は村役場からの厳命で陰曆好な老人たちは不服たら〳〵、それでも仕方なしに新曆を行つたやうでしたがそれを、何かとり返しのつかない損失でもしたかのやうにくやしがつて今年は依然(他國はいざ不知當地方は)舊曆によつて居るのです。然しこれも數千年來の長い習慣ですもの、さう一朝に改まるべきでもありますまいかとも思はれます。何と云つても習慣の力の偉大なるには今更驚いちまひます。

「母様お待ちかねの彼岸櫻が咲きそめましたよ。あすあたりみ頃でございませう」

「おや、さうかへ、幸明日はお節句、子供等を集めて……」
「ホヽヽお花見しませうか」
嬉しい／＼、これでチヤーンと決つた。
一體私は大きな姿をして、子供と遊ぶのが大好、未だ學校にゐた頃なども一年や二年の人たちを對手に鬼事したり、陣屋どりしたり、それは隨分騒いだものです。今でもお飯事に飽いた春の夕など、そつと庭に下りては、俊子とブランコの相のりして「何だねえ、大きな女が」と母様からお叱言頂戴くのも珍らしくございません。

△

日頃から寝坊の私、此の頃でも六時をきかれれば床を離れない——否え、故意に離れないんぢや御座いませんむぢや起きやう／＼と思つてもつい眼の方が醒めてくれないのです。——其の私も何うした事か、今朝は暗い内にさめました。
「花——花っ——花や、起きて頂戴」
今から考へると、この頂戴がよほど振つてたと思ふ。湘南の某館に、誰やら様のレンズに入つた姿の森香様を思ひつゝ、白のエプローン襷の甲斐々々しう。然し悲しい哉、臺所に出ては、何うしても思ふがまゝの活動は出來ない、それに花が助手とは「和洋料理案内」の手前、少々お恥かしい次第では御ざいますけれども。
又しても茫然立つてゐては「新妻のお櫃にも困りますよ」と氣が廻らなくて」とは此の日、兄様か母様から戴いたあり難いお言葉？

その内に出來上つた御馳走のかず／＼、どつさりお重に詰めて、紅白の菱餅と共に雛壇に供へておいて、あとはもうお客様を待つばかり。
此の隙にと化粧部屋に——、手早く髪をといて熱いお湯で癖なほし、思ひつきで頭高な束髪に結げる。一糸亂れぬルイザ巻——なぞと、そんな事はかまはずやの私には出來ない。何時かもいとこの宏さんが「その髪何て云ふのか、まるで蝸牛みたいだよ」と云はれたから「ハア、これはでん／＼巻一名田螺巻、も一つの名は新發明のりう子まき、と云つてやりました。

△

チリン／＼、門の格子が開いたと思ふと玄關に「御免遊ばせ」と可愛い聲、緋鼻緒の下駄と編み上げの靴の主、小さい雛の客は俊子に導かれて離れ坐敷へ。
「皆様、よく入らつしてねえ、今日は終日宅で遊んで頂戴な」軈てお重を開いて皆様におすゝめする。少しばかりの白酒に皆さま、もう可愛い頬を美くしう染めて。
「今日はお花見どお雛と一緒なんですよ、だからおひなの前でお花を見乍ら食つて頂戴」と左右に障子を開ける、とさーつと室内に流れ込む春のそよ風は、上氣した頬はえも云はれぬよい心地。
「三日みぬ間の櫻哉」實に散るを惜まぬ櫻花は咲くのも亦早い蕾七分の昨日の枝はどれも／＼もう滿開、咲きも殘らず散りもせずなど、そんな陳腐な形容は今さらくだ／＼しう申上げますまい。「まあきれいだわ」

と皆樣忘れてか右手に楊枝、左手に食盃もつたまんまでのび上つて彼入る、その又可愛らしさ。外にはもの言はぬ艶なる花、内には言ふ無邪氣な花、

△

「次郎ちやんも、八重さんも入らつしやい、ブランコへ行きませう」と俊子が先導にみなさんつゞいて庭へ下りられる。

私はひとり殘つて昨日ついたばかりの女學世界を繙いた。……新

新婦の性格――何と云つても金子さんは巧いもの。

みなつらしさんや、今月の寄書欄のABさんなぞも隨分と、千代子樣の事ひどく云つてゐられるけれども、やはりあの人たちだつて内藤さん崇拜に違ひない、私だつて大の〳〵千代樣崇拜だけども、時々はこんなわる口聞くのも亦痛快だ。

千代子樣てどんな方でせう？ 宅の俊子がどこか似通つちやゐないかしら、とも思ひますの、美くしい其のお姿、夢になりと、拜したいものと、いつも胸に手を挟んでやすみますけれども、カラ駄目なんでございますよ。どなたで御ざいますか、千代子樣をおてんばだなぞと、とんでもないこと。

強ひて快活な裝ふては被入るけれども、千代子樣は屹度おちつきのある、考へ深い、さうして涙の多い方――と私は思ひますのよ。

宅の俊子つてば、切長なあの大きな眼、器用に出來た石膏細工のやうなつんむりと恰好のいゝあの鼻、きつと結んだその口元、人はみな靜淑な子、おてんばな子と評されますけども、それはやさしいしほらしい子でございますのよ。

あゝ、磯千鳥樣、此の君は又千代子樣とはすつかり反對な行きぶりしつとりと奥床しい内にも又凛とした、御筆の彩にはその人となりのほども偲ばれてそゞろ懐しうも戀しうも御ざいます。

昨年中は今樣枕の草紙に、今年は又、新つれ〴〵草に、私等は少からざる玉章の教訓を與へられて居ます。「光榮ある人世の存」で内海の友千鳥樣の仰有つた通り眞實今清少納言と申上げても宜しい、あの穩健な御思想、床しい筆づかい。私は全然氣に入つてしまひました此の方、一宮清子樣とは昨年頃の誌上で伺ひました。お故郷はたしか京都あたり、京都と云へばすぐにやわ肌の美し女を聯想します。クッキりと色白なやさしい御顔に、烏羽玉のお髮は日本髷、屹度、御名の通り清麗な方と想像ます。その深奥なる學理はおん胸の底ふかく秘めて恰も忘れたるが如く悲しき時も心に泣きて外に笑顔し給ふの人、筆執手腕はお立派、さう〳〵四月號の新つれ〴〵草で仰有つた「よき友三つあり……」の項に適合な方と思つてよ。

華やかなる千代子樣と氣高き清子樣、江戸趣味と京都趣味、共によい對照では御座いませんか。

東西古今の文化のうしほ、一つにあつめし我が女學世界の頁を飾るべく大なる使命を擔ひて立ちます君たちよ、抱負は大なり、耀く前途は盛達、共に、ともに自重、益々御奮ひ遊ばせ。



書籍に囚はれた人

かげろふ

　私は長い〳〵旅の空を、もどかしい汽車の窓から眺め入りながら、いろ〳〵と考へるのでした。かうした何も知らない田舎娘の私を合せて、はなやかな美しい家庭をつくるとおつしやつた謙樣のやさしいお手紙を胸に繰り返して、一刻々々近づいて行く謙樣の上を思ふのでした、いつも下さるお手紙を通して、私は謙樣のお部屋を私の考へ得るだけの美しい空想で、胸の中にちやんと築き上げてゐます。そこには大きな本箱が、うつくしい金文字の背を並べた本を一ぱい鵜呑にしてゐる。その側に綺麗な机が据ゑられて、そこに謙樣が何やら西洋の御本を開けて心で讀んでいらつしやる。片手に挾んでいらつしやるエヂプトから、いゝ香を部屋一ぱいに放つて、紫の煙が謙樣の優しいお心を引き出すやうに、美しくすうつと立ち昇つてゐる。マリヤとダイヤナの顏が、壁の上柱の上から始終私に代つて謙樣の上に、やさしい眼を見張つてゐる。何だか『謙樣』つてお呼びでもしたら、『何だい』とか何とかおつしやつて、お顏を上げさうだわ。でも私は未だ汽車の窓に縋りついてさびしい、まだ花も葉も飾らない野の中を走つてゐた。しかし懷しい謙樣のお側に急ぐべく走つてゐるのだと思ふと、うれしいやうな恥しいやうな氣がして、ぼうつとなる。

　私たちは去年の暮、父母の膝元で『四海波』の聲を聞いた。謙樣はすぐお勤が忙しいとおつしやつて上京なさる。私は家の都合で後に殘る。そして私たちのはなればなれの悲の上に、めでたい年は改まつた。家

の方もあらかた用事が片付いたので、いよ〳〵東京では梅の花が咲くといふ二月になつて、雲の美しさはなけれど、梅が枝を慕ふ優しい春の小鳥のやうに雪深い谷間から、私は梅咲く京の春を慕うて飛んで行くところ。……家を出る時お父樣とお母樣とは、右と左からいろ〳〵注意して下さる。そして家の閾を一歩外に跨いだ時には、私の胸の躍る血汐の底には堅い決心の岩が沈んでゐた。とにかく私は『愛』の一字を土產にして行かう。女學校だけで他に何一つ身についた誇も持たないのだから、せめて『愛』の一字に身を打ちこめて放たれた鐵砲の彈丸の私は二度と歸るまい。それにしても思はれるのは行末、長く〳〵至らぬ私の上に幸多かれと朝夕に祈つて下さる父母、優しい謙樣のお心、私はこの二つの尊い難有いお情に生きて、とこしへにわが行末を今日の門出のうれし涙もて、紅に紫に色どりたい。私は『さよなら』『御機嫌よう』のやさしい言葉の數々を、寒い北國の空に聞き殘して、窓からすぐ見える父母の家、謙樣の家の屋根を眺めた眼にたまつた涙、それは清い少女といふ名の下に流した最後の涙であると共に、終生私を諫めたり慰めたりしてくれる人妻としての美しい涙だと思ひました。

日よ、月よ、汝がとこしへなる美しき光もて、父母の家と謙樣の家とを永久に照らせよ。そして汝があまれる暖かき光もて、謙樣とわが新なる家を包めかし……と私は窓に離れ行く故郷の野や山を見送つて、心にかう祈りました。

＊　＊　＊　＊

謙樣のお書齋の戸を開けた時、私の今までの想像はすつかり破壞されなければなりませんでした。マリヤの優しい眼はあれど、ダイヤナの美しい石膏像は柱に清けれど、それは熱心な讀書家だとは聞いてまゐりましたけれど、かうまでとは田舍者の私には思ひ及びませんでした。もうお部屋一ぱい、いろ〳〵な本がいろいろな模樣の美しさを重ねて、そこにも積まれ、こにも重ねられて、思ひ設けなかつた私は、そこらの

本を押し分け掻き分けてなつかしい謙様のお姿を見つけなければなりませんでした。

私は積み上げられた本の高さの一つ〳〵を見上げて、謙様の思想の高さを仰がずにはゐられませんでした。

「田舍者で何にもわかりません者で、まるで子供も同然でございますから、どうぞ何彼にお指圖を頂きたうございます。」と私は今までいろ〳〵手紙で生意氣なことを申し上げたのが、今更はづかしくつて、やう〳〵震へる口先にかう申し上げました。



「まあ、東京に修業に來たと思つて、勉強し給へ。奥様になつたんだつて、急にさう改る必要もないんだから、僕の所には別にむづかしい家風なんかないが、たゞ少し本を讀んで貰はにやならないと思ふがね、それだけだよ。何でも構はないから、こゝにある君の面白さうな本をどん〳〵讀むんだね。」

謙様はかうおつしやつて、金縁の眼鏡の奥から優し

い眼をお部屋中の本に移される。

「いつかの手紙に書いてあつたね、「私のマダムぶりは臺所に始つてお庭の掃除に終る」つて。」

「あら！　御免あそばして、あんなつまらない事ばかし申し上げまして。」

私は何だか犯した罪を問はれるやうな、さびしい氣がした。

「そんなにマダムぶらなくてもいゝから、勉强に來たと思つて、僕と一緒に本を讀まうや、ね。」

「どうぞお敎へなすつて、何にも存じませんでございますから。

「僕はかう思ふんだがね、今の女學校では着物を縫ふことは敎へても、人の心を縫ふことは敎へてゐないやうだと思ふが、女はこの二本の針をせひ持つてゐなくちやならない。殊に破れた人の心を縫ふ、やさしい糸と針とを持たなければなるまいと思ふ。着物なんかは人に賴んでも綻位は縫つて貰へるが、人間の心はさうはいかないからね。そこでその人の心を縫ふ糸と針とは、どこにあるかといふと、やつぱり人の心の中にある。人間の高尙なる思想の中に長い〳〵糸卷と、美しい針がある。それを紅に紫に染めなしたのが、即ち本なんだから、本を讀むと人の心の綻を縫ふ美しい針と糸とが得られるといふわけだ。そこで僕は第一に君にこの糸と針を用意して貰ふ爲に、本を讀むことを勸める。まあ僕んとこの家風といへば、ほかにむづかしい事はないこれ一つだから。」

私はこれを伺つて、成程としみ〴〵思ひました。人の心を縫ふ美しい絲と針！　心の綻を縫ふ！　何て美しい優しい詞だらう。私は生れて二十年、かつてこれほど私の心を躍らせた言葉を耳にしたことはない。讀書、讀書と私は心の中で囁きました。そして謙遜の私に强ひなさる家風は、この心の綻を縫ふ絲と針とを用意せよとの讀書なんですもの！　私はこれから謙遜のお側で、高く〳〵積み上げられた本を片端から取り崩して讀みませう。そして謙遜が高く天國まで積まれた本の中からこの尊い、美しい絲と針とを探しませ

う。天國にとゞく程高く積まれた本、ひよつとすると一冊々々積んだ本を上つて行つて、天國の優しい女神から、その糸と針とを授かるのではないでせうか。

私は家庭日記の第一頁にからう書きつけました。

一冊々々讀んで重ねた本を階子に、高く天國に上りつめて、やさしき女神の御手より、人の心を縫ふべき美しき糸と針とを得べし。



東京へ來てから三日目、暖かに晴れた日曜日の梅日和、今まで讀書していらしつた謙様が急に『おい、これから僕の三越につれて行つてやる。』とおつしやるので、支度もそこ〳〵にお供申し上げると、電車を降りて間もなく煉瓦造の大きな建物、そこへづか〳〵入つて

いらつしやる。

「こゝが僕の三越だよ。よく覺えてお置き。」つて笑つて二階へお上りになる。入口の上に大きく「丸善」の文字が見えた。道理で噂に聞いてゐた三越とは違ふ、變だと思つたが、なるほど謙様の三越とは丸善書店の事かと、私はその時初めて氣がつきました。月に必ず一度はいらつしやるんですつて。歸りに、

「序に私の三越も御案内いたしませうか」つて笑ひながら申し上げると、

「いや、お前の三越は御免だ。」とおつしやつてお笑ひなさる。

私のために特に買つて下すつたラ、モールとラ、フアム。私は三越へ行つて着物を買つて頂いて、虚榮をほこる衣を縫ふよりも、この二冊の中から尊い美しい人の心を縫ふ美しい糸と針とを引き出すのを樂に歸りました。家では時やが一人で淋しがつてゐませう。

それから二三日、梅日和の美しい日が私たちの幸福なる家庭日記の頁をゆかしく色づけました。ある晩、謙様のお書齋で紅茶を頂きながら、いろ／＼なお話を伺つた末、謙様は卷煙草に火をつけながら、又お話をお進めになりました。

「それからね、奥さんといふものは、さう簡單なものではないんだから、それを心がけて貰はなくちやならない。」

「年ばかり取りまして、ほんとに一向何にも存じませんでお恥かしうございます。」

「といつて、さうむづかしい事でもないがね、つまり御飯を炊いたり、掃き掃除だけぢやマダムの勤むべき仕事のオールとはいへないからね。もつと／＼マダムといふ名の下に潜んでゐる廣い意味があると思ふ。尤もこれは僕のマダムといふ名の解釋に過ぎないかも知れないけれど……」

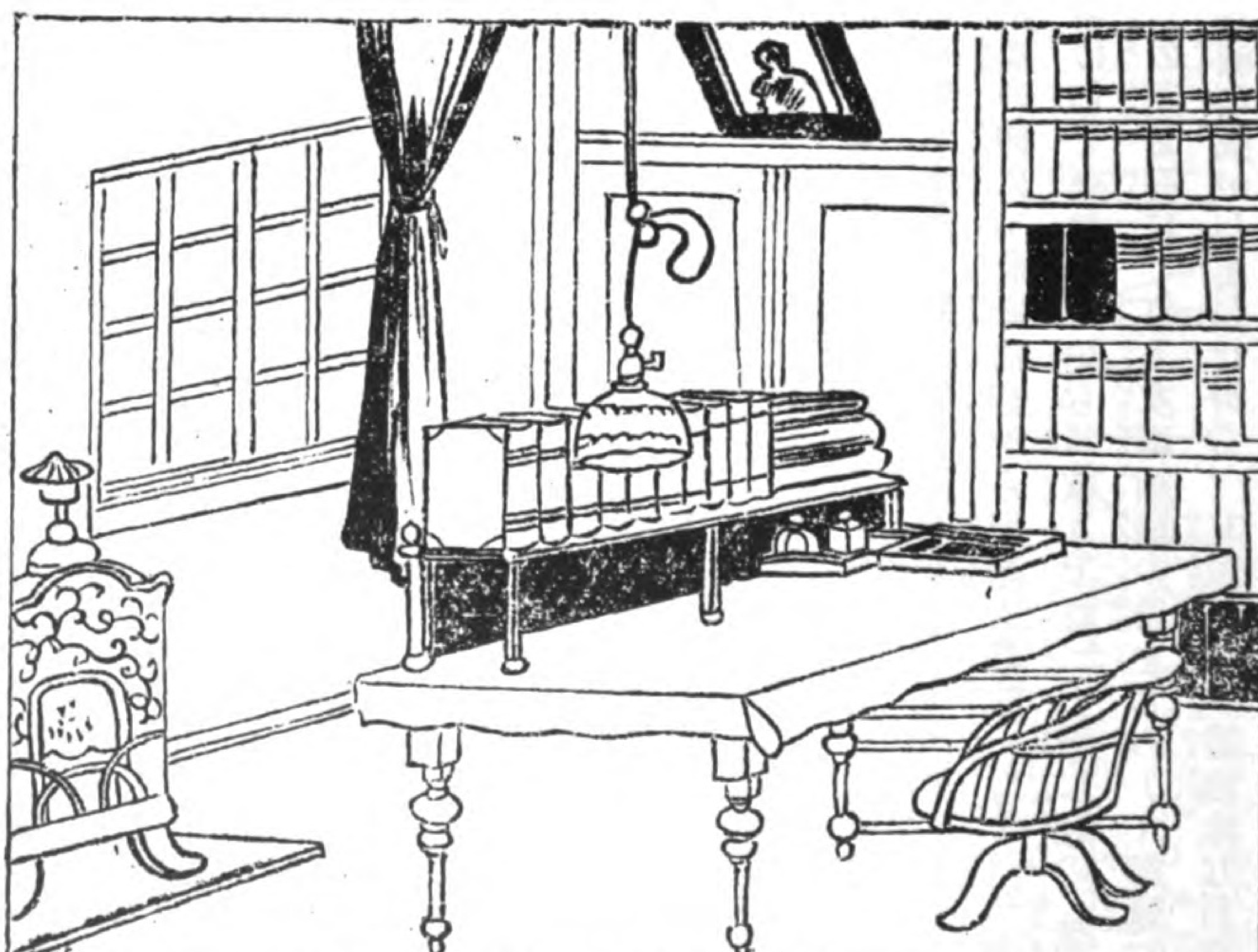
「どうぞおつしやつて頂きたうございます。伺つておきまして、十分氣をつけましてございますから。」

「つまり奥樣は奥樣に相違ないが、毎日々々朝から晩まで一本調子で奥樣ぶられては困るといふのだよ。時に應じて奥樣の使ひ分けが必要だと思ふ。世話女房、の態度、友だち、戀人の親しみ、時には親切な看護婦にもなつて貰ふ場合もあらうしね。とにかく變化が必要だよ。これも强ひて家風といへば僕の家風の一つに數へてもいゝ。」

奥樣の使ひわけですつて、謙樣も隨分おもしろいことをおつしやる、でも全く私に取つてはいゝ教訓、何だか田舍育の不束な私には、その使ひわけが出來さうもないけれど、優しい謙樣の愛の笞を頂戴して、どんなにでも私は出來るかぎり私のすべてを捧げてお仕へしませう。＝さま〴〵の家風　（甲の部）

旅人のいほる山へに焚火かと
　木隱れみえて咲つゝじかな　　蘆庵

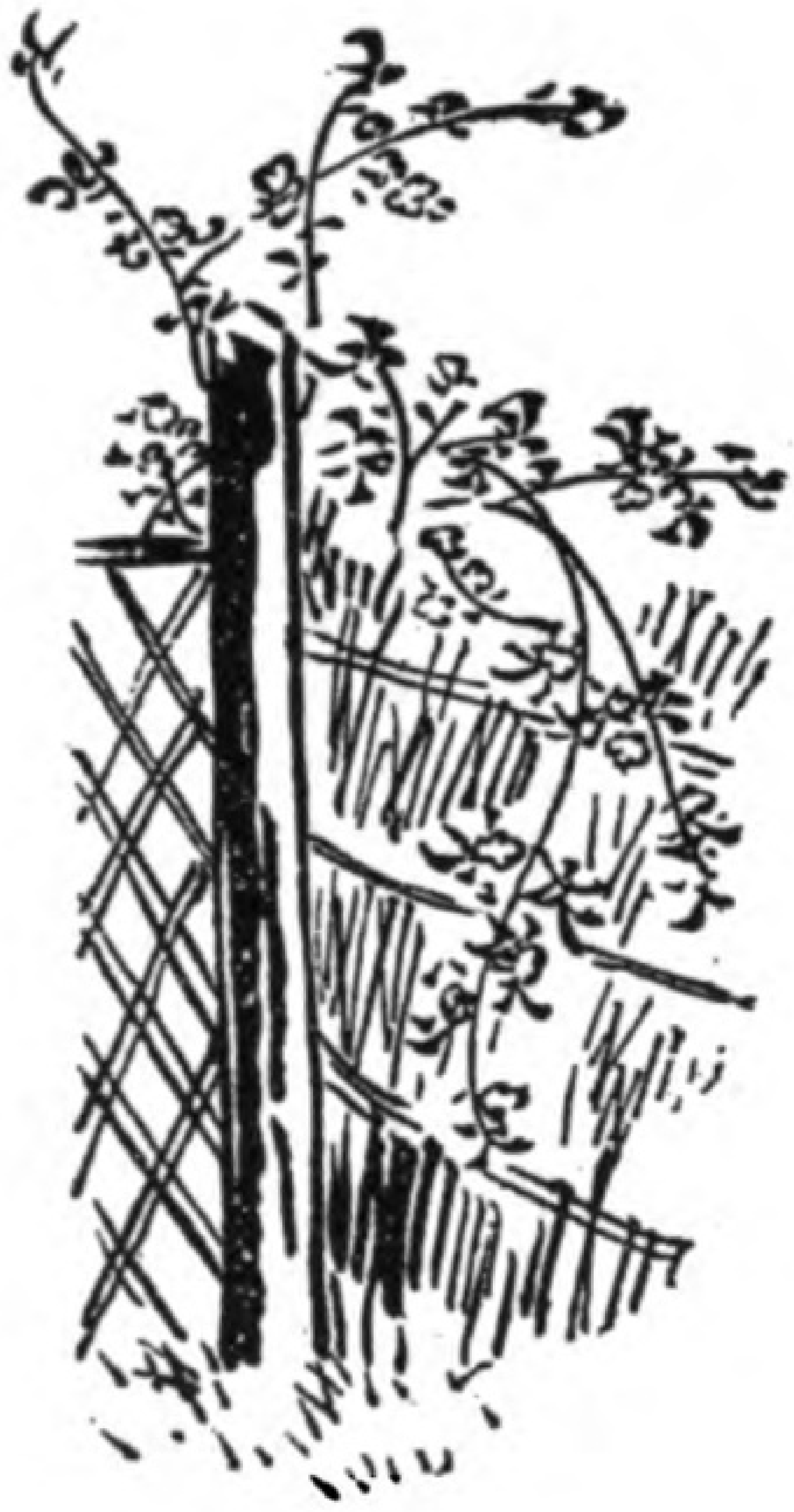
松陰をたくらしとてか岩つゝじ
　已れ打出て火をともすらん　　千濱



書齋

時勢に伴なう家風の變遷

淡雪



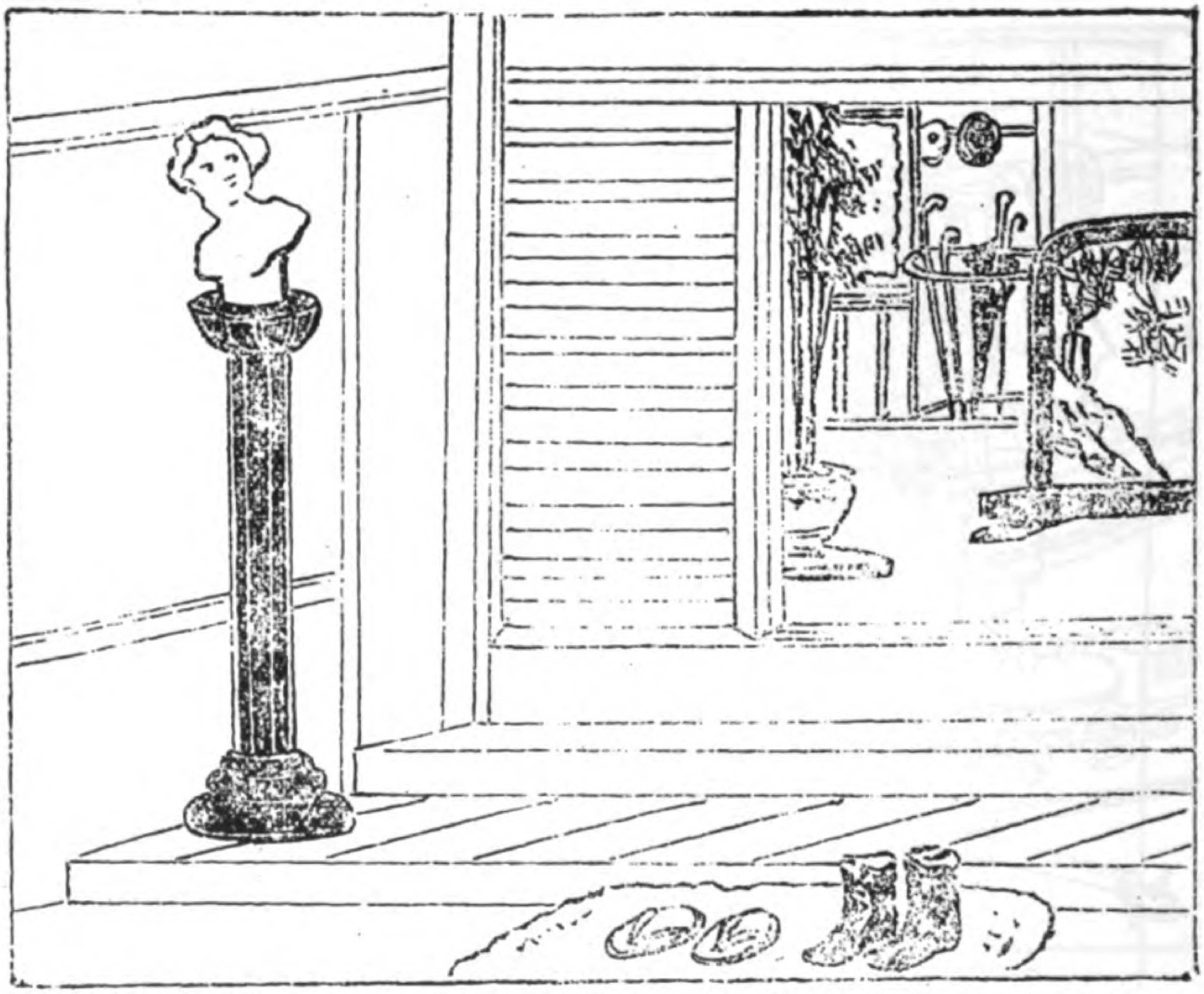
△保守的の家風

私が此家に嫁して參りましたのは今を去る十二年の昔、丁度十九歳の春でした。

當家は昔堅氣な六十に近いお姑樣がありまして家風などは八釜敷いとは聞て覺悟して參りましたが、實際却々複雜なものでした、で一から十までお姑樣のお指圖を受け、マア今から思ひますと丸きり盲從でしたのね、一例を申ますれば正月元日は家族一同禮裝‥‥夫は里方でもさうでしたけれども驚いたのは良人に社杯をお着けさせになりますの良人も是許りはお廢しにしてもらひ度いねと、苦笑なさりつゝも、元來が溫順な性質でしたから、强ひて背きもなさらないでお姑樣の存命中は每年用ゐてゐましたの其他五節句の祝ひは申迄もなく、やれ甲子だから黑豆の御飯を供へるの庚申だから宵待をするのだとか、お十夜だからお精進だとか其他舊曆で何んとか角とか迚も覺え切れない程年中の行事が複雜なのです、其都度親戚から同じ物の交換を仕合ひ、又は招いたり、招かれたり、家族的の親密をはかる事は誠に結構でしたが、社會的の御交際などゝいふ事は一切お好みでないのです。こんな保守的の家風ですから服裝等も隨分窮屈でしたの、或時もお姑樣の仰に「此家は昔から何事も地味に〳〵と極內場にして來たのだから其積りでね」と暗に私の紫矢絣の新お召に、紅入友禪縮緬の帶をじろ〳〵御覽になる樣な氣がしましたから、其翌日は一番地味な目立た

ない銘仙に紅なしメリンスの帶と替へましたの、そしたら大層おとなしい世帶持ち振りになつたと賞めて下さいましたの、いつもお姑樣は「一體今の若い者は昔と違ひ嫁入つても齒も染めないし、髮を束髮にでもして結んで居やうものなら娘も嫁も見境は付かぬ妾はあんなのは大嫌ひ、一旦人の妻となつたら餘り若々しい粧りは見苦しい却て人から見下される」と何角につけて此御主義故妾も萬事氣をつけて手柄も一年許りで紅はやめました。

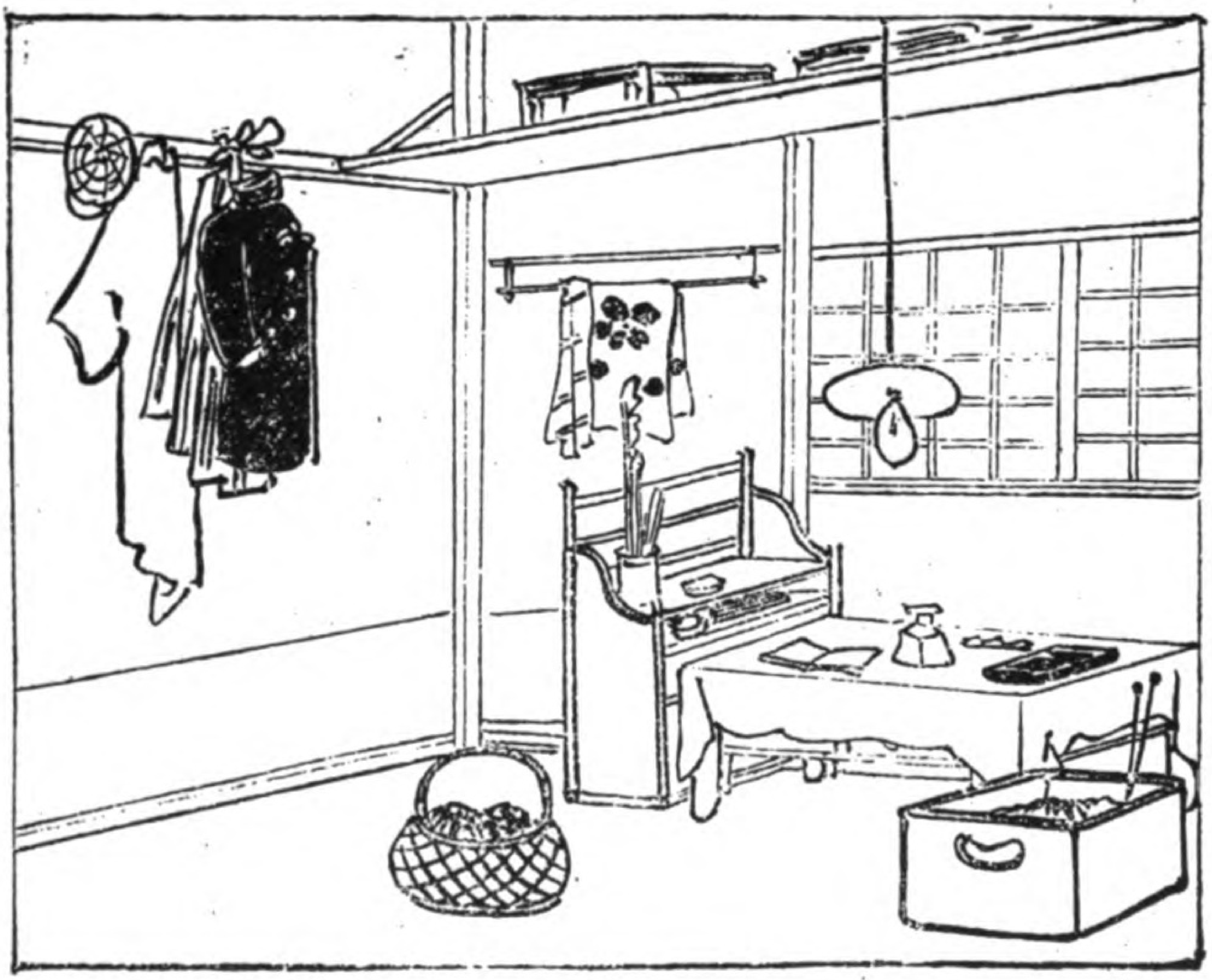
△時勢の變遷



玄關のかゝり

そんな風ですから夫婦手を攜へて散歩に出あるくとか交際上でお勉め歩きするといふ事は一切致しません自宅にて夫の身の廻りのお世話するのさへ何んとなく氣を兼ねる樣でしたが其内子供が生れましては猶更只々家事と子供の世話に年中かまけていつも取亂した裝で暮して居ました、するとお姑樣には却て御意に叶ふと見え、親戚の者やお寺詣り友達に「宅の嫁は今の若い者には稀らしい出來のよいもので……」などゝ過分のお言葉も頂戴して居ましたが良人の方はどうかと申

ますれば十五の年に某氏のお引立で東京に參り、某學校に通はせて頂き、卒業後は其人の經營してる會社に勤務して居るのですから、そんな消極主義に育つた我家の感化にいつしか薄らぎ今は所謂ハイカラ思想に多少魅せられて居る方ですから兎角私の態度にあき足らぬと見え「どこへ訪問したつてお前の樣に意氣地のないしみつたれた風をした奥さんはないよ○○の奥さんなど御覽子供三人も抱へて居ても主人公と相俟つて活動してゐるから……、實際あの細君の裏面の聲援といつたら却々機敏なものだ、だからいつも○○は都合よく向上して行く、何もあの細君程手腕を振へといつたつて出來もしまいが、せめて少しは外交に立つてもらはなくちや困る全體僕の內など何の爲めに下女が居るのか意味が解せん、おまへがそんなに終日臺所の隅にくすぶつて居る程なら下女は入らないぢやないか」など皮肉を申されますので實際たまには板挾みになつて人知れず涙をのむ事もございましたが、五年程前にお姑樣おかくれになりましたから是からはひたすら良人の

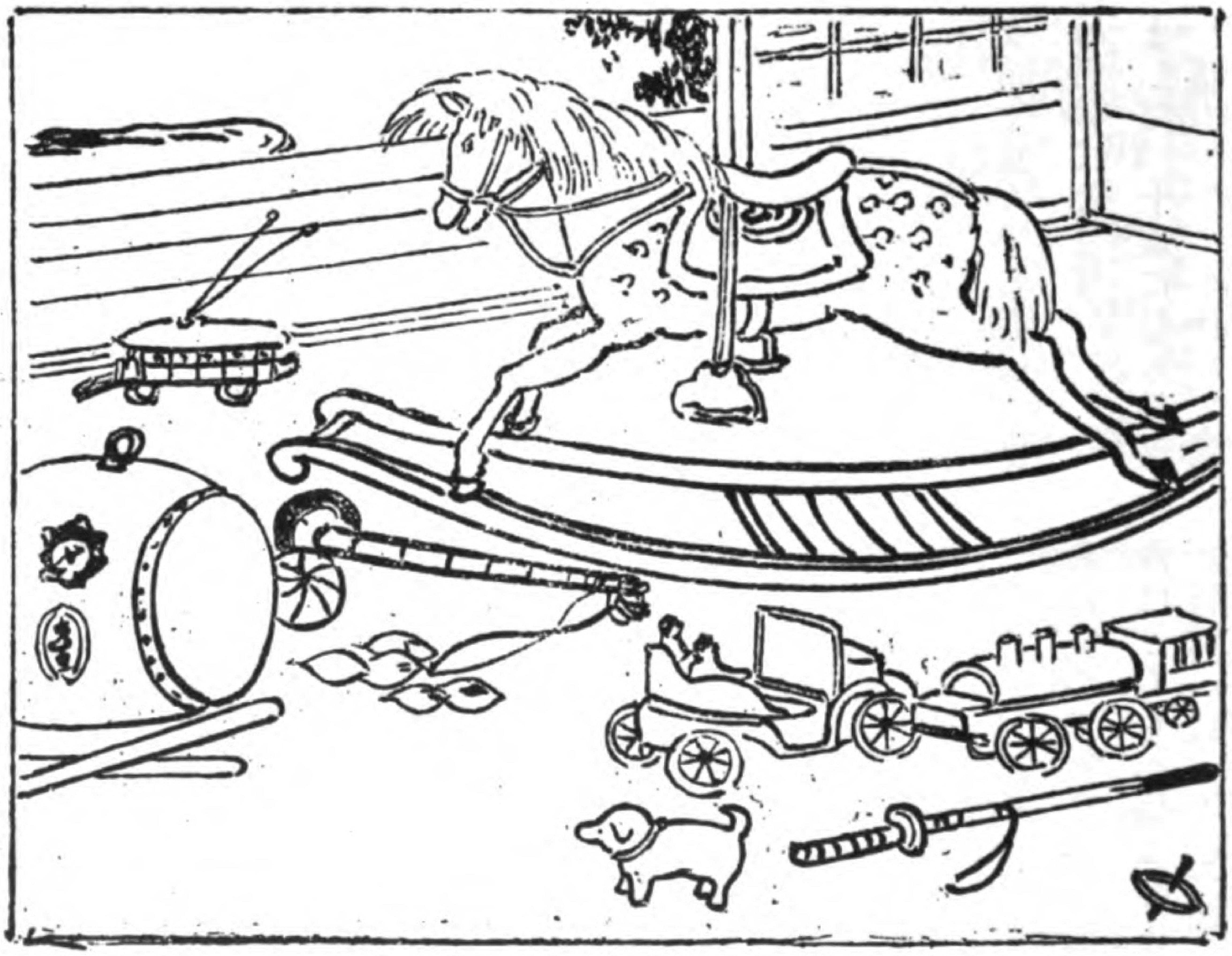


書生部屋

主意に滿足を與へる樣心懸けねばならずと漸次に家風の革新を致しました。

△家風の改革

まづ第一に晩餐を改良いたしました。お姑樣の主義は上下平等にしないと召遣ひの者が氣を惡くすると仰られ決して良人丈け珍味佳肴と迄行かずとも別段に調理する事をお許なかつたのですが併し昔の單純な局部の勤務とは違ひ、現代この大波瀾の渦中に終日身心を勞してお歸りになるお方を家内の者共と同一とは餘りにお氣の毒と始終同情してゐましたから時たまに良人



子供部屋

は外出先で晩餐を濟ませて歸りますのも決して恨みは致しませぬ、却てお姑樣の手前宴會といつもつくろふて置きましたが、是からはそんな事のない樣にと精精注意いたし‥‥お姑樣は牛肉をたべると身體が穢多臭くなるとお嫌ひ故餘り使ひませんでしたが、今は其樣な遠慮もなく和洋取交ぜ調理いたし可成晩餐を賑はせる樣にいたしますが、自然外出先の晩餐も度を減じて、今では眞の宴會の外は却て自宅で家内打寄りていたゞくのを樂しむ樣になりました。

第二には私が公然、新聞や雜誌を讀む時間を得ましたお姑樣は女だてらに雜誌を讀むなどは以ての外だとお嫌ひでしたが、新聞は夜分などお姑樣のお側で三面を讀んでさし上げて、其序に時勢の動靜を走り讀みしてゐた樣な有樣でしたが、此節は朝一通りの用事濟み次第其日の新聞に目をとほし、夜分は雜誌…育兒衞生の書物や、良人が見ます太陽や、時としては書生の取つてゐます實業の日本まであさりますの左樣いたしますと自然新智識を得まして、どれ丈け家政上の參考ともなり、良人の話相手にもなれるか知れません。

第三には年中行事を取捨致しました五節句を行ふは古來いわれもある事にて幾らか歷史的趣味も持つてゐますから依然いたしますが、其他は殆んど廢しまして其代り國祭日と陸海軍記念日と家族の誕生日と結婚記念とを行ひまして、親戚との交誼を重んずる點はお姑樣の御遺風を失なはぬ樣にと心懸けてゐます。

第四には家庭に音樂を入れました。十歲になる長女に私が手ざすみに琴など敎へ、猶オルガンを買つて與へましたら、毎晩食後は自分で唱歌を彈きますの、そういたしますと弟も妹も一緒になつて鳩ポッポだの桃太郎だのと大きな聲で唱ひますと、良人も私も遂釣込まれてドラ聲も黃色い聲も交はりて却々可笑しうございます自然家庭が陽氣になつて子供迄因循の風が去り快活になつて參りました。

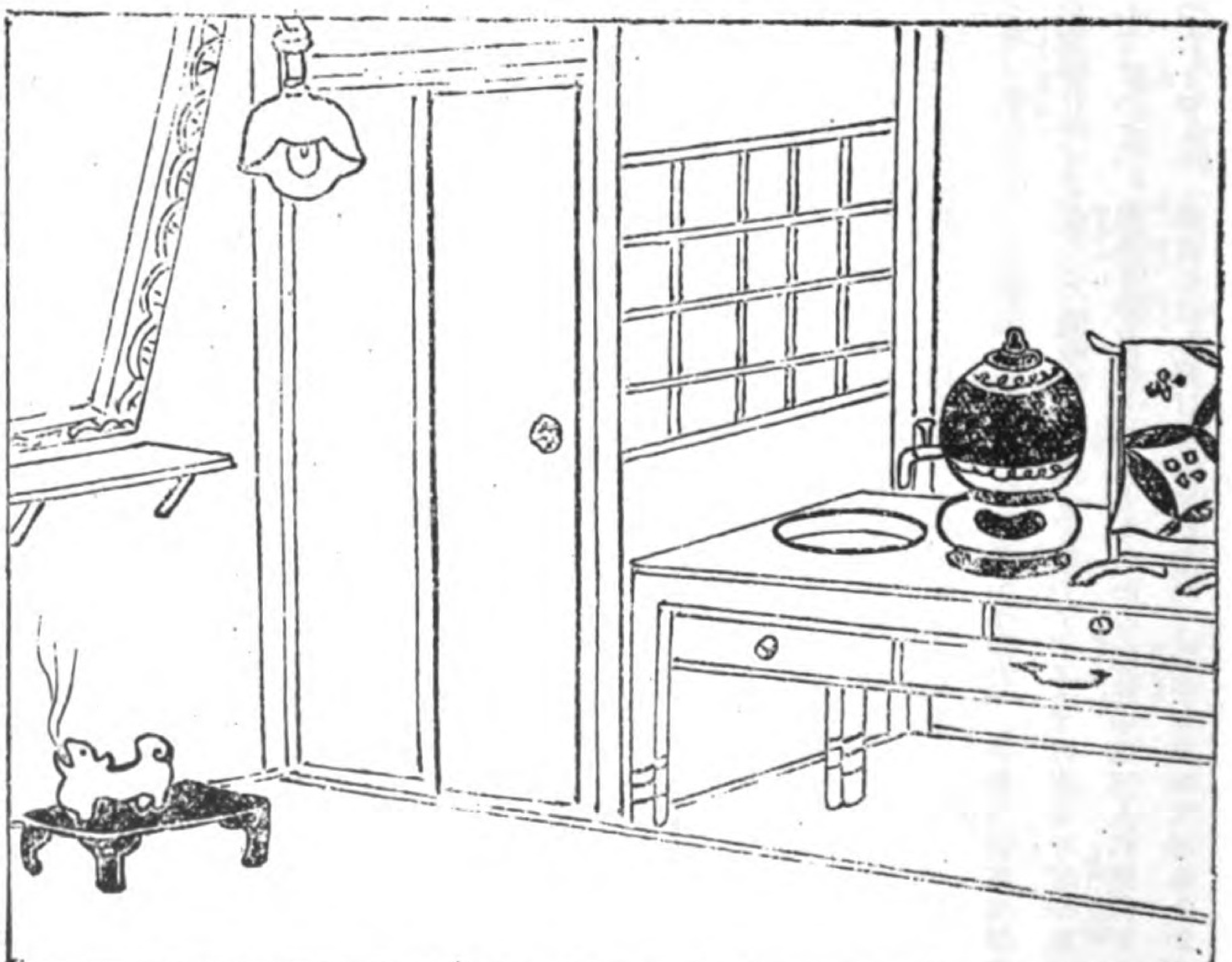
第五には召遣ひを優遇いたします。お姑樣は誠に慈悲深い方でしたけれども、兎角昔の奴隷思想が失せませんでしたから、今時多少人權の何物をわきまへてる下女はブリ〳〵して困る事もございましたが夜分は全然自由を與へ晝間とても爲すべき仕事さへ手落なく濟ませば跡は自身の仕事を致さうと書見し樣と干涉せぬ事に致しましたが却て家事も早く整頓して食物の區別など何等の影響もなく精勵いたす樣です。

第六には絕對的の引籠り主義でゐた私が、良人の指命に從つて知己を御訪問致す樣になりました。最初の内はどちらへ伺ふても何となく遠慮勝で却て失禮に當る事許り致し、入らつして頂けばお話下手で無愛想の

事いたしいつも良人から注意を受けてゐましたが段々馴れるに從つて餘り窮屈張らない樣になりました、先日も或上役の奧さんが「あなたは最初お目に懸つた頃は何んて圭角のあるお方だらうと思ひましたがさうでもなかつた」と仰しやつて笑ひました事です以上の樣に記し來りますと如何にも目の上の瘤を拂つて俄に頭を上げ改革などゝ生意氣だと思はれては困りますが決してさうではないのです是も時勢の要求なのです、つまりお姑樣のいらるゝ間は何事も冷靜に蜚ばず鳴かずの研究時代であつたのですが、其研究の結果を實行するに至つた迄なのですどこまでも御先祖の家風質素勤儉といふ事は私共の守本尊としていますから徒らに流行を追ひ豪奢を衒ふ御家風を窺ふと、末恐ろしとこそ思へ決して羨しいなどの念は毛頭起りません、是ら物堅きお姑樣の感化と心ひそかに悦んで居ります。

さま〴〵の家風　甲の部

雨そゝぐ草の下水くれそめて　氏綏
風たまつまの蛙なくなり



便所の設備

クラスの異彩



黃水仙

私の級で異彩を放つて居る三人の友達の事をお報らせいたしませう。

K子樣

此御方は級長ですの、大變溫和しい御姿はちつとも當世のハイカつた所が見えません。

裁縫の先生が御花にしてらつしやるの、世の道德家といはれるむづかしい先生は、かういふ御方を理想の女としてらつしやるんでせう。人望は可なりありましたから。S子樣が競爭に御負け遊ばしてから級長の職をお持ちなさいましたのですけど、私ほんとうにいやになつちまいますわ、何故つて此令孃至極冷淡で入らつしやるの、エどうして決して嫉妬心では御座いませんワ、私の樣な野心家は級中に、四分の一はあるはづです、アラ實際よ。しかし多勢には勝ち得ないでせうつてそりやもうよく〲承知して居りますから勝利がK子樣組へゆづりましたの、おとなしく、陰氣な御指揮の下にかしこまつて勉强してゐます。

S子樣の勢力があつた時、始めかけて居つた種々の事業は哀れはいせられて毎日平凡に暮して居ます。御自分も樂でせうよ。御勉强ばかりしてらつしやいます、御器用ですから。編物が御上手で時々敎へて下さるのは結構ですが、人が爭等した時には御職務をも忘れて高見の御見物とは恐れ入ります。だから組の統一がつかないんですわれ。

かういふ溫和しい生孃樣に最早エンゲージの君があるとは、何と驚くぢやありませんか、只今花の都に入らしつてよ。佛敎大學とは一寸振つてますネか、、、。

A子樣

只今は退校してらつしやいます、御失敗り遊ばしたの御自身から進んでゞすの、何つて級の恥になるんですもの却々申し上げられませんですよ、しかし親愛なる皆樣ですから何もかも打明かしませう、學校の名さへわからなければ別に差つかへません理由れ、此御方は不良學生の毒牙にでもおかゝりなさつたのなら未だしもですけどさうぢやないんですつて、美男子や氣取りの見るもいやな學生の二三人に關係があつたとやら、最近の噂を聞けば御宅が變つて養子が出來て居るとか。

ぞつといたします。そりや美しい方でした、お髪といひ、お顔立は元より、御姿だつて申分のない方。學科も一寸御出來でしたけど裁縫は全く駄目でした、音樂は十分好いでしたよ。ヴアイオリンさげて小さいシクルアンブレラさして　編上げの靴で靜々と歩みなさる姿は、海老茶袴にレッドのリボン、くつきりと色白のお顔に美しいくちびるをきゆつとしめて床しく、袂豐かに麗はしいS子樣と好一對の花ですねえ。

S子樣

私の大好きなS子樣

夢路式の御眼に三郎式の御姿、しつとりした優しい御方ですが　一度事起らば何處へでも出かけるといふ大丈夫の君。何故か私好きですの。

此方ほんとに御氣の毒なのよ、まあ聞いて頂戴。三年間缺かさず級長の役を務めてらつして何一つの御失敗もなく　それは〳〵御親切で皆敬服してました。學校歸りにはいつも御殘り下さつて雜誌の編輯。植物園の手入れ、室内の裝飾から下駄箱に迄氣をつけて他の組に負をとらぬ樣にしてらつしやいましたが、一朝不幸の風が舞込んで四分の三の人々に信用を失ひました。その原因が面白いの。

H先生つて未だ御年の若い男の體操の先生——

只今は御轉校遊ばしましたが、その御方のお花だといふので。皆がヤレストを唱へてさわぎたち　求愛の中だの、意中人だのつて申しました、見る目もお氣の毒でしたよちつともそんな事はないんですわ。

S子樣は元から餘に大學趣味を持つてなさいました　先生は無邪氣な可愛い御方で、よく師弟の道を心得てゐらつしやいますし　戀の何のとは決してありませんの、いつか『何故先生はもつとお年が召してらつしやらなかつたのでせう』つてしみ〳〵と仰有いましたワ。

S子樣さういふ事があつてから間もなく　教會へ行き始め遊ばしたんですよ、すると又いろんな事いつてはそれ〳〵のお花の先生へ惡く告げましたの。少々勢のある人が。何故つて私の級にはキリスト教攻撃者が非常に多いのですの。

先生方の中で只今S子樣を愛してらつしやる方は歷史と音樂と、英語地理、理科、數學の諸先生です。

これを見れば先生側ではあまり信用が落ちては居りませんけど　級長の職をとられなさつたのが何より　お口惜しからうと御察しいたして居ります。此れ迄　大變よかつた方が一ヶ所落度があるとひそんで居た嫉妬の炎が燃えたつたんですねえ。

國文の先生はS子樣に『教會なんて所はいけません、自然主義者の行く所ですよ』なんて仰有いましてよけれど作文の時には相變らずS子樣が一番ですのどうしても水際たつているんですから　それだけは誰も彼も惡くいへないんですわ。

卒業後の悲哀

紫都子

みさご鳥讃! 私は何度くりかへしましたらう? 私のみの悲哀とのみ…… 人にさへも告げなかつた私は――あゝ君様も……と私は泣きました白濵よする砂濵に かすむ對馬の山ながめては涙せられます……おんなつかしの君様! 若き日の小さき悲哀。 操の二代目とは幾度云はれましたらう花なき里にも 春は來ました又た時々刻々と逝きます美くしい十八の光は……あゝ! 時々に去るのです暗き浪の潮の香?。 オールの響! 時折洩れるこゑきいては 私、私ボートの主がなつかしうございますボートの主が……すぎし 二八の朧夜……君様よ――なに故なればかくまで御身の上に似通ひたるか 妾はく\たゞあの文を拜し參らせてたゞく\泣くのみでございます。 忘れんとした若き日の思ひ出! 私も今十八の少女ですそれに若き日! をつければなりませんわ今は若いて居ります十八の少女はげに若いて居ります 月おぼろの松浦の沖……白き砂に青き松 虹の松原を二里の松原と訛るほど長き濵に……曉栄の宵! 玄海つゞきの海け今宵たんとして うら寒き風の袂をなぶる夕べ? 漁火の燈火たへて 白帆の影さへみえませんでした鏡山がうすくかすんでお舞城に霧の盛り 西海岸をさまよひましたあゝあの宵! 私一生も二生も忘られません……小説的なんですわ 貴久子ちやんとK様と三人の散歩でしたもの離れも何んとも云おしませんわ K様は恰度何かの用で歸省なすつて私の宅を訪れ下さいました 貴いちやんは路で歩いつて引きかへしました後は兩人で濵を……あはれその宵、四月二十日の夕べ……二十日は近づきつゝある――もう申しますまいたゞ熱い涙を流すばかりです、 あゝ若き日よ若きタイムよ。

△

鐵拳禪師様は『若かれ! 若かれ! 若かれよ。 若くして咲く花の如く萌ゆるもなほ美果のごとく美しき光と潤とを有せざるべからず』 と痛切のお言葉ですわ内藤さんに憧憬した時さへすぎました。 空想な空想と知り夢を夢と知つた私はあまりの情なさに泣きました、『このまゝ現實の境にいるのはいやです』 とおつしやつたお千代様! やつぱり醒めますわ私は――ドリームタイムが餘りに早くゝ 餘りに短かゝつたのを恨みます、 十八で醒めるものでせうか、 私のみでせうか? 千代子様のやうに去年も十八今年も十八で暮らせたらようございますわれえ けどさう世は我々を優遇してくれませんわ、 洛陽城東桃李花飛び來り飛び去つて誰が家にか落つ、 洛陽の女兒顔色を惜む――私いつもよみます、 おゝ世の儚い夢のたはむれあゝ、。 あゝ限りなき青春の熱血迸らしたは昔のこと、 煩雜な世事を考へると前途はみな暗黒、 然しく\一日の疲勞を休むべく床に横はつた時――庭木立さへ 何の音もいたしませんああこの時塵俗な思は悉く消えてたゞ鮮やかなるは悔いよとせまる胸の跡のみ……あゝ弱き子よ何故に生れ來しか、 何故に生存するや。 私は

女（るの二）

文學博士　井上哲次郎君閲

學習院教授女子學習院學部　有馬祐政君
國學院大學講師　黑川眞道君共編

國民道德叢書

閲者並に編者は夙に日本特有の思想に就て研鑽し日本將來の道德に對し考慮し、斯學斯道の爲に盡瘁せられつゝあるは周れく人の知る所なり。今や時勢は此諸先生をして奮起せしめ多年蒐輯せられたる良書珍本を網羅して吾が日本國民至上の寶典たらしめられたり。之に依らば國家の基礎愈ゝ安泰なると共に國民の道念愈ゝ確固たるを得るや必せり。蓋し國民道德の培養は永久に必要なること勿論なれども、特に今日より緊切なるはなし。本書は其の要求に應じて餘りあるもの、眞に唯一無二の寶典といふべし。學校官衙を始め教育政治に從事する人、否、吾が忠誠なる全日本國民は其の子孫教養の爲に每家必ず一部を備へざるべからず。弊館此の精神を以て莊重典雅なる表裝を凝し弊館獨特の廉價を以て之を滿天下に薦む。請ふ陸續購讀の榮を賜はんことを。

全三冊　洋裝菊判上製頗美本　各冊紙數約五百頁　上卷……近刊

上卷目次

中卷目次

中村高等女學校長 戸野みちゑ女史
元華族女學校講師 近藤正一君 共著

實用 女子作文全書

和装菊判美本
紙數 四百五十餘頁

▲近刊▼

女子をして容易に文章を起稿し且つ作文に圓熟せしめん爲に編述せるものにして文の組立方、修辭着想等作文上の大法は勿論記事、紀行、日記、叙情、弔祭、祝辭、書簡等諸種の文章には一々文例を擧げて其作法を懇切に記述し又作文の資料として美辭、類句、用語等を四季若くは題目に分つて列記し更に進で家庭に必要なる公用文の認め方をも示し苟も女子に必要なる文章上のことは之を盡したれば女子座右の寶典として女學生は勿論家庭に於て一日も缺くべからざる必要の書籍なり

東京日本橋本町三丁目 **博文館** 振替口座東京二四〇

●華道の珍書「花包」は公開せられたり

芦田春壽先生著

花道の珍書 花包

最新刊

大本全壹冊 木版彩色刷 極上日本紙 大和綴美裝 實價壹圓 郵稅八錢

▲百花爛漫の好時節將に到らんとす

▲吾人は如何にして花を贈るべきか

▲花束？ 否 花輪？

然らず我國固有の『花包』あり!!!

●花包は折形嚴正にして水引の掛方また優美なり以て高雅なる進物となし得べし●本書は夥多の古式花包の彩色圖畫を載せまた折方用法を鄭寧懇切に詳記したり●本書は普通の賣本にあらず惟だ世間に忘却せられたるこの優美高雅なる花包を普及せんと欲するのみ、實に「花包」は淑女の手藝として適當なり、乞ふ壹冊を求めて後その如何を察せられ給へかし

發賣元 東京日本橋本町三丁目 博文館

東郷大將、片岡大將、上村大將題字
加藤中將、伊地知中將、小笠原大佐序文
海軍少佐 水野廣德君著

此一戰

菊判洋裝四百頁、コロタイプ版寫眞版石版等海戰關係圖二十六枚挿入其他本文挿畫數十圖 定價金壹圓 郵稅十錢

【附錄】公報、死傷者人名表等

▷版三ち忽ニ評好大◁

嗚呼日本海海戰！東郷大將が「皇國の興敗此一戰に在り」と令するや士氣猛然として振[illegible]はずして既に敵を壓せりと云ふ本書題して此一戰と云ふ亦內容を見ざるも既に肉躍血湧の感なくんばあらざるなり著者は當時水雷艇長として戰に參與し偉功を樹て後命を受け軍令部に於て海戰史の編纂に從事したるもの[illegible]官撰の戰紀は自ら簡明正確を主とするを以て專門家以外之れを咀嚼せずして止むべき[illegible]乃ち本[illegible]り[illegible]中戰前彼我の狀況より[illegible]壯烈の戰況を敘述する[illegible]も嚴にして詳其の彼我戰略の巧拙軍機の細[illegible]和魂「スラブ」魂を論ずる處筆[illegible]雄勁誰か[illegible]防に從事する人の此の才筆あるに驚かざらんや小笠原大佐本書に序して曰く「卷を開けば君が燃犀の見と一條の大筆とは相俟ちて日本海海戰の光景咄々眞に逼り一擒一縦[illegible]者をして作ち怒り作ち泣き作ち笑ひ趣味津々たるの間に於て不知不識忠烈の士氣を涵養せしむ」と近く六週海軍紀念日を迎へんとするに當り敢て之を江湖の諸彦に薦め且つ本書を以て此の振古未曾有の海戰を子孫に傳へられんことを望む

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

女(その五)



文藝倶樂部
第拾七卷……第七號
——（（五月一日發行））——
□菊判紙數三百廿頁□
□口繪彩色錦繪及寫眞版數十葉□
□正價廿五錢□
□郵稅二錢五厘□
春風駘蕩！世は漸く花笑ひ鳥唄ふ好季節となりぬ、本誌また盛裝して、眷愛の諸君子に見えざる可からず。我が文壇に於て忠實にして而かも巧妙なる飜譯家として知られたる 馬場孤蝶子 が初めて 創作 に筆を染め、世評に問はんとする長篇小說『漂』を卷頭に掲ぐ。人生の深源揭剔與も、靜止せざる心裡の不安を記述せる、文藻の豐麗、取材の奇拔此の篇一とたび出でゝ、世は必ずや子が創作の雄と仰ぐならむ。第二に紅葉門下の秀才 北島春石子 の小說『侮辱』を收む世路の艱難に泣く哀れなる乙女は、子の筆を得て初めて會心の笑みを洩らすなるべし。第三に 礫川魔王 氏の名を以て文壇某大家の喜劇『神經質』を載す。讀みて解頤せざるものなし。倘夫本誌が特色の一たる 新講談 は、斯界の豪傑 龍齋貞水子 其の得意の讀み物『出世の茶碗』を演す。神出鬼沒の妙、讀者は卷を掩ふに遑なからむ。活社會、長廣舌、演藝界 其他の諸欄他の企及し能はざる趣味と資益とに充溢す。例の賣切ぬ內不相變の愛看を賜へとこそ。
東京日本橋本町三丁目
博文館
振替口座東京二四〇番

肺病患者に警告す

醫科大學藥學專攻
藥學得業士 金澤巖

肺病は難治の疾病にして病理診斷等の幼稚なる時代に於ては殆ど不治の病と稱せられたり此習慣久しくして今日尚必死と信ずる人多く教育ある醫師と雖も患者が肺病の診斷を以て死の宣告となし失望悲嘆するを恐れ最末期に及び治療の目的なきに至り始めて實を告ぐる事多し故に輕症時代に患者は其覺悟に充分攝生服藥せず又家族は平素消毒豫防せず爲めに一家傳染滅亡する事多し是實に大なる迷信にして此考への爲めに生ずる人生の不幸は極めて多大なりとす不肖往年肺病に罹り一時は不治と決心したるも多數の成書を渉獵し大に悟る所あり現今醫學上の方式を原則として自ら實驗に實驗を重ね攝生療養に力を盡し又藥化學上の原理を應用し一新藥を發明し終に自個の病軀を全治し倍舊の健康を得るに至れりその藥物を**キニトール**と號し發行せるに既に幾千通の全治輕快の報告實證を受領せり爾來十箇年間に於る學界の進歩と實地の經驗を鑑み數次の改良を經て『**第三キニトール**』を發行せり此新藥は少くとも現代に於ける理想的肺病治療藥にして消化器を害せず食氣を進め全身の營養を增加し精神を爽快にし熱を去り痰を切り咳を鎭め肺病の各症狀を寛快し病原菌を擊退し漸次濃量を增加し全治に至らしむるもの也同病患者にして一度使用せらるゝ時は自覺するを得べし尙委細は東京市下谷區上根岸町金澤巖宛御申込ある時は報告と同時に詳細の養生書一冊を進呈すべし（文句の盗用嚴禁）

女(ろの八)

どこからともなく響くやうな氣がします——積極的に煩雜な世事を召使として働かせたら——考へました。願いマスターにせよと云ふ叫びが起つて來ます。父母には孝行をし兄妹仲よく、朋友にはよく交り世人には誠をもつて交る、みな煩雜である。然しこれを愉快な心をもつてすればいろ〳〵面白いことが出來るのだらう。なんて強い考へがおこる又消えるかくして毎夜〳〵激烈な戰をして居る。

△

學校で居る時は流石に淚が流れました。學生時代とはなれるのが一番辛らうございました。十日ばかりは送別會、茶話會、校友會、謝恩會など殆んど毎日つゞけでした校長先生から『誠を以つて働け』とのお訓を身にしめて積極的に守りませう無氣壓なんとニツクネーム奉つた先生でもなつかしくて淸い美しい淚は到る所にみたされました。やつと終つて家に居りますと、ある歡樂!希望をとられたやうな氣がして、五六日は有耶無耶でした。この頃のポカ〳〵暖い時などには、峨眉山邊に遊ぶ人も多うございます。曉に絕影島から龍頭山かけて、眞白な烟がちぎれ〳〵に飛んで紅い光が一直線にさして居る、西山に三日の月が微かの光をなげた所は。

ひんがしの野に陽炎のたつみえて
かへりみすれば月かたむきぬ

を思ひ出してうれしかつた。春は曉にこしたものはないでせうネエ。

夕方妹つれて棧橋に行きました、山本さん送りに……『すぐ出ますから一寸いれて下さいませんか』『お斷りしてあるんですけど……ぢあ直ぐ出て下さい』文樣と操樣と船の上甲板に登りました、そこに居たボーイが『お見送りの方はお斷いたします』下のボーイが『その方は一寸だから』『イヨー特別だな』つて大笑ひした、『御機嫌よう』『お體ご大切に』『御手紙下さいな』つてかたい握手でわかれた、稅關とステーションのアークが海にうつつて安平丸ゆきの小蒸汽に青と赤との火が円だつて美しい月は黑い波はたゞ燈のさすだけぴかついて居る　明日は杉山さん……毎日送ることばかり私いつ送られやう!?

△

……あはれ曉の星の光で心なき
我がメリーの昔の今更に偲ばるゝ哉
嗚呼メリーよ世を去りし可憐の者よ
今はいづくの空に在するぞ
汝の戀人がかくもやつれし姿ないかにみらむや
其の戀人の胸を裂きける獄の聲を如何にきくらむや

彼はアイル河のほとり、綠深き夏の杜影に、命を限りの永き別とも知らずして、行末かけてつきぬ名殘を惜しみぬ……これは私何かで見ました、たゞノートに書いて諳記してしまひましたが……お離室に机に頰杖ついて考へると淚が出ます!何人の詩とも知りませんたゞ疲れし戀人が泣き叢に注ぐ美しき淚……よ、あゝ悲き兩人の思ひ……アイ

かぶとの意匠



ル河の濃き綠の蔭に――夏の日盛り避けて、聖き、聖き愛の泉の二つの水を流した――あゝ若葉しげる頃となつた―― 高山先生は晩春の色を働き疲りにおたとへ遊ばした―― あらゆる初夏の花は燃ゆるやうな紅の瓣をひらく。人の心も若がへる時よ――。

女々しい思ひ出に泣くべき時か――あゝ世は刻々と更けて行く 詩人の泣く秋がやがて來る―― 濁情を洗ふべきオータムは來る――今年三月すぎた九月すぐれば十八の年は逝く――思ひのまゝに送らう 涸れた胸の血も湧く初夏は來る――げに來るよ。

なつかしの初夏！つゝじい下に玉がれむつて居る彼岸櫻は若葉にかはつた。



雜記帳

與謝野晶子

×

尋常小學三年で用ゐる讀本、修身書、習字帖などを長男の爲に買つて、兩親で例の通目を通してみました相變らず自分の子の腦力に對して餘りに簡易だと直ぐに氣が附く。併し之を基礎にして其上に先生の御話を附け足して下さるのだと想へば、讀本に書いてある事は筋書の樣なものだから簡單でもよい。其れから又わたしは小學の敎育をさまで重く視ては居ない。わたしの家庭で受ける自然の感化の方が非常に大切だと考へて居る。何もかも小學の先生に責任を持つて頂く樣な事では先生に濟まない、我子にも濟まない、兩親自身の心にも濟まない。其れで家庭で施すべき敎育の一部を小學の先生に御任せしてある氣でわたしは居る。自然家庭で行ふ平生の敎育の方が小學の敎育の程度より高くなつて居るのも已むを得ない。

但だ小學の先生の敎へて下さる事は直接的說明的で家庭の敎育が間接的暗示的であるのと異つて居る。兒供は變化と新異とを好く。家庭敎育よりも程度は低いにせよ、先生の敎へて下さる事が一段凹んで規律正しく新らしい渦を卷いて居るのが兒供心に何れ丈刺戟になるか知れない。其れに先生の威嚴ある敎授は兩親の威嚴と大分に趣が異ふ、其れも兒供心に變化があつて宜しからう。

鷗外先生のお孃さんはピヤノを習つて入らつしやる京都の上田博士のお孃さんも佛蘭西の尼さんに就て語學とピヤノとを習つて入らつしやる。斯ふ云ふ特別の

教育を施す爲には、今の小學教育が簡易で兒供の腦力に餘裕の多いのが却て好都合である。

×

小學の教科書を讀んで文部大臣の注意を促したい事は、漢字の少な過ぎる事、句讀點が亂雜して居て科學的の統一の無い事、及び假名遣の誤つて居る事です。假名遣に就て私は斯う云ふ考を有つて居ります。在來の習慣を無視して發音順に書くのなら一切發音順に改めたい。又在來の假名遣を守るのなら嚴に語原と言語の沿革とに考へて一切正確に守りたい。私は曖昧な態度を好かないのです。

小學讀本を見ると假名遣を正確に守る方針の樣ですけれど、隨分手落があつて假名遣のまちがひが目に附きます。「ほんとう」と書くべきが「ほんたう」となつて居る。「本當」などと書く當字に惑はされたのでせうが、「ほとほと」(殆)の「ほと」と同じ語が音便で「ほんとう」と變化したので、も一つ語原を正せば「ホツマ」(秀眞)の「ホツ」から出たのです。「ホツマ」は一方に「ホンマ」(眞實)とも推移して居ます。

又「せわしい」(忙)とか「せわをする」とか書いてあるのも不詮索の非難を免れません。之も「世話」と云ふ當字に泥んだので、「狹」の意から出て居る事が解れば「セハシイ」、「セハ」と書くべき事が解りませう。

「スマフ」(相撲)、「ムカフ」(向側)なども「ウ」音便に書くべきではありませんか。

「ハイル」(這入)と數個所に誤つて居るのも目に立ちます。讀本ばかりで無く文學雜誌までが誤つて居ります。私なども何か認めた場合に幾等「はひる」と假名を振つて置いても雜誌記者の校正は屹度「はいる」と直して仕舞ひます。「這ひ入る」の「イ」が省略せられたので、此場合「ヒ」が省略せられる法は國語の規則に無いのです。

兒供に對して南北朝問題の如き込入つた智識を授けるのは未だ早い。さう云ふ大問題は何うでも宜しからうと思ひますが、假名遣などは是非小學で教へ込むべきものなのですから、斯う云ふ缺點の無い樣にと祈つて居ります。

(序に此雜記帳にも隨分假名遣其他の誤植が多い。初の中は氣になりましたが、發行を急ぐ出版物には已むを得ない事かと今では諦めて居ました。其れにしても前回に「胎を裂く」が「股を裂く」になつて居たのは泣きたい程興醒めました。)

×

修身讀本の中に古人の例が澤山出て來るのはお寺の過去帳を見る氣がして餘りに親みが無い。然う懸け離

れた古い生活の人の事蹟ばかりでなく、之を讀む兒供や其兒供の親達と時代を同じくして居る人の中から秀でた人達の事例を撰擇した方が、活々とした刺戟と眞實の感銘とを與へて宜しいでせう。古い人の事蹟になる程虚僞の分子が多く、成長した後の智識と聯絡の附かない弊がある。虚僞の無いまでも餘程今日の生活の參考とするには迂濶の嫌がある。

忠君の例に何時までも清麿や正成を引くのは時代に適切で無い。私の長男が新しく尋常三年で習ふ本には



かたり来る若葉の風の便にも初音聞せよ山ほとゝぎす　千浪

清麿の條に宇佐八幡の神のお告げと云ふ事が書いてありますが、學校の先生は此「神のお告げ」を何う御教へになるでせうか。安井哲子女史の樣に最上善と云ふ樣なものを信じる事の出來る教育者が澤山お有りになるとしても、斯う云ふ奇蹟の説明は一つの苦痛でせう私などもお伽噺の中の神樣ならば明快に説明が附きますけれど、此清麿の場合の神樣には口を噤む外ありません。

兒供に虚僞を教へず、父兄も教師も眞實と信じたものを教へるので無くては教

育も無駄でせう。其れには古代の例を引くよりも、現代の伊藤博文とか、大隈重信とか、澁澤榮一とか、森林太郎とか云ふ、新しくして確實な人々の事蹟を例に引く方が、困難が無くて却つて餘程有効だと思ふのです。私は湊川で討死した、正成の忠誠を疑ひませんけれど、現代の忠誠と言ふ意義は高時や尊氏を敵として戰爭した時代とは餘程擴大されて居る。憲法政治の行はれる聖代には國內に高時や尊氏の樣な敵は居ない。一朝外國と戰ふ場合が生じても戰爭は軍人の責任です一般の國民が殊に女子までが皆正成になつて戰陣に立つ必要は無い。勿論平時にあつては正成の事蹟と心持とを襲ふ必要は少しも無い。今日の忠誠は 今上陛下の思召から出た維新五箇條の御誓文、帝國憲法、敎育勅語等の御趣旨に則り、各人の本業と義務とを勵み、國の安寧進歩と個人の權利自由とを伸張さする事を意味するのですから、斯う云ふ現代の忠誠の適例は矢張現代に求める外は無いと思ひます。

私は淸麿、道眞、正成などよりも故伊藤公爵などの方が現代的の忠臣として文明人として幾等偉大であるか知れないと考へて居ます。併し文部省の敎育方針は然うで無いらしく、修身書をお伽噺と歷史との合の子の樣にして敎へて居る。小學では其れでも可い。自分は家庭で自分の見供を敎へる場合に、以前から成るべく現代の人を例に引く樣にして居る。文部省に反對するのでなく、文部省の缺けた所を補ふ積なのです。

×

日本ほど官營の多い國は無いと或人が話されましたが、官營にも適不適があつて、敎科書などは自由編纂が良い。出來るなら地方々々で適當した敎科書を編纂した方が好いでせう。學位の授與なども學士會院に一任して文部大臣が御關係になりません方が正しいでせう。

地方を旅行して來た人の話に、平田內相が熱心に鼓吹せられた結果、各郡又は各町に靑年會と云ふ物の出來たまでは可いが、出席して見ると新智識に遲れた郡

長、町長、歸休將校、警察署長、判檢事、どれを見ても怖い人達が苦い顏をして上座に控へて居る。戲談一つ云ふ者は無い。其れでよく／＼怖い顏の老人中老人達に利害關係のある青年で無い以上、三回四回と續いて出席する者は無くなる。而して之を御用青年會と尊稱して居ると聞きました。是なども官營の失敗でせう。

×

中學や高等女學校を卒業する年頃から以上の青年男女の思想行動には、父兄、教師、文部省の官吏などが直接に干渉をしない方がよい。窮屈な溝や堤防を造るより唯遠卷に氾濫を防ぐ手段を取るのが上策である。



今日の若い人々は其肉體の感覺からして老人とは異つて居る。其微細鋭敏な感覺が味噌と澤庵と論語とで育つた老人達に解る筈が無い。駕籠位なら老人にも拵らへられるでせうが、飛行機の發明となつては最う青年の腦力で無くては出來ません。

老人達には南朝正統論を立てねば忠君の至誠が亡びる樣な事を云ひますけれど、今の青年は然う云ふ歷史

上の紛糾した問題は一切專門史家に任せて風馬牛です少しも然う云ふ問題に就ては騷ぎません。もつと高い大きな所に見識を据ゑて、南北朝の古い問題は何うあらうとも、神武天皇の立派な御血統を以て君臨遊ばし前代に、無い慈仁正大な憲法政治を行はせられる今上陛下に對し忠誠を致す精神は、老人達に優るとも決して劣る所は無いのです。

老人達は既得の地位と固陋な頭腦とで青年を支配しやうとせられますけれど、老人達に時代に適應した忠誠の念の甚だ乏しい事は一般の青年が看破して居ます老人達は青年の模範となるべく新しい何物を有つて居ますか、卑近な例で云つても、若い女子には小笠原流の禮式などを習へと强制して置きながら、老人達の最も晴の公會である帝國議會に於る大臣達議員達の言行は何と云ふ不作法でせう。又全國の醜業婦に最も多くの金額を支拂ふ者は老人中老人ではありませんか。國内の罪惡と過失の九分までは青年の與り知らない所です。

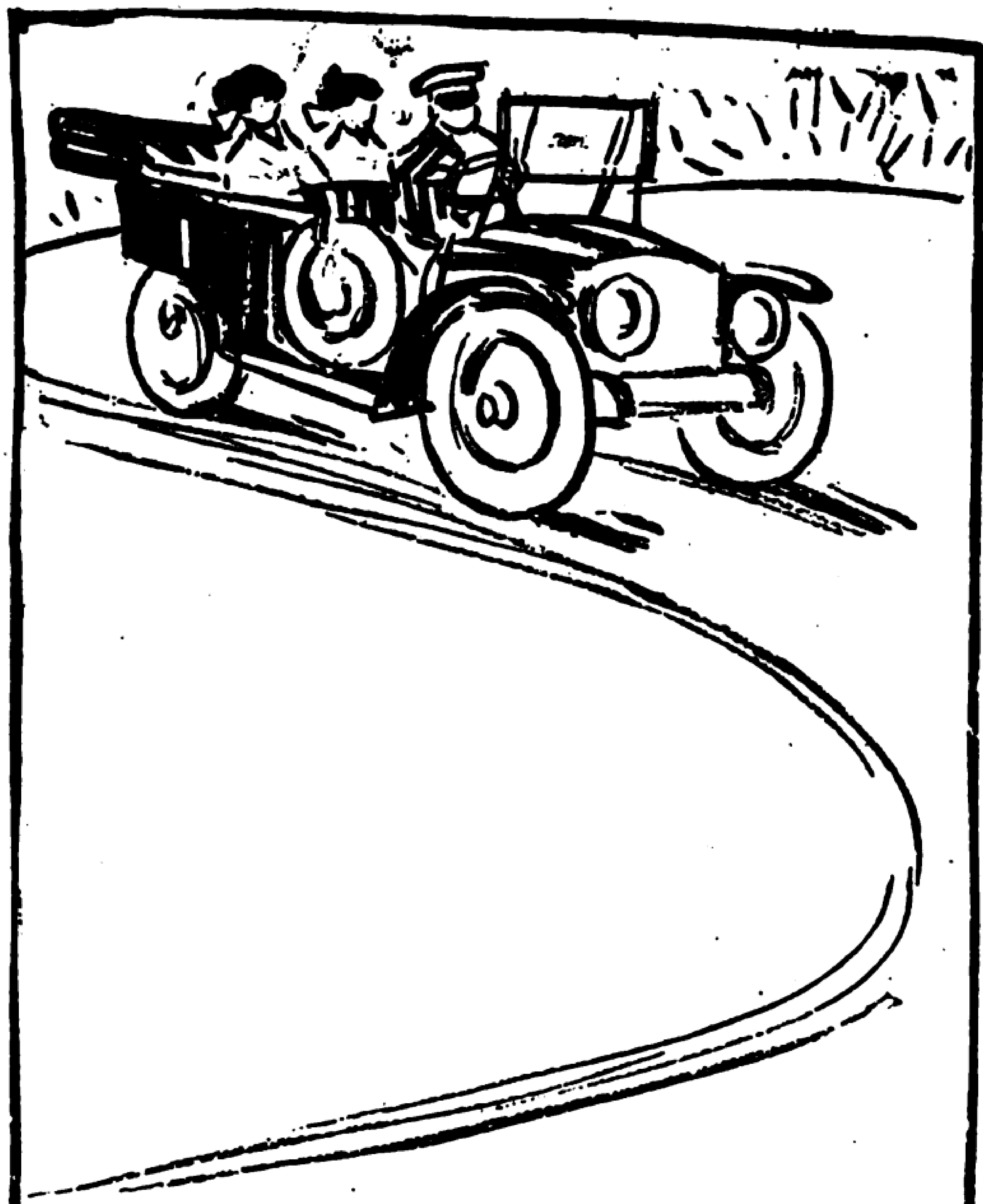
而して老人達から何う云ふ新しい學界の發明が示されましたか。何う云ふ新思想、新藝術が興されましたか。戰爭で死ぬのは老人で無い。坑夫にせよ工女にせよ有らゆる身を剝む勞働は凡て青年が負擔して居ます道德上、學問上、技術上、何れから見ても老人達が忠誠勤勉の實を缺いて居るのは明白です。よしや三四十年前には忠誠勤勉の人であつたにしても、其れが今日何の役に立ちませう。惰力で新しい人を支配する時代は過ぎ去つた。最早老人達が威嚇を以て臨まれる時でありません。俊秀な青年男女の言說と設計とに聞いて、青年の手足となつて働くか、さなくば退いて自家の思想を修飾し言行を改悛して老後の善を作し、竊に遠くから青年の模範となる事に勉强して頂きたいと思ひます。青年會などを奬勵する勞力で各地に老人會を起し、老人自身の德と新智識とを修められん事を望みます。若し老人達が其樣に奮起せられる事が出來たら老人の墮落に愛想をつかして居た青年は何んなに驚き喜んで老人を尊敬し、其れに感激して何んなに踊躍し

て相共に日本の文明を完成しやうと努力致すか知れません。

併しそんな事は空想です、堕落した老人が政治、教育、學問、實業、あらゆる社會を壟斷して居る間は、青年は自己の心の儘に進路を拓いて勢ひ、老人と遠ざからねば成りません。

×

古雜誌を屑屋に拂はうと思つて調べる序に、一昨年あたり迄の婦人雜誌をあれや是や拾ひ讀をすると、婦人に關する議論の



調子が其頃と今日と大變な相違である事に氣がつく。殊に女子教育家の知名な人が丸で反對な議論をして居られるのは正しく進歩に相違ありませんが、又教育家の意見に節操が無く、常に時代の思潮の推移に右顧左眄して進むものである事が解つて厭な氣持が致しました。良妻賢母としてよりも先づ「人として娘として」の教育を施せと云ふ感想を最初に述べたのは私ですが、其れが今日では普通の議論となり。先年 私 の議論の標

的となつた敎育家までが其賢母良妻主義を捨てゝ私と同樣な議論をせられる樣になつた事は兎に角喜ぶべき現象だと存じます。

其れにしても文部大臣などの意見が輿論に背いて未だ高等下女主義を守つて居られるのが不思議です。先日加藤駐英大使は倫敦の公會で英國外務次官の乾杯辭に答へて「今や日本に於ても從來の男女關係を全然改鑄するの要あり、而して婦人が政治上の權利を要求するに至るまでは猶年月を要すべしと雖、而も彼等に對し多大の權力を與へらるべき日は遠からず到來すべし。」と言明せられたと云ふ事ですが、政府の言動が外と內とで矛盾して居るのは氣持の好くない事です。

×

帝國劇場が出來上りましたのは喜ばしい。勿論不完全な所も少く無いでせうが、其れは何うとも漸次に改善が出來ませう。兎に角あゝ云ふ費用の澤山かゝる建築は老人中老人の方々の奮發があつて初めて出來るのです。劇場が出來て仕舞へば後の事は乾度老人達が、持て餘します。其時になつて若い者が自然實權を握る樣になりませう。小山內さん、木下杢太郎さん、高村光太郎さん、あゝ云ふ若い方の指圖を仰がねばならぬ時季が今に參りませう。

文藝院も出來ると申しますが、帝國劇場と同じ意味で是も老人達の好い御奮發だと稱讃せねばなりません。文部省の老人達にばかり任さずに、大阪の岩本氏の樣な篤志な人が出て百萬圓も寄附せられると宜しいでせう。

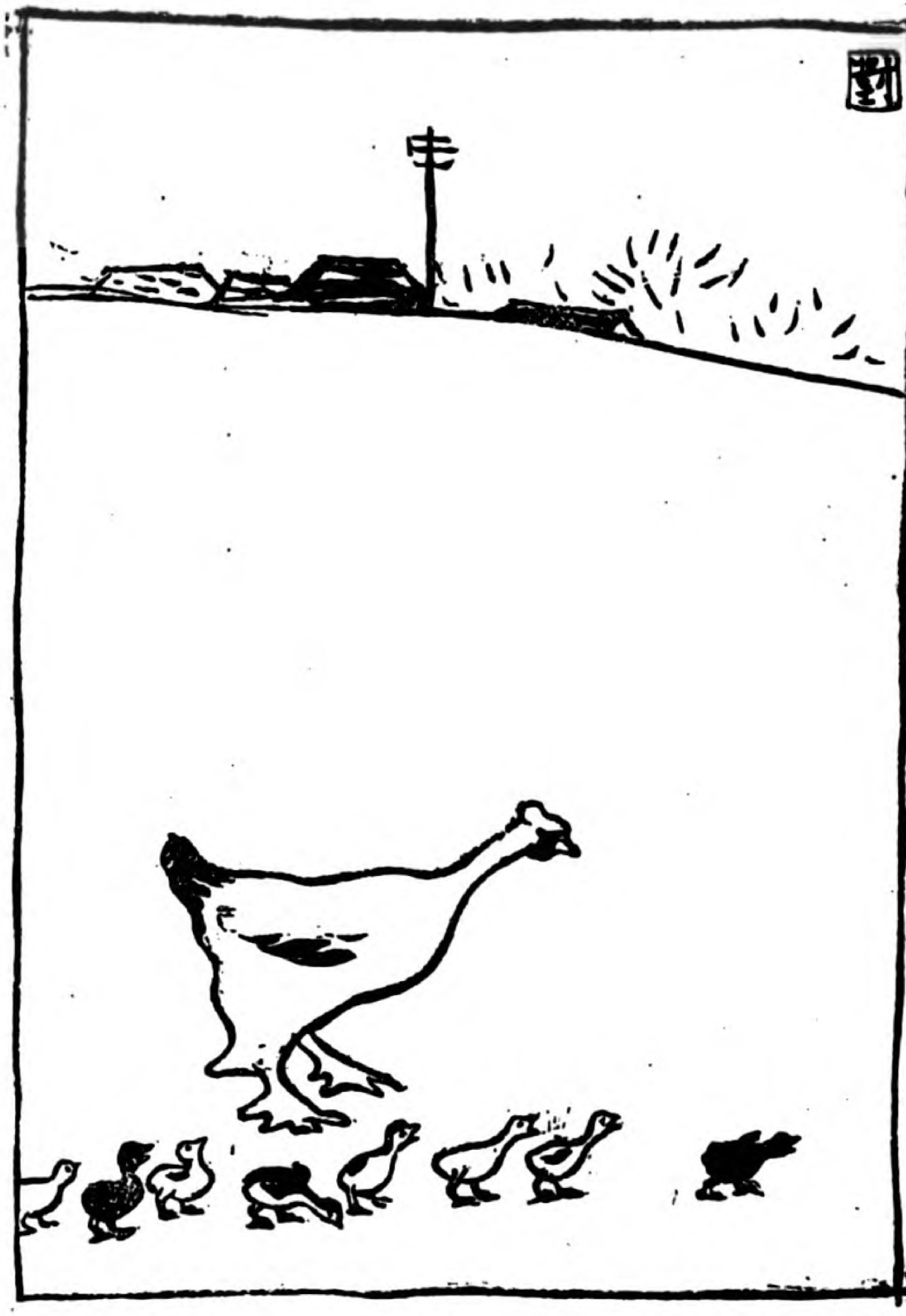
×

加納子爵が家庭談話會を設けて令孃達の爲に靑年男子との交際機關を作り、聟となる人の撰擇をも其會で爲しめられたと云ふのは結構な事ですね。若い婦人は皆さう云ふ物事の解つた父兄を持ちたいと思うでせう

一般に年頃の娘を持つた兩親は靑年男子を見る事が狼を見る心持で居る。其癖良い聟に娘を貰つてもら

ひたいのである。男女の交際を許さず雙方の性情職業等を理解せしめずに於て、幸福な結婚をさせやうとするのは無理な注文です。

戀愛は人生の最も大なる力で之を抑へやうとするのは若い者の身體の發育を止めやうとするよりも困かしい。戀愛の力を善く用ゐると否とで一生の幸福の基礎も定る位大切なものである以上、年頃の娘には父兄自ら加納子爵の樣な方法、又其他の方法で男女交際の自由を得させ、父兄の寛大な監督の下で男子の性情を研究させるのが上策だと思ひます。私は之を「戀愛教育」と名づけて父兄達に奬めたい。昔の裁縫教授所をさへ實科高等女學校と云ふ嚴めしい名の附けられる時代です。況して人間自然の大勢力である戀愛を一科の専門學と爲ないのは間違つてゐます。成るべく多くの俊秀な若い男子と娘とが父兄共々接近する機會を作り、男子は女子の價値を、女子は男子の價値を互に理解し判斷する樣になれば、互に珍らし





がる事なくして、人情の表裏を知り、十分自己を尊重して、輕卒に貞操を破る樣な事が無くなりませう。娘に若い男子を珍らしがらせるのが何よりも宜しくない珍らしいと思ふ心は盲ですから、相手の價値を判斷する遑なくして身を誤る事にも立至ります。

如何はしい例を引く樣ですけれど、遊里の新造とか仲居とかに案外貞操心が堅固で有と申のは、多くの男子に觸れて其弱點を知り拔き、つまらぬ男の爲に貞操を破つて仕舞へば一生の不幸を招く事が豫知せられるからでせう。危險な物に蓋をする樣な消極手段は永い間の經驗で手を燒いて居るのですから、寧ろ積極的に戀愛教育を最良な方法で施す事を工夫しては何でせう。

非常時に際して發現せられた武士魂の輝き

田鶴子

躑躅をかりこんだ低い生垣をこして麥の葉青い畑の畦には、すみれや蓮花草がかあいらしうさいて雲雀のうたもねむさうな晝さがり、御部屋樣はむかしなつかしい金襴や錦やの切れ〲を出して、袋物の御細工中御傍で遊んでゐらつしつた美代ちやんはもうあきて「御ばアさん鳥々」と御部屋樣の御手をひいて次の間へゆられた、こゝには數多い鳥籠に、目白、鶯、頬白などが、羽かろげにすゞしい聲で囀つて居ります。御部屋樣と美代ちやんはその籠をもつて、なげしにかけられた槍の光の神々しい御廊下を通つて御座敷へゆき籠の戸を開けておやりになると鳥はうれしげに御二人の肩から手から御座敷中をとびまはるのです。

御床の掛軸は法眼元信が畫繪の山水、昇り龍降り龍の彫刻ある青銅の御花活にはまだめづらしい杜若がいけられ、蒔繪の刀懸には塗うつくしい黒鞘の御大小がかゝり、青貝入りの御琴には色あせたちりめんのおほいをうけてたてかけてあります。

四民平等の今日ではこの御家もたゞ一の士族にすぎないのですが、御維新前まではこの藩の代々御家老の御家柄、とぶ鳥もおとす御勢で今の御住居はその頃の御別莊です、御本宅の結構美麗であつた御事はなかなかこの御家などのだんちやなかつたさうです、ですから御部屋樣御壯年の頃は御召使も數多く、琴よ茶の湯よ御歌會よとのどかな御暮らし、人々の羨みの的となられたとやら、それも今はたゞ盧生が一炊の夢となつて、世は數年のうちに全くかはりはて、此御別莊に御引移りになつてから、御隱居樣(御部屋樣の御良人)の御他界に引きつゞき四年以前にまだ御壯年の御先代範永樣は御逝去になり、御當主は當年とつてまだやうやう十五歲の秀範樣、荒き風をもいとひなされた御新造樣(範永樣の御夫人)は秀範樣をかしらに十一歲の義範樣九歲の武範樣五歲の美代子樣と御四人の御子樣を

かゝへて身なりもいとひなく、わづかの召使を相手に水仕のわざからすゝぎ洗濯まで手を御下しになるとやら、御部屋様も御あきらめよう、昔の榮華などは御口の端にももらし給はず、御居間にとぢこもつて袋物の御細工と、小鳥の御世話を何よりの御たのしみに、愚痴らしい御様子もなく、感心な方めづらしい御家風と誰したはぬものもありません。召使と申しても昔の御家來のうちからあがつた十五六歳の小女と四十いくつのとめといふ啞者と爺やとの三人切り、ことにこのとめはまだ十一二歳の時から御奉公にあがり、なみ〳〵ならぬが不憫だと、御部屋様の御あはれみふかく、何かと目をかけて御使ひなさるので、私どもにもわからない身ぶり手まねも、御部屋様にはよく御わかりで世の波風のあらいもしらで彼女はこの御邸でこの年まで過したのであります。

　的場につくられた芝生のうへで棒切れの竹刀でうちあつてゐらしつた秀様に義様に武様、小女の「御湯がわきました」とのしらせに棒切れを投げ出し御湯殿へ一さんばしりいつも御湯は御三人御一しよです秀様は兄様顔で武様洗つてやらうよと洗場でタオルをにぎりこぶしにして脊なかをごし〳〵とやつてゐらつしやるその時です、晴天の霹靂といはふか何といはふか、思ひもかけぬ大慘事はおこつたのでした。

　さすがに長き春の日も夕暮れの色、軒端にせまるにおどろいたとめは、御湯殿の斜むかいの御縁側で、御湯殿を背にして、ランプの掃除をすまし、灯をともさうとマッチをすつたその途端、はしなくもその火が傍にあつた石油罐にうつゝたのでした。體のみかは心まで幾分並ならぬかれ、ことにはあはてた拍子に燃えあがる石油罐を、とるよりはやく、うしろに、投げつけたのでした。ところがこれをしも運命と申しませうか丁度それが武様の肩に當つて無慘とも何とも武様は全身に焰をあげて、此世ながらの焦熱地獄、生不動とはなられました。秀様は驚いて抱きつかれたのでしたがこれも裸のわが身の熱さに、思はず手をはなしなされ、御湯の中の義様はたゞあれよ〳〵といふばかりで

手のつけ様もありません。武様はくるしまぎれ裸のまま家中を走りまはられたのでしたが、折から少し御不快で御やすみになつて居た御新造様は走りこまれた武様のこのありさまを見ておどろきながらも早速はね起き、ありあふ蒲團でしつかと抱きしめられたため火はやつと消えたのでした、然しあゝしかし無慘全身は目もあてられぬ大火傷です、すぐさま擔架で醫師の宅にかつぎ込み應急の手あてをうけてまた擔架でかへられたのですが、その間たゞの一度もくるしいといふ事はおつしやらなかつたさうです。わが家の門を入り、必配さうに玄關にたゝるゝ母上のすがたを見て「御母様何でもないのださうです」とさも勇んだ聲で叫びなされたのでした嗚呼何たる氣なげな御言葉でせうけなげなのはこれのみではありません枕邊に人々がとめの事などかたるをきいては「片輪の事だからね」と



夢ともなく現ともなくなかばうわ言の樣にいつてゐられるのでした。かくて涙にうるむ人々の目にみまもられつゝ、もだえに悶えて一夜をあかし翌朝の日の出づるや、最も苦しい火傷の重傷を負ひながらも、一言も身の苦痛をうつたへず人もうらまず。行く末ながき若木の櫻はあたら散つてしまつたのでした。

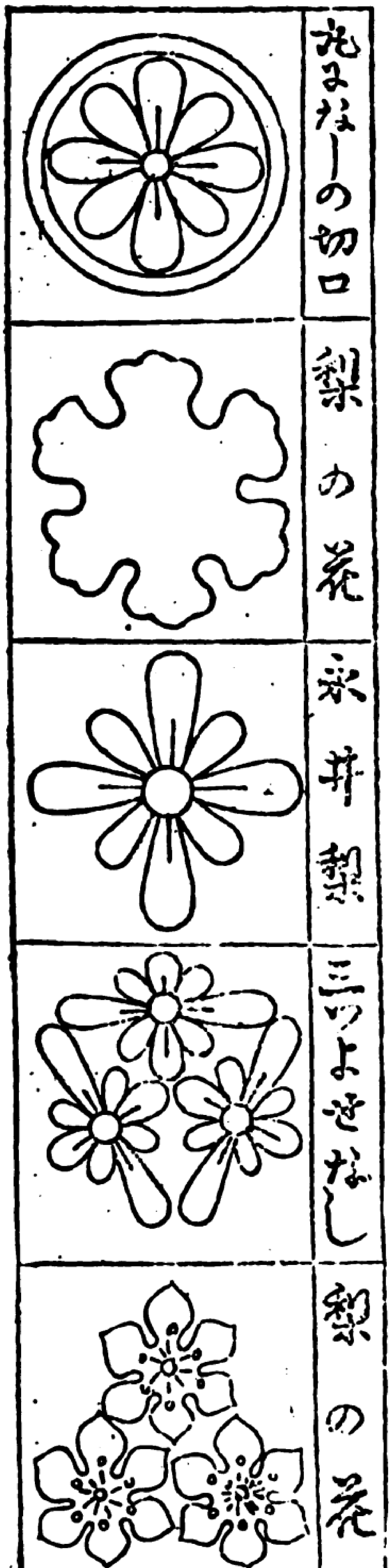
　考へてもごらんなさいまだやつと九歳の子供ではありませんか、丈夫も及ばぬ此御振舞は、御先祖このかたつたへられた尊き血のながれをうけつがれたその御魂のかゞやきでなくて何でせう、たゞに武樣ばかりではありません、御部屋樣も御新造樣も胸も湧きたち膓もちぎるゝ樣な悲痛のなかにも、たゞの一言もとめが爲にとは仰せられで、片輪者をつかひながら氣をつけなかつた自分等がわるかつたと、千萬無量の血涙に御むせびなされたのでございます。

　この大過失を仕出來したとめも、なさけの露におほはれて、罪人ともならず、若干の御金をさへいたゞいてさりげなく御暇になつたのでした。

　あゝけなげな武樣の死、武士が千軍萬馬の血戰場裡にはなく〵しい討死をなすよりもより一層うるはしいけなげな御最後ちやありませんか。

　新思想もよいでせう、文明的家風もよいでせう、がしかし私はこの可憐なる武樣の死によつて發現せられた、武士的な日本固有の家風が何ともいへずしたはしくなつかしく思はれるのでございます。

梨の花



人生批評

毒舌三千言

嫌はれ式部

三春の行樂節なる今日此頃、千金にもいや增さる卒業證書を手にして、頭に、顔に、胸に、何處から何處迄、光り輝き給ふ都の令孃方を、忍び參らせては、青春の色褪せし老孃も、轉た、懷舊の涙なきにしも非ず、とでも申しませうか。

眞、片田舍の侘しき老孃生活！　それは、廿の聲を聞いて、もう光榮ある處女時代も終り、かなどゝ、死の宣告でも受けたかの樣に、歎息遊ばす君や、一高の誰樣！　角帽の某樣とやらいふ、御優しき御兄樣を御二人も、三人も御持ちになつて、我克てり、とでも申した樣に誇つてゐらつしやる都の姬方には、一も二もなく、鼻つまゝるゝ事で御座いませう。

然し、徒らに少女十八何とやらで、青春の季に憧憬れてゐらつしやる御方を拜見しては、座ろに、御氣の毒の樣にも存ぜられます。餘計なお世話で御座いませうが。

年々歲々花相似。　歲々年々人不同。

で御座いますわ、ましてや、

須憐半死白頭翁。　此翁白頭眞可憐。

伊昔紅顏美少年。

ぢや御座いませんか、紅顏美少年も、花恥かしき美少女も、頓ては頭に霜を飾る老の身と變る、有爲轉變極りなき世に生を保つて居る人間では御座いません

いや、其れを觀すればこそ、短かい青春が惜しまれて、暮れ行く春に何時迄も憧憬給ふので御座いますつて、誠に御尤樣！　是非も御座いませぬ。

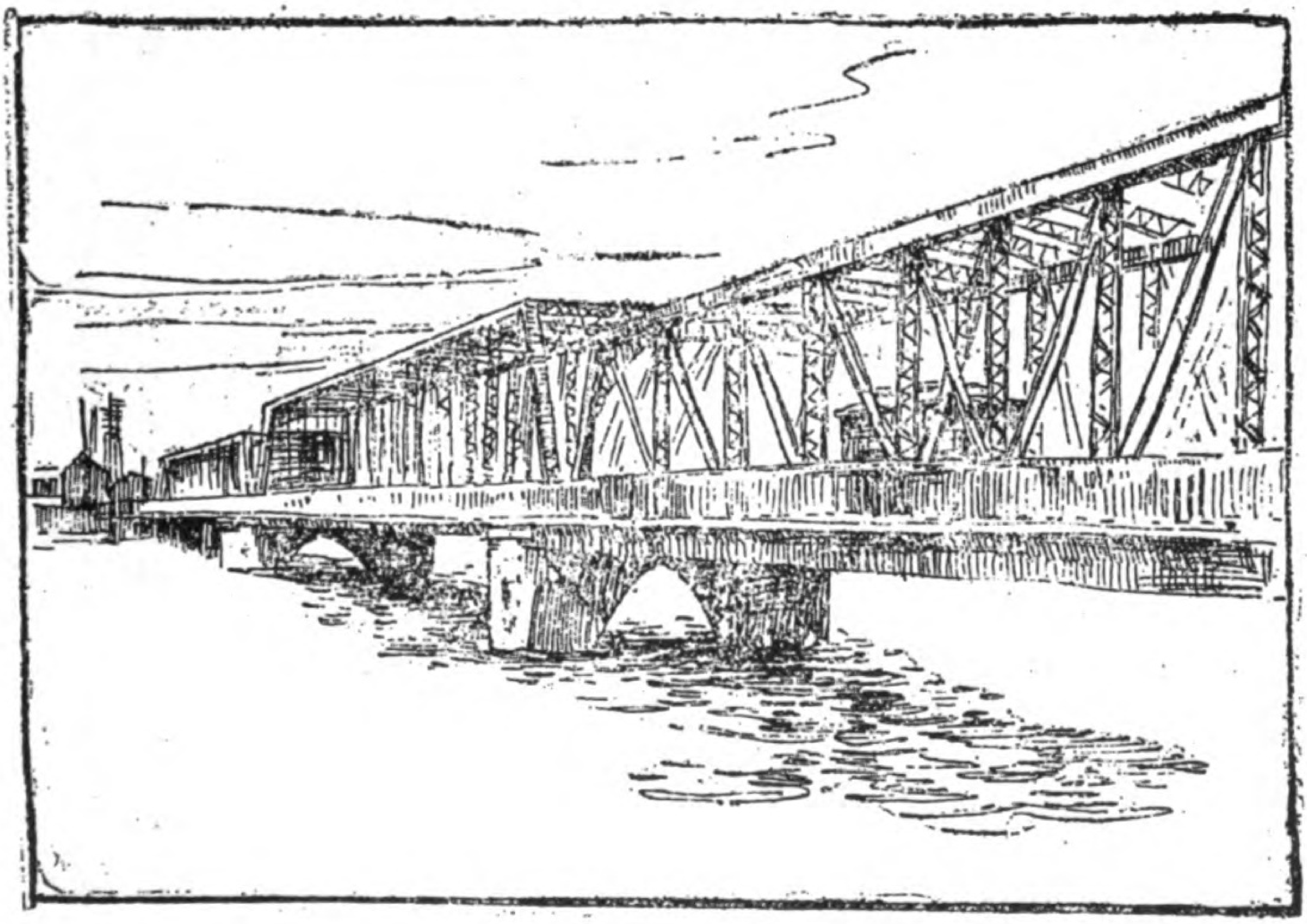
おや、其麽坊主臭お說法なんて眞平！　ですつて？

まあ、誰が說敎師ぢやあるまいし、お生憎樣！　私は勝手に一人で喋りますの眞平御免遊ばせ。

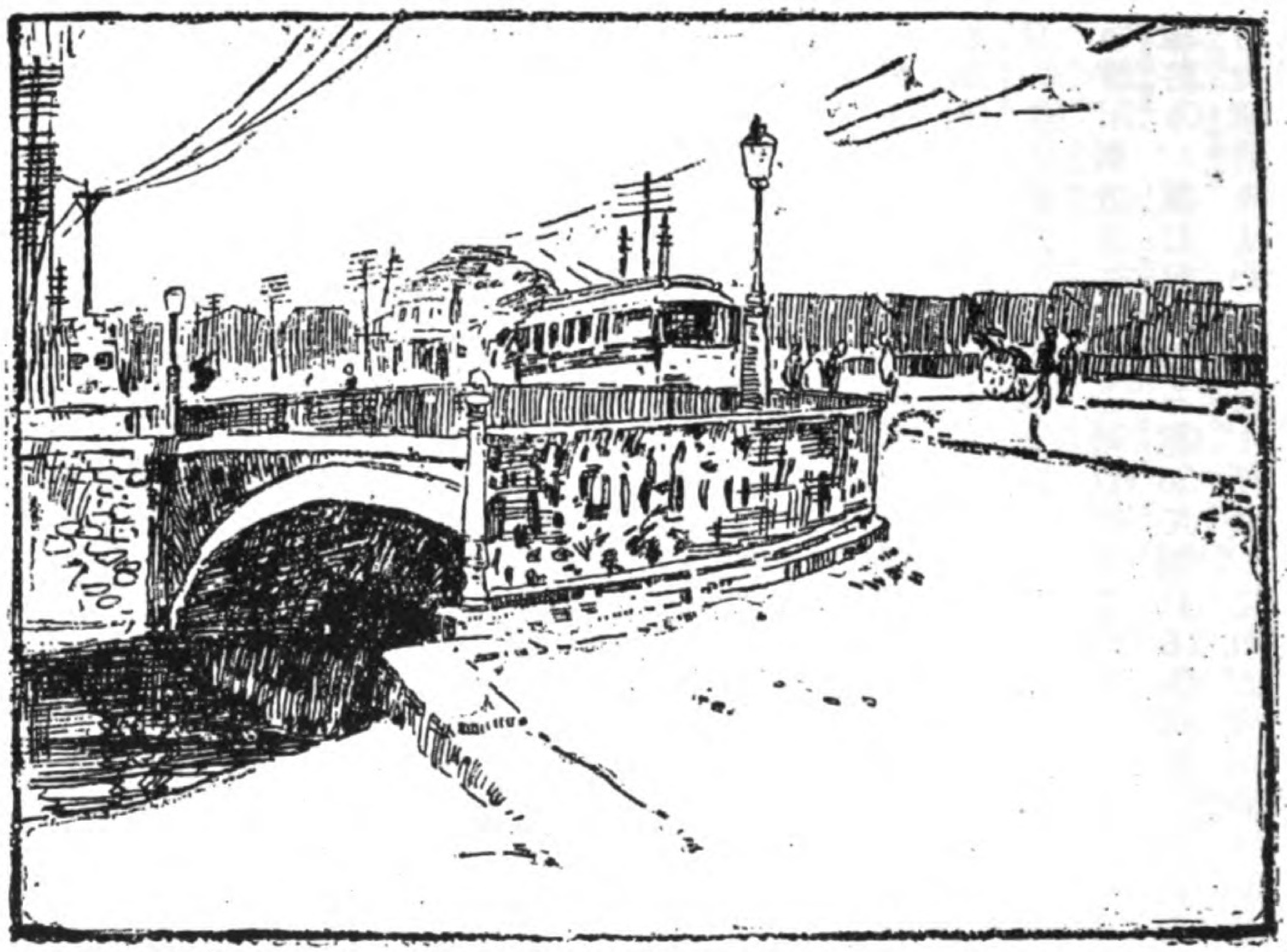
省みれば、私だつて青春時代は御座いました。　花恥

かしき粧も、一度や二度は經驗して居りますわ。けれど概して、私は今時の皆樣方の樣に華々しい事はした覺えが御座いませぬ。尤も、嚴格なさる寄宿舍で生活致しました事とて、尼樣の樣な舍監に、頭から抑へつけられて、殿方との交際は勿論、着物から、頭の物から一々の御注意、何でも十七八の頃等には、一見廿二三に見られた位、地味な柄に、黑ずんだ袴ですもの：：其れでも可笑なもので、自分もそれが滿更いやでもありませんでしたわ。つまり、其頃上級の廿四五にもなる御姉樣方の眞似を、喜んでして居たのですね、今の御孃樣方の御口に逢へば。

再びとは來ぬ人世の春を、尼樣ぢやあるまいし、隨分馬鹿氣きつて居るわねえ、などゝ二の句もつげない鋭い嘲笑を、頭から頂戴して仕舞ひますが、然し、私はさうして、馬鹿で過して居たから、一面德した事があると思つてますわ。これは私の自惚ぢやない事よ。とは云ふものゝ、若し、今の多くの花の樣な令孃方の樣に、爭ふて、胸に秘めたる繰言を自由に紙上に發表



阪　橋



淺草橋

する機會がありましたなら私だつても……鈍色の令孃の胸の血も眞紅に燃えて居りましたらうにね……

實際、現代の令孃方は、御幸福でゐらつしやいますよ、實にお羨ましき限り、之も、自由思想の何とやらかも知れませんわね、兎に角に、結構な事にて、之を謳歌せずには居られませぬ。と云つて、人樣の事のみ羨むでも居られませぬ、何事も痛切に感ずるのは、自分の身の事、私などは、年で申せば、咲きも殘らず、散りも初めぬ遲櫻で御座います、先老孃の御仲間で御座いますわ。

故何御緣付きになりませんの？ 等と、外の御老人に問はれた時、または、途上で、車屋等に奥樣々々と呼ばれたる時、顏から火が出る程、恥かしく、情けなく、實にいやな氣持が致します。理想の夫ならば結婚は生涯決して致すまじく候。などゝ、大膽な獨身主義を構へる柄でもなし、夢にも殿方を罵つた覺えもなく誘ふ水あらば、の心根乍ら、如何にせん、元來 私 には、胸の病がありますの。勿論、進歩した醫術によつ

て癒されつゝあるのですが……

之といふのも、一つは女子教育の犠牲なので、生存競爭の烈しい世の中に、弱者は、強者の爲に征服されるのは必然の事、教育家を責める譯でもなし、自分の體力の弱かつた上に、勉强の方法も惡かつたからでせう。

然し斯ういふ弱者は、强ち私一人でもありますまい。まあ御聞き下さい、私が初めて斃れる時、多くの友や、師の君等は、どれ丈け私に同情をよせては、色々と慰めて下さいましたらう。噫人情の美かくてこそ、人間の心と心との震動によつて大なる團體といふ力も出來得るものだ。などゝ切りに感謝して居りました。

がさて、四年五年の星移り物變つた昨日今日、未だに斯うしてぶら〳〵して居る私を省みて呉れるものは只一人の親友と、肉親同胞のある許りぢや御座いませんか、親友とて、遠く離れて居る事とて、只折々の玉章許り、眞に私を憐み慰めて呉れるものは、只血を分けた者許りといふ有様、所詮、これが世の中といふものか、と、今迄抱いた心と心との震動も、只一睡の理想の夢と醒めて仕舞ひました。思へば實に、文明といふものは、人の心に迄一種の恐怖を持たせますのね、強者の誇は旭日の如く、赫々たる勢ですもの……

相互輔助なんて、實際弱い勢力だと見えますのね、何うしても弱者は、强者の犧牲ですわ。けれど、其實矛盾は随分ありますのね、つひ此間も、平常文通もない、さる教師から學校の記念式につき、可成纏つた金額を寄附されん事を云々。なんて、偶の手紙が此麼事で、然も精神主義の某先生も、矢張り學校の爲には、實際に於ては黄金主義にならなければならない世の中なのかしらんと、初めて納得致しました。

然し、人の妻となつて居るか、又は自活でもして居る自分ならいざ知らず、此麼弱者迄を捉へて。とつひ愚痴もこぼれますわ……

人生莫レ作二婦人身一。百年苦樂由二他人一とか唐人さんの仰しやつた事も、まだ〳〵。今の世には適合つて居りますのね。

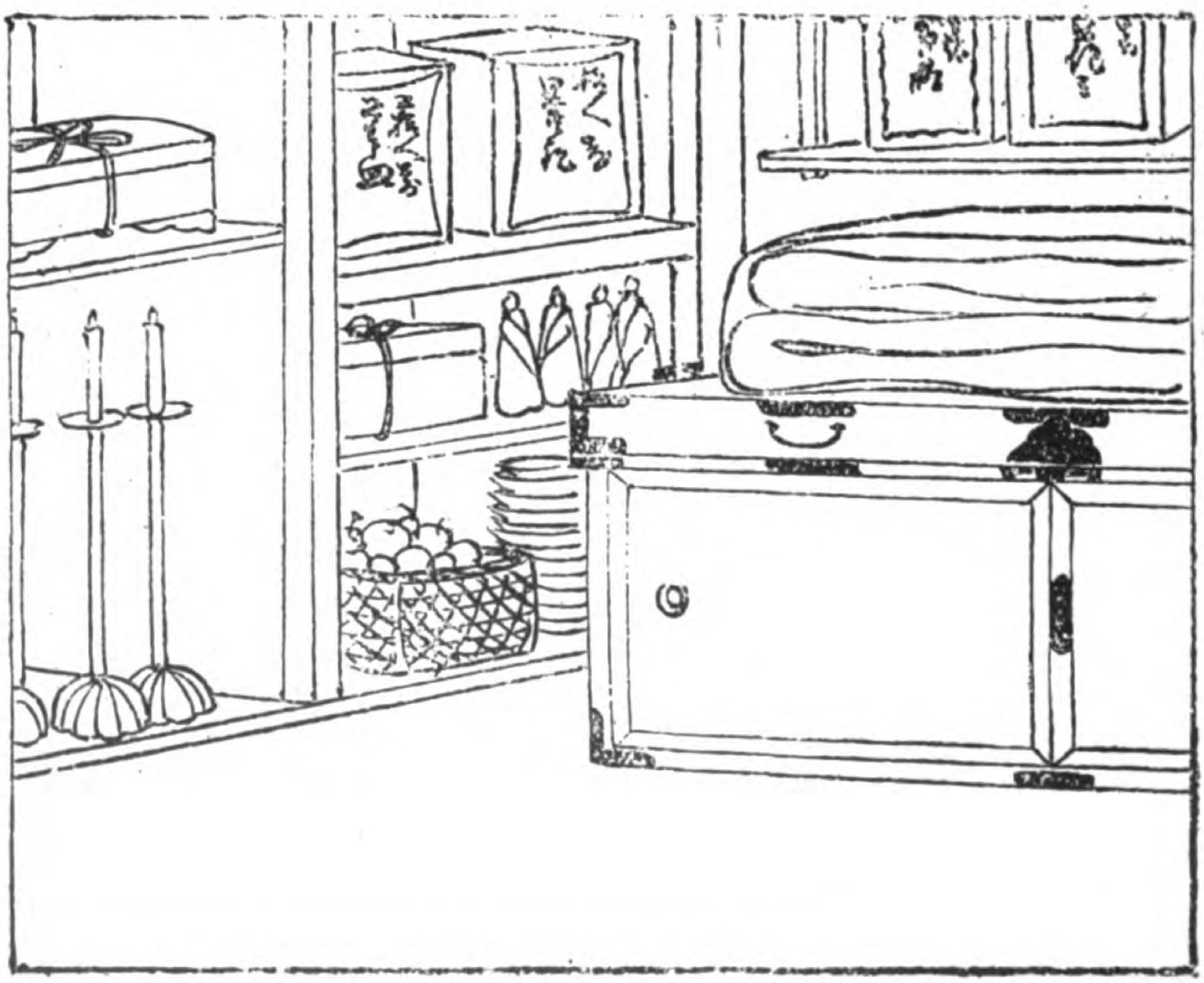
某の奥樣と云へば、何處でも巾がきゝ、親もない一本立のミスとなると、巾こそ少しはきゝませうが、まづ敬遠される方なのぢや御座いませんの？

令孃は御父樣のお名によつて光り、奥樣は旦那樣のお名によつて輝くのが、昔から今に續いた女のレコードとやら。そのレコード破りの女一本立とは、却々困難な、覺束ない事で御座います。潮風樣が、眞に、獨立自營して居る女の目つきの鋭く毅然たる態度があると仰せ遊ばすのは、全く無理も御座いませぬ。

私は、このせち辛い世の中に獨身主義を固持して意氣揚々と働らいてゐらつしやる、御婦人を拜見してはまあおえらい事と、感心するより外に何と申してよいか存じません。

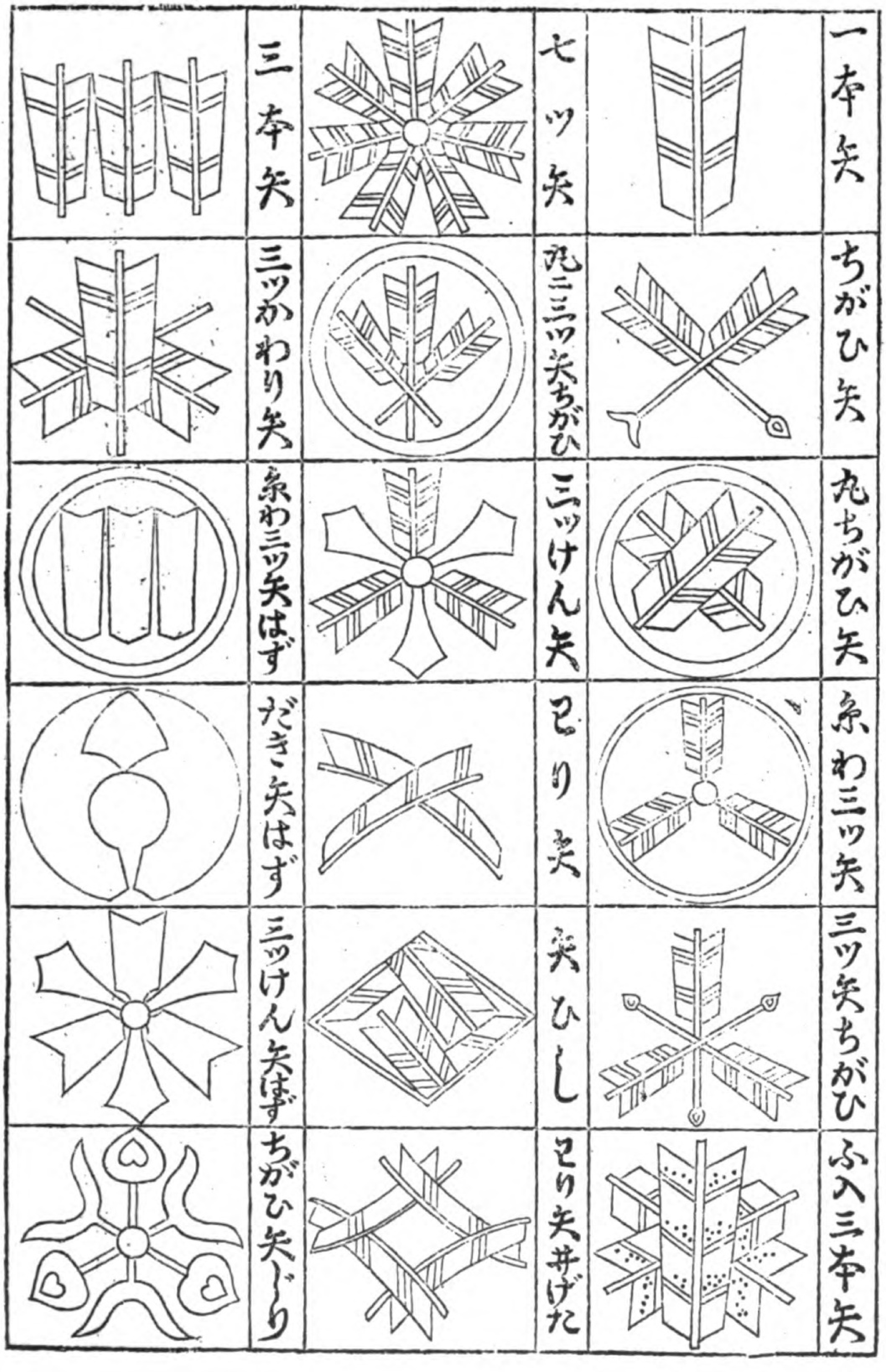
然し、私の樣に、何れとも相場の定まらない女も澤山には御座いますまいまあ〳〵せめて、幸福なる皆樣方の御上に、尚幸多かれと神に佛にお祈り致しませう

永々と下らない事お喋り致しました。大分に弱い口も、手も疲れましたから、一睡の夢でも貪りませう。



花の車に、春の粧、二九の少女に若がへつたよい夢でも見るで御座いませう・・・・

矢羽根の意匠


一本矢
七ツ矢
三本矢
ちがひ矢
丸に三ツ矢ちがひ
三ツかわり矢
丸ちがひ矢
三ツけん矢
糸わ三ツ矢はず
糸わ三ツ矢
をり矢
だき矢はず
三ツ矢ちがひ
矢ひし
三ツけん矢はず
ふ入三本矢
をり矢井げた
ちがひ矢じり



誕生日

松平鏡子

△

四月十日

妙子さん十八回の誕生日、淡紅色のレターペーパーで、招待状は昨日來たけれど、この話は一月も前からあつた。

定刻の十時に間にあふ程、青山のお宅へ車を飛ばせる——といふと大變好いけれど、この私のお抱へ車、用もない所に止つて仕様がない、乘る人降る人、自分一人の物のつもりで車窓に寄つて居る私の前を、衣かすかすに通つて行く……。

それも好いけれど、青山の乘換をすませると、先の電車に故障が出來ちまつて、とう／＼長い事立往生、馭者も馬丁も……まア强ひてさう云はせて頂戴よ、……コツ／＼板の間を靴先で叩き作ら欠び三昧、淑女の前で失禮ぢやなくつて……と云つてやりたい氣もすゝ

こんな事に暇取つて、さう三十分餘り費したであらう、電車を降りるとすぐ帶の中から出して時間を見たあゝもう十時を二十分まはつてゐる。

お祝の品を包むだ風呂敷を抱へて、この御令孃なかなか儉約家だものだから、車にもおめし遊ばさず……

それでも、また都合の好い事もありましたのよ。

私つてばねえ、よそ様へ上つた時、お取次を賴むのが、一番厭になつて了ひますのよ、まさか十七にもなつちやつて、お玄關から「妙さん」とどなり込むわけにも行きませんし、といつて淑子さんの様に「御免遊ばせも、何だか恥かしくつて、一寸にや出やしない。

それが今日は、眞實に都合がようございましたの、門

を入るとすぐお玄關の障子が開く、……え丶丁度妙さんが、私を見に出て下すつたところ……。

「ずい分晩いお出ましね」

「つい晩くなつちまいましたのよ。御免遊ばして頂戴な、あの皆様は？」

「もうとつくからお揃ひよ、まちぬいてましたのよ

高島田のよくうつる白い頸を斜げて、妙子さんは私の手を取つて下さる、

かねて用意の二十疊へ通されると、澪さん、淑子さんを筆頭に、雪江さん茂野さん、お塾様の幸枝さん迄お納戸の袴をはいてひかへ込んでゐる。座敷の裝飾はいふまでもなく、

「おそなはりまして……」と皆さんへ會釋をして、

「妙子さんおめでたうございます」

「有難うよ、鏡さん、これからも仲よくなすつて下さいな」莞爾と微笑まれて「ほんとに何の御愛想もございませんのよ。ですけれど何卒御ゆつくりね、今日は御存じのごく親しい方ばかしですから……」

床を上座にひかへた二十疊の座敷、居流れたのは總勢七人、御主人役の妙子さんは、おちこちの取なしにせはしない……。

後の襖を靜かに開けて、十四五のお小間さんが恭々しくお茶とお菓子を持つて出る。

床の間にはお祝ひの品がうづ高くつまれてある、皆今日のだ……と思つて妙に氣が引けて了ふ。

妙子さんが座を退された折を見て、そつとかげでお渡しする、

「ま、すみませんわ、そんな御心配頂いちや……ほんとうにありがとうよ、すみませんのね」

「あら、眞實に可笑しいんですよ、たゞ私の心一ぱい

「……嬉しいわ」……………。

黑塗の平膳、お魚も口取りも、吸物も、この膳を彩どるものゝこと〴〵くは、妙さんの美くしい庖丁にかかつた御自慢料理、もとより惡からう筈はない。

ずつとかう見渡したところ、日本髪は妙さんと私と二人きり、幸さんのお下髮……但し前髪出した……が

一番若く見えて、あとの四人はハイカッたお髪‥‥。

膳の引けた後又一しきり雜談に花が咲く。

「いゝのねえ皆さんは、お誕生日にかうして遊べて、私なんぞそんなどころぢやないわ‥‥だから塾は厭だつて云ふのよ」



塾生活の幸枝さんが、まづ第一にぐちり出す、思へば眞實に可哀想よ、だつて父樣や母樣のお膝を離れて、かうしてゐらつしやるんですものねえ私ならきつと病氣になつて了ふ、‥‥幸枝さんなんて同い年だのに豪いわねえ‥‥。

「呼ばれてばかしの方が好いぢやあなくつて？方々食べ散らしなさいよ幸枝さん……ね八月には、私の家へ悪戯にゐらつしやいな」

と澪さんは戯談半分、慰め半分……。

「だつてたまにや、御主人顔もして見たくつてよ」

何でも結末を、茶にして了ふのが幸枝さんの癖？、先刻の濁つたらあともない、こんななら、同情の涙なんてそゝいで上げなけりやよかつた幸枝さんの爲に流す涙は何日も無駄になつて了ふ。紅涙取戻しの告訴でもしやうかしら？

「私なんて家に居たつて、何にもしやしませんわ、お赤飯位のものですもの、詰らないつたら……」

と茂野さんが仰しやる。私だつて矢つ張りさうだ、たゞその日には、記念として爲になる本を求めるだけ只それきりなのだ。

「あの榮公の誕生日つての御覽遊ばして？若松さんの忘形見に出てる：あんな人も世間には居るんですもの

と私がいふと、

「榮公がどうかしましたの？え鏡さん：」と幸枝さんが問ひ返す。

妙子さんは笑ひ乍ら

「眞實に可笑しうございますのね、幸さんまだごらん遊ばさなくつて？私のところにありますから、お歸りにお持ち遊ばせ」といふ、

それから榮公がおつ母に誕生日の暇を貰つてお友達に誇り乍ら、何をして遊ばうといふ事や、青草の上に寢ころむで二人して考へてゐるとおつ母アが呼びに來るところや、頭からどなられて吃驚して起きると、赤ん坊の守をしろと云はれる、榮公の誕生日は過ぎて了つて今日でなかつた事や、いろ〳〵の話がこの緒によつて開かれる、

「妙さんこちらにばかりおいで遊ばしてよくつて？：あちらもお客様でせう」と雪枝さんがいふ。

「いゝえ、好いんですわ、彼方の組はね、今晩宿るんですのよ、あしたの學校道具をちやんと抱へこむでるんですもの……ホヽヽヽかまひませんの……あの從妹

も姪も來てますのよ、呼びませうか？」

「あら薫さんが來てらつしやいますの、お呼び遊ばせよ」といふとでは、と、云つて立つてゐらつしやる。

お從妹の薫さんは十一、美江子さんが九つ、お二人とも可愛いお孃樣

「青山からお茶の水まで大變でせう」と淑子さんがおきゝになると

「あしたは凝功しませんわ」といひわけをなさる、それがまたほんとうに可愛らしい。



どうぞ〳〵せびりぬいた上句、妙さんをピアノの前におしやる。

ピアノに燭をつけて花でもさして彈くと詩的よなんて幸枝さんが仰有やるものだから總立ちで戸をしめて丁ふ、華やかな電氣の光を避けて、三つ燭された蠟燭の火が、幽かに息をつく、ピアノの臺は油繪にでも描かれたやう…そそられるやうな樂の調べ…。

そのあとで澪さんがヴァイオリンで合奏なさつた。

幸枝さんがとび入りの獨唱、淑子さんはお琴の春の曲……藝盡してまるで音樂會へ行つたやうだ。

しなくつちやするい、しなくつちやするいつて包圍攻撃をうけて茂野さんと雪枝さんが引つぱり出されて合唱をなさる、とう／＼私にお鉢がまはつて來た、仕方がないから薫さんと美江子さんの手を取つて、ピアノの傍に立つた。

え、何を歌つたと仰有るの？尋常二年のお嬢さんがゐらつしやるんですもの、大抵しれてますわ、

……………

大黒樣が來かゝると
こゝに因幡の白兎
皮をむかれて赤裸。
大黒樣は憐れがり、
綺麗な水に身を洗ひ
ガマの穗綿にくるまれと、
よく／＼敎へてやりました

……………

桃割れで大きな袋を肩にかけが振つてるの、師範のやうだのつてさん／＼冷かされて了ひました。

「もう音無しくしてませうねえ」

つていきなりおん大將にてまします幸枝さんが坐りこんで了ふ、一番騷いだ人は誰でせうと聞いて上げたい。

「アラ騷いだんぢやなくつてよ、ねえ、騷ぎやしないわねえ」

靜かにおしなさいよだの、騷ぐと惡いわだのつて、はら／＼して、ゐた澤さんが今度は守勢をとる。

——雨戸も明けはなされて了つた、やゝ靜まつた座敷に雜誌のページをくる。

日の暮れないうちにお暇して、妙さんに門傍まで送られ乍ら六人して歸途につく、

あゝ今日は眞實におもしろかつた。

電車に乘る時、澤さんと茂野さんと幸さんにわかれて雪枝さんと淑子さんと三人になつて了ふ。


若葉のかげ
昭子

今は昔のクラスメート、忘れ得ぬゆかしの花の俤をちよつと御紹介致しませう

青柳はる子様

中肉の、背はすらりとお高く、色白の瓜實顔に刻むだやうな目鼻立ちばりとして、それはく美しい方。

御自分では筆にもお出しになりませんけれど。曾ては藤間について お習ひになつた踊は優れてお上手の由、それかあらぬか折ふしのスタイルに捩ひつきたい様な風情がありますのよ御選擇の御服飾は紺の小紋か何かに紫カシミヤのお袴目立たぬ風をなすつてゞしたが、御宅にお出の時は目の覺める様な派手なのを召して、長いお袖を斯うお胸に麥見眼さしうつとりとお泉水のあなた眞秋白萩露に咲こぼるゝ籬のもとに佇つんでいらつしやる時なんか恰で宗圓様のお筆そのまゝ。

先年の夏期休暇に、はからず輕井澤に落合つて、一月程も御一緒に居りました際、はる子様は母君への御たよりを一心に認めていらつしやる、私はお傍で山家集を拜見して居りましたが、ふと其の方の後の手摺の上にさゝやかな手帖を見出しましたの、何氣なく開いて私は驚きました第一に妙法蓮華經普門品とあるぢや御座いませんか、思はず「まあ……」と言つたら、

「え？」と振返つて、

「あら、とんだ物見つけられて仕舞つてねえ」

つてつと引奪つてさつさと納つておしまひになりましたがねえ……あの先にもつと何が書いて有つたでせう、惜しい事をした、と私は今に思つて居りますのよ、斯ういふ方です。

上の御兄様は醫學士、次の兄様は軍人次が一高にお出でした。才色兼備のはる子様は兄様方のお友人には修羅の種、中には血氣の戀獸なんて猛烈なのもあつて中原の鹿誰が手に落つるか、とばかり他から見る目も笑止の至りと上の兄様と同級の從兄は言つて居りました。けれども御當人は一向平氣、浮いた噂は小指つばかりもきゝませんでしたがはる子様とて木の端ではありませんもの、其の固く鎖した神祕の扉をそと開きて内なる花の色香に醉はん鍵を握れるこゝな果報者は誰あらうK様今の旦那様だつたのですよ。それすら言はず語らずの間にも出さねば、御存じだつたのは上の兄様位のものでせう。

偽か眞か如斯な話をきゝました。御親戚のF様、大層なお熱度で、或る日皆様のお留守を見すまし、高嶺の花を手折るべく輕氣球よ飛行機よと騒いだのでせう、はる子様はてんから耳にも掛けず例のへうたんなまづぬらりくらりと言ひぬけてばかりいらつしやるのでその方カンシヤク起して『かくまで言ふのにせめて哀と思つて呉れる事か眞面目に聞いてさへくれぬ、焦れこがれて死ぬ身ならむしろ情なき人の眼前にて……』

とか何とか捨ぜりふ宜しくあつて用意の双首ぢやない丁度その頃不眠症だつた兄様が用ゐていらしつたモルヒネを突然……。止めるか止

めるかと思つたはる子樣は止めるどころぢやなく可笑さうに失笑してついと奥へいつてお仕舞になつたんですつて張合のぬけたB樣まさか怨しむ眞似も出來ず、口なるものを吐出してしまつてこそ〳〵逃歸られたとか其の後ははる子樣の顏見るもいやと仰有るさうな。ほゝゝゝまさかれ。

お得意の學科はとり立てゝ言ひ樣もなく、全甲の譽はいつの試驗にもこの方の双肩に懸つて首席はづした事なし。

今は、秀才敏腕の譽高きK樣の配として、外交官の夫人として其の御交際振の如何にあざやかな事でせうこれこそ吾國、吾校、吾級の名花として世界に誇るに足るべきものと、固く〳〵信ぜられますのよ

島村みち子樣

お色の淺黑い瘠せ方の中脊で、常に愁を含んだ御眼ざしともすれば柳眉の邊に電がちら〳〵、伏目になつて菫色のハンカチーフを手まさぐりつゝ吐息遊ばすところ、如何しても少さき御胸に包み兼たる憂き惱のお有りになるとしか見えません。「ほんにどうしたらお孃樣の御氣分を御引立たせ申すことが出來ますやら....」つて女侍がこぼして居りましたつけ。お父樣はチヤキ〳〵の實業家、御名を明せば直ぐあゝあの方、と誰も合點くでせう、優れた手腕とも一つ....、れ、それ。お母樣とて元の御身柄は....、斯うしたお方のお子樣に又どうしてみち子樣の樣な方が出來たのでせう替り目毎の觀劇に羽左よ高麗よの噂やら、ゴールド、プラチナダイヤの眞珠のと醜き軀をピカつかせて得意がるのが相應しいに、幸か不幸か早くから智識の眼を開いて靈的方面に憧憬されたが煩悶の因、亂れた家庭を忌むのあまり嘆くのあまり、世の中にあるまじき美しい空想の世界を畫きだして壺中の天地に逍遙したいおん望みなのでせうけれどもゆる血汐を盛つた若々しい御身がなんで左樣冷やかに悟りすまして居られませう。

「私ねえ、何だか斯う寂しいやうな果敢ないやうな便りないやうな遣る瀨ない氣がして仕樣がないのよ、何を見ても聞いてもさつぱり味がないやうでもう此儘氣が狂つてしまふのかも知れないわ...眞實に私畫にまれ音樂にまれ、生命を得られる程の天才が欲しいわしみ〴〵欲しいわ私見たいな性格の者にはとても宗教で安心を得る事は出來さうにもないから....。」なんて、ふとした動機からこんな旨を仰有つたことがありましたつけ傍ぎゝしていらつしつた皮肉やの松木さんてば「あゝあ御不自由のない方は贅澤を仰有る私なんか年百年中用事に追はれて其樣こと考へてる暇がない」なんて仰有いましたがねえ。

天地有情が大お好で始終持つていらつしやいました「我袖の記」を見てから高山博士崇拜になつて——宏き天地の闇にわが胸の琴は群をはなれし雁がねのたぐひなき寂しき響きすなり——とばかり、情なく見ゆる花吹雪暮なんとする春の夕をかすかに消えゆく鐘の音に玉の緒ゆらぐ胸を抱いて、あの築山の四阿に思ひわづらつていらつしやるのが見えるやうな。それでも、何に光明を認められてかこれは又案外な陸軍の少佐へお嫁きになつてもはや二人のお母樣、御家庭至極圓滿の由。ですからね....。

四ツの家の格式

花筐



家風と！　かう一口には申しますけれど、この短い言葉の中に、どんな種々の事が含まれて居りますか。この家風といふ物がある爲に、若い嫁は苦しみます。何かといふと家風に合はぬ——口實を作る姑こそいゝでせうけれど……。

女は難かしいものです、十何年馴親むだ家風を一朝に捨てゝ、全然異つた家風の下に立たねばなりません。——いくら簡易主義が好いからつて、何々伯令孃とも云はるゝ方が、まさか鹽せんべい十錢で御婚禮も出來兼ねるでせうしねえ。

まア假りに、こゝに一對の男女の者があると思召せさてこの二人がたとへば結婚するにしても、十分にするだけの餘裕はない、そこで至つて簡易にその式を行なうたとしませう、するとその人の子なり孫なりが、だん〳〵お金も出來、社會の位置も得て、すれば出來得る費用もあるけれど、父祖の事を思ふてなるべく簡易に(その位置に比べて)すませた、そして自分許りでなく、自分の子にも孫にもさういふ風にさせやうとする、この家風が子から孫、孫から曾孫と、衰ろへず傳はつて行つたなら、それこそ全く其家の家風となるのだらうと思ひます。

これに反して、昔榮えた人の家が衰へたりしても、かういふ場合には、外見の儀式は出來兼ねるでせうが精神上の禮式は貧しくとも傳へる事が出來るでせうと存じます、また出來る限りはまね事なりとも家風通りに致したいものです。

現代教育を受けた若い人が、新らしく家庭を作ると

しましたら、昔からのしきたりが、心に染まぬ事も多いでせう。そして新らしく起したいと思す方もありませう、又實行しておいでの方もありませう、何にしても時勢が違ふのですから、變へるのも宜しいでせうが、根本の骨子は、名殘だけでも止めたいものと存じます。

親に孝、同胞仲よく、夫婦睦ましく、とは誰でも願ふ事で、凡そ何事にしてもこれが骨子とならぬものはありますまい、同じ骨子に致しましても、それに添る枝葉によつて、簡易主義、華奢主義、質朴主義、嚴格主義と變つてゆくのだらうと存じます、儀式にしろ禮節にしろ、そのもとを正してやれば五倫の精神から起つたことで、又、それがどこまでも、隨いてゆかねばなりますまい。

まア此樣下手の長談義は好い加減に切り上げましてさまざまの家風を、私の知つて居ります家庭にあてゝ申し上げて見ませう。

C　樣

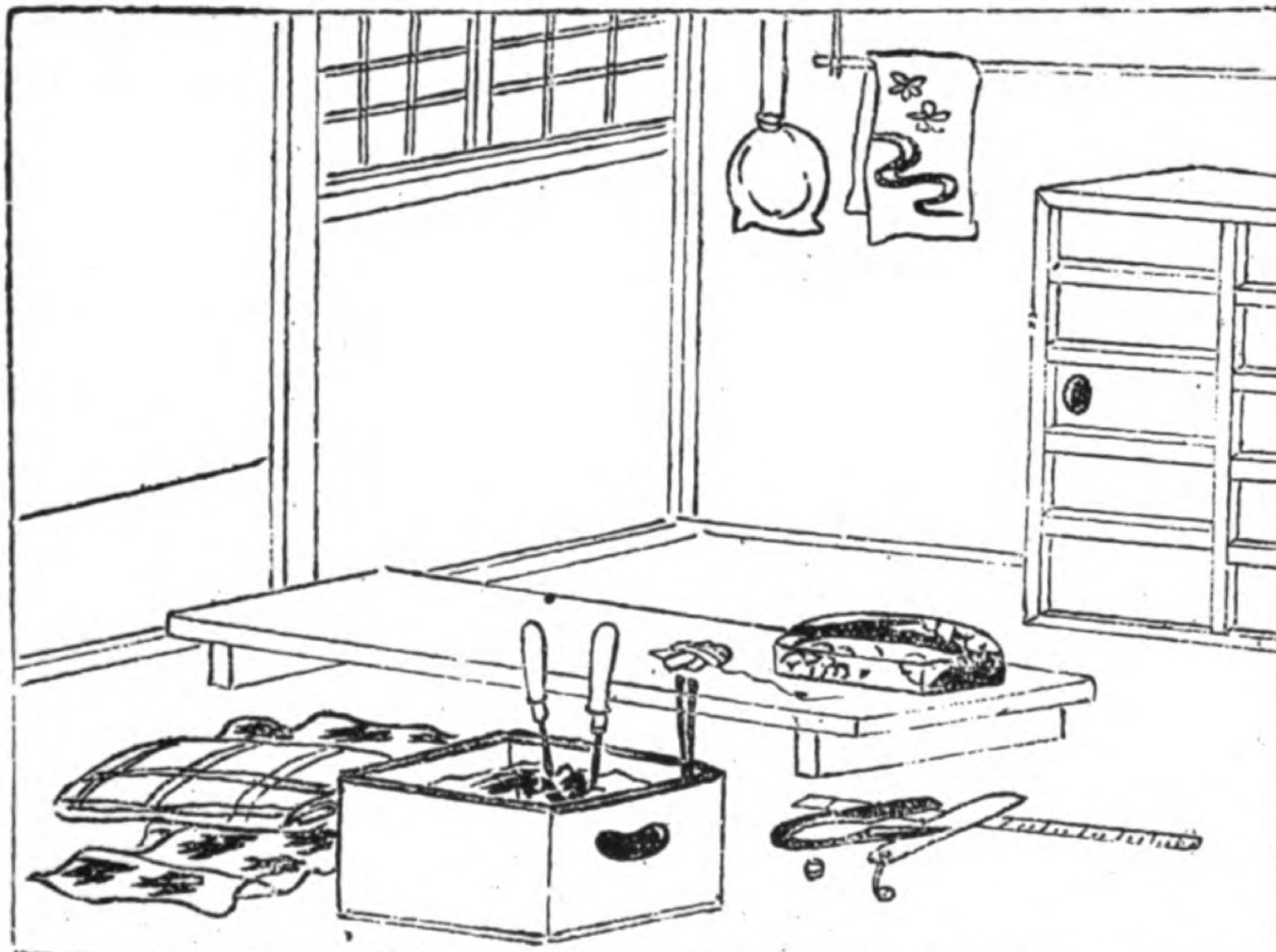
祖先は鎌倉將軍何代の孫、何の某が何とやら云つて、Cさんのお宅はまづこれからして固苦しい。三つ指の腰元、仲働に下女、玄關に袴の折り目正しくひかへ込むだ書生まで、數へれば十指に餘らう。その癖お上は主人夫妻に切髪の後室とたつた三人！

こんなに召使の多いのは强がち御主人の官等が高いからばかしぢやあなく、それでは御先祖にすみませぬと云ひ張る御隱居のお言葉が、實行されてゐるからなのでせう。お正月から雛の節句、それあれ何のかのと、隨分難かしい御儀式をなさいますのです。昔からの習とかで、長い裲襠を廊下に引いて——えゝまるで繪のやうだつてお話よ。でも面倒臭いのね……こんなの、複雜主義つてんぢやあないでせうか。

O　樣

嚴格主義と云つたら、ほんとにこんなお家もありませんわ、いくら軍人さんだからつて、もつと開けてるのよ、だから幹子さんは可哀想——。學校へ行く時つきり、めつたに外へはお出になられ

ない、お父様がお氣難かしやなんですけれど、やつぱり幼さい時、嚴格にしつけられたんでせうね、幹さんなんどまるで籠の鳥よ、學校へいらつしやるのを樂しみにしてゐらッしやるッたら――歌舞伎座や三越なんて、行かない事は云はずもがな、いつか宅の雛祭の時に、お迎へを上げたつていらつしやらない。いえ、外出ばかりぢやありませんのよ、萬事がさういふ風なんですから全くたまりませんわ、何もかも規則づくめでまるで兵營へ行つたやう――、もつとひどい！



お仕事部屋

辛いかもしれませんけれど、お行儀は善くなりませうね、ですけれどお心が眞直のびやかに、若々しい心持で居られるか如何か？――さアそれ迄のお受合は出來ませんことよ。

×　S様

至極な放任主義

それこそOさんと好い對照ですわ。

これは元子さんのお母様が、ある雜誌に載ッて居た某名夫人の談話を讀み嚙――讀み嚙ッて、あゝ何でも子供はうッちやつとくに限ると、まアすつかりさとつちまッたからなんですわ、

そりや好いでせう‥‥好いでせうけれども、まアご覧遊ばせ、子供を放任ばかしぢやない、臺所も放任、お座敷も放任、お子さん達迄お母様を見習つて、玩具手道具の放任教育、家の中はそれこそ馬小屋のやう—。小さい方はそれだけのものですけれど、それが募つて元子さんなんぞ、男の方と交際して何とも思ッちやいらッしやらない、どんな方だかよくわかりもしない人と、ずん〳〵誘ひ合ちや遊んであるくんですも——私みたいな女は因循だつて‥‥さうかもしれないのねえ。

S様の放任主義は、全くお母様の主意から起ッた、新らしい家風なんです、これに教育された元子さん達、矢ッ張りこの志をうけ継ぐでせう。

何にしても、こんなお家の女中こそいゝ迷惑よ‥‥あら、手癖の悪い女なら大喜こびだらうッて？　ホヽヽ。

×　M様

お故郷から出京ていらしつたお祖父様が、腕一本で築き上げた御財産、だからいつまでもその教へを守つて、M様のお家は全くの節倹主義です。

何十萬といふ財産家の令嬢が、絹物なんて身につけた事がない、遊ぶな働け主義、費ふな溜ろ主義、一人娘の仲子さん迄が、くる〳〵と駒鼠のやうに働いてゐらッしやる。よくまアあゝ身體がつゞくわねえ、それに本よむ閑もない程あくせくしてるのに、不平も仰しやらぬ仲さんは感心よ‥‥でも拜金主義にかぶれてお了いなつたのかしら——。

こんなお家は溜ッたら少しは吐く道も考へるのが必要でせうと思ひます、それから仲子さんなんて、時には本でも讀んで、世間を明るく遊ばせ、と一寸一片の老婆心から——。

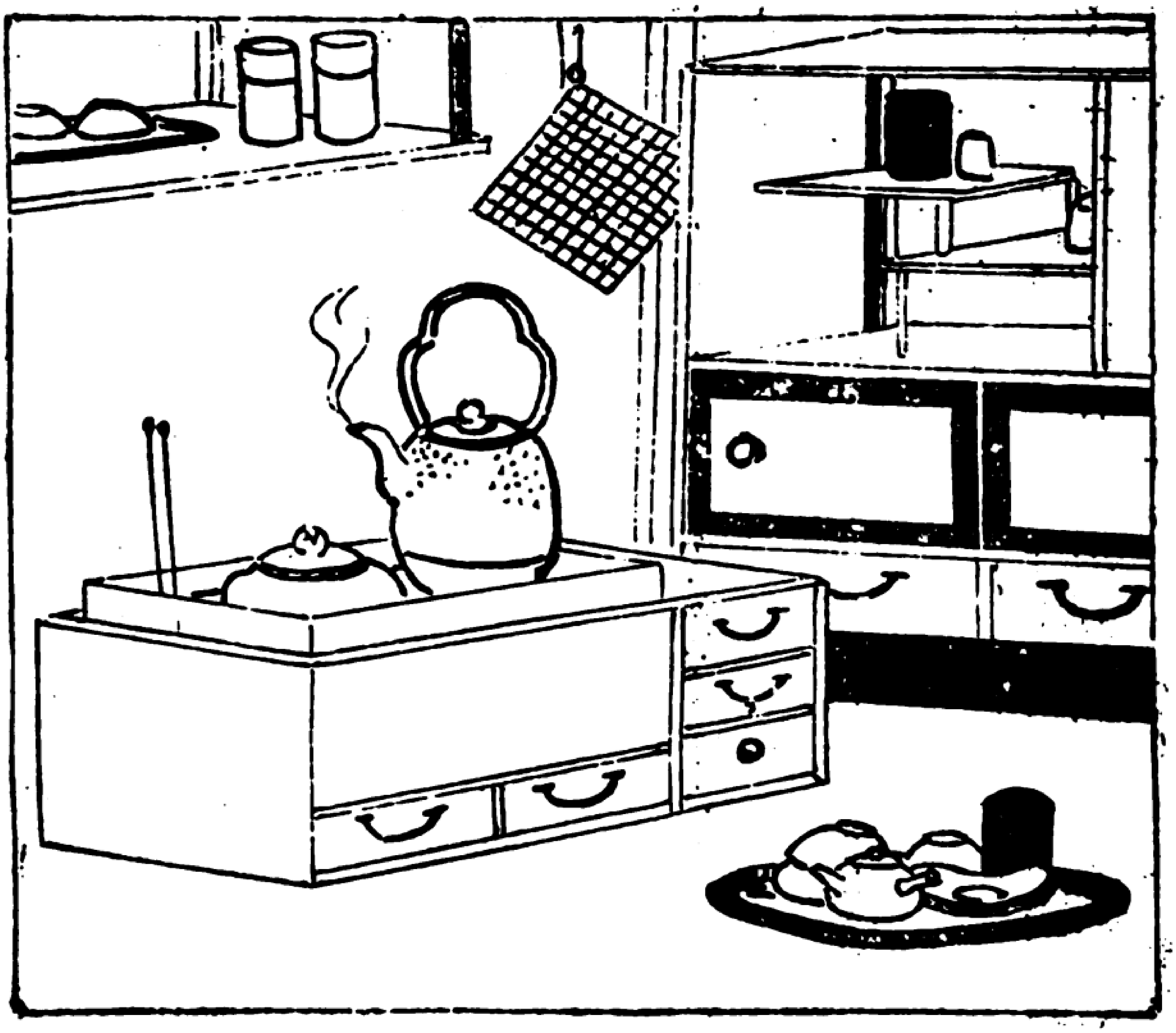
剛に失せず柔に流れず、嚴に過ぎず華に過ぎざる家風、それを誰しも好み乍ら、一つ〳〵にはなして見ると、さてそれ〳〵の異なつた風味のあるものです。

私は嚴格も放任も、華美も、質素も、皆程度問題だらうと存じ升。一方に偏せず過度に失しなかッたならば、

放任もいゝでせうし嚴格もいゝでせう。

餘り野放に教育をおろそかにしますと、兎に角人の心といふものは、惡い方に傾むき易いものです、女一通りの禮義もわきまへなければ、他家の家風の下に立つた時、人一倍の苦しみに泣かねばなりません。そうかと云つて嚴しすぎますと、のんびりした寛りした氣風を失ない、陰陽といふ惡い癖が、起らぬこともありますまい。質素がいゝと申しましても、またその方の一天張では、趣味に乏しい心が見えすくやうです、華奢に失しますと奥床しい品位が、なくなツて了ひます、家庭を作れば、世間との交際もありますから、突拍子な家風は善くあるまいと思ひます。

また儀式の様なものになりましても、その家々によツて、様々の法式風習がありますが、私はこれは精神的の家風（まアかりにさう名付けます）の様に、世の進歩と歩調を揃へてゆかなくツて、出來る限りは昔の儘の風を殘したいと思ひます。と申しましても、餘まりくどい儀式は、簡易にはぶく事も、家によッては必要でせう。



茶の間

新案文字の敎（一）

何だか、丸で謎でも掛けるやうな話だが、あの子守やおさんどんが知つて居るべき事で歷々の學士、博士達が始終間違へてゐらつしやるのは何だらうと問へば一寸頭をひねくられればならぬ、それは日本の言語の解釋である。文字の意味である。かういふと何だか又人を馬鹿にした樣な話であるが、よく考へて見ると全くさうだ。一體日本の文章、言語は世界中に多く其比を見ないほど難澁至極なもので、少し高尙ぶつていふと、子守やお三どんは扨置き隨分肩書のある先生でも往々間違つた事を仰つしやるのである、況んや學校の課目に忙がしい女生徒樣達は普通の日本文を習ひ覺えるのに隨分お骨が折れるだらうとおもひましてこゝに「文字の敎へ」と題して一寸字引のやうなものを拵らへて見ました、尤も字引といつても、ある限りの文字を出すのではない。唯日常尤も多く使用する言語を畫の順序によつて少しづゝ出して見るのです。つまらない樣でも、よく味つてごらんになると却々おもしろいです、なかなか意味が深いです。子守やお三どんどころか歷歷の學者先生達でも、こいつは馬鹿にならぬわいと仰しやる事は請合です。まあ、よく御目をとめて御覽なさいよ。貧ふた子に淺瀨を敎はるとはほんにこの事だ。そしてこの欄を一年つゞけて讀めば一廉の物知になりますよ。あなかしこ、穴賢

一の部

(一)イチ　㊀ひとつ。㊁ひとたび。㊂はじめ。㊃おなじ　ひとし。㊄もっぱら、ひとへに。

(一一)イチイチ　㊀ひとつひとつ。㊁のこらず。

(一人)イチニン　㊀ひとり。㊁天子さまのこと。

(一子)イッシ　ひとりご。

(一又)イチユウ　一ど二ど。

(一口)イッコウ　ひとふり。(刀などの)

(一夕)イッセキ　㊀ひとばん。㊁あるばん。

(一己)イッコ　じぶんひとり。

(一介)イッカイ　ひとり。

(一心)イッシン　㊀いつしようけんめい。㊁こころを一つにすること。

(一天)イッテン　㊀そらすっかり。㊁せかいぢゅう。

(一水)イッスイ　すこしのみづ。

(一日)イチニチ　㊀あさからばんまで。㊁ある日。

(一夫)イップ　㊀ひとりのをとこ。㊁ひとりのをっと。

(一切)イッサイ　のこらず。

(一片)イッペン　ひときれ。すこし。

(一半)イッパン　はんぶん。

(一旦)イッタン　いちど。

(一白)イッパク　いったいにしろいこと。

(一世)イッセイ　㊀そのじぶんの　よのなか。㊁いちだい。

(一札)イッサツ　いちまいのかきもの。

(一本)イッポン　いっさつのほん。

(一句)イック　ことばや、ぶん　などのひときり。

(一字)イチウ　いっけんのうち。

(一式)イッシキ　のこらず。

(一件)イッケン　あるできごと。

(一存)イチゾン　じぶんひとりのかんがへ。

(一名)イチメイ　㊀ひとり。㊁べつのなまへ。

(一同)イチドウ　みんな。のこらず。

（一向）イツコウ　㊀いつしようけんめいになつて、ほかをかへりみぬこと。㊁すこしも。
（一再）イツサイ　一二ど。
（一列）イチレツ　ひとならび。
（一行）イツコウ　㊀ひとならび。㊁みちづれ。
（一曲）イツキヨク　なりものなどの一くぎり。
（一死）イツシ　いのちをすてること。
（一弛）イツシ　いきほひの おとろへること。
（一決）イツケツ　ひとつにきめる。
（一身）イツシン　じぶんのからだひとつ。
（一見）イツケン　ひととほりみること。
（一歩）イツポ　ひとあし。
（一技）イチギ　ひとつのげい。
（一角）イツカク　ひとつのすみ(隅)。
（一更）イツコウ　よるの八時ごろ。
（一系）イツケイ　㊀ひとすぢ。おなじちすぢ。
（一門）イチモン　㊀おなじいへがら。㊁しんるゐ。
（一抹）イチマツ　ひとなすり。
（一物）イチブツ　あるもの。
（一服）イツプク　くすり、ちや、たばこなどを一くち。
（一周）イツシユウ　ひとまはり。
（一炊）イツスイ　めしを一どたくひま。
（一味）イチミ　なかま。みかた。

（一具）イチグ　ひとそろへ。ひとくみ。
（一泊）イツパク　ひとばんとまること。
（一命）イチメイ　いのち。
（一念）イチネン　いつしよけんめいに おもひこむこと。
（一面）イチメン　㊀かた いつぱう。㊁すつかり。
（一品）イツピン　㊀ひとつのしな。㊁すぐれてよいしな。
（一計）イツケイ　あるはかりごと。
（一洗）イツセン　きれいにあらふこと。いつぺんにあらふこと。
（一軍）イチグン　㊀のこらずのぐんぜい。㊁ひとかたまりのぐんぜい。
（一律）イチリツ　㊀おなじちようし。㊁いつもおなじようにておもしろくないこと。
（一首）イツシユ　うたなどを かぞへるときの一つ。
（一段）イチダン　㊀ひときり。㊁ずつと。
（一括）イツクワツ　ひとくくり。
（一派）イツパ　あるりうぎ(流儀)やしゆうし(宗旨)からでたわかれ。
（一陣）イチヂン　ざつと ふいてくるかぜを一陣のかぜといふ。
（一室）イツシツ　ひとつのへや。

（一氣）イキ　ひといき。ひとおもひ。
（一能）イチノウ　ひとつのはたらき。ひとつのげい。
（一流）イチリユウ　ひとつのりうぎ。
（一酌）イツシヤク　ざつとしたさかもり。
（一家）イツカ　㊀いつけんのうち。㊁うちぢゆう。
（一笑）イツセウ　㊀ちよいとわらふこと。㊁わらひぐさ。
（一般）イツパン　㊀のこらず。㊁ひと とほり　㊂おなじ。
（一時）イチジ　㊀まへに。㊁いちどに。㊂ひとまづ。
（一隻）イツセキ　いつそう。(ふねの)
（一致）イツチ　㊀おほぜいが きをそろへること。ものごとがすつかりあふこと。
（一座）イチザ　おなじざしきにゐる人のこらず。おなじなかま。
（一退）イツタイ　いちどしりぞくこと。
（一眸）イチボウ　ひとめ。
（一毫）イチゴウ　㊀ひとすぢの毛。㊁すこしばかり。
（一敗）イツパイ　いちどまけること。
（一張）イツチヤウ　いちどい きほひ のさかんなること。

(一隅)イチグウ　ひとつのすみ。
(一掃)イッサウ　いちどにはらふこと。
(一族)イチゾク　㊀しんるゐのこらず。㊁しんるゐ。
(一眼)イチガン　かため。
(一條)イチジョウ　㊀一すぢ。㊁一つのことがら。
(一通)イッツウ　てがみや、かきものなかぞへるときの一つ。
(一連)イチレン　一つづき。一つながり。
(一途)イット・イチヅ　一つのみち。一すぢ。
(一帶)イッタイ　一すぢ。(ぢめん(地面)などにいふ。)
(一章)イッシャウ　し(詩)やぶん(文)などのひときり。
(一斑)イッパン　㊀あらまし。㊁ごくわづか。
(一期)イッキ　一くぎり。(じかん(時間)の。)
(一期)イチゴ　いっしやうがい。うまれてからしぬまで。
(一貫)イックワン　ものごとを、やりとほすこと。
(一統)イットウ　ひとつにまとめること。
(一進)イッシン　いちどにすゝむこと。
(一揆)イッキ　なかまをつくって、らんぼうをしたり、又は金やしなものを、うばひとるもののこと。
(一飯)イッパン　一ぱいのめし。
(一朝)イッチョウ　㊀ひとあさ。㊁あるとき。㊂なんどき。いつたん。
(一椀)イチワン　たべものや、のみもののいつぱい。
(一散)イッサン　わきめもふらず。
(一義)イチギ　ひとつのわけ。
(一節)イッセツ　ひときり。ひとふし。
(一新)イッシン　のこらずあたらしくすること。
(一葉)イチヨウ　㊀いちまいのは(きやくさの)㊁かみなどの一まい。
(一粲)イッサン　いちどわらふこと。
(一遍)イッペン　㊀いちど。㊁ひととほり。
(一旒)イチリュウ　はた(旗)や、のぼりの一つ。
(一圓)イチエン　のこらず。
(一齊)イッセイ　のこらずそろって。みんないちどに。
(一廉)ヒトカド　ほかの人よりもすぐれた。
(一說)イッセツ　あるせつ。(たくさんあるうちの)。
(一端)イッタン　㊀ひとつのはじ。㊁わづか。
(一碧)イッペキ　いちめんにあをいこと。
(一圖)イチヅ　ひとすぢに。
(一駄)イチダ　一びきの馬につんだにもつ。
(一對)イッツイ　ふたつそろつてゐるもの一くみ。
(一睡)イッスイ　すこしねむること。
(一睹)イット　ひとめみること。
(一篇)イッペン　ぶんしやう(文章)などのひとつ。
(一撮)イッサツ　ひとつまみ。
(一緒)イッショ　ともに。ひとまとめ。
(一瓢)イッピョウ　ひとつのひょうたん(瓢箪)
(一興)イッキョウ　ひとつのおもしろいこと。
(一概)イチガイ　ひきくるめて。おしならして。
(一擧)イッキョ　ひとはたらき。
(一禮)イチレイ　いちどのあいさつ。
(一擲)イッテキ　のこらずなげだすこと。
(一擊)イチゲキ　ひとうち。
(一縷)イチル　㊀ひとすぢ。㊁ごくわづか。
(一點)イッテン　㊀ひとつのてん。㊁ごくすこし。
(一瞬)イッシュン　めばたき一つ。ごくわづかのあひだ。
(一應)イチオウ　ひととほり。いちど。

(一雙)イッソウ　ひとそろへ。ひとくみ。

(一轉)イッテン　㊀いちどかはること。㊁いちどまはること。

(一蹶)イッケツ　いちどつまづくこと。

(一轍)イッテツ　㊀ひとつみち。おなじあと。㊁いっこく。がんこ。

(一藝)イチゲイ　ひとつのげいごと。

(一議)イチギ　いちどのさうだん。

(一躍)イチヤク　ひととび。ひとはね。

(一覽)イチラン　ひととほりみること。

(一變)イッペン　いちどかはること。

(一襲)イッシュウ　ひとかさね。(きものなどの)

(一體)イッタイ　㊀おなじからだ。㊁ならして。いっぱんに。㊂ぜんたい。

(一丁字)イッテイジ　ひとつのもじ。(文字)

(一大事)イチダイジ　ひとつのおほきなできごと。

(一刹那)イッセツナ　ごくわづかなじかん。

(一里塚)イチリヅカ　むかし一里ごとにみちばたに、つちをもり、きをうゑてめじるしとしたもの。

(一面識)イチメンシキ　いちどあつてしつてゐること。

(一張羅)イッチャウラ　いちまいしかないはれぎ。(晴衣)

(一霎時)イッショウジ　わづかのあひだ。

(一機軸)イッキジク　あたらしい、くふう。

(一天萬乘)イッテンバンジョウ　てんしさま。

(一五一什)イチゴイチジュウ　「一部始終」とおなじ。

(一所懸命)イッショケンメイ　いのちがけ。しにものぐるひ。

(一字千金)イチジセンキン　ひとつのじ(字)が千金にあたるほどだいじなほめることば)

(一利一害)イチリイチガイ　りえき(利益)と、がい(害)とが、ともなふこと。

(一得一失)イットクイッシツ　ひとつはよくて、ひとつはわるいこと。とくのあるかはりにそんもあること。

(一知半解)イッチハンカイ　なまものしり。

(一刻千金)イッコクセンキン　いっこくが千圓にもあたるおもしろいとき。

(一部始終)イチブシジュウ　㊀ある本のはじめから、をはりまで。㊁はじめから、をはりまで。

(一氣呵成)イッキカセイ　ひといきにしあげること。はやくしあげること。

(一唱三歎)イッシャウサンタン　いちどよんでたびたびほめること。

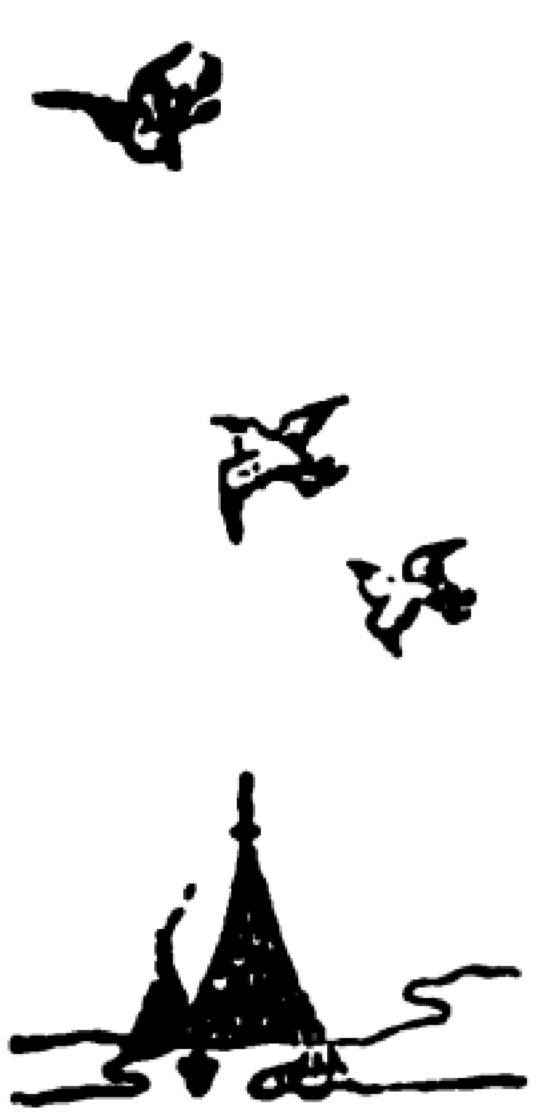
(一衣帶水)イチイタイスイ　はばのせまい川や海。

(一騎當千)イッキトウセン　一騎(うまのり一人)で千騎にむかふほどのゆうきあること。

(一瀉千里)イッシャセンリ　いちどみづをそそげば千里もながるること。ものごとをごくはやくしあげること。

(一攫千金)イッカクセンキン　いちどにたくさんのかねをもうけること。

(一髪千鈞)イッパツセンキン　いっぽんのかみのけでおもいものをささへること。(ごくあぶないことをたとへるにいふ)



毛利公爵母堂、岩倉公爵夫人、鍋島侯爵夫人
大隈伯爵夫人各序　牧野伸顯男書簡
◉鳩山春子夫人著　クロース製全一冊

婦人の修養

定價　金壹圓貳拾錢

郵稅　金拾錢

本書は婦人界に名聲高き鳩山春子夫人が内外の務め繁きうちに深き素養と、廣き見聞と富める經驗とを以てものし敢て新奇に走らず腐を套はず能く其中庸を得たる好著と謂ふべし之を讀みたらんには母たる人は育兒教へを聞くべく社交の婦人は交際の術を學ぶべく一般婦人は常識修養の指鍼とすべし各女學校は最好の參考書として如何に偉大なる感化を受くべきか誠に得がたき現代婦道の木鐸といふべし

發賣元　東京本町　博文館

女(その二)

木村鷹太郎君新著

世界的研究に基づける

日本太古史

卷上

洋裝菊判上製表裝清楚

紙數八百四十頁
コロタイプ寫眞版一枚
石版四枚木版畫挿入
正價金二圓
小包料十二錢

破天荒の研究空前の大發見

日本民族の太古史は極東の小島國史に非るなり若夫れ博大なる世界的知識に基ける新研究法を以つて神話及び言語の比較を行ひ又吾太古史地理に就て嚴密なる攻究を行ふ時は國典吾人に示すに日本人は希臘羅典系民族の宗祖たり世界文化の率先者たり又我民族は太古小亞細亞に起りて希臘より埃及に遷り此を中津國として西は伊太利より東は波斯、印度、暹羅に至る大帝國を建成し居りし歴史を以てす。且此新研究を以てする時は從來難解不可解と爲し來れる言語・地理神事、風俗、習慣等盡其明解を得る事[illegible]榮登る朝暾の積雲濃霧を照散するの觀あり。是破天荒の大研究空前の大發見。本書は實に史學、人類學、言語學に關して日本は勿論世界の學界に一新紀元を開くものと謂ふべし。

本書第一卷は神史、言語、風俗等に就て日本に希臘羅典及び猶太民族の夫れを比較し彼我男女の神々の史傳は美麗なる辭を以て之を叙述し言語の比較は有益愉快の知識に充滿す、又珍奇の挿畫數十、普く一般の讀本に適し而も研究態度の嚴正なるは學者必至の研究書なり。

下卷は日本太古史地理の世界的說明にして將來の日本的迷夢を打破し精密無比の歴史地圖數葉を挿入して續出す。

發賣元　博文館

東京日本橋本町
振替東京二百四十番

女(その四)

紐育市體育局長 ルーサー、ギュリック著
醫學博士 シドニー、ギュリック

水野和一君共譯

健康の生涯

全一冊四六判並製紙數二百頁
正價金四十錢 郵税六錢

著者は生來蒲柳の質で、靑年時代に廢學せねばならぬ程であつたが、非常な意志力を揮つて體育法と醫學とに心を注ぎ、終に強健な體格と旺盛な元氣とを造つて、米國で有名な體育家となり且つ醫學博士となつた◉本書は著者が多年の實驗の結果として生れ出たもので、頗る簡明に健康術の秘奥を說き示して居る◉心身の不健全な人が此書を讀んで、活氣が生じ體力が加つて愉快に仕事が出來だしたといふ例は非常に多い◉而かも本書の示す健康法は、誰れでも實行の出來るものだから、學生や、敎師や、官吏や、實業家や、又は婦人など、凡て運動不足の人々に取ては、特別に有益である、

四明翁 中川重麗君著

形似神韻

觸背美學

一名 新俳諧美學

洋裝菊判並製紙數約三百五十頁
正價金四十錢 郵税八錢

本書は俳諧不離不即の理を推して繪畫、彫刻、演劇、能樂、音樂、建築、模樣等の藝術は勿論、非獨立の諸藝術にも及びパノラマ、ヂオラマ、活人畫、盆栽、盆景、生花、園藝、儀式作法の類に至るまで諸家の義論を引證して說明を下し挿畫にはロダンの傑作あり印象派の代表作あり加ふるに多くの俳句を加へたるもの松本亦太郞博士本書を一閲し書を寄せて曰く離即の一義を以て萬の美術御說明相成御手際誠に心地よく云々又曰く殊に日本の藝術に重きを置き云々以て本書の價値を窺ふべきか請ふ速かに購讀あらんことを

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

女(その五)

文學博士坪内逍遙君序　文學博士上田萬年君序

◎文學士佐々醒雪君著

俗曲評釋

全部六冊　各冊紙數約二百九十頁　洋裝四六判總布美本　正價一冊五十五錢　郵稅六錢

近世三百年の歌謠、俗曲中の名篇は悉くここに網羅せられたり、著者は現代唯一の俗曲研究家にして且つ頗る近世の文藝に精し、況や各篇現代の風俗に精通せる諸方が百方考證を重ねたる艶麗なる挿畫あり乞ふ、世間の片々たる評釋書とは同一視せられざらんことを

- 第一編　▽江戸長唄　全
- 第二編　▽箏唄　全
- 第三編　▽河東　全
- 第四編　▽上方唄　全
- 第五編　▽小唄と端唄　全

（續刊）第六編　◎常盤津

（東京）博文館（本町）

女（その六）

家政上手な我が妻

藥學博士　長井長義

三月二十七日にテレーゼ夫人と銀婚式を擧げられた藥學博士長井長義氏を青山のお邸にお尋ねしたのは銀婚式の一週間後でした　此日は日曜で夫人の應接日でしたから、英國人の夫妻を始めとして、紫矢絣の令孃や、お召縮緬の奥樣なぞが、銀折鶴の天井からぶら下つてる應接室にズラリと列んで居られ、盆栽の君子蘭や寳丸餠も佳香を漂はして夫人は來客の應接にお忙しい所でした。（婦人記者）

▲結婚當時は妻が困つた

結婚後二十五年間別に之れぞと云つて取立てゝ話すこともありませんが、風俗習慣の違ふ不自由を堪へ忍んで、今日まで私は少しも内顧の憂なからしめた事は妻に對して竊かに感謝して居ます。結婚當時妻が一番困つたのは、下女を使ふとでありました。何しろ日本の下女は責任の觀念がなくて、一から十まで主婦が指揮しなければ用が辨じない所へ、言葉が通じないのですから、隨分閉口しました。

▲味噌と水の間違

妻は別に敎師を聘んで語學の稽古をしたのでは無く、家事向の言葉は家婢を先生として學んだのですが、最初の内は隨分滑稽を演じました。妻が水を持て來いと命した積りで居ると、下女は大急ぎで味噌を買つて來たやうなとがあります。そして家は洋風で妻には便利であつたが、私の國元（德島）から呼んだ下女は洋室の勝手が少しも分らず、入口や出口に間誤付くと云つたやうな譯で、毎日喜劇を演じて居ました。

▲妻は借金濟に來たやうなもの

私は十八の時に出京して、頗る苦學しました。それから二十四歳で獨逸へ留學を仰せ付けられて、彼地に十二年間居つたが、留學年限が切れてから二年間、又自分の望みで留學を續けて居ました。其の爲に丁度四千圓ばかり借金が出來たのですが、妻はこの借金濟に嫁入つたやうなものです。此の借金を返して、これま

でに濟ぎ付けたのは、畢竟妻の經濟法が巧みであつた爲と思つて居ります。

▲吾々の收入は誰も知つて居る

吾々役人の收入は誰も知つて居る通りで、ちやんと定まつて居ります。其の確まつた收入で同格の人達より立派な體裁に生活して居るのに、負財が出來ないのみか、却て幾分か殘つて行きます。これは妻のお陰だらうと思ひます。私は日本の婦人を妻に持て見ないから解らぬけども、日本の婦人を妻にして居たら、恐らく斯うは行くまいと思ふのです。日本の婦人は、遺憾ながら經濟の敎育を受けて居ないから、定つた收入で體裁を張らうとすれば負債を作り、儉約貯蓄をすると、馬鹿にシミツタレると云ふ風があるやうですが、西洋婦人はそれを體裁を整へて社會を飾り、これを巧く遣つて行くやうです。外面ばかり見ると、西洋婦人を妻に持つのは經費倒れの樣に思はれるかも知れないが、それは大なる誤解です。尤も最初の内は風俗習慣の違つた者を仕込むのだから、一時幾分か費用の嵩むこともあるが、少しく慣れると、次第に無益の費用を省くので、年を積む間に自然餘裕を生じて來ることは、私の實驗上確かであります。先づ今の私の家ぐらゐなら、普通四人の家婢が居なければ、間に合はぬ譯だけれどもそれを二人で十分用を辨じて居ます。若し家婢が彼地のやうに技倆があつたら一人でも澤山でせう。斯く人手の省けるのも、畢竟規律が正しいのと、家族全體で家事を働く爲めです。御覧の通り倅は取次の役を勤め娘は小間使の役を勤めて居ります。

▲子供に絹を着せる弊風

妻は何時も世間で子供に絹を着せる風習を歎いて居ります。これは私も弊風であると考へて居るのです。幾ら西洋に比べて絹が廉いと云つても、年々に成長する子供に一時的の美服を纏はせて、後は廢物にして了ふそれのみならず女の子などは、益々虚榮心を養成されて、學問の修養に遠ざかつて行きます。西洋では社交

に出す年齢になれば、社會に對して相應の服裝をさせるが、勉強盛りの時代の衣服は實に質素な物を與へます。又主婦となつては、勿論衣服の體裁を重んずべきであるが、滅多に着ない絹物を何枚も簞笥へ藏ひ込んで置くのは、不可思議千萬です。妻などは應接日だけ彼の通り立派にして居るが、常服は甚だ少く、平素はひどい服裝をしてセッセと家事を働いて居るのです。而して一枚拵へたら、それを樣々に工夫して作り直し時勢相應の體裁を作つて居るのですから、被服費は實に少いものです。娘も此風に仕込んでありますから、自分で工夫算段することに熟練して居るので、一枚でも人手に掛けたことはありません。

▲洋服に限る

經費を省いて體裁を宜くするのは、どうしても洋服に限ります。が併しこれを一時に改革するとなると、金が多くかゝるから一寸臆劫になります。と言つて何時までも日本の服裝で押通して改革することをしなければ日本の紳士は女の着物に壓迫されて發展が出來ますまい。此の服裝の改革が出來れば、初めの內にかゝつた金ぐらゐは直に取返しが付きます。

白髮蒼顏の博士は、風采も話し振も、所謂バンカラと云ふ方です。西洋婦人を奥さんにされた日本紳士は大概長井博士のやうに、バンカラ風なところがあるやうですが、それで却て一家の調和が宜いものと見えます。

學問ばかり熱心にして悲慘に終りし婦人の實例

棚橋絢子

△必要な事と不必要な事

私が若い婦人に申して置きたいのは、必要なことに骨を折つて、不必要なことには、身心を勞しないやうにせよ、而して必要なることは、自然の要求で、割合に骨は折れないけれども、必要でないことは、不自然である丈に、餘程身心を勞するものであるといふことです。例へば親に孝行をする、人に同情を表する、勉強する忍耐するといふことは、自然の要求でありますから、左程に骨は折れませんが、之に反して、親の命令を用ゐず、人に反感を持ち、或は勉強しなかつたり忍耐しなかつたりする事は、不自然でありますから、却て孝行、同情、勉強、忍耐等よりも數倍の心配をせねばならず、而も其の結果は、非常に面白くありません、たとひ終りに面白く行つても、強て自ら心身を苦め同じ事をしながら、人に左程好く思はれないものであります。されば、そんな餘計な不自然なことをせずに自然で必要な事を猶豫なく實行するやうにしたいものであります。

△學問で身を立てるに適する婦人

又高等女學校を卒へると、何でも其れ以上の學校に入つた方が、立優れて居るやうに思はるゝのですが、決して其んなものではありません普通婦人の本務は、然るべき良緣を求めて他家に嫁し、良妻となり、賢母となるのですから、大槪に家が貧乏であるとか、一人娘で家の名跡を繼ぐに是非或種の資格を要する時とか親は貧乏で、跡取は幼稚なとか、非常な醜婦であり、又は家系が惡くて嫁したくも嫁することが出來ないと

か、早く後家になつて已むなく獨身生活を送らねばならぬ場合などには、據ん處なく教員を志願したり、獨立した職業を求めたりするのが必要でせうが、普通の甲斐性ある婦人は、決して其んな必要はない、先づ高等女學校位卒業したら、家庭の實際に通曉して、良縁のまに／＼嫁して、立派なる主婦となるのを目的とせねばなりません。

△複雜な手腕

併し高等女學校を卒業した丈では、學問にしても、女藝にしても、ほんの手ほどき位のもので、之を實地に應用し、尙之を進めて、主婦の活動を全うせんには却々の忍耐と勉强とを要し、男子に劣らぬ複雜なる手腕を要します。耳に聞いて口で言ふといふやうな女學者よりは、主婦の責任は、至つて重くて高尙であります。婦人の高等敎育(專門敎育)は其の天才又は前述のやうな境遇に依つて必要もありますから、一概に排斥出來ませぬが、唯婦人としては、變則なことであるといふことを承知して戴きたいものです。けれども高等女學校程度の敎育は、誠にやさしいもので、之を實地に應用し、布衍して行くには非常な苦心を要します。例へば裁縫や料理の法則を聞いても、之を自在に應用して行くことはなか／＼むづかしいのです。修身の條目、家事の條目も、之を應用したら、無限なことになります。されば、高等女學校の卒業者は養老、裁縫、洗濯、掃除、或は接客、割烹等いろ／＼なことに親むのですが、此の實地に通じ、家事に熟練して餘裕が出來ましたならば、讀書其他の學術に親しむ事も大切であります。

△夫の不幸を喜ぶ婦人

其れから嫁入する人は、よく舅姑のない家を望むやうですが、之れは一面から申せば良人の不幸を喜ぶといふ事になります。二十代や三十前後で、兩親に死別れたり、別居したりして居る男子は、實に不幸なる運命の人であります。自分でも、父母若くは兄弟が居な

いといふことは、何より哀しく思ふものなるに、良人には父母や兄弟が居ない方が宜しいといふことは、何といふ心得違でありませう。此んな考で、どうして人世の幸福が希はれやうといふことを、記憶して居つて戴きたいのです。

△途方に暮れる苦學生

婦人の本務を忘れ、學問ばかりに親んで、目的を達することを得ない實例を申しますと私方へ、時々地方などより、出京勉學を切望して、



私の助力を頼むやうな手紙が參るのですが、先年已が境遇の拙さを感じ下女奉公でもして、勉學したしとの、切なる思を込めて、私に頼んだ女學生がありました私は已に職務を有すると、さう勉學は、出來ぬ、勉學の爲に下女奉公するといふことは、むづかしいことで、たとひ私方に置くとした所が、何事を爲しても勉學の餘裕を念頭に置くやうな人では如何にも使ひ難いから、餘り希望はしないし若し使ふことにしても、家族の者が厄介に思つては、矢張

面白くありませんから、私方で使ふことは廢めましたが、幸ひ心安き方で、使つて呉れることになり、一年ばかり奉公することになりました。其れでも、餘り受が宜くない様子でしたから、幸ひ某女史に談して、其處の下女を勤めつゝ、專修科に入ることになり、勉強して、遂に其處を卒業しました。是れで目的の一部は達したものゝ、たゞ是れ丈では物足らぬ、今少し高等な學校に入りたい様子だけれども、學問のことを心頭を離さず、人が用を言付けても、左程機敏に打働かず際さへあれば讀書に親みたいといふ有様だから、何處に行つても成績が好くないので、誰とて引受けて遣るといふ人もありません。だからといつて、學術上の成績でも、好ければ、亦取得もありますが、さうでもないのですから、本人も途方に暮れて居ります。其れに寄る人を定めずして、多くの人に口をかけたから、何處からも讓り合ひをして居るといふ有様です。で私は之に諭して、其れはお前さんの心得方に惡い所があります、何故といふに、下女奉公をするなら、十分に注意して職掌を盡し、氣を利かして主人の痒い所に手が屆くやうにしたならば、主人も亦お前さんが學事に熱心なのに同情を表して、夜間なりと十分に勉強をさせるのです、尚亦相當の期間十二分に働いたら、それに感じて將來のことをも心配するものであります。然るに之れに氣がつかず强て自分の希望ばかり、熱心に達せんとするから、主人からも同情を表せられずして、虻蜂取らずに終るのですと申しました。

△生死不明となつた女學者

のみならず婦人が、學問ばかりに凝つて居たなら、只に婚期を誤るのみならず、幸に良縁があつて嫁ぎましても、良人のするやうなことに趣味を持つて、動もすれば讀書に耽つたりする所から、大切なる家庭の事が疎かになり、育兒も、割烹も下女任せになし、經濟も何にもない、入る丈は費ふといふ有様だから、到底家庭を豐にし、平和にすることは出來ません。之れが適例として、一人の婦人があります。幼い頃から神童

と呼ばれた才女でありましたが、長じて或る學校の教授となり、獨身生活もなしかねて、幸に某高等官に嫁ぎました。所が、朝起ると身仕舞よりも臺所のことよりも、第一に讀書するといふ有樣で、障子が破れやうが、廢れ物が出來やうが、丸で下女任せで、自分はせつせと學校に教鞭を執つて居りまして、餘程の收入はあつたのですが、此の如うな經濟の仕方では、どう



しても家事が甘く行きません、數年ならずして、多くの高利貸などに責められ、終に身代限の處分を受けて、今日にては生死さへ判らぬ有樣となりました。でありますから男子と女子と同じ事をして居ることは、相方の爲に好くありません互に及ばぬ所を勵み合はねばならぬので、婦人は何處迄も家庭の空氣に觸ることが第一であります。

前世式と當世式

露子

A「面白い對照が出來るでせう、根本から違つてゐるのですからね」

B「さうですねあなたのお家は御夫婦が丸で主從の樣な關係ですからね」

A「ほんとに私の家はね萬事主人の權限内にあるのですから丸で封建制度ですよ如何なる事ありとも主人の命には服從すべき事といふのが第一條なんですから」

B「私の方は御覽の通り妻は夫の相談役なるを以て常に常識の養成に務め精神の修養を怠らずよく其任務を盡すべき事なんて、餘程持あげてゐるでせうホヽヽ」

A「あなたのお家には神棚がありませんね、私等毎朝必ず神樣と佛樣の前で御拜をしなければなりませんの、そして皆一しよにお膳について此處で朝の挨拶の交換を致します」

B「マア六ヶ敷事ですね、私共には神棚はありませんが毎朝主人は冷水浴私は冷水摩擦をして後東に向つて深呼吸を致します、これは兩人共缺かした事はありません」

A「ほんとに新式ですよ、そして食事は必ず主人と一しよでなくては致しません、私はよろしいですが母も必ず待つてゐますから自然主人も朝寢坊もならず、夕方も食事時迄には萬已むを得ない時の外は歸つて來ます、中々窮屈ですよ」

B「私共では食事の時間が定まつてゐますから其時が來ますれば誰が居なくつても、下女一人でも必ずたべて仕舞ます、だからよく日曜なんかには主人と散歩にいつて洋食なんか食べてかへると下女はちやんと自分の事をしてゐます、却々呑氣ですよ、其代り土曜の晩は來週の仕事の一般から獻立表迄すつかり作らんければなりませんから却々ですよ」

A「私共にはそんなきまりはありませんの、お姑樣が

毎日のお料理は朝お定めになる、お仕事も毎日お言ひつけなさるから其れさへすればいゝのですよ、其代り思ふ樣にはちつともなりませんの」

B「お洗濯でもお家のお姑樣は八釜敷いのですつてね、いつか下女が話てゐましたよ」

A「ハア家内中のを別々に洗はんければなりませんのですよ、無論男物と女物とは小切れにいたるまで一しよにしられませんの、女物でもね着物はよろしいですが、襦袢なんかは私のものとお姑樣の物と一しよに洗はれんのですよ、竿でもね、着物の竿襦袢の竿足袋の竿と定まつてゐますの、六ケ敷でせう」

B「私共は一心同體と定めてありますからそんな區別はたてません、只私が心で濯ぐ時に主人のものを先に濯ぎますだけです」

B「おうちでは出納の事はどなたがなさいますの」

A「主人が全權を握つてゐましてね、大抵通帳でとります、月末に母が通帳を主人に示しますと夫れ〲金を渡します、そして母にも私にもお小遣を與れますですから主人は何に幾ら使ひますのやら、幾何貯金が出來ますのやら、何處にどんなお金がありますのやら、田地でも只お米を持つて來ますから田のある事を知る丈けで何所にあるのやらちつとも存じませんの」

B「マアお姑樣も御存じないのですか、若しかの事のあつた時には其れは闇ですね」

A「イーエそれはちやんと書き物にして何時主人が亡くなつても分る樣に遺言狀と一しよに毎年大晦日に作つて變りのあつた度に訂正するのですつて言つてゐましたよ」

B「私共の家は簡單なものですね、着物一枚買つても帽子一つ買つても皆相談の上ですから、どちらが何時亡くなつても分らぬ事なしです、又何もないのですものねヽヽヽ

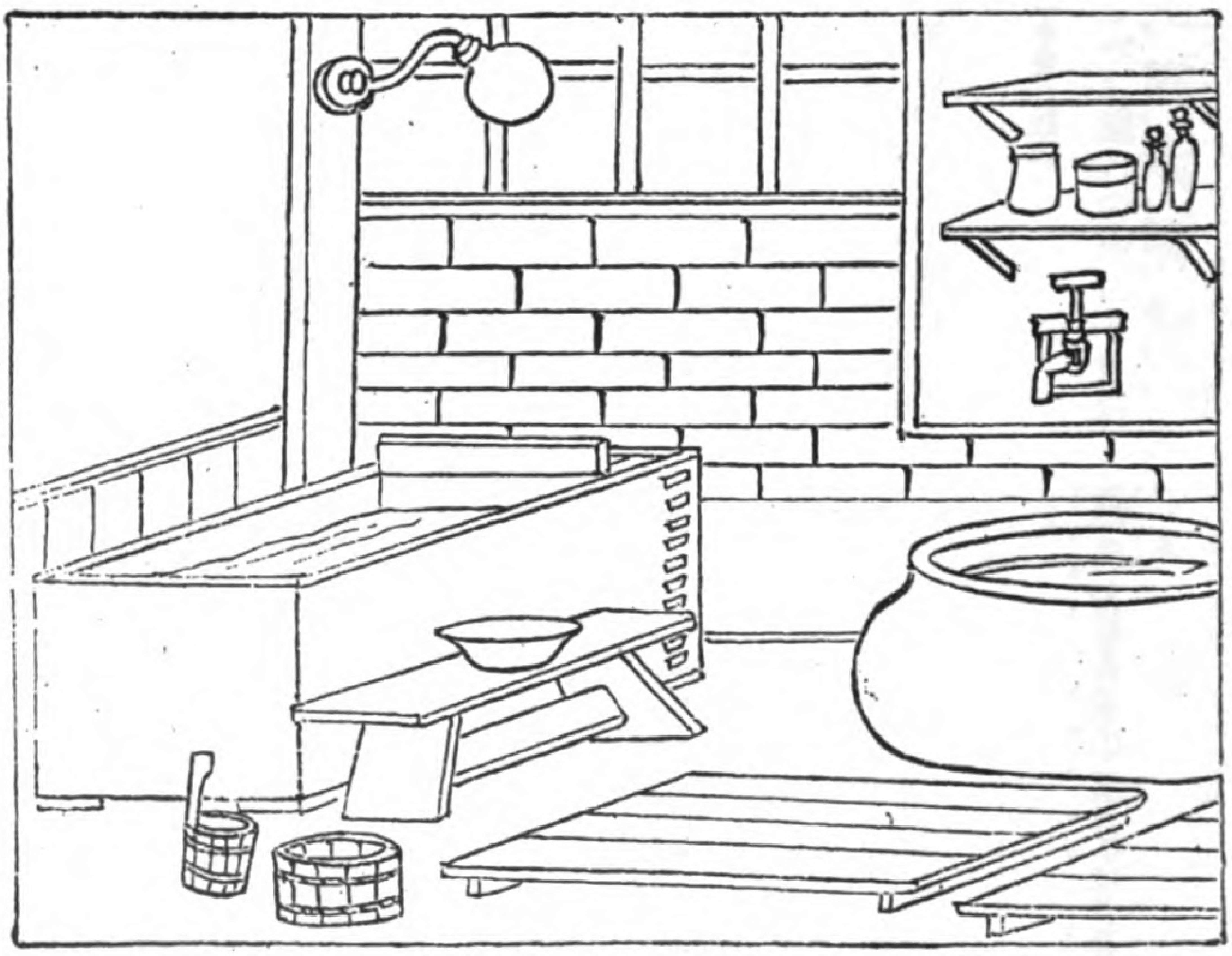
A「あなた所はそれでいゝのですけれど私共には兄弟もあり係累が多いゝですものね、お嫁入の時なんかの賑かさと來たらお話になりませんよ」

B「ほんとに面倒なものでせうね」

A「五月蠅ですよ二度のお藪入と春秋二季の彼岸の祖先祭には隨分と心を痛めます、又五節句でもねちやんと書き物になつた規則がありましてね、お料理でも何でも皆それによつてするのですよ」

B「では冠婚葬祭の御儀式もちやんと定まつてゐるでせうね」

A「はあそれは何でも何とかいふ蟲の喰はぬ薬をはいた紙の帳にかいてあるのですつてお姑様が仰しやつた事があります、そしてね主人の生れた時に頂いた品物の書付も其外の兄弟のも皆ありますのですつて、ですから無論舅の病



浴場の設備

中の見舞人や頂いた品、亡くなつた時の傳人贈物等はまだ大切にして仕末してあります、何にも二代とか保存するのですつて」

B「さうですか、私共はほんとに亂暴ね、よく實家の母が新式もよいが舊式にもよい事があるよと申しますがね、ほんとに盆もなければ正月もない、大祭祝日に自分等の好むものを拵へて祝ふばかりで、お節句とか何とかいふ時にはいつも實家にいつて御恩恵を蒙るのですよ親戚や知人の內に吉凶がありますと幾何と定めた額に相當したものをお贈りします」

和歌





一等　○　下谷　佐藤冬子

思ひでのもれいづるゑみをつゝみかねおもてをかくす春雨のかさ

評、青春の血やさしく湧くの状を活叙し、情景宛然見るか如し。袂袖は袖などいふべき所に、春雨の傘を出して、興意轉々新なるを覚ゆ、

二等　○　小石川　下田有容子

肩揚げのとれしほこりに十八の春はいさゝか物ほりぞする

評、いさゝか物ほりぞするとは、面白き言ひ樣也。

二等　○　下谷　松藤龍子

打つれて春をいそがぬ旅なれや大和めぐりの若草の道

評、和平の氣象温雅の調と、相待ちて、此の秀作を出す。

三等　○　山形　ちどり子

結ばれしえにしの緑を立つ虹のいづれの色と君思し召す。

評、赤縄天上より落つるの概あり。唯えにしの緑と立つ虹との關係稍唐突なるを憾むのみ。

三等　○　攝津　和久かつ子

さいかちの芽にやはらかく雨そゝぐ春の夜頃のなつかしきかな

評、品のよき歌也。下句殊に妙。

三等　○　小樽　香子

仰ぎ見ぬ夢より淡きにひ月を梨の花散る夕扉によりて

評、美しき歌也。新月、梨の花散るなど、いやふさはし。

秀逸

○　信濃　石田芳子

散りしける花の五ひら合せ見て暮れ行く春の鐘の音かぞふ

評、來懐一に何ぞ長き。

○　　奈良　塚田秀子

春の夜は夢も想ひも花も灯もなべて朧ろの中にとけ行く

評、想調共に美はし。

○　　横濱　佐野孝子

靜けさは鐘つき終へて其後に徹かにつゞく細き餘韻よ

評、着想奇警。

○　　本郷　幸子

馬子歌の末は霞に消えゆきて花吹雪する春の山みち

評、艶麗。

○　　本郷　佐久間千代子

病みて二十日藥飲むとてうちふるふ手のやせしるき朝冷の窓

評、哀婉。

○　　青森　秋元美葉

すなほなる柳の絲にひかされてしらぬ門邊もよりてこそ見れ

評、用語の妙を賞む。

○　　銚子　加瀬紀久子

紅桃と白桃とりてたはぶれに召せなといひしにくらしき君

評、才氣を見る。

○　　[illegible]　榎原よしゑ

相思ふ幸はもどかし君よ夜の夢の司さの羽に乗りて來よ。

評、[illegible]奔逸。

○　　名古屋　ふさ子

騎る駒の歩みとゞめて過ぎがてにしばしやすらふ花の下かげ

評、美はしとも美はし。

○　　紀伊　白井わき

千粒の立琴をとりみどりなる衣着る姫は岸にうたへり

評、着想の壯大を取る。

佳作

○　　羽前　白菊

流れ行く水に櫻の花散りてわが漕ぐ舟のあとも見えけり

○　　芝　露香

ふとゆめは醒なくれに疲れけり春雨はれて月淡き夜中

○　　京都　初枝子

春の夜にかすかにひゞく梭の音ははなと月とのさゝやきのごと

○　　東京　田鶴子

ともしらで何ぞといひてうちのぞきともにしおるゝわが子よあはれ

○　　紀伊　山田松子

物思ひの窓にもたれて君おもふ淋しき夜中を雁鳴き渡る

○　横濱　小豆澤しげ子

かくばかり悲しみ多き身さへなほ春は心のときめくものを

○　美作　田鶴子

君きませ陽炎燃ゆる野の邊やなぎみどりに緋桃咲く宿

○　四國島　渡邊梅子

其頃は君十三におはしけり菜なりとて野花なたぶ

○　北千住　竹内ふみ子

夕月は櫓をかぐ若人のその片頬にたゞ白く照る

○　北海道　瀧川信子

春の風ゆら／＼髪の毛を吹けば血汐さゆらぎ胸の琴鳴る

○　札幌　四方直

衰へしおもて見守り電燈は臨終者めきて青くまたゝく

○　三重　楊子

散りてくる影とも見えて戀しきは花のひまもる春の夜の月

○　大阪　野村清子

ほろゝちる花びらにそと口づけてやさしき人は花わあむなり

○　松前　宗原英津子

ともすれば都戀しとうちなげく少女も今は人妻となりぬ

○　天草　しら菊

心にきく渕のぬしはそも誰れと忍ぶ小垣にたちばな薫る

○　岩代　その子

都路に生れ出でしみ詩にて名もなき里にうづもるゝわれ

○　防州　花の實

暮ちる夕べ小窓に身をよせてゆく十七の春をなしみぬ

咲きおくる花の雲間に日の見えて影なやかしき春の夜の月

○　丹後　小楓女

ひれもすを心に泣きぬたね／＼と連翹の花瓣に濡ろこと

○　堺　村田千代子

岩かげにつりする人の笠みえて一むらさけり山吹の花

○　下谷　小林しげ子

やはらかき若草しきつながめやる空のはてなる夕暮の色

○　大阪　村田しづか

春眞晝わが今縫りし紅絹にかげらふもえぬ桐の香もして

○　豊前　田鶴子

若き女の紅き衣ぬふ春の夜の窓を雲にほそき雨ふる

○　山形　英子

綵きては人の面わのいろ／＼に今日／＼といひて花もちりける

○　川越　綾部歌子

紅の絹の糸ともみゆるなり桃さく里にふれる春雨

○　美作　水江新子

このふたりすみれ草咲く野の上にやはらかくおくわれらのこゝろ

○　宮城　野木ちさし

甲斐なしと身を泣きかこち濁り棲のれやに冷たく白き月さす

○　八戸　西村みや子

寂寥を淡く描々しき幹に似て春は香りも花もやさしき

○　越後　吉田幸子

眞白なる處女が胸にたゞ一つ清咲くひけり紅の花

○　徳島　平田露子

○　筑後　登喜子

處女てふほこりにみてる柔腕を弓ひかんとて君のやさしき

○ 埼玉 山崎初子

大空にかすめる月の静にて櫻の花は音なくちりぬ

○ 京都 木戸いと子

なきつれて白き鷺かへる川沿ひに井戸の柳に夕月いでぬ

○ 横濱 瀧濤湖

足曳の山のかこめる湖の田鶴啼き渡る朝の静けさ

● 大阪 のぎく

聞ゆるは誰か手すさびの笛の音か花散る庭の朧月夜に

○ 大阪 秋花女

何となくむかなしきよべのゆめ思出でては涙するかな

○ 新潟 大沼君子

のどかなる春の野づらにけふも又菫つみつゝ日をくらしけり

○ 大阪 椿邑はな子

花見んとあすの日和を祈われなあんじていれし頃もありしが

○ 札幌 赤羽節子

春がすみたなびきそめておちこちの野にも山にも春は来にけり

○ 栃木 しのぶ子

野も山もわが家も神のみやしろも霞こめけりうす紅に

○ 川越 村松さだ子

君に別れわれ淋しさに泣く日より日記は其まゝ記さずなりぬ

○ 豊後 吉眞靜子

暮ひせまり夕べとなれば別れにしいその小菊をつみてかへりぬ

○ 門司 鱗吉はるみ

わびしさや野鳥のむれ啼きてゆくものかふドいもゝみず啼きゆく

○ 横濱 山本眞子

花片のまどより入てやむ妹が散りじと聞かばいかになげかむ

○ 大阪 古川清香

おぼろ夜に笛をふきつゝゆく人の影見えぬまでわれたゝずめり

○ 米國 村越光子

高どのゝことの音さへに花笑みて春の光のたゞよひきたる

○ 下總 園子

むぎ青く菜の花黄なる山里も心浮立つ春は来にけり

○ 大阪 渡邊千代香

やめる人磯なき松に身をよせて春の光をあびて澄みる

○ 廣島 香川玉代

海鳥は夕焼あかき岩角の砕けし舟に群れて鳴く哉

○ 日本橋 松岡千代子

きのふ花霞にうもれし山里の花のふゝきに今日は暮れつゝ

○ 加奈陀 清子

若き身の青なば未来の玉とせん只さきくあれ故郷の父母

○ 岐阜 安藤たか子

五月雨や旅じ淡の疎き音のたゞよふ中に母と我泣く

○ 大阪 八木嘉代子

永き日み裾野しづかに夕ぐれて富士に横たふ金色の雲

○ 大阪 北村昌子

春来れば花よ蝶よとあくがれて歌思ひしは昔なりけり

○ 朝鮮 夏木み都子

もとなぜにわれは笑まひぬいとし兒の墓前笑はしおぼろ夜にして

○ 芝 新田香代子

いそ山も霞の奥に消えはてゝいよ〳〵廣き大和田のはら

○　上總　楓の葉

遠方の鐘打つ音の音絶えて花散る里に夕靄ひとく

○　伊豫　有田百々代

君を思ひ都を思ひ櫻貝伊豫路の濱に獨りひらひぬ

○　川越　貝谷むら子

わが詠みしさびしき歌に己のが身の胸の闇をなぐさむるわれ

○　越後　東樹賢子

五月雨のはれまもまたてしつのめは袂ぬらして早苗取るなり

○　横濱　會田よし子

君は見えず明はなちたる夜の窓に庭の若葉の匂ながるゝ

○　熊本　鳥居須磨子

まどろめばくしき夢にぞおびえける山吹みだれ咲く雨の宵

○　新潟　関谷ふじ

疲れ身を机に寄せて思ひ出の影追ふ窓に春雨のふる

○　香住　久子

なの子等と風に夕餉を忘れにし十とせ昔の春ぞこひしき

○　宮城　てつ子

尋ね入る山のさくらに風ふかば花のふゞきにわれやまよはん

○　旭川　國手瀬枝

さら〳〵と岸うつ波に春の夜の月もくだくる北の星川

○　麻布　瀬部惟子

春雨はわびしく降れり夏たけりほと吐息して針を止めつ

○　神戸　森清子

日の匂ふ河のほとりの靜けさに空を眺めて心甘ゆる

○　播磨　長谷川つた子

まちませよ菫の花を籠舟に積みて君ます里に送らん

○　大阪　田中れん子

はづかしくたゞおんそばにうつむきて草むしりゐぬ岡の松かげ

○　廣島　加藤かをる

花散りて我が戀ならず病いえず枕にさゝき雨をきくかな

○　栃木　本田ます

世の中のよろこびもよしうきもよし浮きつ沈みつおかしさぞ添ふ

○　秋田　富田とめの子

深山路の風にもまれし山草のいかに氣高き花の咲くなる

○　靜岡　高田香葉

折からの雨もなか〳〵つれ〳〵のなぐさめなれやおぼろ夜の窓

○　牛込　平塚白百合

野邊より薄霞ひく洛陽の野に七人の少女草つむ

○　大阪　梅村花子

鳥歌ひ花紅に咲きいでゝ世はうつくしき春とはなりぬ

○　香川　香子

夕日入るかなたの空をなつかしみ日毎なかめぬ君と別れて

○　門司　瀬吉靜子

目路遠く路じら〳〵とつゞきけり菜の花の路麥青の路

○　宮城　安井露香

心なく歌して君と別れ來て淋しさ知りぬ十八の秋

○　島根　松田眞子

たそがれをまたこの村もはなれつゝ田道いづこへ編笠の人

五月ばれ

紅梅



いよ〳〵最う御節句に成つた。

朝御飯がすむと、静夫がまたスヤ〳〵寢てゐるのを幸ひ、良人の分と千代子さんの分の袷のしつけを取つて、襦袢や羽織を揃へて置く。

「老人は、成たけ後が好いから、お前達から先へおはいり……」と仰しやつて下さるので、静夫を乳母やにあづけて置いて、千代子さんと湯殿へ行く。

博多と繻子を合せたのをつるりと辷らして、上着も襦袢もする〳〵と脱れば、橘の香りゆかしい湯のけぶりは、またゝくひまに全身を包む。

千代子さんと流しつこをして、今日はゆつくりお化粧をする。菖蒲の葉が身體をつゝいて擽つたい〳〵つて千代子さんは大騒ぎ……。持つて來た爪取り鋏で矢羽根を二つこしらへて、一つは桃われの前がみに一つは自分の丸髷のうしろへはつしと挿す。

湯上りの氣も輕々と、初袷の着心地よう、お晝飯には一家こぞつて、樂しく静夫の初節句を祝ふた。

今日の献立は、

○つくね海老の椀盛。　○鯉のすつぽん煮。

○柏むし鯛。　○木の芽和へ。

(一) 車えびの身をよく摺りつぶし、鹽とおろし芋を少しづゝ入れて交ぜ、指先ほどに丸め、ざつと煠でゝ五粒程づゝ椀に盛る。さよりは三枚に卸し小骨を拔き鹽をふり、〆結びにして爪楊枝にてとめ、同じくゆでて椀にもる。三葉はゆがいて一寸五分ほどに切りて添へ、清汁は普通、吸口は柚子。

（二）鯉の鱗をとり頭を落し、膽を切らざるやうに腹部をあけて腸をぬき、よく水洗ひして三枚に卸し、皮目を下に爼板へのせて、皮に届くほど、一分位づゝ間を置いて切り込み、適宜に切つて敷笊に並べ、味淋と酒を等分に鍋に入れ、沸え立ちし時、敷笊のまゝ鯉を入れ落蓋をして沸立たせ、鰹節の心をうすく削つてふり掛け、よく煮・あげぎはに醤油をほど好くさして煮つめ、器に取り粉山椒を振りかけて出す。

（三）板に葛粉を撒いておき鯛の身の、二分位の厚さに削ぎしものをのせて、又葛粉を振りかけ、庖丁のひらにて叩き伸ばし、茶筒の蓋にて丸く打ちぬき、木の芽みそを包み、柏の葉をよく洗ふて上から包み、蒸籠にいれて十分ほど蒸して皿に盛る。味噌の拵へ方は鹽水にて木の芽をよく洗ひ、水氣をきつて擂りつぶし辛味噌を入れ砂糖にて程よく味をつけ、鍋に取り、火の上にてざつと煉り、裏漉して用ふ、

（四）初めぬるま湯を丼に入れ、其中へくるみを入れて薄皮を剝き、水氣を去りて擂りつぶし、木の芽を混ぜて尚よく擂り、白みそと砂糖を加へて裏漉しにしておく、別に竹の子の根の堅き處をとり、皮つきのまゝ鍋に入れ、水と少しの糠を加へてよく煠で、水にとり皮をむき、適宜に庖丁し、うども皮をむき一寸位に切りてざつと湯がき、鍋に敷笊をしきて此の二品をいれ、煮切り及び砂糖と醤油を程よく入れて下煮をなし、皿に取りおき、いかは水洗ひして細く切り、同じくざつと下煮をなし、三品ともよく煮汁を切つて、前の味噌にて和へて出す。

常には、奈良漬けの瓜にさへ赤う成らるゝ良人も、いとし兒の身祝ひなればと、母様のお酌で小さいお猪口に菖蒲酒をほんの少し……。食後に苺のショーケーキを出す。

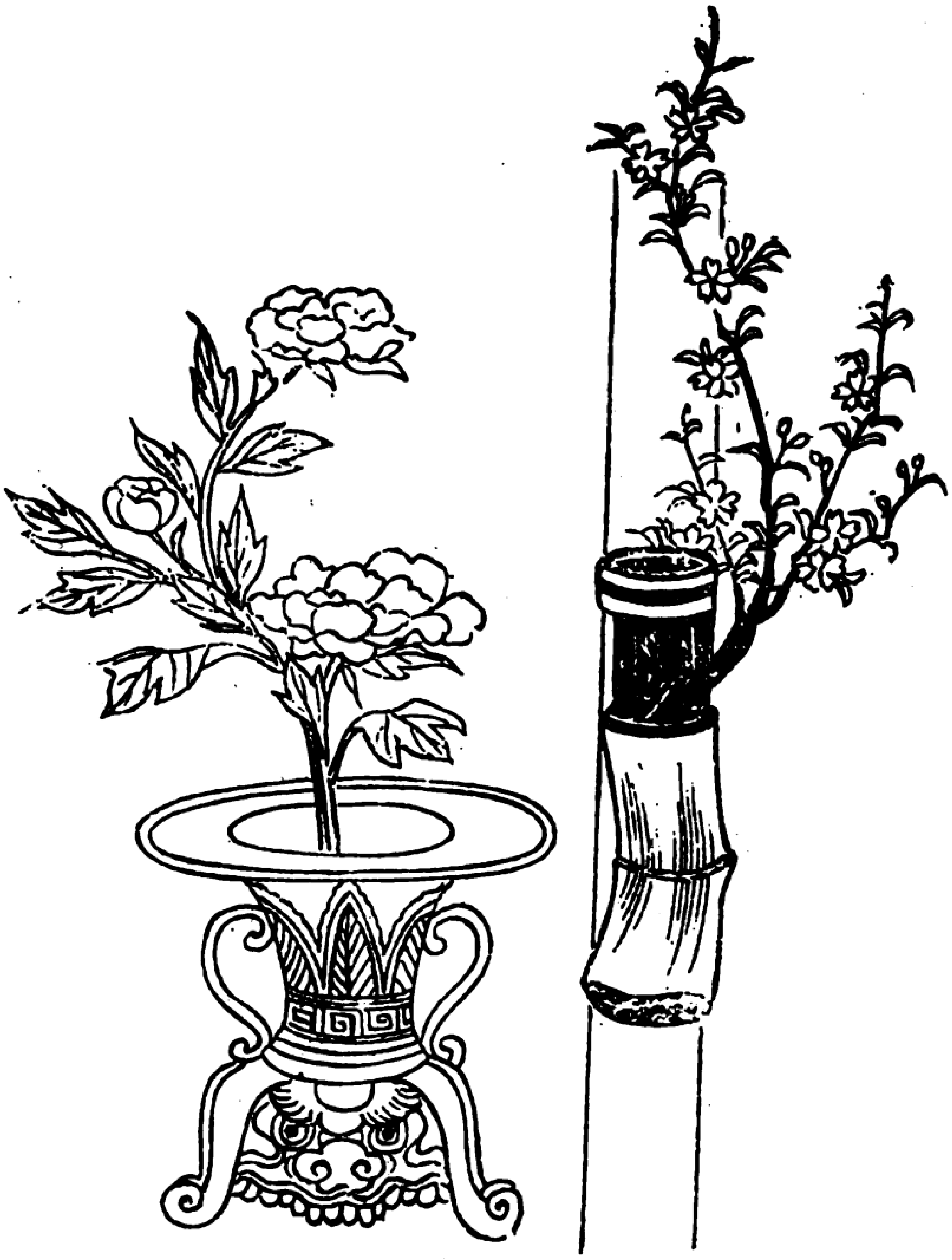
拵へ方。初め葡萄酒へ砂糖を澤山入れ、その中へ二つに切つた生の苺を漬けておき、別にカステラを二分位の厚さに切り、其の上へ前の苺を並べ、又カステラをのせ、三四段同じやうにして上より苺を漬けおきし汁を注ぎかけ、又その上より、玉子の白味へ砂糖を加

へて固く成るまで泡立てしものをかける。

母様が靜夫を抱いて庭へお出でになる後から、庭下駄をついとはいて追ふて行くと、

「幟りを見せやうと思ひましてな、今年はまだ譯が分らなくつても、此の次からは大喜びぢや」と、先づ御自分からほゝ笑まれる。

今朝頭が上げて行つたのだらう。門ぎはに雄々しう立てられた大小の幟りの上を、紅白網の吹ながしや、眞鯉緋鯉がはた〱と風をはらむ る



季節の花

で、勢よく美しい中空に繫へつてゐる。四阿の屋根には可愛らしい雀の子がいく羽か、和い風に、ふくらむで、千代〱と囀つて居るのも、吾子の幸をことほいでくれるのかと心うれしい。

二時頃から本町の勇さんや一郎さんが遊びに來る。廣間の人形の前へ陣取つて、ちまきやお柏餅など召しあがりながら、良人がする楠公父子のお話しを、興味ありげに聞いて居

定つた品許りでも淋しいからと、千代子さんにお手つだひを頼むで、お八つにと菖蒲鮓をこしらへて上げる。御飯を焚くやらお魚をとりにやるやら、菊やと藤やまで召集して、一生懸命に拵へた甲斐があつて大分評判がいゝ。お宅へのお土産にと、一折包んで持たせて上げる。

拵へ方。大鰺を三枚に卸して小骨を去り、三十分ほど鹽をして置き、後水洗ひして酢に漬けおき、一時間程して酢を取り替へ、鮓枠の中へ菖蒲の葉を布き、皮目を下にして、鰺を並べ、冷したる飯をその上に二寸位の厚さに置き、其上に又鰺の皮目を上にしてのせ、又菖蒲の葉をならべ、落蓋をして二時間ほど押しおき、後枠をとり適宜に庖丁して、薄く片いで鹽と酢につけ置きたる生姜を添へて出す。

△

午前は解物。お天氣がいゝので母樣は、午後から千代子と靜夫を連れて龜井戸邊へ行つて遊んで來やうと仰しやる。お供は乳母やと菊やにきまる。

魚やが勢よく、大鯛のピン／＼したのをかついて來たので、別に斯うといふ工夫も無かつたし、取りあへず買つておき、例もよりは少し早めて仕度をする。

○潮汁。　○玉子巻き。　○いり酒。

(一)　三枚に卸した後の頭及びあらを好きほどの大きさに切り、鹽を振りかけ、十分程たちて、鍋の湯の沸立ちたる中に入れ、ひと吹き沸立てゝ味を試み、再び沸立て、卸しぎはに醬油一二滴を注ぎ、椀に盛り吸口には木の芽を用ふ。

(二)　三枚に卸したものを又薄く削ぎ、うす鹽をあてて卅分おき、煠玉子を縦に四つ位に切つたものを其の肉で巻いて、バターをのせてテンピで焼き、皿にとり、白ソースをかけて出す。白ソースの拵へ方は、一匙のバターで一匙のメリケン粉をいため、牛乳とスープと少しの鹽胡椒とを加へて、ドロ／＼に成つたところを用ふ。

(三)　鯛の身を細づくりにして置き、別に酒と酢と味淋を等分に合せて梅干の肉を少し入れ、弱火でゆつく

り煮つめたものを、冷ましてから掛けて出す。

△

此の間伊勢丹が来た時、帯皮にしやうと思つてとつて置いた縮緬友染を、あんまり柄が荒いので静夫のちやんちやんに拵へて見る。思つたよりも却々好い。うつすり綿をいれて衿をつけて丁つてから、勝色無地の八掛で紕をつけ初めると、珍しくお葉さんが見えた。



季節の花

「ま、大変御無沙汰を申上げちやひましてね。一寸風邪を引きましたのを貴女、なあに位で打捨つておきましたもんですから、悉皆り大ごとに致してしまひましてねえ。」つて、例の愛想よく、二つ三つ世間話しをして新座敷へ行く。

千代子さんは先日鞍馬を上げたので今日から道成寺を初める。例もながらお葉さんの聲三味線は安宅の好さ、つくぐ\と聞き入つて了つた。

松の二上りからやつて居るが、千代子さんも此の頃は却々手がまはるやうに成つて來た。満更お師匠さんのお世辭ばかりでも無いやうに思ふ。

恰度時分どきに成つたので、無理に引きとめて御飯を上げる。

○蛤酒むし。　○よせ揚げ。　○あなご甘煮。

○鰺亂づくり。　○さやゑんどう青煮。

(一)　大きな蛤を水洗ひして笊に上げ置き、鍋に水を入れて其の中へ蛤を入れ、沸立ちたる時酒少量を加へ、鍋の卸しぎわに醬油二三滴を落して火よりおろし椀に盛り、水にて洗ひし木の芽を二三葉ほど浮して出す。

(二)　車えびの頭を去り、水洗ひして皮をむき脊腸をとつて五分位に切り、いかを水洗ひして足を拔き腸を去り、輪切りにして沸湯をかけ、又水洗ひをして笊にあげて水氣を切り、一寸に庖丁したる三葉と共に衣に交せ、沸立ちたる油の中へ流し入れ、火の通りたる時うら返して、よく揚りたる時分にとり油をきりて器に盛り、傍におろし大根と山葵を添ふ。衣は、卵一個を丼に割りよく溶きて其れに、水一杯粉一杯の割合にて混ぜしもの。合せ醬油は、濃き煮出汁五杯に醬油一杯の割合にて煮出て冷まして用ふ。

(三)　あなごを脊開きにして、中骨や脊鰭腸などを去り、鹽水にてよく洗ひ、ざつと兩面を燒きて好きほどに切り、鍋に入れ、味淋七分醬油三分の割合にて落蓋をして煮上げ、卸しぎはに花がつをを振りかける。

(四)　ぜんご及び頭腸など除き水洗ひをし、三枚に卸して小骨をぬき、鹽をふり卅分ほどおきて洗ひ落し、酢につけて直ぐに上げ、皮をとつて亂切りになす。又、蓼を水洗ひし、細かにきざんでよく擂り、その中へ飯粒を小匙にかろく二杯ほど入れて擂り交せ、少しの鹽と煮切りを加へ、うち漉しして鰺の上よりかけ、煠でて酢にひたせし紅防風を添へて出す。

(五)　さやゑんどうを水洗ひして蔓をとり、鹽湯の沸立ちたる中に入れてよく煠で、笊にあげて煽ぎ冷まし、一寸生醬油に浸して器にとり、うすく削りたるかつを節をかけておく。

園藝のたのしみ

凡そ樂みの最も大なるものは物の成長を見て樂むと云ふ事が、最も樂いので草花を植ゑて樂む事は實に其の成長を樂むと云ふ點にあります。殊に草花は樹木と異つて其の成長力が速なもので夕べ數へた花の蕾が今朝は滿開に咲いて居る如きは實に樂いものであります。

殊に園藝は室外に出て、日光に觸れて働かねばならぬ仕事ですから、身體の運動にもなり健康を助ける事が著しいので弱い體であつた人も園藝を始めてから壯健になつた方は澤山あります。又園藝を始めると自然植物に對する智識が増して來て、一つの草花を見ても、それが何科に屬する種類であつて、如何なる培養法を採つたらば能く出來るかと云ふ事が知れて來ます。

又西洋流の宴會に於ては、料理よりは籠に盛られたる草花の方が稱賛されるので幾ら山海の珍味を列べた所が、其の價格は知れたものですが、溫室に作られたる花などは、價に限りの無いもので、西洋人は之を御馳走として喜ぶのであります。日本でも今後の宴會には必らず草花が盛られるやうになるでせう。

又園藝の傍ら家庭に於て蔬菜類を作る事が必要です。蕪でも大根でも、市中から買入れたのは日を經てゐるが爲めに味もまづいのが多く畑から拔き立を取寄せて料理すれば新鮮で家庭趣味を加へます。

又西洋では贈物に草花を用ふる事が流行して居りますが、之は食物を贈るとか、又は反物を贈るとかいふよりは、餘程高尙なものであります。然るに日本では未だ草花の贈物が發達して居りません。偶々病人などにこれを贈るものがあると、何だか佛扱ひにされて緣起がわるいなど、御幣をかつぎ、これを嫌ふものがあります。又西洋人はよく生花の蕾をさすのが例ですが、日本の家庭ではまた矢張緣起がわるいなどいつて用ゐません。元來日本で花を用ゐる場合は佛に捧げる時にのみ限ると考へられてゐるので、僊人に多少園藝の趣味の存してゐるのは全く佛敎のおかげであるといつてもよい位です。隨つて地方でも佛敎の盛んな土地は家のまはりに[illegible]花を植ゑて居るものが多くあるが、此の他は餘り此の趣味のないのが遺憾です。



卒業生の行衛

大原あや子

ハラ〳〵と散る、雪の花瓣が、軟風にも斜に散る、散る!!、散る!!、昵と耳を澄ましたら地に落つる其音も聞えさう、晝だのに。

あゝ靜かだ、斯う鉛筆を持たまゝ茫然青空を見入て居ると只もう夢中、馬車も、指環も厚板も、芝居も：：それ處か他人も家も自分すら頭にない一切空、かう宇宙全體に溶け込だ樣だ、目の前からは梅の香がふはりふはりと匂ふのに、それでも何となく何處からか業打つ音か豆打つ音でも仕さうだ。靜寥は秋の物だわ、

春は如何しても、ドンチヤン〳〵樂隊でも囃し立てるその細長い旗を、緣側から跳び上り乍ら眺めて居る方がふさはしい。春は都の物だ。此樣な濱邊に燻つて居るのは勿體ないは。都の方はまあ嘸今頃は春の氣を吸ひ集めて、歡樂に醉ひ切て被在るだらう。記念祭、ボートレース、音樂會、帝國劇塲、狂ふ花園は彼方にも此方にも：：田舍は淋しい、閑とした眞晝の田舍は殊に淋しい。

少女椿が咲いた事、まあよく咲いた、この花が咲くと思ひ出すは、彼の一輪を袴の紐にグツと差して感謝の歌(卒業式の歌)を淋しい〳〵心地で唄たのももう四年前になつた、彼頃の筒袖のお下髮さん

「あら五年の方泣いて被在るのよ。まあ。私早く卒業したいわ」

なんてぴん〳〵跳ね廻て被在た方も今頃にしみ〳〵思ひ當て被在るだらう。

……………………………………

嬉敷くも此處を去らん

よしや今此處を去るも。
いかで我忘るべき學舍の恵を。
學舍のめぐみを。

その學舍の恵よりも何よりも年々に廻り來る三月○○日が忘れられないわ。あの氣持が忘れられないわ。只淋しいなんて云でも、さう何と云たらいゝかしら。丁度大晦に除夜の鐘を聞く時、あゝもう何萬年經てもこの年は返らない、この鐘が突き納めると一緒にもう取り返しはつかない……この取返しがつかないと云ふ氣が胸中を彼方へ此方へ掻き亂す樣で只わく／＼胸騒ぎがする許り。經驗のおあり遊ばす御方は屹度點頭いて下さるでせう。

遠くから見て居ると華かな美しい嬉敷い物でも、突き當て見ると瞬間に通越さなければならないのですもの。

それでも式後は四年級以下の方々の心盡しの送別會で、趣向を凝らした假裝の對話や。新家さんの送別の辭に泣かされた涙も、何時しか可笑し涙に變る程樂しく送て頂き、先生方からは別に二階の食堂で西洋料理の御饗應を受けるなんて、何だか急にエラクなつた樣な、氣味が惡い樣な、未だ此樣間に性質素行を見られるんぢやないかなんて考へて、オホヽ、ほんとに先生つて恐しい者、鵜の目鷹の目で生徒の一擧一動を監視なさるんだもの、皮の二枚も三枚も覆らなければお前へは出られないものと極めて居た、その先生から正賓と尊敬められるんですもの、成程卒業は難有いと思ひましたわ。そのたつた今の得意も直に何處へやら、夕暮を装飾やら、隊列やらで行く室もないので、盡きぬ名殘を猶惜まうと云ひ合はした樣に圖書室へ集ても、皆薄暗がりに默り込で、誰も口を開く方がなかつたわ謝恩會の相談處か何誰の御目にも露が一杯。

「斯うして皆さん御一緒に居るのもこれが最後ね」
「皆今日からはちり／＼に……」
「あゝ如何しませう！、屹度何時迄もね」
「御交際して頂戴な、何時迄も何時迄もよ」
「愈々學生々活の最終ね」

「貴方はいゝわ英學塾へ被入るんでせう？

「一寸お顏見せて頂戴な、お國へお歸りになるともうお目に懸れないわ」なんて皆もう涙聲、眞暗な中で拉げよと許り握り替した手と手の暖もまだ消えぬ樣に思はれる間に、卅三人散々に別れては御消息さへ打絶てお住所の定かならぬ方まであるんですもの、これが十年も二十年も經た後はそれこそ卒業の寫眞取り出して此樣方がクラスに被在たかしら？なんて云ふ樣になるんぢやないかしらと空恐しくなりますわ。先日も茂子さんのお話に、



「ほんとに私なんか此様田舎に居て淋しいからせめて、お友達のお手紙でも頂きたいと思ふんですけど此方から差し上げなきや何誰だつてねえ下さりやしないと思て上げても、お返事も下さらないのよ隨分薄情だわ、それでもお別離の時はこんな者でもね茂子さん如何ぞ末永くねなんて泣いて被仰たのよ。あの御容子が目に見える樣だわ。」

てしみ〴〵被仰たつけ、茂子さんなんか去年の卒業だし、おまけに私達の様に府の制定通り常軌にはめられ、壓し出されたのとは違て、彼の〇〇先生の御主義の元に生ひ立た方でも矢張り思は同じとすれば、女は薄情なのかしら。如何に時間の經濟家でも、せめて端書位認めて被下てもよさゝうなもの。

學校では如何な遊歩時間でも離れつこなしだつた女子さんなんて酷いわほんとに。

「これは、風の便に聞いたのよ、お目出度いんですつてね。でも如何にお境遇がお變り遊ばしても何卒お變りなくね、お交際遊ばして頂戴」

て御結婚前に上げた手紙がお氣に障たと見え、皮肉澤山なお返事頂たきり福岡の炭坑に神隠れ、今は御子様も御二人とか此方から御機嫌伺ひ卒ても御年始狀さへ戴く光榮を得ないんですもの、何も其樣にお怒り遊ばさずともいゝでせうに。

よし子さんだつてさうだわ、佐世保へ被入るまではよく被下たのに、其後はまるで、音信不通。伊東さんだつて其通り東京に被在り乍ら。

嫂の弟が轉地先から、「薩張り御手紙なく、死だのか生きてるのか一寸判斷に苦しみ候。生死の程キット御返事願上度……」と云ふ端書が舞込で大笑ひした事があつたが。此樣端書を飛ばしたい處は澤山あるわ。

高等師範の方だつて此方から差上げるから漸々仕方なしの御返事なんか些とも難有かないわ。彼方々こそ卒とは毎日緣のある方、寸陰を惜んでの御勉强なんて云はせやしないわ。オホヽヽ、御風呂の永いことゝ云たら二時間は懸値なしですつていゝ所から伺て居るわ花岡先生の御講義ぢやないが。

「朋友程賴もしい、慕はしい者はないのです、貴方方がこれから行く前途には山もある、谷もある、云ひ知れぬ困難に出會ふ其時、家族よりも先輩よりも先づ思はれるものは朋友です、第一番に縋り付くものは必ず友情でなければならんのです」

なんて眞面目で敎壇上で被仰るかしら、被仰る積りかしらオホヽヽ、此度一つ聴て見やう。

卒業當時と今も變らず親しくして被下る方は二人切。隨分仲の善かつた方達さへこの通りなんですもの。たまに歸京てクラス會でもと思ても年年集る方は減る許り、多くて七人なんて情けないわ。

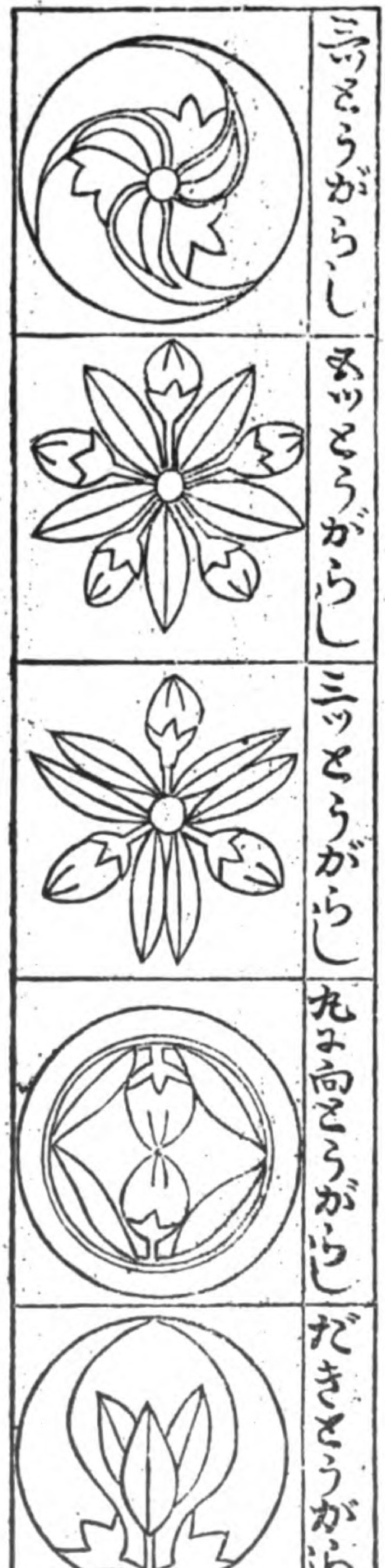
「私ね杖突て孫の手を引いて出席するわ」



なんて元氣なこと云て被在た靜子さんも、今ぢやお顔もお見せなさらないお父様お他界後御不幸に世を送て被在るとか二人の心は一つ心とまで云ひ合た俊子さんは逝ておしまひなさるし、いとゞ少かつた私の組も三人まで冷いみ墓の下に螢の花をむざ〳〵散らして、永く〳〵醒めぬ

眠にお着きなすつた。然も何れも結核とは、何かの因縁話の樣だこと。あゝ俊子さん何故逝てをしまひなすつたの?『氣が狂たら殺してね……』て被仰たわね。それでも遂々胸の悶えを獨り抱いて逝らしつたのねお察しするわ。ほんとに勝氣過ぎたんだわ。

何と云ても五年間同じ教室に同じ先生から同じ御講義を同じに聞いた三十人ですもの、これから先の先、何時迄も何時迄も思ひ出して懷かしい方に違ひないわ便りはなくとも訪れはなくとも、まさか途上で知らん顔もなさらないわ、矢張り斯うして思ひ出して被在る方だつて屹度あるわ、坐り込で筆とる暇のないのが女の常なんですもの、さうは云ふものゝ何も習慣だわ、



都下幾千の今年卒業ます君達の何時迄も此頃のみ心其まゝに變りなけれとばかり。……あ椿の花が一つ落ちた事。首切り花とはよく云たものだ首からポトりと。趣のない散り方だこと。毎年々々花と共に繰返す思を又も今日も繰返した、花が散り花が咲く間は同じ想を數多度々々々繰返すんでせう。

悲しきも樂しきも慰めつ戒めつ、
數多の年を、事なく過ぎて、
嬉敷くも此處を去らん。
よしや今此處を過るも、
如何で我忘るべき友人の情を。
友人の情けを。

現實の光

花輪ゆり子

古川様の「漫遊日記」と、長谷川様の「旅行記」とを、今夏のやうに汽車中で讀み返し／＼、勇躍と不安とにみち／＼た胸を、一尺九寸の袂に抱て、私は東京の地をふみました。雨とそして風のため、美しい櫻花は散りはてゝ、土にまみれた花びら、淋しい春で御座います。たとへ足らぬ勝ちながらも一家のお嬢さんで立てられて居たものが、沸きかへる東都の渦巻の中に身を投げ出して、自活して行くこの門出、かれて期した事ながら私の魂はあふ事毎に、恥かしさと怖ろしさとに戰慄て居ます。こんな事が長くつゞいたらどうしませう、あまり弱い事を云ふやうですけれど、考へて見るとひろい世界に身のおき所のないやうな氣がします。東京へ出て多くの人の中に接したら、かへつて自重心もおこるかも知れない、自分の長所をみとめよ、自信あれ、と△△先生はくり返して云ふて下すつたけれど、私は實世間の風にふれてみると、いよ／＼自己の小さく弱いものであるのに、悲觀せずには居られません。私、今まで女と生れながら、自活の奮鬪のと云ふ事に頭をなやまさうとは思ひませんでした、獨身論などゝ云ふもの耳さへ傾けた事はありませんでした、おとなしく人の妻となるべきものときめて居た、のにこの頃の子を生む女を淺ましいやうな氣がしてなりません。あなたはおかはりに成りましたわれえ……と泣いたのは、戀人に誓ひをやぶられて、人は望まれて嫁くのが一番の勝利です、なんて云つてる文さんです。美しい友は嫁してから、音信もとだへ勝となりました。また私より二つ年下の、きよい／＼可愛い友は申しました、ちい姉様、面がはり御らんになりまして？ あれを拜見して私泣いて了ひました。菊池様……弱い方ですれえ、私は私は、筑波山下の病詩人の君をおもふと、何と申してよいやらわからない。一度、一度でよいから先生にお目にかゝりたう御座います。姉様は悲しい事ばかり仰せになりますのれ。花やかな春、あゝなぜ自覺たる人は……とおん文顔におしあてゝ、私は机に泣き伏しましたつて。柳子様はつよいのでも何でもありません、覺めたのか冷めたのか、醒めて捨てゝ嫁いだ柳子様のお心も、どんなに淋しいのでせう。

あゝ、父母の涙をかへりみ得られる方は幸福です、母を捨て家を捨て、親もはらからも信頼するに足らず、自分一人をたのみにて、一人で泣いて一人で生きて、自分一人を守らればならぬ身、戰ひつかれて身をよせるかげの欲しくなつた時、生活上の苦痛に堪へられなくなつた時、そしたら私は嫁くであらう、あはれかつては純なる狂熱な涙多き詩の子でもあつたけれど、いまはもう、理(？)利に冷へて、戀には泣けぬ少女ですもの。

私は私は自炊でも何でもしたいのだけれど、まさかこちらに親類のあるものを、そんな眞似も出來ません、いわゆる居て合はず、おいて合はぬ食客と云ふ境遇、壓迫やら叔妹やら、つかれて歸つて來ても快くく

つろぐベッドはない。今までは自分の勝手で自分の好きにするんだもの、いくら醜美作りにしやうと人の眼に立たうとかまうものかと思つてたのに、どうしてどうして毎朝髮一つ結ぶにも、不出來だからとてさう結ひ直す事も出來ず、お化粧するとて、着替するとて、ともすれば女中達の眼が光ります、そしてその人達でさへ紡績や紫矢飛白ぐらゐ着て居ますものを、どうして私がまあ縫ひ直してもつて來た袷や羽織は行李の底から出せません、義理にも伊勢崎ぐらゐ羽織らなければ、歩けないぢやありませんか、だん／＼日光もつよくなるのに、どうせ買ふんだからパラソルを早く、草履も欲しい、下駄がへる、足袋が切れる、ペコヘコの蟇口を握つて暮すこの心細さ。

前髮を下げて洋服きて居たあの頃がなつかしう御座います、と友は云ふ。私は過ぎ來し方をかへりみても、あまりに甲斐なき思ひ出のみなれば、昔を今にとも願はず、自己を冷笑し、人を冷笑し、未來………未來は恐ろしいから考へてもみません。

かはりました、ほんとに。それは食物の好みまでかはりました、私、私れ、上京でには御飯も咽喉を通らなかつたけれど、この頃はお腹が空いて困りますの、でお菓子でも買はうと思つても、あまりにさもしい樣な氣がして、どうしても店に立つ事が出來ない、他家に居ると意地きたなくなるつて、よく母が云ひましたが、ほんとに情けない………

すさび行く心を抱いて私、將來どうなるのだらう。結立の高島田に紺飛白着て、三疊の書齋にA樣と、長い夏の一日を語り暮した時はたのしかつた、またも少し可愛氣もあつたでせう、十八と云ふそれだけでも、なつかしい聲ですもの。どんな人にも笑顔をかゝさなかつた身の、いつのまにこんなかたくな心になつたらう、他人の中にもまれたら、角がとれて丸くなりさうなものを。

たゞ微笑まれるのは昨日の帝大ボートレース、行きたくて／＼たまらなかつたけれど、意地を張つてとう／＼行きませんでしたが、法科が敗けた。私は夢にまで見ましたの、それが正夢でした。

上りつめれば下り坂、醉へるものは必ず醒めればならぬ、あゝ夢の世界は美しいものでした。

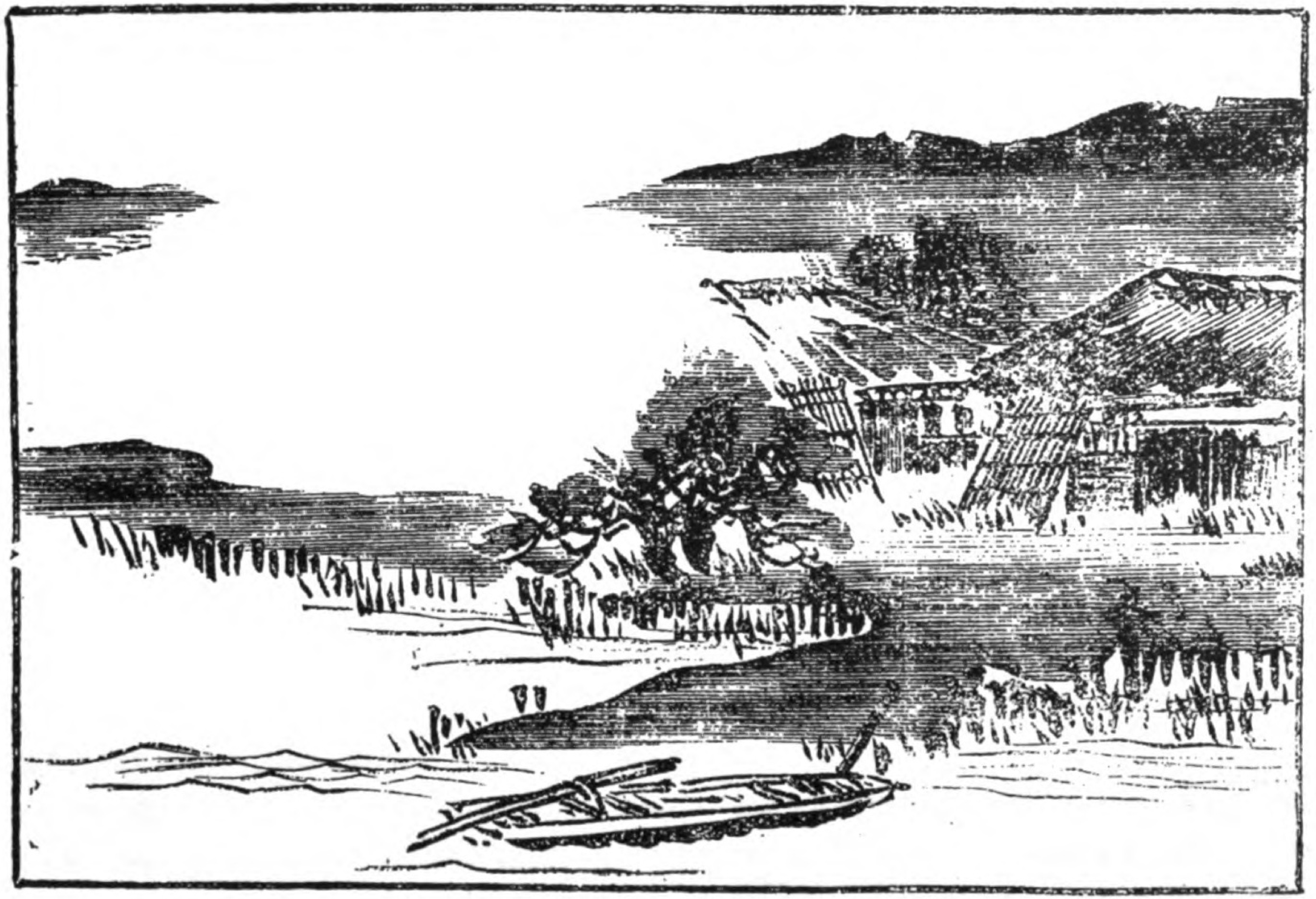
「梅も櫻もちりはてゝ、すでに柳はふかみどり、人はあかれど行く春を、いつまでこゝにとゞむべき………北行く雁は大空の、霞に沈み鳴きかへり、彩なす雲も愁ひつゝ………」本郷の宿にて

花ぐもりの日



初聲を都にいそげほとゝぎす
山賤ならぬ人こそはまて、

初夏



眞洲

精神の修養と物質上の餘裕

松村介石

英國の或る有名なる宰相は、或る大學の式場で「人間は全智全能なる神の子なりと稱せらるゝと共に、猿より進化せし動物なりとも論ぜられて居るが、兩者何れにせよ、吾人は神の子たるに恥ぢざる精神を修養しなければならぬ」と申しました。眞に私共は神に似たる靈性を持つて居ると共に、また肉體を有する動物ですから、此の兩者を均しく進歩發達せしめなければなりません。世の宗教家、教育家が靈の修養を說き、經濟家、實業家等が人の此の世に處するに必要なる富の事を論ずるのも此の故であります。

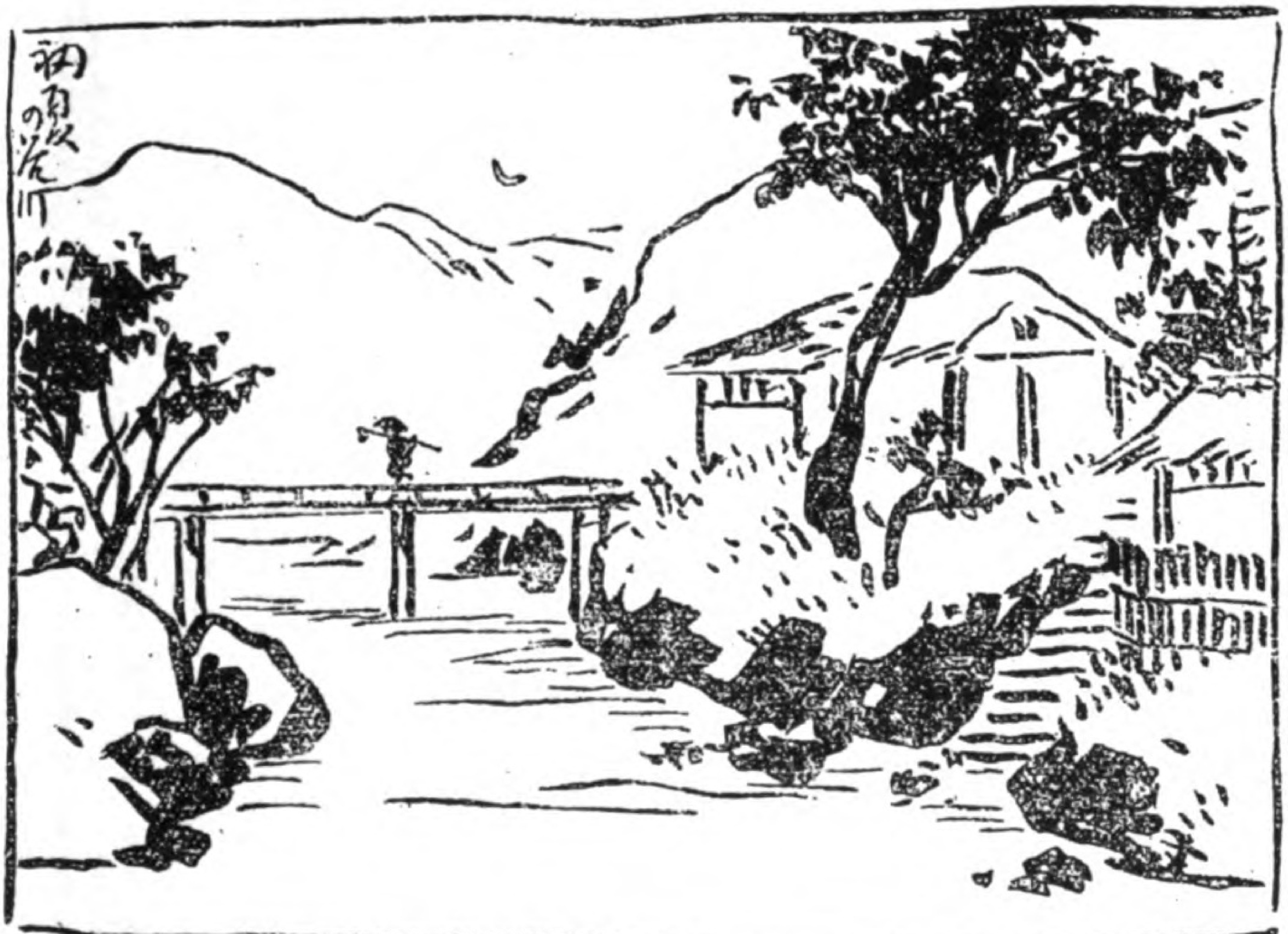
▲時勢に遅れては申譯なし▼

近頃私は屢々人から此世に處する主義目的は如何になど〻大問題のお尋ねに預るが、私は主義など〻六ケ敷い名を附ける程のものもありませんが、前に申した靈性と肉體との進歩發達を均しく謀りたいと勤めてをるのであります。私の立場として私は絶えず智識の開發を謀らなければなりません。日に月に進み行く文明の世に處して、何時迄も舊思想に囚はれ、時勢遅れの說を稱へて居るやうでは申譯がありません。又精神の修養をなすためには、人間以上の高尙なる人格を模範としなければなりません。もし人にして自己以外に大なる光及び性格を認め之を手本と致さないならば知らず識らず驕慢怠惰に流れて、我儘氣儘に陷り易いのであります。故に私はどうか全智全能なる神を信じて、神樣をお手本とし繼嗣者として幸福なる日々を送りたいと願ふて居ります。以上は靈性上に於ける私の考へでありますが、肉體保護の上より申ますと、收入を以て一家を支へ、其の幾分を割いて貯蓄をなし、不時の災害、老後の準備に具へたいと思つてゐます。若し私に此の準備がないならば、父母が此の世を去つた後には兄弟の厄介者となつて甚く人々を困らせる事とな

るでありませう。

▲煩悶なき境涯▼

私は斯樣な考を抱いて毎日幸福に且つ滿足に、己が職務に當つてをります。其れ故學校に於て教鞭をとる餘暇には、洗濯屋の忙しい工場の邪魔をしたり、料理屋の狹くるしき臺所へ這入り込むだり、其他隨分嫌な苦しい思ひをする事が屢々ありますが、是はなるべく世事を研究して新智識を得たいと思ふからであります幸ひ絶えず忙しくて朝の五時から夜の十時まで休む暇もなく働いて居りますから床に入れば直ぐに眠つて仕



舞ひ、煩悶などは少しも起しません。けれども若し私に精神上の慰安がなかつたら、必ず之を物質上に求め、即ち衣服調度に華美を競ひ、流行を追ふて此の世の快樂を貪らうとして、自然心に隙が出來、生めかしき考へなどが芽を出して如何なる屈辱を受くるか解りません。

▲誘惑に打克つ修養▼

世間には隨分子供の教育に熱心なる人々が澤山あります衣食住は勿論、學校教師も選擇して、天晴なる人物を養成しやうとして居られます。けれども此れのみにては完全なる教育は出來ますまい。尙は

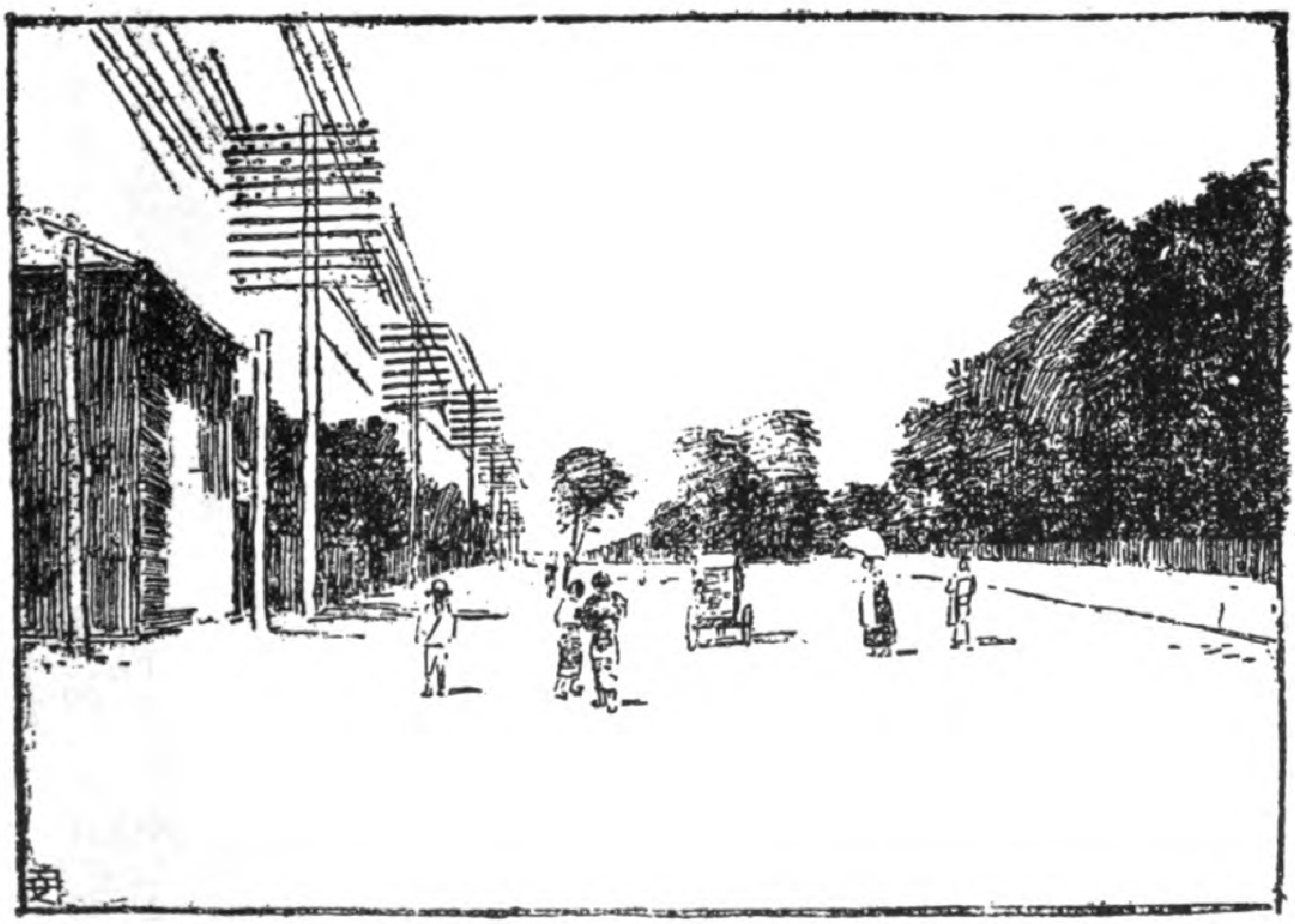
其子の精神敎育上に大切なる絕對善即ち知らざる所なく見ざる所なき大なる權威を敎へ、正義慈愛なる無形の友を心友となし、之を模範として、絕體の善を會得せしむることが緊要であります。人は幼少の頃には父母、長者、敎師の手によつて誘導、敎訓せられるけれども、長じて獨立自營の生涯に入つた時に。誰が之を監督するでせうか。まして父母は此世にあらず。且つ知らぬ他國に流寓する樣な時に當つては、誰が慰藉者となり敎導者となつて與れるでせうか。されば旅の恥はかきすてとか世の諺にもあるごとく、斯樣な場合に於て恥づべき行をなし、或は墮落の淵に沈むものが多くあります。之れは全く宗敎心の缺乏より起ることで、神を手本とし且つ友達として進む者にはそんな事はなく、容易く誘惑は勝つことが出來ます。只今私の家は母と私とで二人の弟と二人の姪を監督して居るので、血氣盛な靑年と、未だ頑是ない幼兒とを預ることは容易ならざることですが私は自分等の弱き力に賴らず神を一家の主人公と仰ぎて、其のお力に任せてゐるから、安心してをる事が出來ます。まだ四ッや五ッの子供でありながら、寢る時に祈をして下さいと申しますから、母と替り〲にして遣りますと、子供は實に安心して眠ります。また人の知らない所でも、見ない時でも、神樣は知つて被入ると云ふ事を話してありすから、よく云ふ事を聞きます。

▲二種の婦人の家政ぶり▼

以上は精神上の事でありますが肉體の保護の方から申すと、成るべく身體を健康になし、之れに對する準備として、己れを謹み、相當の貯蓄をしなければならぬと思つて居ます。一家の經濟は主婦たる人の心掛に依て如何にでもなりゆくものです。或は私の家はどんなに儉約しても餘裕がないと言ふ人があるが、之れは未だ精神が至らないのであります。私は薄給の夫に仕へて數人の子供に高等の敎育を施し、無一物から家作地面を澤山持つ樣になつた一婦人を知つて居ます。今其の人の談を聞くに、此の婦人が嫁した時に、夫は月收僅に五圓、夫人は年僅に十六歲であつたが、兩人と

も勤勉な人々であつたから、夫婦相談の上、住むべき家のないのは恥かしい、子供の出來ない內に家を建てやうと云ふので、一生懸命貯蓄をなし、幾分か貯金の出來た時、其れを基金とし他より融通して家を作り、そして月々家賃を拂ふと思つて借金を拂つたので、二三年の後には借金は悉皆返濟されて、家は全く自分のものになつたさうです。其後も斯樣な方法で地面を買ひ家も幾軒も建てました。夫も漸次に增給して後には四十五圓を受くる樣になり、且つ家賃地代等も大部這入り、餘程裕福になりましたが、下女は一人も使はず一生懸命働きます。子供達も學校の餘暇には家事を助け、我儘を愼み、皆勤勉な孝行者であります、かと思ふと或る婦人は夫が年俸千二百圓を受けてゐるにも係らず、年中不足がちで、なほ借家住をして居る人があります。併し此の夫人とて別に贅澤をするのではない只だ家事が不取締で理經の術を知らないのです。僅かの事に儉約でなく、目に見えざる所に益なき金錢を多く使ふのであります。

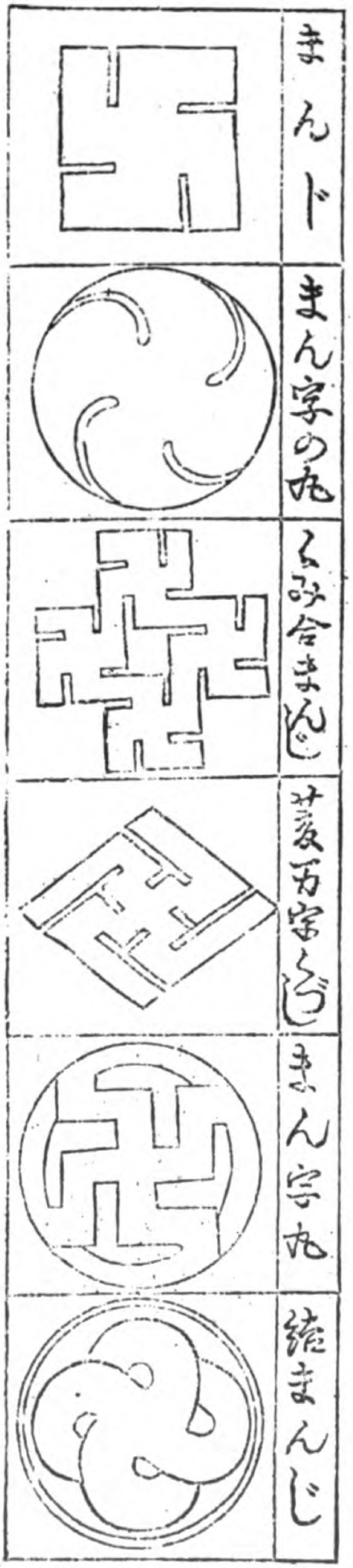
札幌大通り



▲犧牲の價値▼

日本が小國にして且つ富有ならざるにも係らず、如何にして戰爭に勝ち能く一等國の仲間入りをすることが出來たかと云ふに、婦人の力が與つて大なるものであらうと思ひます。或人は西洋の婦人は活潑で智慧があるのに、日本婦人は愚圖で役に立たぬとかいふけれど、智識の點は兎も角、精神と行爲に於ては遙に彼等を凌駕して居ると思ひます。先づ日本婦人は家庭を己が領土となし、子女の養育は勿論、衣服、食物に至る迄悉く己が手にて調達し、其上舅姑に仕へて献身犧牲の生涯を送ります。日本人の献身犧牲の精神の盛んなのは、其の母親の薫陶でありませう。日本人には獨身者の稀れなるに反して西洋に甚だ多いのは、如何なる理由であるかと云ふに、種々なる理由がありませうが、經濟上より來る生活難は其の大部分であります。西洋婦人は日本婦人の如く質素なる生活に滿足する事が出來ないため、男子は其の負擔に堪へないのです。幸に日本に於ては斯樣な患ひは比較的少いやうであります。國威を張り國家を盛ならしむるには、献身犧牲の精神と人民の繁殖と幸福なる家庭の增加することが大切であります。此の點に於て日本婦人が國家に貢献する事の多大なることを祝はなければなりません。

（明治母の會講話の大要）



姿を美しくする法

寫眞師　阿部亨正

服裝と姿勢の美

私は如何すれば婦人の姿勢を美しく撮影し得るかと云ふことについて大に研究して見たい考へで、模範になるやうな姿の寫眞を色々集めて見ました、その中で和裝洋裝を比較して見ますと和服は撫肩で胸の出ない腰部の細い人が美しく、洋裝は張肩で胸の出た腰の太い人がよろしく、美點の要素が正反對であります。

▲骨格を隱すと現はすとの差

洋裝に適する婦人の體格は極く立派ですが、和服姿に適する婦人の骨格はさう立派ではありません。正直に申せば和服の適する婦人の骨格は先づ無恰好でありますから、その服裝は骨格を隱し得るやうに發達して來て居り、洋裝はこれに反して骨格の美點が現はれるやうに出來て居ります、又身振動作に於ても、和裝の人は手を前に垂れ重ねて胸を小さく見せ、袖と帶で腰部を覆ひ、骨格が見えぬやうにして美を保つのですが洋裝の人は肘を曲げ胸を張り、長い袖や廣い帶で腰部を掩ふことなく十分に骨格を現はして美を發揮します、それゆゑ洋服は皺襞其他の恰好が主眼で、流行もこれらの型の變化に重きを置くやうですが、和服は型よりも模樣色合が生命となつて居ります、試に停車場で和洋の婦人を比較して見ますと、西洋婦人はスーッと入つて來る概括の姿勢が第一に目に着て、容顏や衣質の善惡は第二に感じますが、日本婦人は顏や服の品質模樣が分解的に眼に映ずるやうです。

▲腰を掛ける姿勢

洋裝の婦人は、ズッと歩いて來て椅子に腰を下すのに、何遍も姿勢を直さないでもチヤンと恰好が整ひますし、腰を掛けて體をねぢり、自由な姿勢を取りましても、裾に恰好よき變化を起しますから、却つて言は

れぬ美を現はします。それが和装ですといつも一定のつゝましい姿勢を取つて裾を整へなければならず且腰から裾が筒形ですから、膝をつぼめて腰をかけますと可笑しな皺がはみ出して見苦しく、のみならず裾の下から不美術的な足先が現れます。つまり和装は坐する時に尤もよく美を現はすやうに出來て居るので、腰掛けた姿勢を良くするのは頗ぶる困難なやうですが、腰を掛る際に両膝を少し開き加減にすると餘程良く見えます。

▲足先

美しい姿の連續とも申すべき舞踊に於ても、彼我の間に大なる相違が見えますが、これは體格の關係よりも足の關係にあると思ひます、洋装の袴は足の動作に何の心配も要らず自由に變化の美を現はすことが出來ますが、和服では裾の開く不體裁を氣遣ふ爲に一足毎に注意を要するので、自然日本の舞踊は靜かにして一歩一歩的となつて居ります、この呼吸は音樂にまで影響して居るやうに思はれます、何れにしても足先は姿勢の基礎でありますから、寫眞師の尤も注意をえうするところです、今私の集めた直立の足附の寫眞の中で見よいものを撰出して見ますと、和装の時は凡て内輪なのが宜しく、靴ならば僅かに開いたのが美しいのであります、特に和服で撮影される方は足先の全部が見えぬまでに衣服を掻き合せて腰部の骨格が目立たぬやうに注意するのが肝要です。

▲我國婦人の洋装

顔の据ゑ方は、和服は少し下向が美しく洋装は上向が美しいやうです箇様に和装と洋装とは凡てに於て大相違がありますから、我國の婦人方が洋装の場合には動作は勿論心理上にも注意して和服の習慣を打破しなければ理想の姿が現はれません、従つて我國婦人の洋装美を發揮するには寫眞師も一方ならず苦心をします

▲電車に乗る姿

お守の意匠



姿勢について苦心する私共は、一寸した處で良い參考を見出すことがあります。先達も須田町で電車を待合して居る際、見るともなく從車へ乘込む婦人方の姿勢が目に着きましたが、咄嗟の場合ですから、盛裝の婦人も我勝に車臺へ足を掛けるはづみに脛の後部が高く露出し、甚しいのは膝關節の後部位まで露れますのが頗ぶる不體裁でありました。すると一人の若い婦人が少し體を斜にして電車と並行の姿勢を取り少しも皮膚を現はさないでひらりと乘りました。その落付いた體度と美しい姿勢とは確かに參考とすべきものです。



逝くか青春

百合香

どうせ構はない私の事ですもの、別におつくりもないんだけども女て妙なものね、いやに手間取れてしまつた、九時つて約束なのにもう十時頃よ、嘸、清さんが待つてるだらう、靴をはく間も遲しと紫の蛇の目持つたまゝ飛び出したら「あらまあお孃樣、鳥はどう遊ばすんでございますの」つて相變らず頓狂な聲で、時が呼びとめる。あゝ、めんど臭、いつその事今度にしやうかしら、だけどたのしみに待つてるのに、持つてかなくつちや、惡いわ、まあ、これも友の爲め、因果だとあきらめて、すみれ色に白いクローバをしぼつた絹ハンケチに、かごを包んで、右手にもつ、清さんとこへ御よめに行く若い小鳥、うちのカナリヤが、かへしたんです「よその知らない子なんか連れて來たら、ぶんなぐつてよ、カナリヤならつれて來ても嬉しいけど……」なんてステキな手紙よこすんですもの、きよさんも隨分だわ。

此の方男のやうな字を書くもんだから、何時だつたか、三輪田の寄宿舍に居る從妹にやつた手紙を怪しまれたんですつて、清さん人が惡く出來上つてるもんで、わざと潔なんて字書くんですもの、おまけに「出かけて來給へ、待ちます」つてな調子だから、温厚な眞砂子先生に疑はれるのも無理はない。

「ヤ、百合ちやんすまして何處へ？」

ツンツルテンの絣の着物に長いマントきた人が早實業の帽なゝめにかぶつてひさしの下から目をひからせながら。

「今日はね、展覽會よ、これから御出馬遊ばすの」私あの、人大嫌ひさおしやれで見榮坊で、女の蹟ばかり尾行て歩いてるあんな、奴、はりなぐつてやりたいわ、

音もなく、しと〳〵と降る春雨を衝いて、江戸川の中の橋を渡ると清さんの御宅はもうすぐそこ……。

通用口の硝子戸をがらりと開けると、お女中が二人何やらして居た「いらしつてゞ」と聞くとハイと云ひながら奥へ行く、すぐ、側の工場では絶えずガタンガタンと音がして、少し開いてる窓から女工が、目引き袖引き、囁き合つて居る。ヲセン會社です。

「遲かつたわねえ」

「え？」と振り向くと、——これはしたり、清さん……まあ!!!私もう、とうの昔に、御支度は濟んで、あのお揃ひの、濃いすみれ色の御袴、胸高に召しての事かと思つたよ、御普通着の儘なんですもの。

「まだ行かないの？」

と目をみはると「えゝ、未、早いのよ。」是だもの!!!だから暢氣だつてんだわ。

「お上んなさいよ」つて云ひながら籠に目をつけて、「あら、チッチッて鳴いてゝよ、可愛いわねえ」

判然としたもの云ひの方、かごをもつて、ずん〳〵奥へ行くから、馴れた事とて、遠慮なしに私も行く

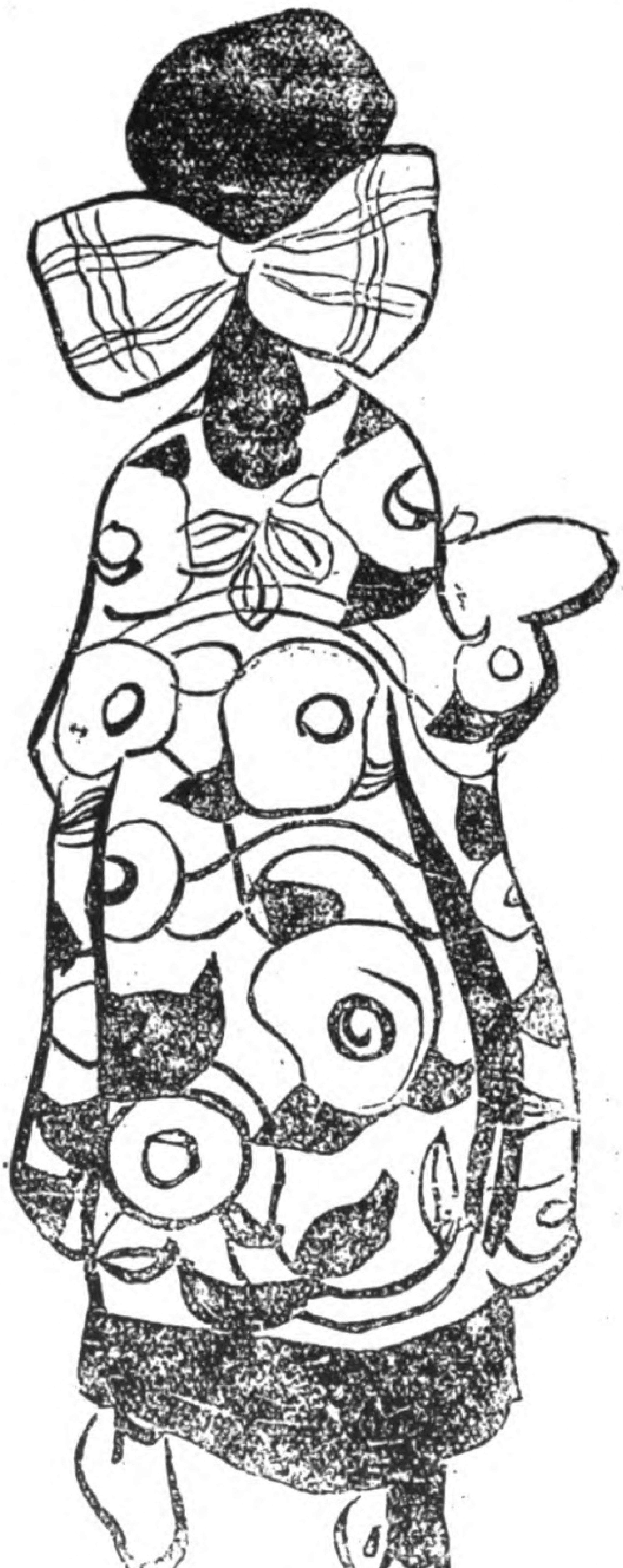
六疊の御書齋、御床には、御ひな樣の時の掛軸を其のまゝ、片隅にて袋に入つた御琴が二面、たてられて居る、そばの紫檀の茶棚には御茶の御道具やら、アルバムやら、瑪瑙の美しい兎も、鳩ポッポと仲よく遊んで居る、オルガンもある、ヴアヰヲリンも……だけど、清さんの是等のものを、もて遊んだ所を見た事がないわ、

「一寸、三枝さん、行くの？」つて云ふと妙に笑つて

「ホヽヽ御生憎樣、今朝、電話で御斷りよ、ガッカリしたでせう、目を廻して轉倒つちやあ、困つてよハイ、寶丹！」

手近に有つた錫の入物取つて突きつける。とても清さんに逢つちや敵はない、私より一つ上の十九、凛と

した面輪の美しい方、スタイルが非常にいゝので通學の道すがら獨協の學生たちに騒がれたものだつた。
それに、何處かチャームするやうな所が有るので、學校でなんか、下の組の人にワイ〳〵云はれてるの、小學校時代の友で、目白へ行つた方も多かつたけども皆、散散に別れしまつて、私と清さんと二人仲がよかつた。四年の時に退學して美術へ通つていらつしやるのです。今日は丁度展覧會なので、私も此の交際界のクキンと同道の榮を恭ふして、かくは罷りつん出た譯…。



束あられが出たのを何だの彼だの云ひながら皆、爽らげて仕舞ふ。出たものは空にすると定めてあるんだから凄い譯ね。
清さんが御召がへに立つた時、退屈まぎれに、オルガンをむやみにブーブー鳴らして見た、不圖上を仰ふぐと前に掛つた金縁三尺の姿見曇りもなふ、ふつくりと大きく取つた前髪からマガレットにかけた銀ねずのリボンの邊りを判然映す。スラリと立つと藤ねずの山繭入りのお召しに白襟を重ねた胸にブローチの光り、少し下つて、

菫色の袴が、しごきの紅と映えて美しい。あゝ少女十八の花の姿!!!

「お待ち遠樣さあ行きませう。」

まあ、うつくしい淸さん。例も御好きなお納戸がゝつた御召に例の胸高に御袴はいて‥‥。格好のいゝ丸髷の束髪がほんとによく似合ふわ、大くて、黒いつやつやしいいゝ御毛なのよ。

ふつくりとした白い御指に、眞珠をはめたあつさりしたリングを態と一つ。

二人並んで、鏡の前に立つてにつこりした。

御玄關から出かける、又、雨がはら〳〵と降り出したので相合傘、嘸、誰かゞ羨んでるでせう。

未だ櫻には少し早いけども、もう仲の橋あたりはつぼみが大分赤らんで來る、淸さん所の三階から見ると花が丁度、眞正面に見えるのよ、去年の丁度、今頃肋膜を病んで駿河臺の病院へ通つてる時も、人力車で此所を通るとあの!風に送られて、うす紅の花びらが車の上に散つたりして、本當に嬉しかつたつけ。

「來てよ。」簡單な淸さんの言にはッとして傘をつぼめると、糸のやうな春雨が、上氣した顏に心地よく掛る。あゝ江戸川の花を縫つて、所々に植ゑられた靑柳も、新しい葉に美しいうるほひを見せてみどりも濃い‥‥白鳥橋で乘りかへるとき、又なつかしい雨にぬれた、三丁目で電車をのり捨てると今度は別々に傘をさした二人は、日の丸を交叉した正門から入る。

‥‥‥‥!!!紅紫紋綾の浪うつ、美しい人垣を、わけて、すぐに食堂へと突貫する、

「あら!」「まあ、よく‥‥‥‥。」

「早かつたわねえ、御待ち申してたのよ」

「よくいらしつて下すつたのねえ」

右左から美しい女に取りまかれて、さすがに交際なれた華やかな言に圍繞せられて、面食つて仕舞つた。

何は兎もあれ‥‥。

「何にしませう、おすし?、お菓子、サンドキッチもある事よ。」

「おすしを頂戴な、」と淸さんが云ふとぢや私にも」

「おついでに私にも頂戴。」「私もお壽司よ。」

時計を見るとまだ十一時半、まあ、何處も見ないうちに直ぐ食堂だなんて……。「もう御覽んなすつて?」、



「いゝえ、どこも……」

「あらいやだ、ホホヽヽホヽまあ食心ばうねえ」

オヤいけない随分だわ、元來、吾吾の目的はパクツキにあり

なんですものなんて云はふもんならそれこそ、ふやけちまふほど冷かされるわ、ないしよ〳〵、其な事は關せず平氣でお茶を吞んぢやあお壽司を食べる、淸さんのお箸の持ち方がをかしいつて、皆、キャッ〳〵て笑らふ、餘り笑ふもんだからすぐわきのテーブルに居た三田の方二三人、不思議想にチョイ〳〵此方を見るんですもの。美津枝さん御よしなさいよよく笑へるわねそんなに！、ホヽヽヽヽ。

さあもう戰鬪準備は出來たから、愈々、廻りませうか、一番先きに菊花の所へ行つて何かめづらしい、ステキな盛花でもあつたらと思つたけど、もういゝのはきのふ、賣つてしまつてないんですもの。昨日來ればよかつたわ。淸さんてばとう〳〵うりつけられて頗る不景氣きはまる華を求める。

西洋畫の室へ行くと、正面に大きな女のがある、おすてきだ、紫がゝつた着物に いてふ返しの粋な女が片手は髮に、立膝のまゝやゝ小首を傾けた艶なもの光線の工合が少し惡いかして顏は少し變だけど、でも却々よく出來てるわ、美しいつたらない。

斯うずうつと見まはして見ると賣約濟の赤い札が下げてあるのは皆、小形なもの許り、それをまた閑人どもが賣約濟の札の下に書いてある名を見たいつて、リボンやら簪やらの頭をよせて見て居る、私も御多分にもれぬ一人で好奇心やら何やらかやらで覗いて見るとまあ不思議、どれもこれも荻野つて方の書いたのばかりなんですもの、よくある畫題の晩秋つて云ふのが、殊によく出來て居た、くれ行く秋の日をあびた林の影が、地上に長く、印して居る所が何でもない癖に本當に人の心を引つける。

それから怒濤うづまく江の島の辨天岩のあたりも、ふるひつくほどいゝ、あゝ 渺洋の蒼き口に白泡の齒をならして刻々島根を食ひ削らんず、恐ろしき浪のかしらの目に見えるやう、紙上に躍る狂瀾怒濤どんなによかつたでせう。

風通しのいゝ窓の下に長椅子おいて、美津枝さんと澄さんと淸さんと私の四人、腰をかけて出入する人を

眺めて居る、香水の香や油の香、肌の息れのむし暑い中を出る人、入る人、色々な人が通る。角帽あり、白葉あり、中折あり、中にまぢつて子供の手を引いたのやら、投島田の艶なものもある。束髪ローマ等は云はずもがな大黒帽あみだにかぶつた美術の人もちよいちよいするどい目鏡越しに見て行く。

日本畫へ行かふとしたる階子段の所で小花さんに逢つちやつた。「まあよく……」とにつこりなさる。マガレットに眞紅のリボン蝶と結んで、銀ぶち眼鏡が伊達でもないらしい。いつしか、良一ちやんが一さんと二人で來て「僕の好きな子は小督の中にある」つて云つてるのよ「あッ、小花さんだねあの猫の眞似する人ね」つて云つたら良ちやん、それは〳〵恨めし想な顔したつけ。その方よ。切符をね電車の中で買つたつて素的な評判でしたわ、ホヽヽ、まさかねえ……。

日本畫は洋畫程感心しなかつたわ小花さんは、綱地へ大きくダリヤを御畫きなすつたのでしたけど、何だか、色彩が單純すぎて、輸出向に的してるわ、專門家の目から見るといゝのかも知れないけど、吾々素人の目から見ると輸出向……。まあ大變〳〵此んな惡口が良ちやんに知れやうもんならそれこそ、あのまあるい眼をキヨロ〳〵させて「百合ちやんはひどいねえ」なんて、云はれやうもんなら閉口だわ、却々猛烈なんだもの、いつかなんかちよつと羽織の白い紐の事で觀ちやんの事云つたら、まあ、目の玉の飛び出る位皮肉るのよ、お負に罪もない一さんにまで八ツ當りにあたるんですもの、オヽコワイ〳〵、君子は危きに近寄らず。

縫物を見て美津枝さんの縫つた絽の御重を散々冷かしてやる美津枝さんと淑子さんとは私にも美術へ來いつて云ふの、あゝ私だつて畫の爲めに一生を捧げるのなら、ちつとも惜しい事はない、本望だわ、本望だけれども、だけど、あゝ、だけども……。

沈み切つてると靜さんが「一寸又行きませうよ、餘りさわいだら御腹がゴム風船みたいになつたわ「つて黃金鎖のキラリと見える邊りをさすつて見せる。

食室ぢや相變らず騷いで居た。だけど私は淋しかつたわ刺繡も造花も腦にない……、あゝ江の島辨天窟！白浪をどるさがみ洋、はるかに浮ぶ我がまぼろしの。

初夏一週間の獻立

仲子

△日曜日

一、刺身、鰈、妻、わさび、ちしや、
二、煮付、かれい、竹の子、
三、馬鈴薯のつぶし、
四、汁、うど、玉子、三葉。

(一)鰈の鱗をとり、白皮の方をおろし、腹をとり、皮を去り、小骨を去りて庖丁す、妻、わさびは皮を庖丁にてかき、わさびおろしにておろして、庖丁にてたゝき。ちしやのすじを取つたのと付ける。

(二)、味淋、砂糖、醬油を適當に鍋に入れて煮立たせ、鰈の殘り片身を適宜に切り、薄腹皮などと共に入れ、パッと煮上りたる時におろす。これに竹の子の皮をむき、堅き所を去り、糠を入れてうで、一度水につけ、凡そ三分位の厚さのはすに切り、味淋、砂糖、醬油、かつぶしにて煮たるを付合せる。

(三)、馬鈴薯をまるのまゝ茹で、やはらかくなつた時、水の中に入れ、手にて皮をむき、裏漉して、バタ、牛乳、砂糖、鹽を適宜に入れ、弱火にかけてよくかきまぜておろす。

(四)、鍋に水を入れ、いゝおかゝを入れて煮立て、醬油をさして又煮立てそれにうどを纎に切つて入れ、玉子を(三人に二個位)よくかきまぜておろす前に靜に入れ、椀に盛るときに三葉を入れる。

△月曜日

一、小豆飯
二、組合物、日の出蒲鉾、蓮根、二色玉子、蝦、茶巾、
三、刺身、鯛、妻、わさび、胡瓜、
四、汁(うしほ)、鯛、じゆんさい、
五、木芽あへ、烏賊、竹の子、
六、なます、胡瓜。
七、きんとん、薩摩芋、とうくすん。
八、梨、ネーブル、

(一)、米一升に小豆三合の割合にて、小豆の腹が切れぬ位やはらかく煮えたとき、米を仕立て鹽二勺位入れて、水加減をして炊く。

(二)、蓮根は沸湯の中に鹽を入れ、蓮根を入れて茹で、ばすに厚さ五分位に切り、また中央より、二つに切りて合せ、其の穴が矢の形になりたるを用ゆ。

二色玉子は、玉子四個の中、三個を白味と黃味を別々にとり、一個を白味とともに黃味の丼にわり込み、鹽砂糖にてそれ〴〵味を付け、先づ玉子燒にて白味を燒き後黃味を燒きて、其の燒きたる白味と黃味をかされ、あぶりたる淺草海苔にぐる〳〵と卷いて適宜の大きさに切る。これは可成暖き內に手早くするがよろし。

蝦は頭のさきを一寸切り落し、洗ひて沸湯の中に入れて鹽茹にす。

茶羹は寒天を細々になし、寒天一本に水二合の割合にて、弱火にて煮つめ、一合五勺位になりたる時に裏漉して、砂糖七十匁目に引茶のふるいたるを三さじばかし入れ、一寸火にかけて箱に流し入れてかためる。

雲餅は赤き物なきときは、紅をぬりて赤くしはすに大きく切りて、前の物と共に見栄よく、付合す。

（三）、これはたび〳〵書れたれば略す。

（四）、鍋に湯をたゝせて、鯛を適宜に切りたる物を入れ、また沸上りたる時に塩にて味を付け、盛る前にじゆんさいを入れる。

（五）、烏賊を水洗ひし、薄皮をむき、適宜に切り、砂糖、味淋、塩にて一寸味を付け、別に竹の子の湯でたる物を適宜に切り、烏賊と同じ様に一寸味を付け置き、さて擂鉢にて木の芽をすり、白味噌の裏漉したるを入れ、砂糖を加へよく擂りて、之れにて右の烏賊と竹の子とをあへる。

（六）、若き胡瓜を皮をむきて出來るだけ薄くきざみてしぼり、鯛の骨と皮とを去り、うすく切りたるものと一緒にし、三杯酢をかける。

（七）、とろくすんを湯を二三度替へながら、やはらかくなる迄煮て水を切り、砂糖塩にて味を付け置き、又別に薩摩芋を茹で、皮を去り裏漉して砂糖塩にて味を付け、之を前のとろくすんと混ぜる。

食堂のテーブルには白布をかけ、中央に白百合を一輪さしたるを置き、ちやんとしておまちするなど、風情があつて、時節柄まことに結構でございます。

△火曜日

一、かきよせ、
二、汁、はんぺん、みようが、
三、青煮さや豆、
四、奈良漬、
五、トマトー、

（一）、凡そ一寸五分位の蝦を洗ひ、頭の尖をきり（老人の食するときはすつかり皮をむく）、メリケン粉、玉子一個、味淋、塩、砂糖を適宜に混じて、どろ〳〵にとき、先づ、青ぢその葉を洗ひて水をきり置きたるを、胡麻の油の沸えたる中に入れて上げ、次ぎに前の蝦を皆一度に入れてかき混ぜ、さじにて油の中にすくひ込みてはあげる。

（二）、味淋醤油にて加減したる汁を仕立て、ハンペンとみようがを入れる。

（三）、さや豆の筋をとり、湯を煮立て、重曹少々入れて茹でゝ水に上げ置き、かつを、味淋、塩砂糖にて煮る。

（五）、トマトーに沸え湯をかけて皮をむき、砂糖をかけて食す。

△水曜日

一、ボイルドミート、
二、ふき、竹子の煮付
三、汁、わらび、
四、玉子とじ、ソース、

（一）、牛の挽肉に塩胡椒を入れ、玉子をとかして交ぜ入れ、丸き平らたき形にして、フライ

パンにバタ又はヘットを入れ両面をやく。

(二)、ふきを茹で、水につけて皮をむき、一寸位にきり、別に竹の子を茹でゝ水につけたるを適宜に切りて、かつを、味淋、醤油、砂糖にて煮て、大方鹽氣のしみたるとき、先のふきを入れて又煮る。

(三)、わらびの堅き所を去り、鉢または桶に入れて灰をかけて其上に湯をかけてあくを出し、引き上げて水にてよく洗ひ、庖丁して、かつをのだしにて仕立てたるお味汁の煮上りたる中に入れてたゝせる。

(四)、玉菜をきざみ、メヽにていため、玉子を茹でゝ裏漉したる物(三人前に二個位)を入れてかき混ぜソースをかける。

△木曜日

一、烏賊の鹽焼、
二、里芋味噌煮、
三、汁、蛤、
四、なます、大根、烏賊、

(一)、前日ひらいて鹽をして生干になつたのを焼いて、頭ばかりをうすく切つてソースをかける。

(二)、これは鹿兒島でよくする料理です。白味噌、赤味噌半々をよくすり、裏漉してどろどろ位にとき、味淋少々入れ、里芋を少さきものならばまるのまゝ、大きなのは庖丁して(鹿兒島ではどんな大な物にてもまるのまゝ煮る)前の味噌の中に入れ、弱火にて氣長に煮ればよし。

(三)、白味噌にてお味汁を仕立て、煮上りたる時、水につけて砂をはかせた蛤を入れ、口のひらくまで煮る。

(四)、大根を丹冊にきざみ、沸湯をかけてよくもみ、烏賊の足を薄くきざみて三杯酢をかける

△金曜日

今日は五月御節句ゆゑ、之れに因んだものをつくる。

一、菖蒲鮓、
二、鯉のつゝ切、
三、きやべつ巻、
四、胡瓜、みようが、
五、久和井だんご、
六、柏餅、
　あく餅、

(一)、すし飯をこしらへ(一升の米に酢一合、鹽一勺)小鯛の鱗を引き頭を去り、腹に庖丁を入れて開き、水にて洗ひ、小骨をぬき、鹽をふつて少し置き、酢につけて皮をむき、ご飯を握つて鯛にてくるむやうになし、之を箱につめ、菖蒲の葉をのせて二三時間おしを置き、後適宜に庖丁して出す。

(二)、鯉の鱗をひき腹を出して洗ひ、椀に盛る様に切り、味噌を鰹節の出しにてときたる中にて下煮をなし、更に同じく煮出しにてときたるこき汁を鍋の中に入れ、煮立ちたる時椀に盛り山椒をそへて出す。

(三)、挽肉に玉葱を細かく切りたるを混じ、鹽胡椒にて味つけ、メヽにていため、キヤベーヅに巻き込み、また一寸メヽにていため、ナイフ

にて切りながら食す。

(四)、胡瓜の皮を去り、うすくきざみ、みようがもうすくきざみて三杯酢をかける。

(五)、久和井の天地を切り、口無を入れて茹で水にて洗ひ、だし、味淋、砂糖、鹽にてよく煮つめ、串に三つ四つさしてつける。

(六)、柏餅は上新粉を沸湯にて捏れ、三分の二程に小豆餡をつゝみ、また白味噌百目に砂糖八十目程加へてよく練つた味噌餡を、三分の一程につゝみて、各々柏葉にくるみて蒸す。

あく餅はあくを濃く出して、一夜其中に餅米をつけ置き、蒸に引き上げて水をかけ、竹の皮につゝみて上をしつかり結びて蒸し、食する時に砂糖をかける、これは玉子餅の如く綺麗でいつ迄ももちます。

△土曜日

一、ちしや卷鱚、

二、ロールドポテトー、

三、汁、馬鈴薯、みようが、

四、たゝきごぼう、

(一)、鱚を常の如く料理して適宜に切り、味淋醬油、砂糖を適宜に入れて煮立つた所へ、前の鱚をちしやにまきて入れて煮る。

(二)、馬鈴薯の皮をむき、千六本に切つて、フライパンにバタをしき、其上にて一寸こげる迄ころがす。

(三)、すまし汁を仕立て、馬鈴薯をすりて適宜にまるめたるを、其の沸立つた汁の中に入れ、みようがをも庖丁して入れる。

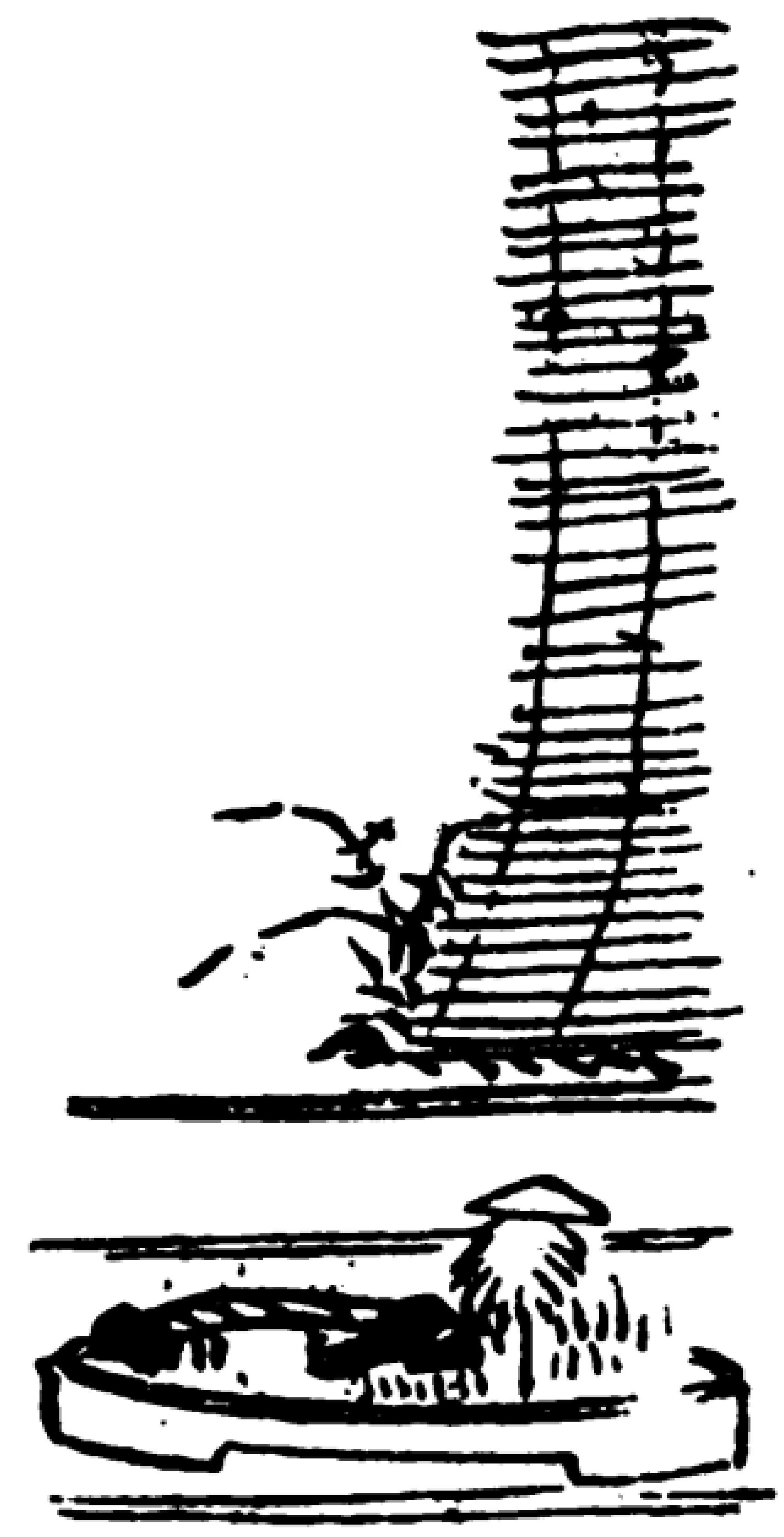
(四)、ごぼうの皮を去り、茹でゝ擂子木にてたたき、一寸位に切り、酢にしばらくつけてけしをまぶす。

△婦人世界の記念園遊會

實業之日本社發行の婦人世界は、春色深き四月九日、芝公園紅葉館に於て、其の創刊五周年の記念園遊會を催したり、當日は非常の強風なりしにも拘らず、定刻には會場は江湖知名の紳士淑女を以て充たされ、先づ手品、藤間勘右衛門の踊駿檄、藤澤一座の喜劇女天下、紅葉館美人連の紅葉踊等の餘興ありて式に移り、最初に編輯主任高信孝次氏の開會の辭、社長増田義一氏の挨拶あり、それより大隈伯、新渡戸博士、跡見花蹊女史、棚橋絢子女史の演説祝辭等ありて後ち食堂を開きたるが、其の間庭園には壽司屋、水菓子屋、ビーヤホール等十幾つかの模擬店も開かれありて同社關係の婦人達の接待あり、頗る盛會なりき。

△竹柏會の春期大會

四月十六日午後一時より日本橋倶樂部に於て、佐々木信綱氏の主宰せらるゝ歌道竹柏會の第十四回大會を開きたり、門下の婦人達其他の會員等花の如くうるはしく集ひ、遠きは伊勢大阪邊よりも態々上京せる者もありしが、第一に松寺久雄氏の兼題「雲雀」百餘首の披講あり、最後に主人博士の軸詠「囚はれずこめられずして大空の濶き心に雲雀はうたふ」を披講し、次で博士の「趣味の發發に就きて」、及び文學博士幸田露伴氏の「古き文學の一つに就て」と題する講演ありて餘興に移り、櫻間伴馬氏の船辨慶を舞ひ出づるや舞臺前にリボンの波搖ぎて彩雲の如く、それより藤間勘十郎社中の布ざらし、松の緑、娘獅子等ありて庭園の模擬店開かれ五時過散會せり。



俳句

天
川暮れて水に聲なき野がも哉　小樽　山口かく子

地
おぼろなる町をこわいろつかひ哉　宮城　鈴木ちさし

人
春の人落花の石に憩ひけり　横濱　牧野洋子

秀逸

欄朽ちて欵のびたる馬場かな　下野　片岡浪子
紅皿の紅のうすれや虎が雨　鉾田　岡田千冬子
うつゝなの鐘や花散る宵の雨　東京　萩野露子
鏡拔いて廢兵を待つ牡丹かな　名古屋　平松こう
音調べに絃しめ盡す夜長かな　越前　山口靜枝

馬走せて櫻月夜に戻りけり　小樽　金澤とく子
石實って凸凹庭や春の雨　横濱　山崎済子
爽やかに雲雀晴れたる草野哉　横濱　吉川志佐子
葉柳や鯰釣る竿のたてゝあり　旅順　田中きよ子
拜殿の袖さす花の渡しかな　沼津　原川すま子
綾板にもみのあらしや雛初す　長野　長野ちか子
張板の緋綿に散るや桃の花　茨城　森山利子
春宵や鼓うてば怪戀ひよらむ　香川　細川はる子
病床に妻戀ふ夜、半やほとゝぎす　廣島　加藤かなる
千代紙の雛南阮に淋しけれ　長野　服部信代
よき人の後ろすがたや花ふゞき　越後　岩本よし子
夜習に歸る途中や蛙なく　紀伊　木下助子
永き日の暮れて南無阿彌陀佛哉　紀伊　玉置仲助
逝く春や矢立に殘る京の水　茨城　中林たけ枝
ぬれ髪に若葉の風のすがすがし　廣島　加藤よし子
山鳴りもなれて安堵や春の雷　肥前　服部ふじ代
桃日和網の萬竜とゞきけり　香川　大井久子

夢破る琴の空音や夜半の春　香川　猪熊さい子
暮かゝるうす紫の春野哉　香川　大井裕子
雨若葉廢兵院の家として　埼玉　伊藤時子
梅が香にわざと消したる灯かな　石狩　乃武子
旅行風呂煙らせば雁名殘る雨　神奈川　鎌田閑月
夜網引く背に近き千鳥かな　靜岡　ゆかり
春の雨柳の糸にまとめけり　北豐島　古川奈良菊
媚きの囁く辻や月朧　瀧の川　中村喜代子
桑の花や尼が畑のこぼれ咲き　能登　向井きみ枝
宮の緋鯉浮けり堤の花長閑　新潟　高橋やす子
寒梅や白髯の主詩に耽る　茨城　森山花子
遣水や鷁首御紋に風光る　三重　四山ひさゑ
秋の姿都に老いし局達　山口　長谷比呂子
南窓の梅の木に迫る冬日かな　秋田　加々谷山里
友戀ひし人こひし今日春日かな　熊本　きく子
春雨や花の節句の謠曲會　備中　圓山愛子
紅梅に雨暖き彼岸哉　長崎　林田百合
夜や春や柳の朧むめの月　本郷　近藤たみ子
ぬり下駄の足の白さよ春の雨　神戸　中西清子
摘草や明日は鎭守の宵祭り　東京　廣瀬千代子
衣かへて起居のかろき女哉　淺草　渡邊とみ子
山莊の筧は深き若葉かな　廣島　新見あさ代
藁屋のみ並ぶ小村や百千鳥　越前　梅が香
張板の反物赤しちり櫻　東京　のだ美
蝶々や埃溜に咲く落草に　肥前　黑田君子

木蓮や若き居僧の寺に咲く　紀伊　山田松子
空想に耽る少女や春の宵　福島　木村つれ子
敷石や楡はら〳〵と廟の道　廣島　香川玉代
春風や上臈の君が醉顔に　旅順　山本やすゑ
米つきの鷄追ひにでる日永かな　宮城　鈴木菊枝
櫻に暮れ櫻に明ける都かな　常陸　青山松枝
梅手折るわが影寒き月夜かな　宇都宮　松井女史花
學齡の子を祝ぐ家や桃の花　大和　坂本鹿の子
夕不二のかげ居直るや汐干潟　東京　貞子
長閑さや髪洗ふ庭に蠅群るゝ　福岡　近藤花子
紅皿のかわかで暮れぬ春の雨　本郷　うた子
花守の少女は逝きぬ落椿　本郷　華子
海棠や縁に佇む孫横樣　金澤　松本みさを子
梅雨に入る日を侘住の軒冷ゆる　伊勢　大原つれ
生垣の杉も茂りて春の行く　美作　民子
離れ家や牡丹に縁の塵とめず　福岡　のぶ子
春の宵帷桁に見ゆる長襦袢　福岡　井上みよ子
お社日を裝ふ牛の誕かな　香川　猪熊榮子
色褪せし裳に注ぐ小雨かな　播磨　辻田きさ子
貝拾ふ子も繪に入るや磯の春　下關　柳　ふく子
溫容の君さながらや春のやま　新舞鶴　片山春香
夜桑やる手元休めてほとゝぎす　岐阜　今井智惠子
春の夜の嫁盗人や月おぼろ　長崎　深見つゆ子
飴賣りの傘の破れや春の雨　大阪　本山須磨子
髮洗ふ盥の湯氣や陽炎す　越後　平石すま子
鯉魚數萬天下の春を躍る　北千住　竹内ふみ子
長江の水遠白む春の朝　京都　德弘律子
餅ついて蓬につゞく日和かな　鹿兒島　山下とよ子



文苑

かすむ夕

美作　田鶴子

いさゝかの事にも笑ひ興じてさへ居れば、世間の人たちは、みんな「苦勞のない樂天的な女よ」と云つてくれます、否云ふばかりで無く、全くさう思つてゐるのです、私の…聲を絞りもしたいやうな。私の苦しい此の胸の底を知つてる人は一人もありません。

「お父上樣はどうしておいでだらうねえ」と浮かぬ顏して母樣は縁の柱に倚つていらつしやる、かすむ夕月の影も、思ひある身には何となく淋しく寂しい、「ほんとにねえ」と云つたばかり、狹い私の胸は迫つて、知らず識らず熱い涙が流れた。

あゝお父樣は海隔はるけき旅路の空に、今如何して被居るだらう。父樣のおん夢に入るは三千里外故郷の空…私等の上ではあるまいか。（一等）

春雨日記

札幌　伊佐敷清子

雨は却々に晴れさうもない、姉樣とさしむかひで、お裁縫をはじめる相變らず口ばかり働いて、手の方はいつもお留守になる、姉樣は燃え立つ樣な、本紅の裏袖を、鏝板の上にのせて、一寸思案顏して居らつしやる、姉樣ヘラがお入用なんでせうといふとまあよくお氣がつく事とほめられた、でも姉樣ヘラの樣なお顏なさつたんですものといふと、まあいやな、ヘラの樣な顏ですつて、酷いわ…、あら姉樣、さうぢやないのよ、ヘラがほしさうにして居らしたといふ事ですわと、言ひ譯けしながらも、思ひだすとおかしくなつて暫く笑ひこける、あとで何んと仰有るかと思つたら、あんまりいろ／＼な事いつて笑はせたので、間違つたですつて、悪い事を皆私の所爲にしてにくらしい。（二等）

故郷の母に

丑野　あざみ

御母樣、無事東都へ着きましたから御安心下さい、初めてまみえた花の都は、すべてが想像以上で、只際もなくそゝられるやうで、心は少しもおちつきません、絶え間なく轟る電車や、各商店の歐洲流の裝飾よりも一しほ目を引きますのは矢張り自分と同じ女學生で御座います、色とりどりの袴に、長い振りの袂、競ふ春の風に、得ならぬ香り止めて、行き來ふ花の樣な姿、かざしたリボンの華かさ、田舍出の私には之れが最も大切な修養時代の學生かと、云ひ知らぬ感じが致します、けれども母樣、私は決してかゝる虚榮の擒となりません、何處迄も田舍者で通します、出立の際の御教訓を心の鏡として、ひたすら學業を勵みますから、

どうぞ御心配なく、御健かに御過し下さいまし。(三等)

磯の夕

大磯　道子

胸の痛みになやめる女は、今日も又夕榮の雲美しき磯邊に坐しぬ、くだけては散る波の花、よせては返す波の響……、痩せたる頰に亂るゝ黑髮、かきあぐるともせで、見つむるは遠き沖邊……美しき目はあやふう光る、彼方の帆影はしだいに近きぬ、……漁ありしを祝ふ聲、夫の歸りを笑顏にて向ふる妻と子、濱邊の暮の賑はしさ……、なまぐさき風は消え去りぬ、されど磯の上なる女の靑白き顏は依然として……、(秀逸)

芳ちやん

下關　花子

芳ちやんは、今年六つで、私より二つ下の妹なんです、私此妹が可愛くて可愛くて仕樣が無いのよ、だつて私が每日學校で唱歌や遊戲を習つて來て直ぐ芳ちやんに敎へると、夫はほんとに能く覺えるの、朝學校へ行く時だつて、行て入らしやいなんて御辭儀をするし、歸つて來ても一寸でも私の姿が見えなかつたら、姉ちやん〳〵と探しまはるんですもの、昨夜母樣が芳ちやんの月代をするつて、この子は眉が餘りくつゝき過ぎてるから落した方が可愛いくつて半分落しかけたら、芳ちやんがお祖母さんの樣でせうなんてませた口を開くから、ホヽヽ、丸で御芝居に出る人の樣だわつて內證でそつと言つたのが、つひ聞えたと見えて、芳ちやんは何と思つたかワツと泣き出した。(秀逸)

春子樣へ

鳥取　淡香

春樣、御目出度うござゐます、アラ何がつて……、分つてゐるわ、ホヽホヽほんとうに美しいマダム振りが早く見たい事れ、いつも綾さんと、さう云ひ〳〵してますのよ、噫、今目の前に見える樣ですわ、春樣の華やかな丸髷姿が……、たつた先度までコバルトの三吋幅リボンを大きく結んで居らしたお孃樣か、と思ふと、夢の樣ですの、「天つ風……」「ハイ」白い御手を勢込んで御出し遊ばした刹那、藥指のリングが一間も先に飛んだ事を春樣覺えて居らして？、あの時は隨分面白かつたわねえ、あちらへいらつしやるのは、いつ頃なの。(秀逸)

榮えあるお姿

熊本　白萩

日の光り和らかに、百鳥の聲も長閑だ、南向の八疊に刺繡臺に向つた祖母樣が嫁來した時のお長襦袢であつたといふ友禪の、観世水に花筏の模樣が、又なく好いので、お許を受けて二階の長持から出して寫したこの繪、眞實に好い、紅糸を針に通して刺しながら、そのかみの祖母樣のお姿を思ひ浮べた、紅白の綾衣の上に、金糸の刺繡ある地に、太い緋ぶさのうちかけ、どんなにかお綺麗で被居したらう、わけても祖母樣は評判の御容色で、丁度十七で被居したさうな。

飛行器

牛込　平塚白百合

遠近にまばらながらさいてる櫻は、浮き雲にまがはれる、武信山脈の山縣に、やはらかな朝日があざやかにさして、筑波が紫のかつぎ着てけぶつてゐる。

春とは云へ所澤の空原は朝風がかろく身にしみて、観覽席の美しい袖

は、るり色に紫にひるがへる、推進器のはげしい音がいちじるしく高くなると、拍手の音に送られて、飛行器の雄大な姿がゆるやかに飛揚し初めた。高く／＼中空を快走するこゝろよさ――、日野大尉は快心の笑みを浮べて、一時間の後飛行器と共に觀覧席の正面に下つた。

私の春

東京　艶子

赤い花を簪にしても 二尺三寸の袂を風にゆらめかしても、唱歌をうたつて、朝から琴をひいて居ても誰にゑんりよもいらぬ私は娘の身、姉様はいつも淋しいとおつしやつた、何事によらずおねだりする父様がある、又嬉しい時でもかなしい時でも私の心の底まで察して下さる母様もある御本をならふ時には親切な兄様さへある。

姉様がお嫁に行つておしまひなさつた事と、妹も弟もないといふ事とがいさゝか私のものたらぬ一事。

雨

神戸　赤松三千代

憎らしい雨、あゝ、私はどんなに今日をまちこがれたであらう、四月三日、私は一ヶ月も前から今日の花見の運動會の爲、どれほど時を費したでせう、昨夜調へたバッグには、日照のきつい時にと眼鏡も入れた、風の用意にはピンクのプエールも入れた、お召の羅れ、厚板の帯、あゝ皆恨めしさうに私をながめて居る。

心地よき日

東京　若紫

柳はみどり、花は紅に、心地よき頃と相成り申候、野に川にかすみの花のおほはれて、一日／＼と春は深う、櫻も眞盛りの由、御壯やかの皆様のみ羨ましう存じ候。にがき藥に白きベッドに、單調なる病院の生活もほと／＼倦き果て申候、時候のよろしき故にもや、四五日此の方殊の外心地よろしく、少しづゝは編物をゆるされ候まゝ、徒らに致し候この羽織紐、いと拙くお恥しくは候へど、御ふだんがけにもとて御目にかけ申候、病院にて富より。

別れ

滋賀　西尾かめ子

卒業證書を片手に、片手は君枝さんの手に曳かれて校門を出た、君枝さんとは、クラスメートの中でも姉妹のやうに交はつてゐた無二のフレンド、今日は懐かしい三年の夢醒めて、いよ／＼東に西に十幾里の間へだつる最終日と思ふと、悲しい淋しい感想が緊々胸に迫つてくる、君枝さんの眼はもう露が一杯に満ちてゐる、自分も感慨を失なつたやうにほろりとした、姉川の堤を越え、土橋を渡つて、いざや袖を別たんとする地藏の辻、こゝに堅く結んだ手と手、「御機嫌よう、今後もきつと御見捨てなく……」、後はもう言へず、堪へられなくて暫時路傍に涙を拭ふた。

やすらひ

札幌　散る花

「私、あの卒業證書とる時、もうほんとに泣いて了つてよ、昨夜もねえ、つくづく悲しくなつて、一時過ぎ迄机にもたれて……」

じつとお瞳をふせて、聲をのんだ時子樣。

時様は明日、田舍の小學校へお赴任遊ばすんですの、昨日までの山形

のでち、かすかに残つたお納戸のお袴長めに……、小紋の肩のあたりは淋しうムいました。
そと手をあてたわが肩に、僅か乍らも摘んであるのを知つた時、今更のやうに、やすらひを覺えました。私の袴は、白線かつけた、其儘にしまつてムいますの。

親しき友に

信濃　たづ子

すみ子様、御美しく御なさけあふるゝ御文、只なつかしくうれしくてくりかへし／＼拜見致しました、君となつかしき袂を分ちまゐらせ、此の湖畔に移りすみて、はや三度の春を迎へます。理想を語りはなやかな空想にあくがれたのも昨日の様でしたのに、淡き短き過去の夢と消えて今は現實になく身となりました、若草もゆる春の野に、樂しくあそびくらした昔が偲ばれますわ、月ごと夜ごと追懐の涙にくれて居ります。

菖蒲

滋賀　野崎みどり

五月雨が漸々止んだ、珍らしい日の光が斜に池を照す、此處には小さい金波が蛇紋のやうに續いてゐる、池の水は黑い、緋鯉が其中に時々背を見せる、下層雲が西へ／＼走るのがよく水に映つて居る、日光は隱れたり出たり、自分は此ういふ景色をいつも心地よく感じる。綠の淺瀬に綠の鉾のやうに尖つた菖蒲の若芽が、銀玉を帶びて空へ上へ何所迄もと云ふ意氣込み、がやがては紫の花が咲く。菖蒲の壽命はそれで終りであらう。

朧月夜

茨城　森山道子

泣きしきる赤子を抱いて外に出る。折柄月は朧に霞んで程近き學校の櫻は白雲の棚引いた樣に見える、知らず識らず足を校庭の前に運ぶ。夜櫻を賞する人、二三人宛此所彼處に見ゆ、花の下に寄れば花輪をさし延れたる櫻の枝は、幾重にも重なり合つて、一種の清い薫りが鼻をつく、月に花が映ずる樣は實に何とも云はれぬ趣きがある、「朧月夜の花の下ふし」と云ふ歌を思ひ出して此處に一夜を明したい樣な氣がした、ふと愛子の面に目を下せば、いつしかすや／＼と安らけき夢地を辿つて居る花に醉されたか、「インゼル」の如き姿して花下に眠れる子の姿は、花の使の樣にも見えた。

星の下

長野　優香子

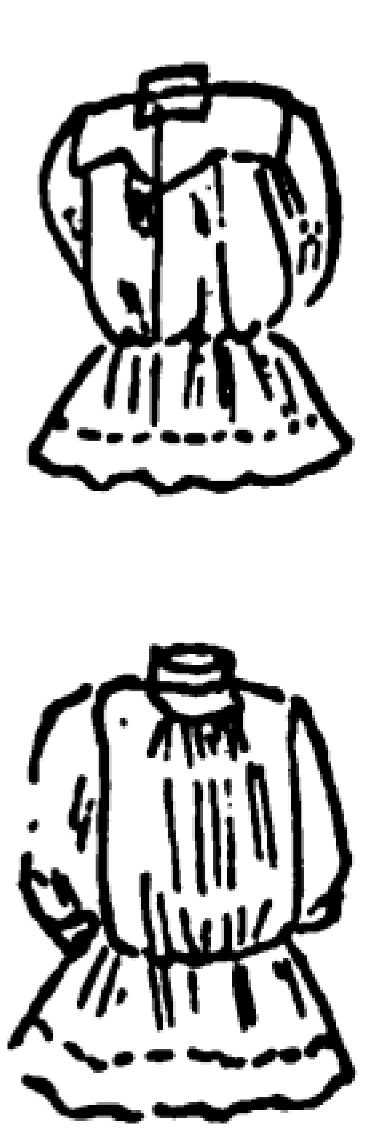
星の多い夕べ、懷しい／＼故郷からの小包みをひもといた、新調の袴の袷せに添へて、名產の杏しぐれ、はらりと落ちた手紙は祖母から、讀み難い折釘流の字も、私には一番嬉しい、家の様子や、暑中休みが待たれる事や、それに明日はお前の誕生日だから、お友達にお茶でも差し上げる様につて、お小遣まで入れてある、熱い涙が止め度もなく流れた。

手輕に出來る子供の洋服

和洋裁縫女子共立會　松江美佐子

六七歳の女兒服

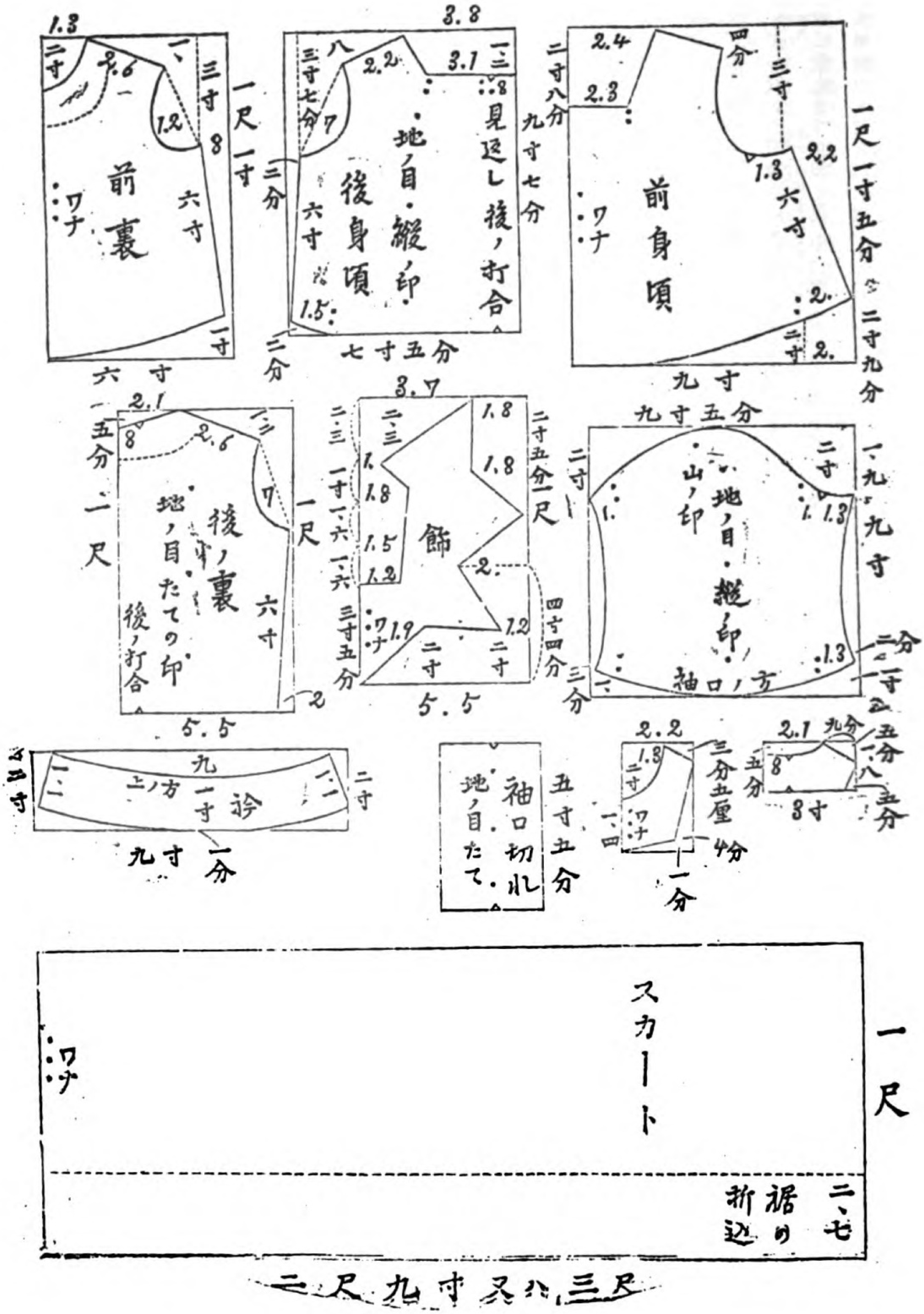
前々號には六七歳の男兒服を記載致しましたから本號には女兒のために圖の如き服を記す事と致します此形は四歳から八歳迄の女兒に尤も適當で御座います。地質は冬ならばネル、セル、カシミヤ、羅フラシヤ等夏向としては麻、絹、生モス、平常着にはあつさりした、更紗形なども宜しう御座いますそして此形はどちらかと申せば極、優美な方で御座いますから、色も無地ならば白とか水色とか其他淡桃色クリーム色・鳶色などが綺麗で御座います外出着には腰の處へしごきをしめて後で蝶々の樣に結んで置きます。尚ヨーク即ち胸の處の、少さい四角な切れ及び袴は、共切れで拵へるよりも成るべく白にする方がずつと引立つて見えますそして白も無地其のまゝでは、面白くありませんから、夏は白の麻、又は絹寒冷紗、（主の地質が生モスの時には共切れ）に細くヒダを取つて用ゐます。ヒダの取り方は、切地で縫つ心得の所に委敷記してございます、此ヒダを取る事は、此形に限らずヨークある女兒服には少しの手數で遙に、引立つて見せるもので極必要でございます尚縫方には裏の形と記して御座いますが夏は、裏なしに、但し前のふくらみの落ちてこないやうに。テツプ三分位で吊つて置くとか又は前だけ寒冷紗で裏を付けるとか致します用布は六七歳のために二尺巾、六尺八寸位、二歳について五寸位づゝ加減致します





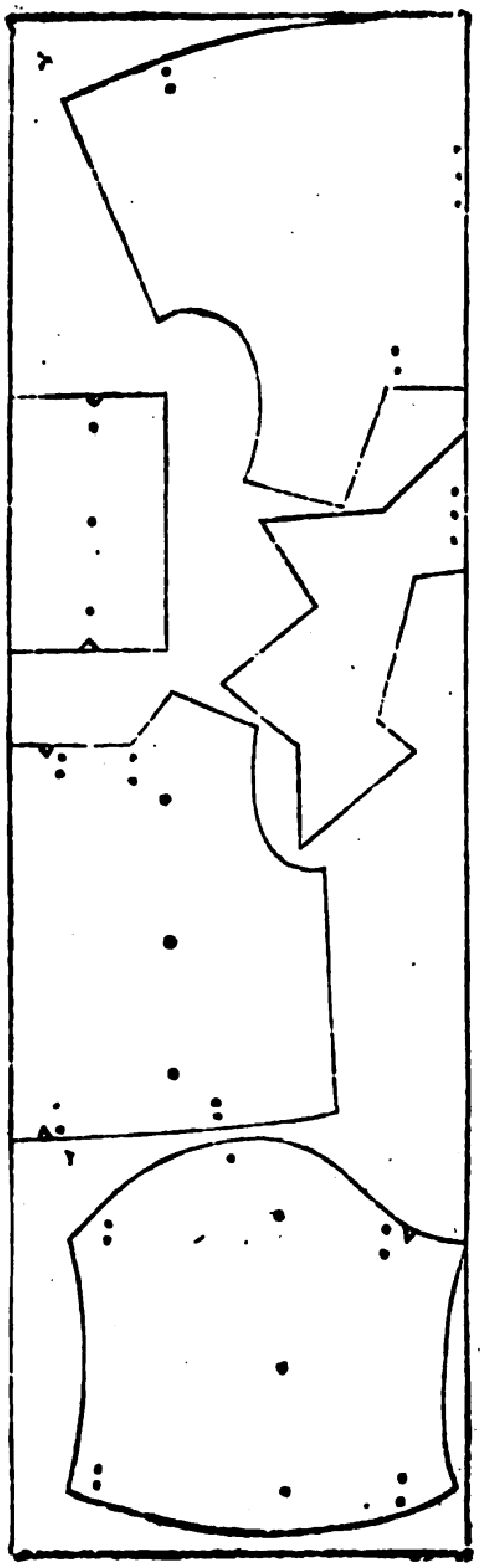
△形紙の拵へ方

先づ四角の紙を十一枚拵へ次に、各所を寸法通り裁切らぬ内に、切れ地を裁つ時に必要な印即ち地の目縦の印及びタナの印を夫々形紙に穴をあけて置きます但しあら〳〵三ッ星の印が地の目縦で近く三ッあるのがタナの印で御座います、其れより形を拵へるのですが總て圓味の處は無理のないやうに、自然に致します、其れより縫方に必要なギヤザの印の（●●二ッ穴）川の印（●一ッ）合印（切込）等を夫々付けて置きます


前裏
ワナ
六寸
一尺一寸
前身頃
一尺一寸五分
九寸
九寸五分
後身頃
地ノ目・縦ノ印
見返し後ノ打合
九寸七分
七寸五分
後ノ裏
地ノ目たての印
後ノ打合
一尺
飾
山ノ印
地ノ目・縦ノ印
袖口ノ方
一尺九寸
衿
上ノ方
九寸一分
袖口切れ
地ノ目たて
五寸五分
スカート
一尺
裾折込り
二尺九寸又ハ三尺

△切地に形紙を宛てゝ裁つ心得

先づ二尺巾の切れで裁つとして、最初にスカートの分を三尺だけ裁ち切つてしまいます、即ち六尺の縦丈しになります、其れより殘り切れを巾二ッ折にしてヲナの方へ前身頃及び飾りのヲナの印のある所を宛て次に、袖に切れ及び後身頃袖等を地の目たての印通り正しく當ちます、其れより前後のヨークにヒダを取ります、これは先づ、形紙の巾が二寸二分ならば切れで裁つのは其の倍を要しますから、四寸四分と其の上にヒダを一分づゝのヒダを兩方で十四本取るとして二寸八分を加へ合計七寸二分巾丈は形紙通り三寸四分又は少しゆつくり用意致し、圖の通り左右から眞中へ向け一分づゝのヒダを取るので御座います、ヒダの山から山への寸法は四分又は五分位に致します、但し眞中は兩方から向き合ひますから、左右へ三分五厘位づゝはなれた處を山に致します、次に後は矢張り形紙が三寸ならばヒダの分を一寸四分以上二寸位(ヒダの數による)加へたものを二枚用意し、何れも端から一寸の處を山にして内向きに取ります、前衿はヒダを取れば斜地が宜しふ御座いますが、これはヒダなしでも差支へございません



二尺巾を二つ折りにして裁つ圖

切地の裁方

△縫方順序

先づ袖の袖口に、印から印までギャザ縫ひをなし袖口の丈に合してちゞめ、此れと縫合し袖口の方へ向けて折を付け飾りミシンをかけます、次に袖下を袖口まで續けて縫ひ夫れより袖口切れは、眞中から裏へ折つてまつりつけます、次に、スカートの巾をはぎ合し前へ縫の處がくるやうにして後の方は二寸程縫殘し兩方へ三ッ折りになし耗りの處は一寸重ねて置きます次に裾を二寸七分折り其の先きを又二分折つて本折けを致します。次に上部にぐるりとギャザ縫ひをなし腰廻りを一尺八寸五分位にちゞめます、

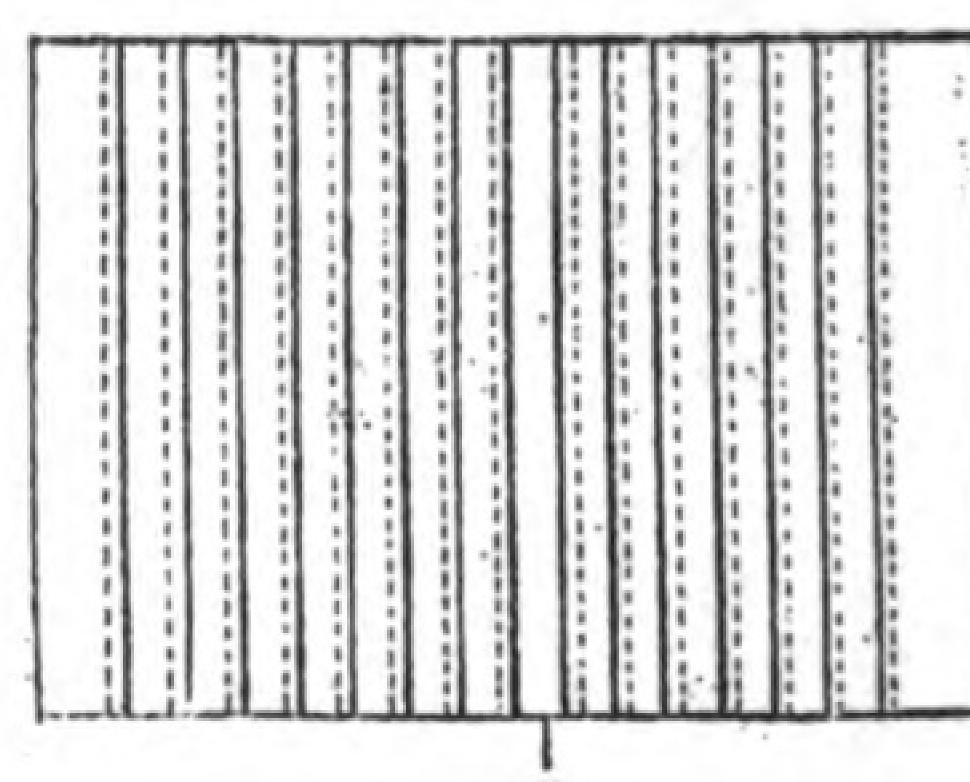
次に飾りの切れに、レースをつけますレースは先づ、飾りの外廻りの一倍半かりに二尺五寸あれば七尺五寸の片耳レースを用意し耳の糸を靜かに引くか又は耳を糸でまつり其れにて二尺五寸にちゞめ飾りの方はぐるりと二分裏へ折つてレースの上にのせしつけをかけて表からミシンをかけます、次に身頃の上部にギャザ縫ひをなしヨークの下部に合してちゞめ次にヨークを縫ひ付けます(縫代に二分)即ち圖の通り縫代は身頃の方へ向け次に後も同様になし後は上前を印ぎりに裡へ折り下前は見返しを付けます次に肩を袋縫ひになす事其れより衿の裏の切れと合して上部を縫ひ表へ返して飾ミシンをかけ次に下部の表一枚を持ちて（裏打をなせし方）ヨークの眞中と衿のまん中と合し衿の上前の餘る分は切りて縫付け飾ミシンをかけ、横及び裏はまつりつけます、次に、飾りをつけます此れは、前のまん中とヨークの前のまん中と合し飾りの後の切り込みの印即ち上前は端まで下前は見返しの分だけひかへて付けるので御座います、尚此の付け方は倒さにして縫代の見えぬやうに付けても宜しく又、飾テツプなどで此縫代を押へても宜しう御座います其れより脇を袋縫ひになし袖を付けます、袖は袖の切込の印と身頃の脇の縫目と合し袖下の縫目と身頃の切込の印と合せつまり一寸位前へ袖の縫目をずらして付けます最後にスカートと縫合します、先づ身頃の前後に、印から印までギャザ縫ひをなし、前身を一尺に後の上前を四寸に下前は、五六分にちぢめ若し裏のつく場合には裏も一緒にスカートと縫合し縫代は巾七分位の斜目切れでつゝみます、袖付の縫目も叮嚀にすれば矢張り包む方が宜しふ御座います

尚後はホックでかけます、若しボタンで掛けるならば後にボタン臺をつけてかくしボタンに致します。

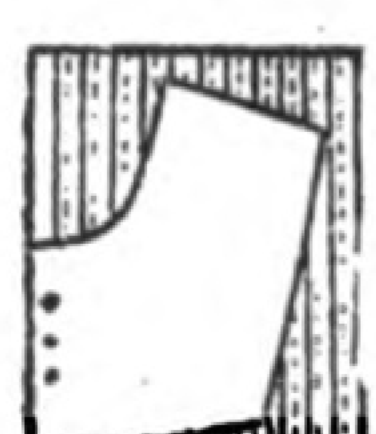
うしろ

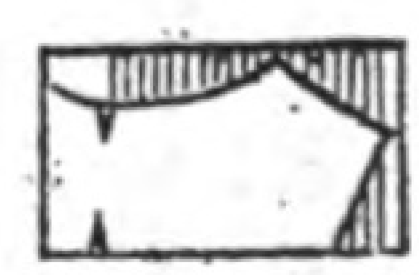


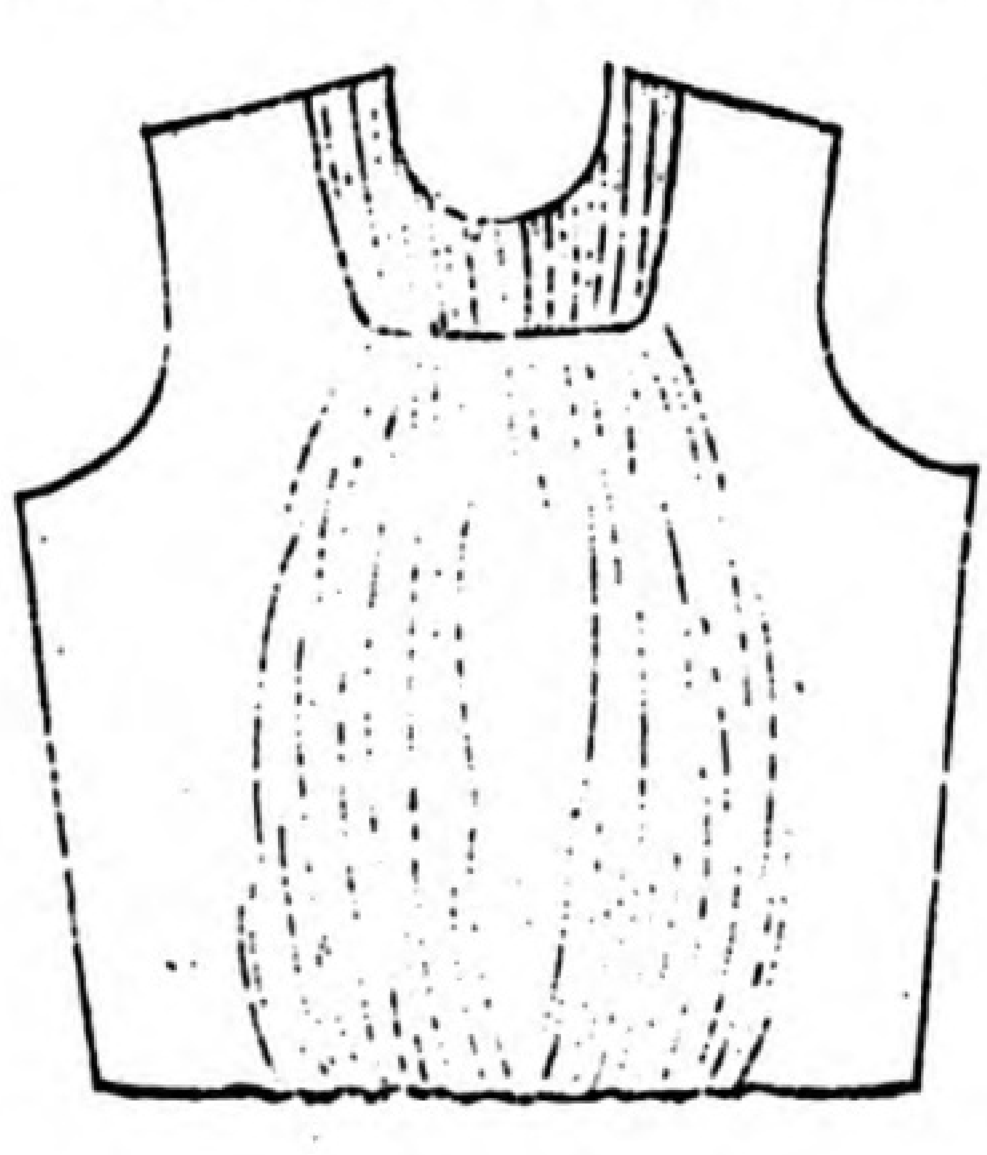
まへ



まん中







△注意

右に付いてお解りにくい所はお尋ねになればお答へを致します尚、形紙及縫上りの雛形が御入用な方は本郷區追分町三十一女子共立會宛お申込みになれば早速調製御送付致します代價は形紙が十五錢雛形三十錢郵税内地にて貳錢滿洲地方は四錢



湖畔吟

萩香

「小母様、風呂がわいたから、早くお嘉鶴さんに入浴にお出なせえましつて……」

大きなゝりして袖無しを着た女の子、藁草履パタ／＼と駈けて來て、脊戸口から呼ばつたが、返辭がないので、さしのぞいて、そのまゝパタ／＼歸つて行く。

亂れ伏す眞萩、白萩、さら／＼と葉ずれの音、垣を擢んでた雁來紅は、さながら火を點じたやう。

夕燒空花やかなこの夕べ、緣に腰かけて、どう／＼と云ふ海の響をきゝ乍ら、果しもなく想ひをはせて、嘉鶴子は泣いて居るのでした。

紡績絣の袷に双子の羽織、一昨日乳母に結つて貰つた桃割が、半ば傾きかゝつて、後れ毛のみだれた、細い襟首がいた／＼しい。

嘉鶴子は今年十八・髮と眼と、頰の色の美しい少女です。

今年の秋を、嘉鶴子の手首はやせました、馬も肥ゆべき初秋を……。

嘉鶴子は孤兒、乳母の許に來てから、もう六年になる、この夏は、山内の富久さんにつれられて、海水浴に行きました。

富久さんとは東京に居た時分のお親友、先日久々ぶりで相見た時、嘉鶴子はたゞ、富久さんは肥つた？と驚きました。富久さんは、嘉鶴子が別に田舍くさくもならないのをよろこびました。

富久さん兄妹、従兄の秀さん、四郎様と五郎様、に嘉鶴子を加へたその若い人達が、まアどんなに樂しく

ほしいまゝな日を送つた事でせう。

四郎樣が、富久子をおどかさうとして、とんだ人違ひをやり、その令孃は驚倒のあまり、三日間も病人に成つて了つた、なんて滑稽醜態は、毎日のやうに演じられつゝあつたのです。

早稻田文學士になりたてのホヤ〳〵の兄樣は、美しいお髪を淺く分けて、朝晩鏡と首つ引だし、帝大土木科へ行つてる秀さんは、今度お髭を立てゝ、これも鞄の中に、小さな鏡が秘めてある。

一歳違ひの四郎樣と五郎樣は、毎日兄弟喧嘩ばかりして居ました。

富久さんは嘉鶴子より二月あまりの姉さんだけれど、御兩親の御秘藏ッ子、苦勞知らずの御令孃、それはそれは元氣者で、色の白いデップリした體格、女權をふるふことゝつたら、まるで誰でも女王に對する秘書官みたいな體裁、大學秀才も何もあつたものでない、無口な秀さんなぞ、度々いろ〳〵な御用仰せつかる、階下の白百合をとつてくれとせがまれて、すべり落ちて負傷したり、十五貫何百の身體をおんぶして川を渡つたり、叱り飛ばさうとする兄樣は、あべこべにはね返されて、富久公、お多福、と口惜しがるばかり。

此富久さんと自稱蠻骨男子の四郎樣とは、好取組でした、なか〳〵回向院や何かでは見られません。

富久さんは五郎樣がきつい御贔屓、嘉鶴子も五郎樣の方が好きなのでした。兄樣は御母校の生徒だもんだから、四郎樣々々と有仰る。

四郎樣兄樣ぶつて「五郎、五郎、」と呼捨にする。五郎樣もまたおとなしく「兄さん、兄さん」と呼んでるが、他人が見ちや、何方が兄樣だかわかりやしない、たゞ五郎樣の方が、少し細くて長いのでした、色も白うございました、ペンの徽章に金釦の制服凛々しく、柄繪屋の靴なんか穿き出したところは、本鄕座式——何處か貴公子風があるのでした。

四郎樣はあまり炎天にばかり出て居るので、眞黑を通りこして、ピカ〳〵光りが出て來た、美しい齒ばかりが眼立つて滑稽に見える。

嘉鶴子のことは誰云ふとなく、秀さんの許婚だと云ひ出しました、思ひもかけぬこと、嘉鶴子はもう〳〵秀さんに恥かしくつて氣の毒でたまらず、秀さんもわりに初心な人で、それから嘉鶴子とは散歩をしなくなりました。

今福さんと云ふ法學士なぞは「お嘉鶴さんは脊高だねえ洋裝に適當だらう、外交官夫人の資格があるよ、工科と云へば大工さんや、土方の親方ぢやないか、工學士の細君にや惜しいものだ、法學士にかぎるよ、法學士に」なんて隨分露骨な惡口を云ひました。



その頃隣室に、朝から晩まで机にかぢりつき、と云ふ變骨漢が居ました、遠慮もなく富久子にさわがれるのだから堪らない、それは〳〵むづかしい顏して、わざと夜なんかみんなが寢しづまつてから、後鉢卷で勉強したり、シッ、シーッなど、叱したり、ある時も女中をつかまへて當りちらし

「女つて奴ア公德心がないのかなあ、人の迷惑もかへりみず、ぺら〳〵ぺら〳〵さへづり通してやがつて、實に氣持が惡くなる、勉強したつて腦にも何もはひら

ん、些と氣をつけるやうに、女中等にさう云つといて下さい、僕ア勉强に來てるんだから」

きこえよがしに云つてるので、富久さん、いきなり讀書して居る秀さんの本を引たくつて

「秀樣、何でせうね、およしなさい。みんな遊びに來る避暑地の旅館で、勉强しなくつちやならない程、なまけて居たの？ そんなら東京へ歸つてヽヽヽカンヅメでもした方が氣が利いてるわ、私等は此地へ遊びに來たんですもの、遊んで身體を太くするのよ、ねえ、四郎さん」

兄樣があまりと見かねて嗜めれば、直ぐ

「天は許さじ、兩人の
　自由を縛する壓制を
鬱する不平の氣はほとばしり
　…………………」

なんて大聲でソシントンの出來そこねなど歌ふ。

敵しかねたか、その人はとう／＼室を代へて了ひました。その後この室へは文科の生徒が來ました、中山樣と云ひました、帝大獨逸文科三回生、白面の眉目秀麗、背の高い淸らかな姿、大學生は七八人居たが、群をぬいたる君が風采、富久さんがまづ先にお近づきになつた、嘉鶴子は始めて言葉をかけられた時、颯と恥らひを頰にのぼせて、にげるやうに避けて了ひました、けれどそれは二三日の間でした、間もなくお室へも行つて、よくお話しするやうになりました。兄樣達とは違つて、それは極く物しづかな、ふつくりとおとなしい方なのでした。で、中山樣はお優しい、お優しい、つて女中達の評判も大したものでした。

富久さんの勝氣とお轉婆は、海水浴場でも、マガレツト君と云へば、あゝ山內？ 誰にでもとうなづかれる程、知られて居ました、が、誰も當世風の富久子よりは、陰氣な嘉鶴子を愛しました。嘉鶴子は別に美人ではありませんでした、スタイルもよくはなかつた。

暑い時と、嬉しい時、はつとした時、その時が、嘉鶴子は一ばん美しいのでした、頰が匂ふやうな櫻色になつて、うるみの多い眼を輝かして、無造作な束髮の

ほつれ毛がハラ／＼とみだれかゝる。同じ笑つても富久さんは、指でついた程の片ゑくぼが、またない愛嬌になりますけれど、嘉鶴子は齒ならびのわるいのがきずでした。憂顔だ。何處か沈んでるねえ、年中何を思ふてのだらう、とはよくみんなの口にのぼされる評でした、物憂さに少し口數でも利かずに居ると、「また何か瞑想にふけつてますね、何を考へて居るんです。いけませんよ、そんな事ぢや……」

なんて云はれて、よく袖に顔をかくして了ふ。額がせまくつて眉の濃いものは短命だときいて、それぞどんなに氣にして居たか知れません。



人の顔色をみるにさとく、非常に神經の鋭敏な富久さんは、中山樣に對する嘉鶴子の態度も、たゞではすませませんでした。「嘉鶴ちやん、理想通りでせう」「先刻は何だか知らないけれど、大變お話がもてゝ居たのね」などゝ皮肉られる事は、珍らしくはないのでした。

女中の誰とかゞ、嘉鶴子樣はお化粧が濃いの、前髪が出過ぎて居るの、あれは中山樣がゐらしてからだのと云つたさうで

「ホヽヽヽ、醜態ねえ、嘉鶴ちやん、私ならもつとも

つと二尺五寸も脚を出して、白粉の厚さ一インチ、笑つたら、亀裂が入る程塗つてやるわ、ア、コリヤ〳〵」デカンショ、デカンショで、なんて飜弄されても、嘉鶴子は一言も云ひ返しませんでした。君在さば、離れ小島も、深山の奥も何かせむ、「風さわぎ、むら雲まよふゆふべにも」忘るゝまなく忘られぬ君、だの、忍べたゞ知らせて後のつらからば、いはぬ頼みもあらし物ゆゑ、などゝ日記に書いたのも、この頃のことでした。

中山様のお机の花一つ活けて上げるにも、富久さんの眼の光るのが恐ろしうございました、可笑しかつたのは一度中山様が山歩きのお土産だつて、立派な白百合を折つて来て下すつたのです。それを富久子にお渡になつたが、お互にその花に手をつけるのを遠慮し合つて、花瓶に投げこんだまゝ、とう〳〵ボウフラを生かせて了ひました。

富久子も嘉鶴子も、海水浴はあまりしませんでした、浪が恐いから！　とは云ふものゝ、その實色の黒くなるのを恐れてのこと。

その代り運動場の持主、テニス界の王様、テニスコートに富久さんの影見えねば、何か變事があるのです。思ひきり華美な品のいゝ浴衣も何も高つぱしおりに着て、袴下の帯を巻いたまゝ麦藁帽かぶつてラケット肩に駈けまはる風は、あんまり好いものでもありません。田中様の御隠居様と云ふ方は、富久子さんのお轉婆は人業ちやない、と有仰つたさうです、この御隠居様は富久子のいゝおもちやの種でして、猫のおしつぽ程のお髪を紫の打ひもで結へた切下げにして、まん中のはげた部分へは、コロップの黒焼をぬつて居らつしやいました、黒の青梅のお被布がよくお似合あそばして大きな〳〵お老眼鏡かけて、よく若い女達に向つて諄諄と、いろ〳〵なお話が始まるのを富久さん、小聲で「振つてゝよ、お祖母様、フレー、フレー、フレー、フレー」なんてみんなを吹き出させる。

朝起の習慣のついてる嘉鶴子は、みんなのやうに明るくなつてから寝てることは、きまりがわるくてどう

しても出來ません、毎朝早起して、濃い緑の無果花の枝を押のけながら、そと柴折戸を開けて、露深き河畔へと出る、川はまだ夢のやうな蟲の音を載せて緩る緩ると流れてゐる。

朝霧やうやく霽れ行けば、東の空ぼうつゝ臙脂の色花やかに、眞紅な太陽が溶けさうに搖らく。

ある朝はゆくりなくも中山様とこの岸に立ちました。中山様が、お嘉鶴さん、今度ボートで何處かへ行きませうと有仰つた。エ、ほんとに？嘉鶴もつれてつて下さるの。つれて行きますとも、貴女一人の方がいゝね、うれしいのきつと／＼よ、



つてお約束しました。それから嘉鶴子は毎日／＼それを樂しみにして、一度四郎様と秀様が、是非のせてやるつて迎へに來た時も、何のかのと云つて行きませんでした、串談らしう「いやよ四郎様、貴君なんかにつれてつて頂いたら、危いものです、どんな目に合ふか知れやしない、命がけです」

四郎様ムキになつて「何だ、馬鹿にするな、城北健兒の腕前を知らないか、失敬な」

秀様は流石に開化て笑ひながら「お嘉鶴さんは中山君でなくつちやいけないかね」

「あんまりです」
ぷいと廊下へ出て了ふと、後にはみんなの笑ふ聲がした。

さアその後、おめ〳〵と中山樣につれてつて頂くことはどうしても出來ませんでした、で、富久さんも一緒にと誘ふと

「中山樣とぢや厭よ、わるいわ。ボートにのりたきや兄樣でも秀樣でも、五郎樣でも居るんですもの」

と言はれて、嘉鶴子は涙を飮みました。

中山樣は甘黨の旗頭、しばらく甘いものを食べないと、氣がぼうつとして了ふのださうです、一日でもお菓子がなけれや心細いなんてまるで大きな坊やみたい、お室にはいつも、東京から小包で來るお菓子折が重ねてありました、嘉鶴子はよく紙に包んで頂きました。ある時も

「お嘉鶴さん、よかつたらいつでも食つて下さいこゝにありますから」と有仰るので

「はア有がたう、折ごと引いて了ふかも知れません、大きなねずみが……」と笑つたら

「エ、かまひません。」

と美しい齒をみせて莞爾、細い〳〵つるのお近眼鏡かけてゐらつしやる、細面の鼻筋通つて、形のいゝ唇のキツとしまつた、お髪は無造作な三分刈頭、凛と秀でた眉から額のあたり、何處か利かぬ氣の御氣性もあらはれて居る、ぢつと嘉鶴子をみつめて

「貴女は僕の姉に、それはよく似て居るんです」

と言はれたのが、嘉鶴子は身にしみて嬉しかつた。

何だか始終中山樣がお室にゐらつしやらないと、心細く物足りなくつてたまらない、御友人のとこへお遊びに行らつしやるのでさへ、恨めしいやうに思はれる。けれど中山樣は誰に對してもお優しうございました、女中達にでも、小言らしい事有仰つたことはありませんでした。

＊　＊　＊　＊　＊

二十日ばかりは夢のやうに過した。ふと富久さんが、箱根へ行つてみたいと云ひ出した、原案即決、四郎樣

五郎樣は拍手でむかへる、嘉鶴子の見上げた眼の色を早くも

「嘉鶴ちやん、貴女はこゝに殘つてゐらつしやい、そして中山樣と一緒に何處へでも連れてつてお貰ひなさい。」

「いゝわ富久さん、そんなにお邪魔なら…………」

ハラ〳〵と落涙した

いつか富久さんが中山樣の袴の綻を縫つて上げて、

「嘉鶴ちやん、たゝんでぐらゐお上げなさい」と何も



知らぬとこへ突然投りつけられた事も胸にあつた。その夜兩人は口を利きませんでした。

翌日出掛ける時になつても、また富久さんは不機嫌でした、嘉鶴子は再びこゝへは歸つて來られないやうな氣がしてなりませんでした、中山樣は室を出て、一行を玄關まで送りました、無量の想ひをこめた嘉鶴子の顏は、人に快くはうつりませんでした、眞白いお化粧が目立て見えた、青磁色紅梅織の

單に肉色博多の帶がうつりが好かつた、富久子はコバルト色の袴を、シュッ〳〵とさばいて先登に立つ。

この連中は街道の險を踏破して、その日の夕方箱根湖畔の宿につきました、富久さんは途中で歩けなくなつて、駄々をこねて、散々みんなを困らせたのでした。嘉鶴子は山百合を持ち切れぬ程折つた。

通されたのは湖水に面した離れ座敷、銀杏返しの紺飛白、二十四五の氣の利い女中の受持でした。

お湯から出で富久子は宿の貸浴衣を着てみて、みんな大笑ひさせた、尻つこけに帶しめて、大きな廣袖のゆきの長いのをまくり上げる風つたら、恐らくパックの記者も、失笑ださずには居られなかつたらう。

ギイー、ギイーと直ぐ先を、桔梗の紋ある赤い提灯をつけた舟が通る、提灯の水にうつゝた影がゆら〳〵ゆら〳〵、波紋を傳はつて長くゆれる。

湖上は一面に薄墨で刷いたやう。

「兄様、飯にまだかねえ、呼鈴を押さうか？」

「四郎様の食心坊？」

「何だー、お多福？」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

曉の冷氣、ひや〳〵と身にしみて、無意識の中に襟かき合せつ。またさめやらぬ夢心地ながらも、中山様？と思ふと何だか胸が一ぱいになつて……枕に顏を伏せてうつとりと……ふたゝび夢に落ちたが、何かに驚かされて、愕然と目をさます。

嘉鶴子は起きて雨戸をくつた、霧深く〳〵立ちこめて、緣の先は海が山かわからない。欄に凭つて、恍惚、思ふまゝに中山様のことを思ひました。今頃は洗面場で、冷水摩擦でもして被居しやる時分だ、あゝ「お嘉鶴さん」と微笑まれるお顏も今日は見る事が出來ぬ。誰がお部屋のお掃除して居るかしらん。「行途をこばむものあらば、」とよくあの寮歌をお口癖……。いつも競爭的に寢坊する人達も、今朝は五郎様まで起されずに起きて來た。湖で顏を洗ふ、いやに生ぬるいやうな氣がする。富久さんはすぐ運動場へかけて行つてプランコ。廣い芝生に露しげく、素足にチク〳〵むづがゆい。



嘉鶴子は湖畔に立ちつくして居た。神々しい程の晨のさまは、眠れる姫ともたとへやうか。翠緑したゝる塔ケ島、離宮は湖上に水鏡して、さながら水中に樓閣のそびゆるやう。チラ〳〵と靜かな小波が渡る。

「オーイ、御飯だよ、容久ちやん、お嘉鶴さん、オーイ、御飯、御飯」四郎樣が緣側に立つてどなつてる。四郎樣は御飯の化物と、嘉鶴子はいつも笑ふのです。お汁に隱元豆、玉子燒の御膳に向ふ。四郎樣と兄樣が手つ取早く代りばんこにお茶碗出すので、女中はお給仕が間に合はなくあはてゝる。五郎樣たら獰猛だ、三杯目にお箸を折つて了ひました。

御飯がすむと、一同ボートで箱根權現へ行きました、昔とつたきねづか、秀樣は高等學校時代選手を承はつたものなんですつて。五郎樣もいま次選手なんでせう。あの狐色にこげた腕にオール握つて勇しく、容久さんのぱちんとひろげた洋傘の

蔭、旭に透いて、頬から肩を、薄紫に隈どつた。嘉鶴子は澄みきつた水の中に手をひたして、指環の玉のきらめくのを興がつて居る。富士山がはつきり水にうつる。鏡の面に一痕の櫓痕を長く光らせながら、みんな聲を揃へて

自治の大船勇しく
尙武の風を帆にはらみ
船出せしより十二年
花咲き花はうつろひて
……………
行途を拒むものあらば
斬りて捨つるに何かある
……………
……………

とある岸にボートをよせて、どや〱と上陸する。權現へと向ふ途中、山の根から、美麗な泉のこん〱と湧き出で居るのがありました。嘉鶴子は思はず足を止めた。が、一同がずん〱行つて了ふので、仕方なくその後を追つた。

老杉の下道、苔むす石段をのぼりつくして、宮の前に出ると、常宮周宮兩内親王御手植の杉とあるのが目についた。嘉鶴子はそこらに散つてる黃金色の銀杏の葉を拾ひあつめて懐に入れた。

歸途には嘉鶴子はもう先へ走つて來て、泉の傍にしやがみこんで了ひました。

まア何と云ふ美しい水でせう、それこそ、それこそ玉の様なのが、湧いて居るのです、ふと、「ゆあみする、泉の底のさゆりばな、二十の夏を美しとみぬ」と云ふ歌をおもひ出した。嘉鶴子は何となく、戀の泉？戀の泉？とさゝやかれるやうな氣がした、ためらつたが…一寸掬んで、唇をぬらすと、甘い、甘い、ヒヲと懐から先刻の銀杏の葉が一枚落ちた、嘉鶴子はそれを水にひたしては口にふくみ、ひたしてはふくみ：……富久さんが駈けよつて、肩に手をかけてワツと云ふ。玉泉に二人の白い顔が重なつた。

「さア嘉壽ちやん、十國へ行くのがおそくなるわ、早く行きませう、ほら、兄樣達はもうボートにのつて了つたわ」

「一寸待つて……………」あたりの夏草の中に咲いた薄紅い撫子や、山紫陽花を折りとつて、これもざぶりと水をくゞらせて、ハンケチで持つた。さらばよ、泉、さらばよ、水よ。急いでボートにのりうつる、あゝ、あの清泉、ほんとうに放れがたなの思ひでしたが丁度中山樣と別れる時のやうな氣がするのでした。



「人の心を惑はする妖魔の、このあたりに現はるゝか、はたまた四方のものすべてを美しき天國化する想像の力、我胸にありて然かなすか知らねども。我はかの「メルジネ」とその姉妹に心魅せられしが如く今又、一つの清泉にも強き力もて誘はれたり、小丘を登りて洞窟の前に行けば下に石磴二十階程ありこを降りゆきしところに大理石もて疊める窟あり、清泉玉の如く湧き出でて心地よきこと限なし、井側をなせる石の垣、さてはそのあたりの若草の……」

（うゑるてるより）

ピカリ、ピカリとオールが光る。

宿へかへると、兄様達、これから十國峠へ上るのたと云ふ、命つけておいたお握飯も出來て居る、富久さんも無論一緒に行くつもりで居るのを、兄様が

「富久子お前達は待つてお出、とても十國へは登れないぞ」

得たりかしこしとその尾について四郎様、

「さうさ、よした方がいゝ。一寸權現の石段を上つてさへハア〳〵肺病患者がせき入つた後みたいな息使ひして……」

富久さんも昨日の醜態に恥じてか、強ひてとも云ひませんでした。が、

願くば雨ふれよ、我が親愛なる四郎君のために祈る…………」と云つて、庭中おつかけまはされた。

兩人で町を散歩たが、別に面白い事もありませんでした。繪葉書を取りよせて、富久さんは盛んにお友達へペンを走らす。嘉鶴子は中山様に一枚！と思ふたけれど、それすらよくなし得ず、やつぱり止して了つた。

兄様達は五時過ぎ、腹が空つた、空つたを先に立てゝ歸つて來た。金色の富士、黄金波、夕映、湖畔に立つて、白モスリンの單の袖を涼風にまかせたまゝ、うつとり佇んで居る嘉鶴子を、

「まア、ちよつと、何見てるんでせう、あゝして先刻から……」一寸夢二さんの畫題にいゝわ、「あこがれ」なんて……」

と富久子が云つたので、兄様達どつと笑つた。この笑聲に驚いて振り向いた嘉鶴子の顏は、かたく〳〵引しまつて居た。

夜、兄様はまたみんなをつれて、元箱根の方へ出かけました。

まつ暗な石ころ路を、兩人は兄様と秀さんのお袖に縋つて、おまけに提灯持の四郎様がずん〳〵先へ行つて了ふので、富久さんは幾度かころび掛つた。

聖僧が眞黒い法衣を着て、突立つて居るやうな杉並木、顏をあげると、高い〳〵梢の間から星がピカ〳〵のぞいて居る。

朝たに辭すゥ、白帝彩雲の間ア、千里の江流一日にして歸るゥ、兩岸の猿聲、啼いて止まずゥ。

四郎樣が蠻聲はりあげてどなりかけると、向ふから「夕月落ちて霧白し、夜は深緣柏葉に……………」

高らかに大好な大好な寮歌の一節はつとしてると、五六人の學生がすれ違つた、嘉津子は思はず、中山樣…と呼びたかつた。

歸途に秀さんは萬年靑の葉を裂いて、何と云ふのか長い一曲を吹きました、そして妙な話しをしました。



箱根の山に暮して居る樵夫と獵師とは、不思議なものを見ると云ふ。

それはもし樵夫が月夜に出て金の怠けそうめやうと思つて鋸の音も身に泌む夜仕事をして居ると、何處からともなく笛の音がする。それが草の葉で造つた笛である事をすぐ氣付く。初めは極く靜かにと切れ切れに響くが段々音が冴えて來て、終には全山木の葉

のそよぐ音もせず、今まで盛んにしてゐた露が木の葉から落ちる音もやんで、引いても引いても鋸の音が聞えなくなる。樵夫は恐れて鋸を棄てゝ鋸屑の中に身を擲て啜泣すると笛の音がぱつたりやんで了う。恐る恐る薄の中の山小屋を見ると、山の中腹にかけて大きな五重塔の影がありありと映つてをるのを見たと言ふ。

又或る獵師は、矢張月夜の晩、一匹の鹿が薄の中に立つてゐて、角が高く月を受けて光つてゐるのを見た、鐵砲の狙をさだめ、段々近づいて來て森と薄の境目まで來たら、嚠喨と葦笛の音が起つたので、思はず足を止めたと云ふ、ぢつと薄の枯葉に身を臥せて覗つて見ると、鹿の立つてゐる薄の近くに一人の子供が裸のまま岩角に腰かけて頻りに葦の笛を吹いてゐたのを見出して驚くと、薄の葉から落ちる露までが調子を合せるやうに耳に響いた。覺えず銃身が岩に當りて微かな音を立てたら、鹿は角を横にして坂を馳せ上つてもう薄の中に姿は見えなかつたが、葦の笛の音が小屋の方に移つた時、葦の湖の水面に黒い五重塔が現れたのを見たと云ふ。

それもいまは言傳へとなつて了つて、たゞ葦の湖の舟子が月夜の湖を渡る時、底には太古のまゝの杉の森があつて、その梢の間に五重塔がかすかに見えると言う噂だけが殘つて居るさうな。(一高友會雑誌の一節)

「アッ」五郎様が下駄をふみくら返した。

「あぶないこと、嘉鶴ちやん」

「えゝ」

* * * * * *

出立の日は雨でした。が、富久さんが、どうしても立ちませぬ、雨の山路もまた詩的でせう、かへつて印象が深いわ、なんて云出してきかない。兄様も困つて女中に相談してみたが、では出掛やう、兩人だけ駕にのせる事となつた。

さア仕度で一さわぎ、兄様達はござを着る、その風つたらありません、富士まゐりよろしく、秀さんが太いステツキついたところは、漆黑のお髭と對照して實に奇拔だ。肥つた富久さんはやつとの思ひで駕に潜り

こむ。

いざと息杖とつて、女中等は、御機嫌好う、と頭を下げかけると、富久さん急に身もがきして、一寸、下して、とさけぶ、どうしたと兄様が驚いて立よると、その手に縋つてはひ出してわく〳〵私こんなものにのつたら死んぢまふ。頭が痛くなつて來た、今日は止します、と血の氣もない顔色してるので、あつけに取られて居た轟親子も下りる、何のこと、今日の御出立は御沙汰やみ、また草鞋のひもをとく。

四郎様は大よろこびで早速この御様を三枚つゞきの自筆繪葉書にものして、女中に投函させました。



富久さん、駕にはこり〳〵した、もうお天氣になるまで動かないわと云ふ。

ところがその日から五日もふりこめられたのでし

た。實に〳〵氣の遠くなる程退屈しました、秀さんは玉突にばかり入りびたつてる。四郎樣と五郎樣は富久子相手にピンポンやつて、玉をありたけつぶして了ひました。

人わるの富久さん、中山樣からお手紙が來やしませんか、來やしませんかと嘉鶴子を弄かふ。嘉鶴子はうつかり、かへりたいとも云へなかつた。

靜かに〳〵、雨に暮れ、雨に明け行く湖水のながめ、中山樣のお目にかけたうございました。

朝に夕に、見るになれたる緣のチエーヤ、嘉鶴子の何となく心について忘れられないのは、いつか中山樣に拜借して讀んだ即興詩人、アントニオがなつかしくてなつかしくてたまらないのでした、薄倖なるアヌンチヤタの、かつては驕兒の恣まゝに戯れ狂ふが如かりしと云ふ華かな姿を想ひ、またあの寺院の圓柱にもたれて紫の花をかざして居た可憐なるラヽを想つた。

兄樣達が二合の卵酒に醉つて、兩人を困らせた晩もありました。また一夜、夕方から雨ふりつのり風さへ急に加はつて、まるで嵐のやうな光景となつた。富久子達は食後、トランプなどしてあそんで居ると、急に湖畔がさわがしい。何でも湖上から「助けてくれーー」と云ふ悲鳴がきこえたとやら、救助舟を出したのだとやらで、提灯つけて右往左往、岸打つ浪のもの凄さ。母家の客達もどや〳〵と廊下傳ひにこの離れの緣へとあつまつて來た。みんな面白半分、洋燈を高くかかげるやら、「おゝ――い」なんて聲を揃へるやら。秀さんにつかまつて鼻の下を長くしてのびよつて見てた富久子が「可哀想ねえ、まアどんな人なんでせう、何だつてこんな晩ボートなんかで出たんでせう、でも可哀想だわ、ほんとに、さぞこはいでせう、ねえ」と二三度云つたので、一人の學生が

「山内さん、男子ですつて、大學生のね、獨身で、しかも素敵な美男……」「失敬な」富久子はぴしやんと障子を閉てゝ、室內へはひつて了ひました。

「ハヽヽヽ御逆鱗だ、御逆鱗だ、」

嘉鶴子はひとり窓に立つて、暗をついてほとばしる

白線をながめながら、こんな晩湖水のまん中で思ふ人と一緒に死ねたら嬉しからうと考へて居た、雨のしぶきがきら〳〵と、髪に袖に肩に光る。

* * * * *

いよ〳〵出發、富久さんも嘉鶴子も、なれぬ草鞋を穿きしめた、一寸先も見えぬやうな霧の朝で、木々の下行くに、ポタリ〳〵と冷たい雫がたれる、眉に露が凝つて、兩人の前髪など水を浴びたやう。

嘉鶴子は路々一生懸命にそこらの花を折りました、女郎花はすでに黄を點し初めて、薄も穗に出た、藤紫の虎の尾や、草に交つて淡紫の桔梗もあつた、お茶碗花やら我亦紅、野萩だの釣鐘草たの、あまり折るので秀さんに

「お嘉鶴さん、邪魔ぢやあないか、そんなに抱へこんで……どうするの、僕が持つて上げやうか」

「いえ、いゝの」流石に頰をそめてそのまゝ取るのをやめた。

三里二十八町の山を無事に下つて、三島の○屋と云ふにお晝食。富久さんは足にまめが出來て、靴を穿くことが出來ないと云ふ、嘉鶴子はお揃の象牙のお扇子をまさぐりながら、夢のやうな氣がして、あゝ今日は中山様にお目に掛れる…………

三島明神へおまゐりして、五郎様は子供らしう、池の緋鯉に麩をやつて興じた。

ふと時計をみると、汽車の時間に間に合はない、さア大へん、丁度兄様がそこへ來たガタ馬車を呼びつけて、さア〳〵急げ、とばかり、兩人を引ぱりあげ、四郎様や五郎様はまだ片足ふみかけたばかしだのに、全速力で馬をすつとばさした、ゆれるわ、ゆれるわ、上下動、左右動、獰猛、猛烈。富久さんは五六度も投り出されそくなつた、鯉口を着てはつかぶりした御者は、時々、ププー、ププー、プーとラッパを吹く、嘉鶴子はもうきまりがわるくて〳〵〳〵、町を出はづれるまで顏もあげ得ませんでした。

たんぼ道へ出ると、かなたの松原つゞき、汽車はもう烟をはいて徐行して來るのが見えます。そら、そら、

はいヨーツ、ピシツ、人も馬も氣が氣ぢやない、ステーシヨンへ駈けこむや否や、兄樣は札賣場に飛びこんで、秀さんがお紙幣を投り出して、嘉鶴子はほとんど四郎樣に引ずられるやうにブリツヂをころげて、あやうく一岡のりこんだ。富久さんは、大切な前櫛を落して了つたとあそくなつてた。

汽車が御殿場あたりを通る時、丁度雲が切れて、暮れ行く空に富嶽の英姿、打つゞく八里の山根、窓に凭つてた嘉鶴子は我知らず涙がこぼれました。白龍をどる鐵橋も、出ではくゞるトンネルも、初めての身にはうれしく面白く、何よりも今夜は宿へかれるのがうれしくて、四郎樣に梨をむいて上げたり、お饅頭を食べたり、いつにない元氣で汽車の進みもゝどかしい。かくて六人はその嘉鶴子のなつかしい戀ひこがれた旅館へ、車をつらねてかへりました、嘉鶴子はまづ先に飛び下りた。

中山樣は行李をとゝのへて居ました。あきれてお部屋の柱に手をかけたまゝ、ぽんやりして了つた嘉鶴子を見上げて

「貴女も僕をおいて今日まで歩いて居らつしたぢやありませんか、だから今度は僕が殘して行きます、」

なんて笑つてゐらつしやる。嘉鶴子は涙の顔をそむけました。

その翌朝、中山樣のことが何だか夢のやうに思はれて仕方がない。あれは夢だつたのかしらん？と考へてみてもよくわかりません。では、もしや、もしや、と瞬時の間、はかない事をたのみにしたが、中山樣のお部屋をのぞいてみると、やつぱり駄目なのでした。もう御飯をおすませになつて、主人やおかみが代る／＼挨拶に來てるのなど、見るに得たへず、富久さんをすすめて庭へ下りた。富久さんは早くもテニスコートへ駈けよつて、聲高くみんなを呼ぶ。

しばらくしてそつとかへつてみると、中山樣は洋服に着替て居ました、まつ白いカラアを心持みせて、餘計お脊が高くみえる。

目で招かるゝまゝ嘉鶴子はだまつて柱の傍に坐りま

した、中山樣は卓に片肱よせて、火もない莨を手に持つて居る、

「お嘉鶴さん、いよ〳〵お別れね、併しまたお目にかかります……」

「これが、一生のお別れかも知れません」投げるやうに云ふと

「そんな、悲しい事云ふもんぢやない」

涼しい眼をぱつちり。嘉鶴子は俯いて襟をかき合はせた。

兄樣も秀樣も四郎樣も五郎樣も、門まで出て來ました。嘉鶴子は富久さんとパラソル傾けて、何處までも何處までもお送りしました。

幾度か〳〵辭退されたが、でも、ねばい兩人の步行ほどに步をゆるめて、朝露ふかき草路を、人も我も無言で行く。

富久さん、かへりみて

「此處らでお別れしませうか、」

「さう」

名殘惜しくもまた二足三足、中山樣も一寸ためらふ御樣子が見えた。が、直ぐ

「失敬、富久さんもお嘉鶴さんもお大事に…………………………」

「御機嫌やう…………」

山角をめぐつて眞白い洋服姿の、見えつかくれつ、二三度後を振りむいて、最後に手をあげて莞爾なすつたお顏？　あ……あ……嘉鶴子は身をふるはして忍び音を立てた、中山樣、今頃はどうしてゐらつしやるでせう。歸つたらお手紙下さい、エ、貴下もよ。僕も書きます。きつと、きつとよ、とかたく誓ひ合つた間ながら、嘉鶴子は手紙は書きませんでした。頂いた名刺は手箱の底ふかく秘めてある。あの地の事でもお思ひあそばす折には、嘉鶴子と云ふ名の、お胸に浮ぶ事もあるかしらん？　人生一度別れては……なんて、緣起のわるい事は申しませぬ、切に〳〵再會の機を祈る…………………。

嘉鶴子は夢のやうに、中山樣との邂逅の有樣を想像

してみた。今度はどんな處でお目にかゝるか、ステーション？　電車の中？　それとも……それとも………あゝその時、自分は、「中山樣」とさけんで駈けよるだらうか。中山樣は、「お嘉鶴さん」と云つて下さるでせうか。

あゝ日を經れば、忘れむと思ふ面影の、などさやかにはなり增るらむ…………」

この頃は毎日角帽制服に身をかため、どんなに勇しい風して、御通學の事でせう？　外ながらその有樣をたつた一目……」

見上ぐる空に夕づゝの影、ホロリと傳ふ一雫。

あゝさらば、我が戀ふ君よ、まさきく在せ……。

龍の意匠



誌友倶樂部

▲岡山の霧牛様ってどなた、人生の花の年頃の方が、質素過ぎるつて、それは華奕な東京市の方とは違ひますよ、岡山では人生の花の頃の方は大概學校生活をして居ますのよ、學生の多い町ですもの、そして質素なのは教育がさうなつてるのですよ、學生の時からそんなに秩父や米流の着具なんか拵ないのよ、ましてや五時ものリボンや佛蘭西形の袴穿いたりなんか……、ほんとに東京の人つて派手なのね、日本の前途思ひやられるは。(岡山市一女學生)

▲與謝野晶子様の「雑記帳」によりて、毎度頂き私の意氣を鼓舞されて居ります、三月號に於て、古き柔順の代りに健順なる新しい事を御奨め下されて、一層感じて居ります、敬服する同女史が、現に其の實行者で居らるゝ事は、其のお筆の跡によく見えて居ります、又其れでこそ婦人の死生の境目なる産床に於て、あのやうな勇氣ある大なる筆を御取りになられましたのでせう、何卒一日も早く輕く御産床を離れ給ひて私共の爲めに御勇筆を御振ひ下さらんことを祈ります。(朝鮮月丹)

▲三月號の本誌面白く拜見致しました、藤曹様の精神生活、妾も同感ですわ、妾こんな方と一緒に事業がして見たいです、貴女學世界が來る度に一番見るのは倶樂部です、又野菊様の様なしつとりとした文章は、こよなく不幸な自分を慰めて下さいます、野菊様、どうぞ毎號御出し遊ばして頂たい、妾は人世の春に醉ふて來ました一人の兒の母ともなりました、……が今はもう何も〳〵捨てゝ、こんな片田舎にたよる人もなく一人淋しくくらしてなります。(なでし子)

▲警告！警告!! 寄稿をなさる方に警告致しますあの原稿をピン(針)で止めたのは、檢閲の際、屢々指を傷けまして、その爲め檢閲掛は大分痛い目に遭ひましたから、若し御不興と思召したら、皆様あのピンを使ふ事を廢してどうぞこよりで綴ぢて下さい、警告と申のはこの事です。それにあのこれはチト餘計な言かも知れませんが、ピンでとめたのは皆その文がまづい様ですれ!!! やつぱりあのハイカラは駄目ですれ!!!。折角名文をお書きになつてこよりで綴る位な勞力は何でもないぢやありませんか。(記者)

▲記者様、私れ、「奇特な弟子マルコ」、あゝいふの大好きで御座いますのよ、以後も何卒おかかげ下さいまし。(四の空にてかもめ女)

▲内藤様はミスかミセスかは解りませんが、御心情はたしかにミセスの御心　ちと見たはひがめでせうか、十八九の少女心では、とても〳〵あゝした御才筆は、たとひ御文才が御有りなすつても、普通はとても〳〵、ミスであゝいふ人情學に通じて入らしやるとすれば、非常に非凡な御方ですれ。(元子)

▲記者様、櫻井女塾の所在地を御教へ下さいまし、それから半年ばかり所學致て戴きに入塾致度と存じますが、出來ませうか、實は私は武士官の妻ですが、四月末より九月迄良人が留守になりますから、幸ひ何かいたし度と存じます。(在横須賀萩佐子)。所は本郷區彌生町三番地です。多分半年ばかりでも入學は許されませう。

▲本誌の三幅對は、野菊様に、綾子様、それから萩香様、私はどなたも好き、然しそれにも増して崇拜措く能はざるは磯千鳥の君、君が深奥なる學理と崇高なる品性とは、慥に現文壇の明星、皆様何う思して？、千代子様がぱつと開いた紅ばらなら、綾様は浮世の荒浪知らず無邪氣に咲き出しカーネーション、秋の野末におく露霜にもめげず、雄々しう匂ふ野菊の花は、その名のまゝの野菊様、貴のうくやうなさうして華なてらふ今の文壇に、ひとりしつとりとおちつきのある筆をもつて被居る磯千鳥様は、ヘテ何？、オヽそれよ深山路の岩間に薫る白百合一本。(かりがれ)

▲私は晶子様のやうに古い自分から脱して、どしどしと路を開いて新らしい自己を築きあげて行きませうか、それとも自己を無にし、犠牲として、親や良人の影にかくれ、名なし草のそれよりも平凡な生涯を送るが奥床しいでせうか、いくら、廣い社會に生きやう／＼と思ひましても、人間の立場は知れきつたものです、その狭い範圍のその中の單純な平凡な生活が女の弱い心身には適當なんでせうか、それとも威勢よく周圍の壓迫から脱して、衆人の呪の聲をうぐひすの鳴音とも聞き、自然主義をとりませうか、いや／＼私は明晰な頭腦と冷靜な觀察を以つて長を取り、短を捨てゝ行きませう。（元子）

▲夢子様、私どなただかさつぱりわかりかねますわ、私は横寺町に居つた事ございませんの、何かのおまちがへではございませんか、もつとも親るゐのものは矢來町一に居つた事がございますが…、どなたでございませう、夢子さまはとらへられません私の頭の中には……又牛込の竹田不二子様、どなたでゐらつしやいますか、たゞ住所をとのおほせがわかりませんの、私は牛込區左内坂です。（ひらつか）

▲「賢い女の側面」をお書き遊ばしたきく子様、ホヽヽヽ貴女は随分破壊主義ですのね、貴女のやうに一も二もなくめちや／＼に仰有るもんぢやありませんよ、人には各々長所あり短所ありです、あんまりむきに御成り遊すと、ホヽヽヽ女の嫉妬ときかれますよ、それこそホヽヽヽ。（元子）

▲妾は渡米以來六ヶ年の月日を北米で面白く送つてゐます、若し諸姉上方の中に御渡米なされ度きお方は、何によらず御遠慮なく問合せ下されば、及ばず乍ら妾の知つてることは御答へ申します。Miss. Taiko. Aoki. Wapato. Washington. U. S. A. ℅ I. T. Kazama. 北米合衆國ワシントン州ワパト村風間友市方青木たい子。

▲記者様、私事娘を此度縁付かせ度候について は、例の新婚旅行の際の服は如何なる着物をきせてよろしきやら、またおつむ等も矢張り高島田にてか、如何なるものかと案じ、一人にて心許なさのあまりに伺上げ候、つまらぬ筆附きにて御たづね申上候へども、親の子を思ふあまりと御笑察下され度、又私事家庭はおこがましき事ながら中流以上にて、先方も同様なる家庭にて御座候まゝ、其のおふくみにて御知らせ下され度候。（孤花樣の花）―御心配はさりながら、之れはすべて貴君の好みにお任せになつたら宜しいでせう。

▲四月號の女學世界、随分面白く拜見いたしました、内藤さんの「新郎新婦の性格」、いゝ事はようござんしたが、金子だの奥様だのつて何ですか机の上の御空想の様な氣がしてどうもね、矢張りほんとの内藤様式の方がいゝ様ですね、私野菊さんのと上原様が大好きです。（三河國西尾町靜子）

▲四月號の金子百合子の内藤様、今度の面白く拜見しましたわ、あの久江としてあるのは小林歌さんとおつしやる方でせう、雛子様は煙草屋の看板娘として名高い鵠沼美人でせう、私あてゝるつもりよ、皆様なんと御思し召しますか、それから赤坂の八千草様のお手に内藤様のおうつしゑが入りましたつてね、一刻も早く出して下さいな、おねがひよ。（わすれな草）

▲投書の注意――皆様がお送りになる原稿の中に、數枚もの紙を綴ぢてないのがありますが、あれは散亂して困りますから、必ずお綴ぢになるやう願ひます。又綴ぢてあつても、よくピンでとめてあるのがあつて、其の爲に随分指を傷つけますから、これは必ず紙よりをお用ゐになるやう願ひます、尙ほ一つ住所氏名を封筒に書いて、原稿に書いてないのがありますが、封筒に書かなくともいゝから、原稿には必ずお書きを願ひます。（記者）

▲越前澄子様、私もね随分物好な方ですから、先年の九月號増刊拜見いたしますとすぐプラン

セツトを取よせましてやつて見ましたが、失張出來ませんが、其れから妹や從妹にもやらせましたが、其れも不成功、最後には下女にもやらせましたが、いけませんでした、どうしてゞせうれ。（羽後菊菁子）

▲藤田いさを樣、近頃は如何なさいました、少しも御ふるひ遊ばさないぢやありませんか、美しい紀三井寺の櫻は暖かい春風に咲き出ました、靜かな海、青い白帆、磯の松、みな畫出でせうに!!、いつも目次を見て御名の見えないのにがつかりしております、どうぞ御ひまには御出し遊ばして下さいまし、樂しんでまつております。（和歌山靜子）

▲記者樣、年齡が二十二三歳にも成つて裁縫手藝を勉强に都に出れば、世間の人は笑ふでせうか、又こんなに年を取つて勉强する人は、どの裁縫學校なり手藝學校なりに行つてもないでせうか。（秋子）――勉强するのはいくら年を取つてからでも宜しいです、ことに二十二三では、まだ隨分お若い方で、其種學校で學んでゐる人は、當地などには澤山あります。

▲丹波の野谷美彦樣、御尋れの件に就て御通知申上げたいけれども、お住所が分りませんからどうぞお知らせ下さいまし。（Y. Yamashita. 2901, Market, Denver, Colo. U, S, A.）

▲昨年十一月號に、母親の嫁せんさくを、お出しになつた名なし草樣、あれ拜見して御兄樣の又と得難い誠のお志に涙がこぼれました、私あんな文が大好です。（肥前忘れな草）

▲三月號に千代子樣の御作が見えませんでしたから、少なからず失望致して居りましたが、四月號に金子百合子として御出しなすつたので、嬉しくつて〳〵、とゞろく胸を押ししづめつゝ開きましたら、まあほんに面白うございましたそれからみさご鳥樣の若き戀哀なつかしう拜見いたしました、私も今年十八よ、やはり貴女と同じむよ。（花鳥）

▲芝の露香樣へ、御手紙たしかに拜見いたしました、私知きに身にあまる御言葉を頂きまして何と申上げてよいのでござりますか、一人でも友の多きは、それだけ私の身に見學許でなくすべての點に益ある事で、また兄も妹も何もなき身には、あたゝかき姉妹の情もうけらるべくとそんじうれしくぞんぜられ候、御返事のみ。（白百合）

▲常盤御前が賢いかどうか解りませんが、私は母らしい女と思ひます、女はいくら弱くても盛でも母といふ自覺を得て子のためには命も惜みますまい、いかなる恥をも恥びませう、其の行爲は尊敬出來ませんけれども、母らしい女として私は尊しく存じます。（元子）

▲毎號面白く拜見いたします、私方家内に病人があつて看護法に困つて居ますが、どうか四月の增刊號には皆樣の看病法の實驗でも御聞かせ下さいませんか御願申上ます。（京都ひさ子）

▲諸姉樣方の中で、もしやハテンレースの製法を教授するところ御承知の方御座いませんか、御承知の方は御もらし被下ましな、私只今暇な身にて、少々研究がして見たいと思ひますからどうぞ勝手ながら御願申上ます。（英子）

▲妾は多年本誌の愛讀者で御座います、皆樣のうちの不幸なし〳〵御境遇の方と、終生變らぬ御交りが、致したう御座います、及ばずながら慰めあひたう御座います。（大阪市西區川岸町一番地生駒方崎山春子）

▲赤坂の入千草樣、今度千代子樣富枝樣のポトグラフ御入手のよし、是非誌上におのせ下さい定めしあまたの愛讀者諸嬢も御同感の事と存じます、千秋の思をして待て居ます。（德島靜子）

▲美しいゑはがき七枚御送り下さいました北米の御方、三月六日午後三時に受取りましたけれど、私英語を知りませんの、代筆たのむ方もありません、御手數ですが封筒をかいて（印紙はどれだけはると云ふ事と）御送り下さいませ、圖のゑはがき御送りしますから。（尾張靜子）

新刊紹介

△少女思出の記　竹貫佳水著

偶像と呼べる可憐なる一少女、世の荒波に弄せられて、母に別れ父を失ひ、他郷に流離すること數星霜、涙と共に紀念の指環を抱いて都に上り、圖らずも幸福の手に救ひ上げられ、涙多かりし往時を追想して自ら之を筆にしたる體にものしたる優しき作なり、拾八錢、本館發行。

△家政の整理　佐治實然著

家庭生活は人生の正味なるを說き、家族制度は人情美の極致なるを說き、如何にして家庭の平和を保つべきかを說き、家政整理の三大標準を說き、人生の最好生活地を說き、科學的貯金法を說く、多くは自家の經驗に基き居るゆゑ、自ら人を傾聽せしむる力あり、定價四拾錢、內外出版協會發行。

△女の心　高島平三郎著

著者の見たる女の心の研究或は批評ともいふべきものなり、內容は男女精神の差異、女子の記憶力、衣服に對する觀察、女性の特種の點、愛情と嫉妬心、女子の誇るべき點其他十數項あり定價四拾八錢、洛陽堂發行。

△かぐや姫物語　小野美智子著

竹取物語を、今樣の文體の、平易にして趣味あるものに書き直したるものにして、家庭の讀物として面白き書なり、定價四拾錢、三交社發行

△此一戰　海軍少佐 水野廣德著

本書は明治三十七八年戰役に於て日露勝敗の最後の運命を決したる日本海々戰の終始顚末を叙したるものなり、同海戰ありてより旣に六星霜を經、今や世人漸く當時の難戰苦鬪の事蹟を尋ねるもの稀ならんとするに際して此著あるは、先づ時宜を得たりといふべし、而して著者は海戰當時第四十一號艇長として當戰の實歷を有し後海軍々令部にありて明治三十七八年海戰史の編纂に從事し、專ら筆を戰紀に執りて最も戰史に通ずる人なれば、其の顚末を叙すること頗る確實詳細を極め、大は艦隊の戰鬪より小は水雷艇の襲擊に及び、戰果の因つて來る所を述べて興味津々、思はず快哉を叫ばしむ若し夫れ我帝國の危機たりし戰役の光榮ある結果を得たる所以を察せしめ、當時の壯烈なる海戰の狀況を追懷せしめて奉公の感想を發はしむる國民敎育上の効果の大なるに至りては、他に多く其の比を見ず、戰鬪圖其他の寫眞版を挿入する亦數十葉定價壹圓、本館發行

△草花繪物語　太田三郎著

造花がその麗はしき感情を人間の眼に讀ますべく造りたるものは花なり、この書は古今東西花に關するさま〳〵の口碑傳說を集めたるものにて、花と人事を結びつけたるおもしろき繪物語なり、元より花その物の自然の形態、特色、精神、意氣、活動を示さんとしたるにはあらねば花に就ての趣味を味ははんには聊か物足らぬふしもあるべし、されど、花が人事に結びついて樣々の物語を惹き起せし詩的の事實のおもしろ味は一讀忘れがたき心地ぞする（定價一圓五十錢精美堂版）

△家庭と報德　鈴古里忠夫著

勤勞は家庭に於ける第一の要素なり、家庭に若し一朝遊惰の風を生せば、其家の前途は頗る危きものなり、報德宗の開山二宮尊德先生は、人に勤勞を敎へ、貯蓄を敎へ、家道繁榮の方法を敎ゆる頗る切實にして、一々皆實踐躬行の活敎訓なりこの著二宮翁の訓言等に基き報德主義を專ら實例より說いて家庭に讀ます樣作りたる良書也(價二十錢報德會院發行)

△京人形　竹久夢二著

無邪氣な繪物語なり、むかしのオイラン、お染お與、今の娘、女學生、子供、人形、ポチ、舞子、いろ〳〵のものを、さま〳〵に活動せしめてその自然の姿態を縱橫に發揮せしめたるおもしろき、あどけなき、繪物語なり、價四十錢洛陽堂版

△繪日傘　笠峰 耕花 合作

現代ぶりのマダム、令孃、娘さん、女學生、子供、犬、などを無邪氣に、可愛らしき筆もてスケッチしたる繪畫に、面白く、且つあどけなく、少女趣味に叶ひたる文章をあしらひて、畫と文と有聲と無聲とを對照して極めておもしろく、和樂の意溢れて、何となく心を暢々せしむる畫帖なり。價六十錢南金六町金盛堂版

募集（五月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）…前金七十五錢
八册（半ヶ年分）…前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）…前金二圓八十錢
内（定刊數…十二册　増刊四回…一、五、九、十一月價格同一）
郵税　一册　二錢

廣告料

廿四字詰	一行	四半頁	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	…	…	…	五十五圓
一等	…	…	廿三圓	四十五圓
二等	…	十圓	十九圓	三十八圓
三等	五十錢	七圓五十錢	十四圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●建目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十四年四月廿三日印刷納本　第拾壹卷第七號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館
電話本局　三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

通信販賣 博 博通社特賣品

● 安心の出來る買物は博通社に限る!!!

懷中時計

器械の堅牢、時間の正確、金質の優等なるは言ふ迄もなく、何れも最新流行形實用向の精良品であります。如何に實質優等にして價格の低廉なるかは乞ふ速に求められ現品に就て視られよ



● 純ニッケル側極薄形最新式器械十七形男持
　市價　三、五〇　特價　貳圓八拾五錢

● 純銀側片硝子極薄形最新式器械十七形男持
　市價　六、五〇　特價　四圓八拾五錢

◉ 純銀側兩蓋付七子側最新式器械十七形男持
　市價　八、〇〇　特價　五圓八拾五錢

◉ 純銀側兩蓋及中蓋付最優等アンクル梨地側寶石入龍頭引出し針廻男持十七形女持十三形
　市價一二、〇〇　特價　八圓五拾錢

▼ 送料市內無料、內地十五錢、海外卅錢

● 浮いてこい

コイ〳〵ういてこい紳士と蛸の競爭!!
紳士が上れば蛸が降る、蛸が上れば紳士が降る、なんて面白い蛸と人



▲ 送料　內地十五錢、海外四十五錢

◉ 長サ一尺二寸直徑二寸餘硝子製壜一本、紳士一人、蛸一匹、藥品一打付

特價四十五錢

● 千代田バック

便利且つ重寶なる本品に優る物なく形狀の優秀、地質の優等、裁縫の精巧、價格の低廉等一つとして具備せざるはなし



◉ 甲種黑揉皮製　特價一圓五拾錢
◉ 乙種刺繡付アルパカ　特價一圓參拾錢
● 丙種本セル製　特價九拾五錢
● 丁種羅紗製　特價四拾五錢
● 戊種繻子製　特價貳拾五錢

▲ 送料　市內四錢、內地八錢、海外卅錢

● 御手紙一本で何んでも廉價に御求めに應ず!!!

(後付の一)

大橋メール、オーダー、ビジネス

東京日本橋區本町一丁目

博通社

振替口座東京五十番
電話本局六百十四番

家庭整理の指導

家庭百科全書

全部五十册——每月一回發行

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひに學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須いざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

- 第一編 新家庭訓 三輪田眞佐子女史著
- 第二編 四季料理 石井泰次郎君著
- 第三編 裁縫指南 喜多見佐喜子女史著
- 第四編 和洋菓子製法 龜井まき子女史著
- 第五編 茶道と香道 永原翠香女史著
- 第六編 諸流生花指南 琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著
- 第八編 簡易治療法 藤井靜子女史著
- 第九編 禮式と作法 佐方鎭子女史著
- 第十編 惣菜料理 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著
- 第十一編 編物指南 三木とみ子女史著
- 第十二編 婦人の生理と衛生 牧野滴子女史著
- 第十三編 教育お伽噺 木村小舟君著
- 第十五編 家屋と庭園 內山正知君著
- 第十六編 魚鳥家畜の飼養 鹿野ゝ骨君著
- 第十七編 女子作文法 遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著
- 第十八編 子女の教養 棚橋絢子女史著
- 第十九編 家庭の趣味 文學士大森兜山君著
- 第廿編 家庭遊戲法 高橋忠次郎君 松浦政泰君著
- 第廿二編 歌の手引 大和田健樹君著
- 第廿三編 刺繡術指南 磯村大次郎君著
- 第廿四編 摘み細工指南 山田興松君著
- 第廿五編 新式化粧法 藤波芙蓉君著
- 第廿六編 室內裝飾法 近藤正一君著
- 第廿七編 衣服の調整 石崎蘊園君著

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

東京日本橋 發行所

販賣用電話 本局二六二〇

婦女必讀の大全書

第七編
育兒の務
田村貞譲君・朝夷孤舟君共著

第十四編
女德の養成
前田長太君著

第廿二編
書道手引
井田秀生君著

第廿六編
洋樂手引
前田久八君著

第廿九編
兒童訓話 母の智識

本書は子女の教養に資せんが爲に、四季日常の科學問題を、最も趣味ある筆致を以て記述し、之に加ふるに適切なる寓話、及び唱歌なとも挿入したれば、讀御の裡知らず識らずに、一般の常識を涵養せしむべく編纂したり、世の母姉諸君は必ず一本を備へざるべからず。

少年世界記者 木村小舟君著

第卅編
洋食の調理

○スープの部○ソースの部○むし物の部○サラダの部○冷し物の部○野菜の部○揚げ物の部○ゆで物の部○いりつけ物の部○煮物の部○燒物の部●和洋折衷料理○汁物○揚げ物の部○いり分けの部○煮物の部○燒物の部

東京治庖會講師 龜井まき子女史著

第卅一編
衛生と衣食住

◎第一編 衣服‖衣服の衛生●衣服と手入●履物と帽子●化粧と衛生◎第二節 食物‖食物と營養●滋養物と飲料●副食品●特嗜品●夏季の嗜好品●胃の衛生●齒の衛生◎第三編 住居‖住居と衛生●室内の衛生●臺所の衛生●入浴と衛生●害蟲と驅除●家庭と黴菌◎附錄‖衣食住雜觀

福田琴月君著

第卅二編
東西名婦の面影

本書は著者が新時代の女性に向つて健全なる思想と優雅なる感情とを吹き込まんために東西を通じて最も傑出せる良婦孝女賢婦女傑等數十人を捉へて新しく平易に描寫したるものです書中に收められた婦人は何れも波瀾多く變化に富んだ生涯を送つたものゝみですから、事實そのものが活きた小説で 之を寫した筆も亦繪のやうに美しくあります 一度本書を繙くと一氣に讀ませられて而かも忘れ難い眞感化を與へられます 挿入した多くの畫と金言とは又た有益多趣最も深い印象を與へるでありませう

高須梅溪君著

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座 東京二四〇番

說文庫

東京本町 博文館發行

クロース特製紙函入

小波叢書

本編目次
▼女房殺し ▼地底の人 ▼つぎ紙子
▼新潮來曲 ▼岬下の家 ▼石地藏
▼旅役者 ▼琵 ▼濁流
▼林間の高塔 ▼水棲記 ▼海上の饑渴
▼湖心の誓 ▼別莊守 ▼惡道路
▼紫海苔 ▼紙子くらべ ▼花井お梅

全一冊 （紙數壹千餘頁）
正價金貳圓
小包料拾貳錢

秋聲叢書

本編目次
一 あゝ京部 ▼男の心 ▼血 ▼かつら川 ▼軍國女氣質

全一冊 （紙數壹千餘頁）
正價金貳圓
小包料拾貳錢

本編目次
●氣まぐれもの ●春の月 ●見え坊 ●學士の戀 ●觀海寺の五日
●惡物 ●みだれ心 ●老骨 ●狂學士 ●危機
●ひとり棲 ●里の女 ●思はぬ罪 ●一念
●濁らぬ水 ●藪かうじ ●通譯官 ●背係齋
●みち芝 ●お靜 ●古巢 ●花園

鏡花叢書

全一冊 （紙數壹千餘頁）
正價金貳圓
小包料拾貳錢

本編目次
▼外科室 ▼梟物語 ▼[illegible]象
▼海城發電 ▼外國軍事通信員 ▼頰白
▼化銀杏 ▼やどり木 ▼[illegible]の灯
▼慈善會 ▼月夜遊女 ▼そら解
▼勝手口 ▼少年行 ▼星女郎
▼鷺花徑 ▼脚本深沙大王 ▼紫手綱

▼續刊▲

美妙叢書 ……其他

光輝ある歴史と最新の學說

東京帝國大學文科大學敎授
東京高等師範學校敎授　文學博士　萩野由之君編著

尾竹國觀畫

少年日本歴史讀本

日露戰役の結果一躍して世界一等國の班に入りし日本帝國は、昨秋韓國の併合に依り、其領土著しく擴張して、國光宇内に輝く、此際國民は益〻忠君愛國の觀念を厚くし、以て帝國の名譽を發顯せざるべからず。而して此觀念を兒童の腦裡に印せしむるには光榮ある、日本帝國の歴史を繙かしむるにしかず。本館玆に見る所あり、國史學の泰斗萩野文學博士に囑して日本歴史讀本の編纂を企て、最も趣味豐富なる筆致に依り、上は天地開闢より、下は日韓併合に至る迄、數十册の大部に收め、遂次刊行せんとす。謂ふに國民敎育上に資すべき點尠少ならざるべし。少年諸君は勿論一般家庭及び學校の好參考書として無上の珍寶ならん。切に愛看を待つ。

洋裝頗美本
挿畫十數個挿入
石版彩色口繪
紙數百三十餘頁
正價一册拾八錢
郵稅一册四錢

第一編（目次）

天の浮橋　全一册

發端・國生み・諸神降誕・黄泉の國・三貴子・須佐之男命・天の安河・岩戸隠れ・足名推と手名推・八俣の越呂智・須賀の宮居

第二編（目次）

大國主神　全一册

國引・因幡の白兎・大國主神・八十神の陰謀・第二の危難・蛇の室・矢拾ひ・琴のひゞき・天日槍・小名毘古那神・大物主神・豐葦原の中つ國・雉子の使・喪屋の騷ぎ・建御雷之男神・大國主との會見

（續刊）

天孫降臨
橿原の宮
三種の神器
新羅征伐
厩戸皇子
弓削道鏡
藤原基經
屋島の合戰
後宇多天皇

發兌元　東京日本橋本町

を述べたる二大少年叢書

少年百科叢書

洋裝細長形頗美本
紙數毎編二百八十餘頁
美麗口繪數葉挿入
定價一冊金廿八錢
郵税一冊金四錢

第一編 竹貫佳水君編
先哲至言 勉學訓
全一冊

第二編 前田越嶺君編
世界名君傳
全一冊

第三編 竹貫佳水君編
讀書法
全一冊

文字が讀めたとて書物は讀めるものにあらず。單に鐵砲の引金を引くだけならば、何人と雖も容易に之を引き得べし、而も眞に之を讀み、目的物に射當てんとするには、それぞれ其法ありと知らずや。讀書するには讀書の法あり、讀書法を修めずして讀書せんとするは、恰も心得無くして刀を弄ぶが如し、危險極まり無し。學に志す少年子弟の先づ讀むべき書は讀書法にあらずして何ぞ、宜しく一本を購つて學海の羅針盤とせよ

第四編 前田越嶺君編
世界名臣傳
全一冊

天下の士氣を鼓舞奬勵するもの、偉人傳に如くはなし、或意味に於て偉人傳は偉人を作るものなり、プルタルクスの英雄傳が古來如何に多くの英雄を起したるかを見れば、蓋し思半に過ぎん、著者茲に見る所あり、上揭の世界名君傳と世界名臣傳とを著す、一は世界第一流の賢君英主を選して其功業偉勳を叙述す、一は一代の賢相名臣を捕捉して其性行閲歷を述ぶ、今や我帝國は日露戰爭以來一躍直に世界強國の班に列す、而して是亦上に明君あり、下に名臣あるの致す所ならずや、嗚呼帝國今日の少年諸子なるもの、曷ぞ奮勵努力せざるを得んや、今や日本は日本の日本にあらず、世界の日本なり、苟も今日の少年諸子にして異日世界的活動の舞臺に活躍せんと欲する者は、須らく今より世界的偉人の素地を作らざるべからず、此意味に於て前揭二書は帝國少年諸君の好伴侶なり、請ふ速に之を購求して世界的偉人の面影に接せよ。

(續刊)
第五編 ▼天界の觀察 全一冊
第六編 ▼地界の觀察 全一冊

振替東京二四〇 **博文館** ◀

男女小供洋裝型紙發賣

小供洋裝は今や實用の時代に達し漸く各家庭に於て裁縫せられんとす然るに未だ實用向型紙の供給者に乏しく簡易なる物も一々洋服店に依賴するの不便且不廉を忍ぶは策の得たる者に非ず依て當店は平素の御愛顧に報ゆる爲め永年の經驗と歐米の新實例とに依り家庭に於て容易に出來得る數種の新形を撰み縫方說明附型紙を廣く同好の方に配たんとす御希望の方は何卒御申込被下度候

前掛（ペナフォー）和洋兼用（三種壹組金五拾錢　一種金貳拾錢）

下着（男兒シャツ及モヽ引　女兒シャツ及モヽ引ペテコート付）　男兒用　壹組　金十五錢　女兒用　壹組　金二十錢

男兒服（セーラー形上下　ブラウス形上下　コート形上下）　三種一組　金六十錢　一種　金貳拾五錢

女兒服（セーラー形上下　ブラウス形上下　コート形上下）　三種一組　金六十錢　一種　金貳拾五錢

男女兒　三歲　三種　一組　金五十錢　一種　二十錢

男女　六歲　マント　一種　二十錢

●其他婦人服、海水衣、紳士服等一切御望に應じ調製可致候

（郵券代用一割增し）（送費無料）

型紙は六歲を標準とし調製致し置候に付各自の御寸法に依り增減せらるゝと御指定の給形及御寸法に依り切抜裁斷及型紙調製可致候間御注文の折は姿勢（肥瘠大小）御知らせ下されたく候

右ハ仕事ノ難易ニ依リ金三十錢以上金一圓以下ニ有之候

東京出張所　東京神田鍛冶町（電話本局二九〇一）

地方係　本店・・・橫濱相生町五（辨天通四）電話三四四番

中野屋洋服店

注意（◎東京市内洋服御註文の御方は電話本局二九〇一番。端書なれば神田鍛冶町へ御申越し下されば雛形と切れ地見本持參早速御伺ひ御容姿に恰好いたす樣調進致します）



デリケート化粧水の好季節

❀花と美を競わんと思ふ御方は一度御試みなさい當店が責任を以て販賣する輸入原料故他に類なし

價（大金五十錢　中金三十錢）　送料八錢　見本拾錢

◉女學世界愛讀者には無送料とす



柳清香油
紳士
貴女用
フロラー香水
二十錢
一円廿錢
一円八十錢
美術小間物化粧品
東京日本橋通二
柳屋本店
GIYA
RYUSEIKO

女學世界
(毎月一回廿三日印刷納本)
(明治四十四年四月廿三日印刷納本)
第拾壹卷第七號
(明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可)